江島茂逸雜纂

九

680
工
6

LINEX 1030M

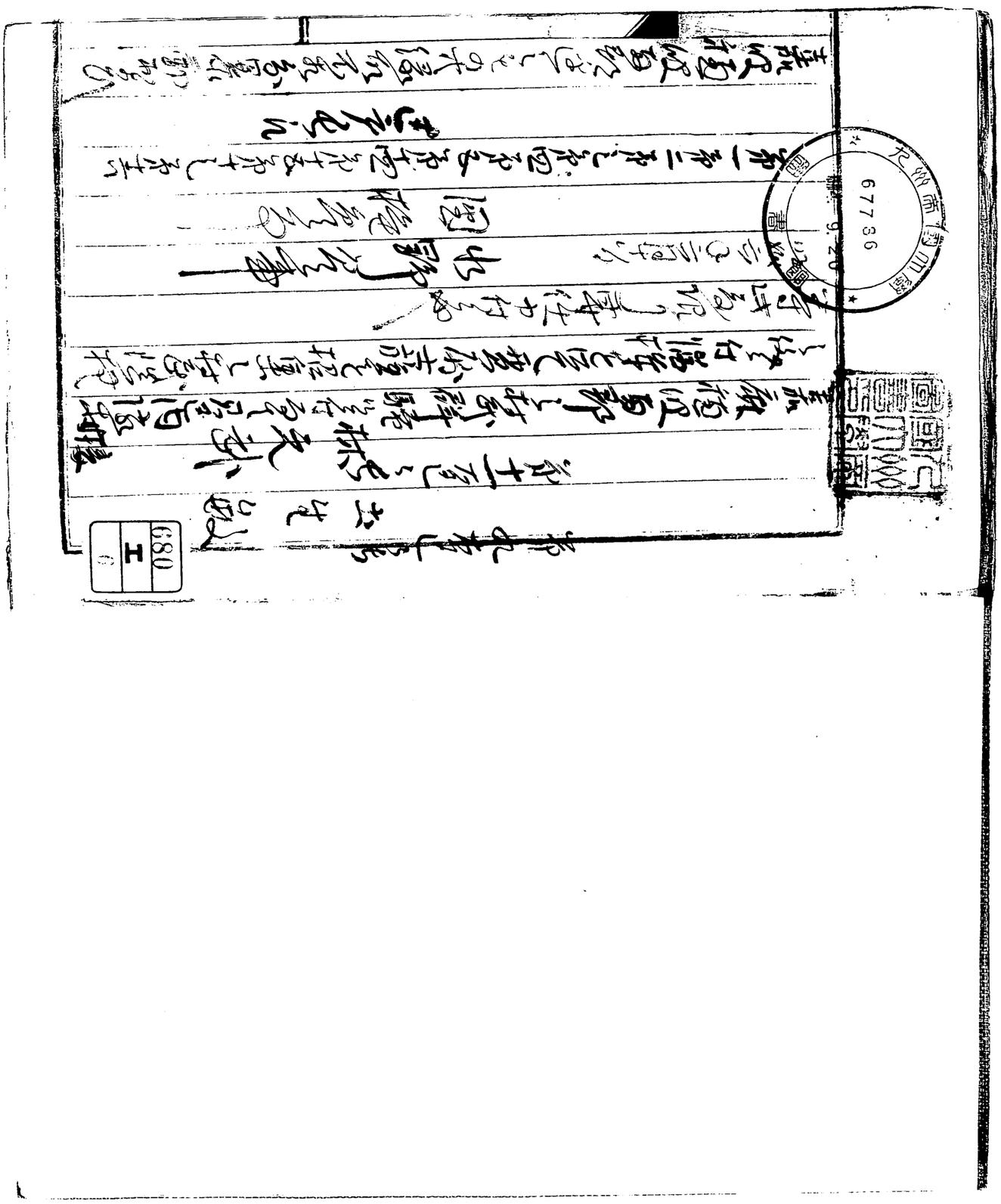
680
工

第九卷

嘉麻郡土民騷擾一件

坂本龍壽来 歴

黒田長溥公系譜

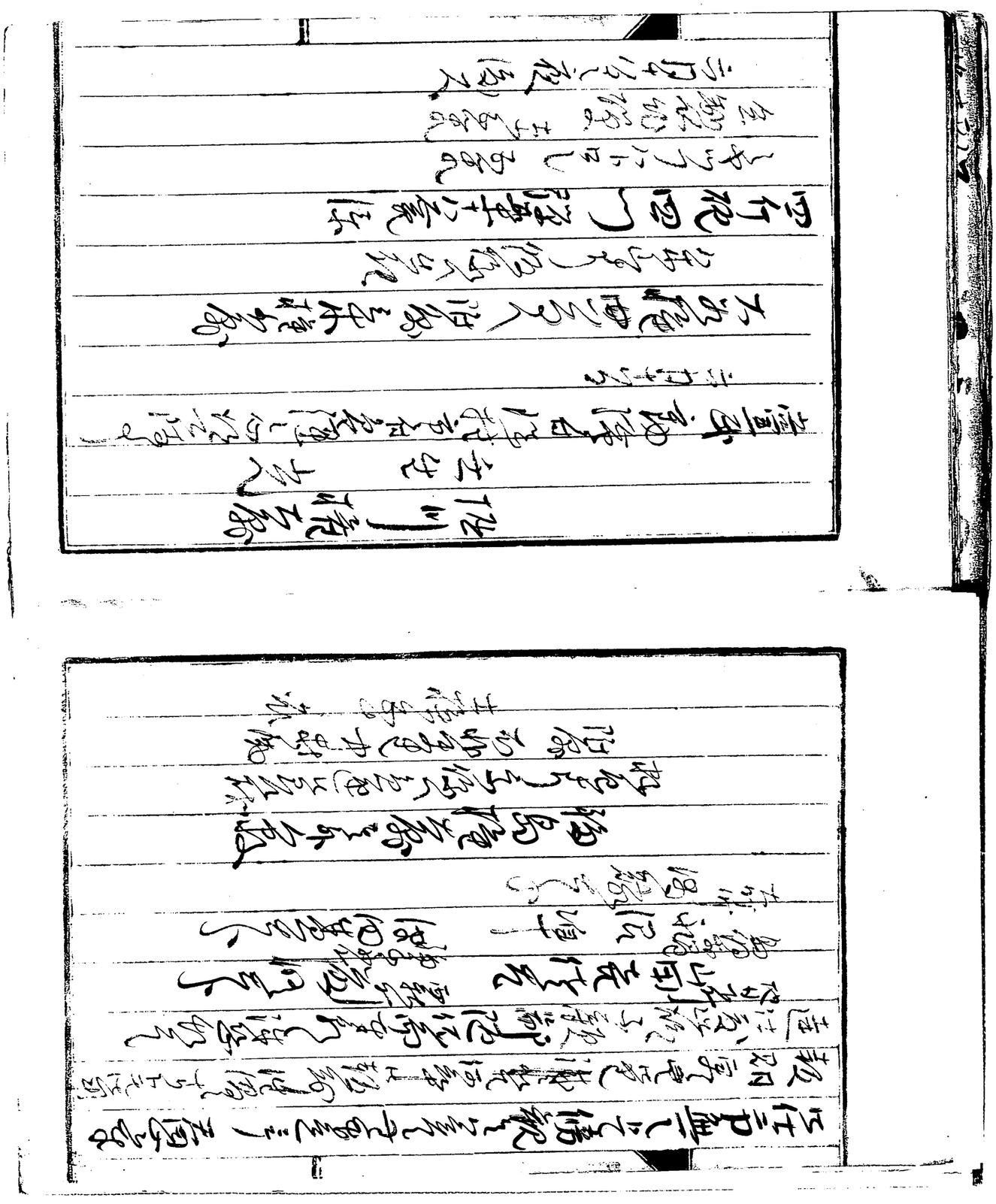


[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

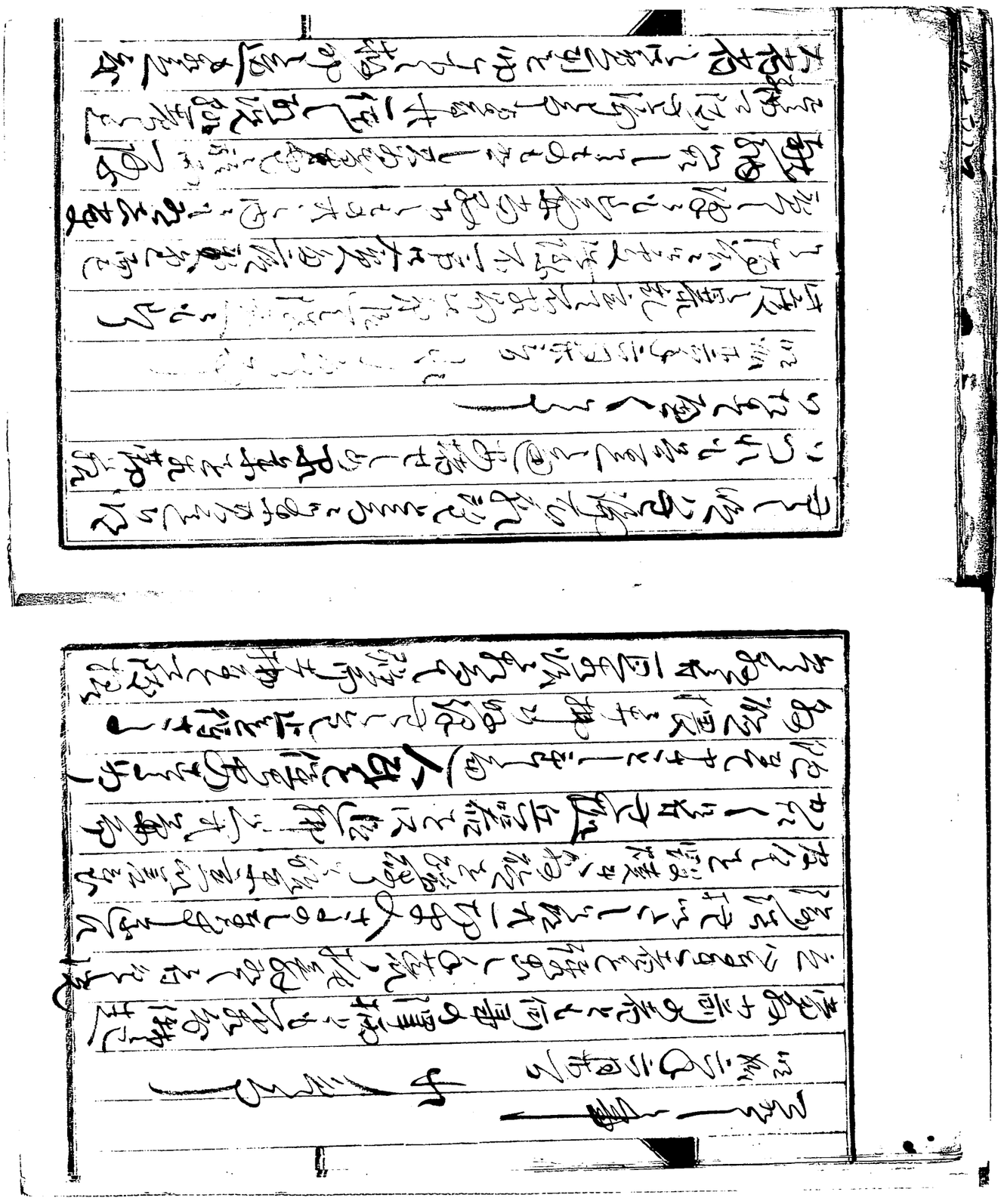
[illegible]

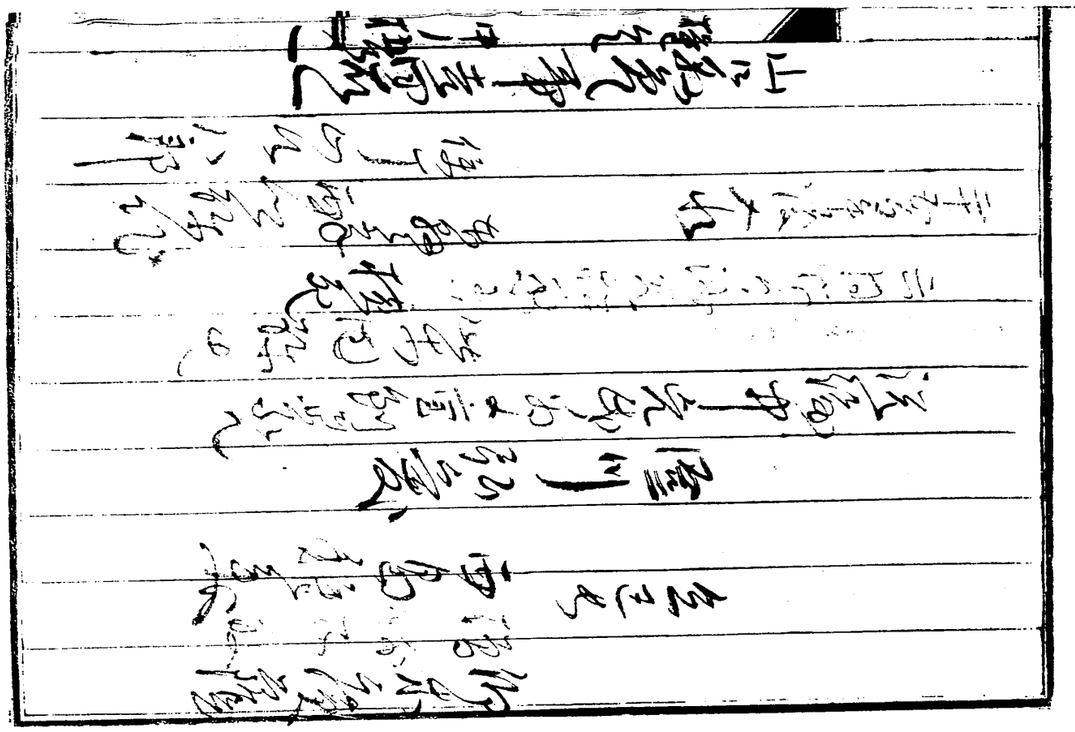
[illegible]

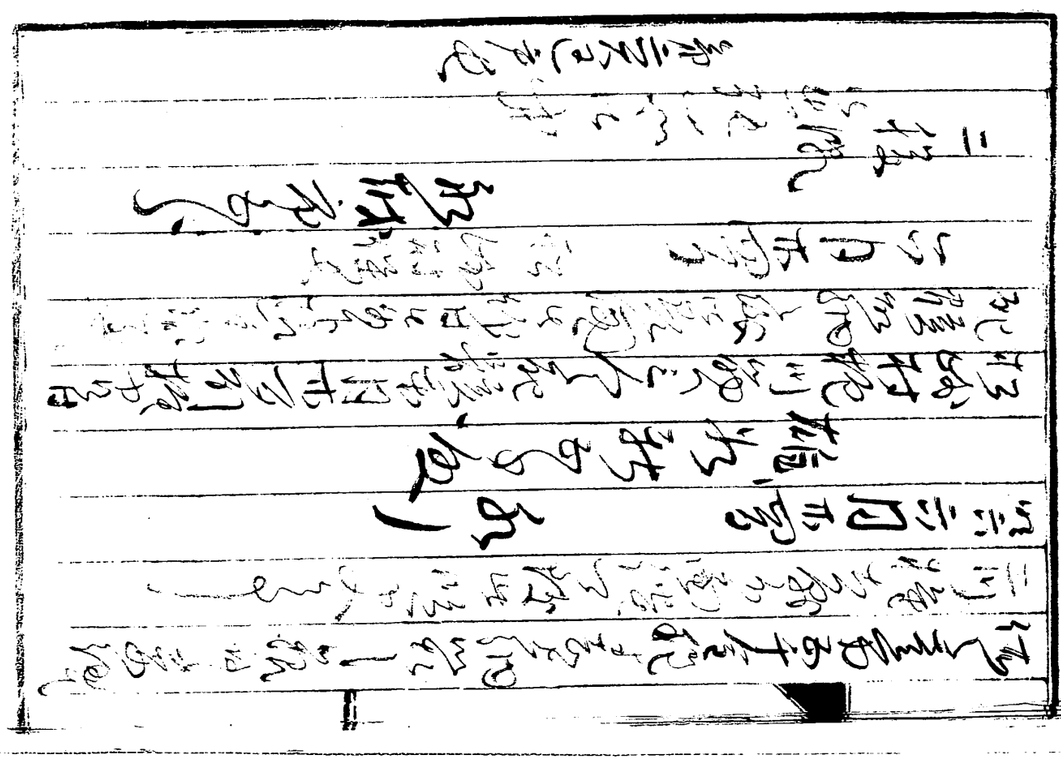
[illegible]

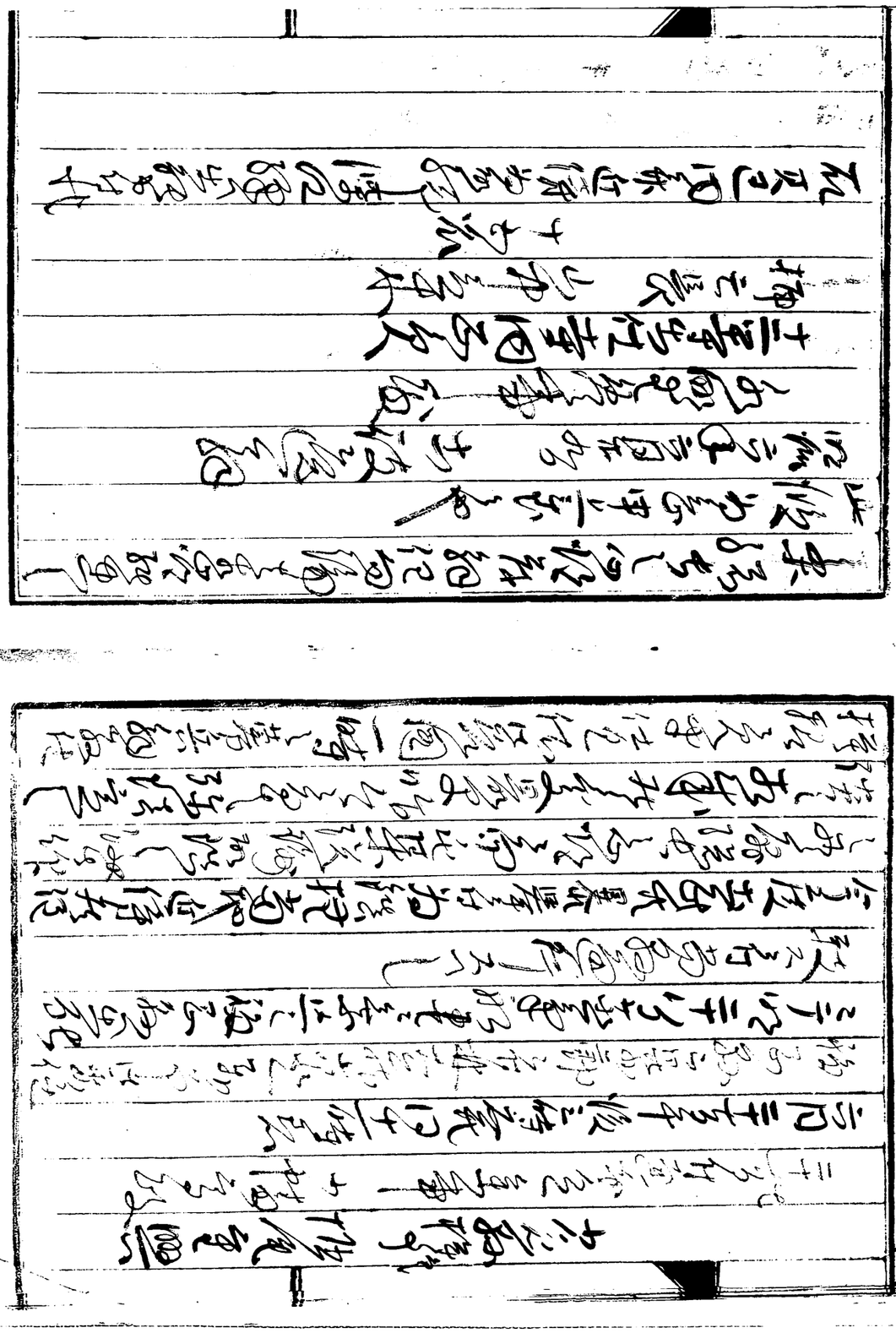
[illegible]

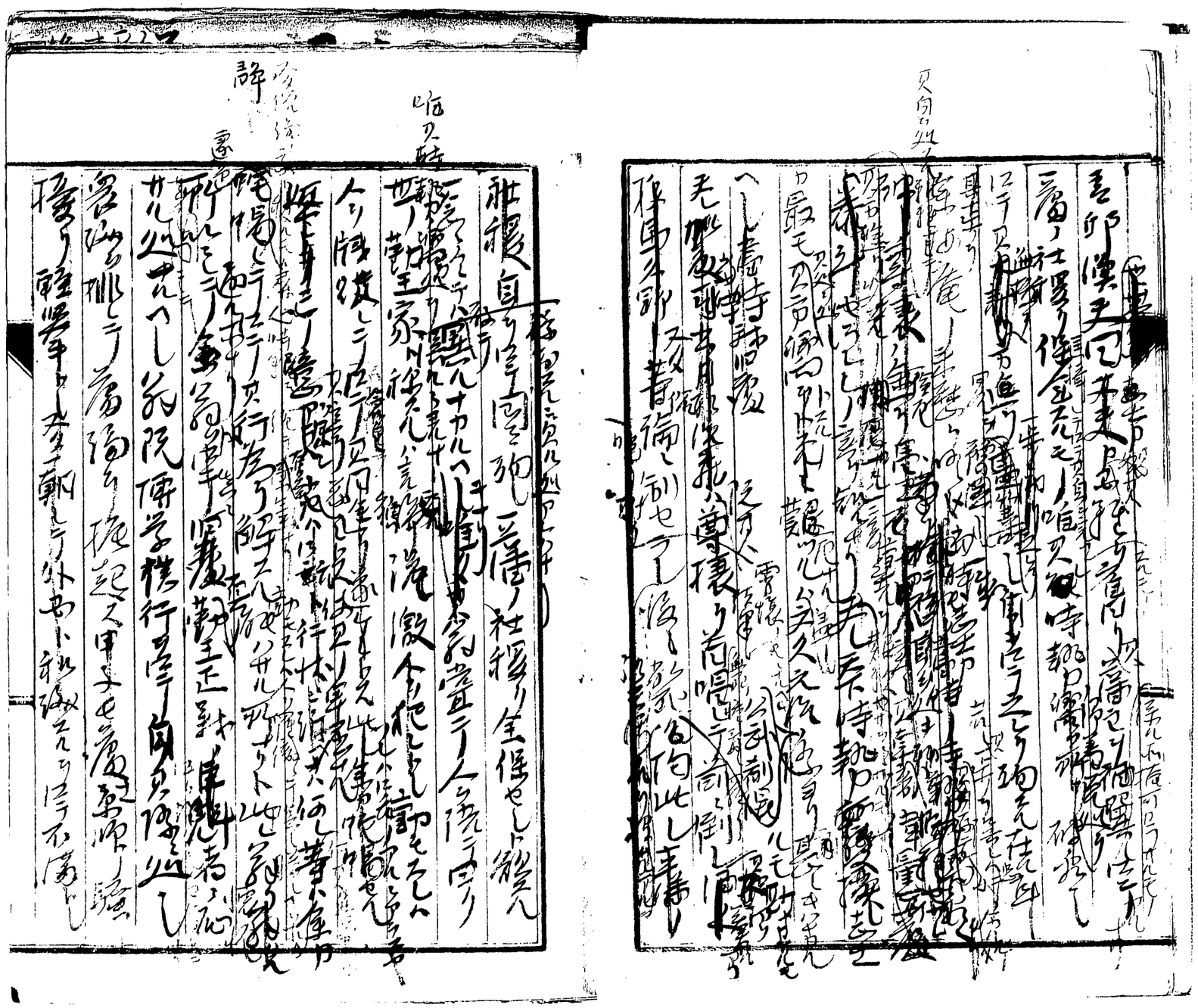
[illegible]

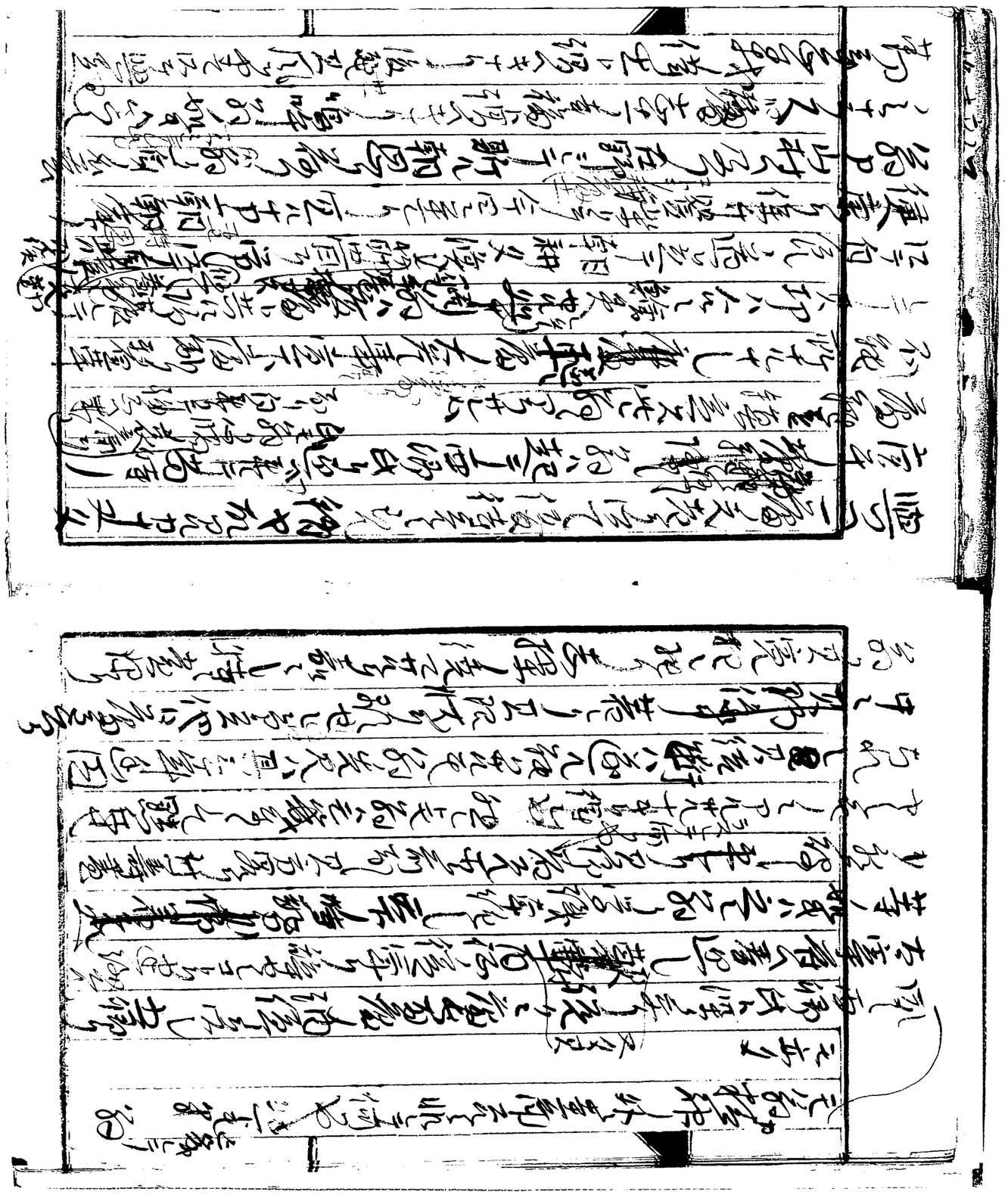


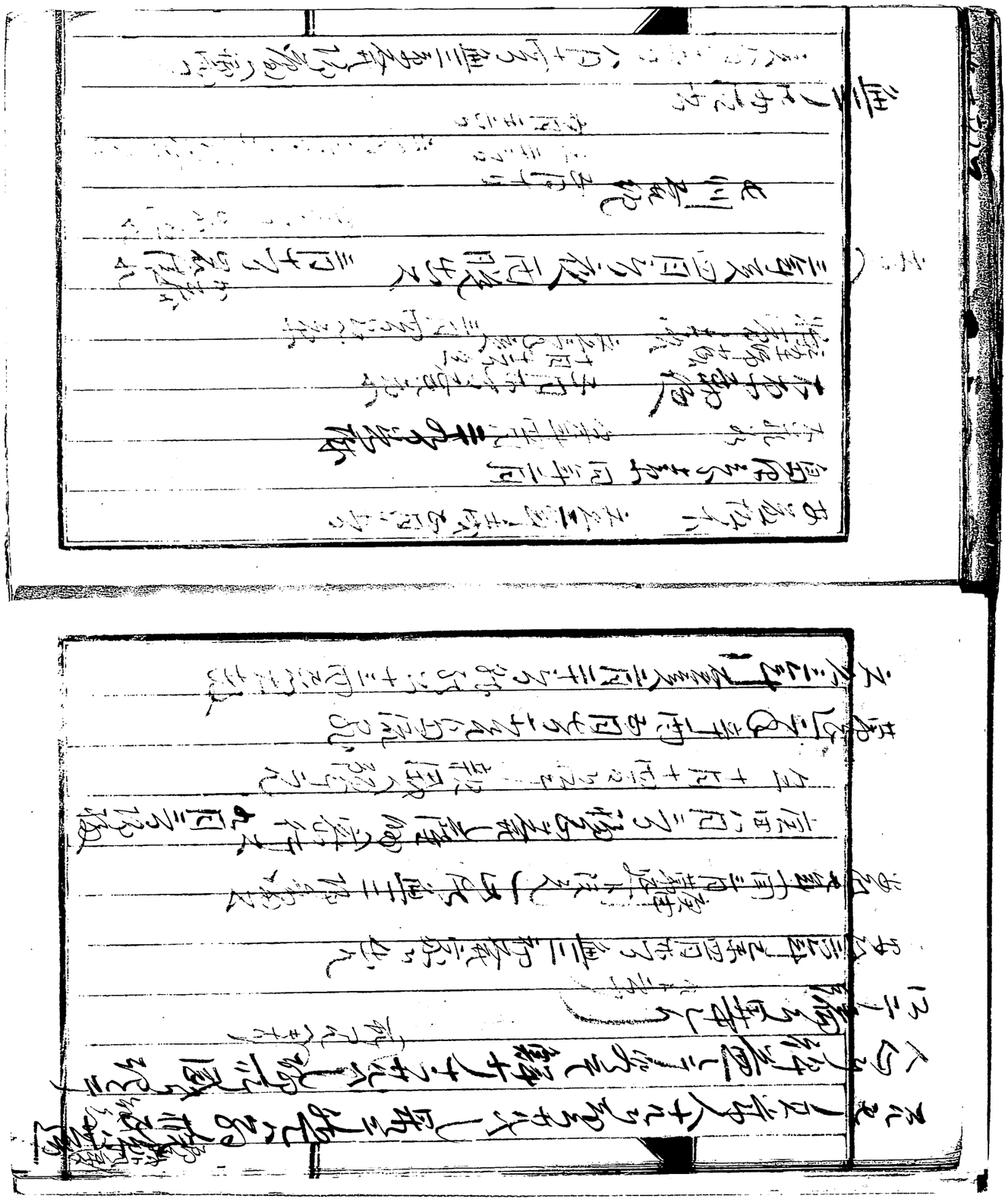


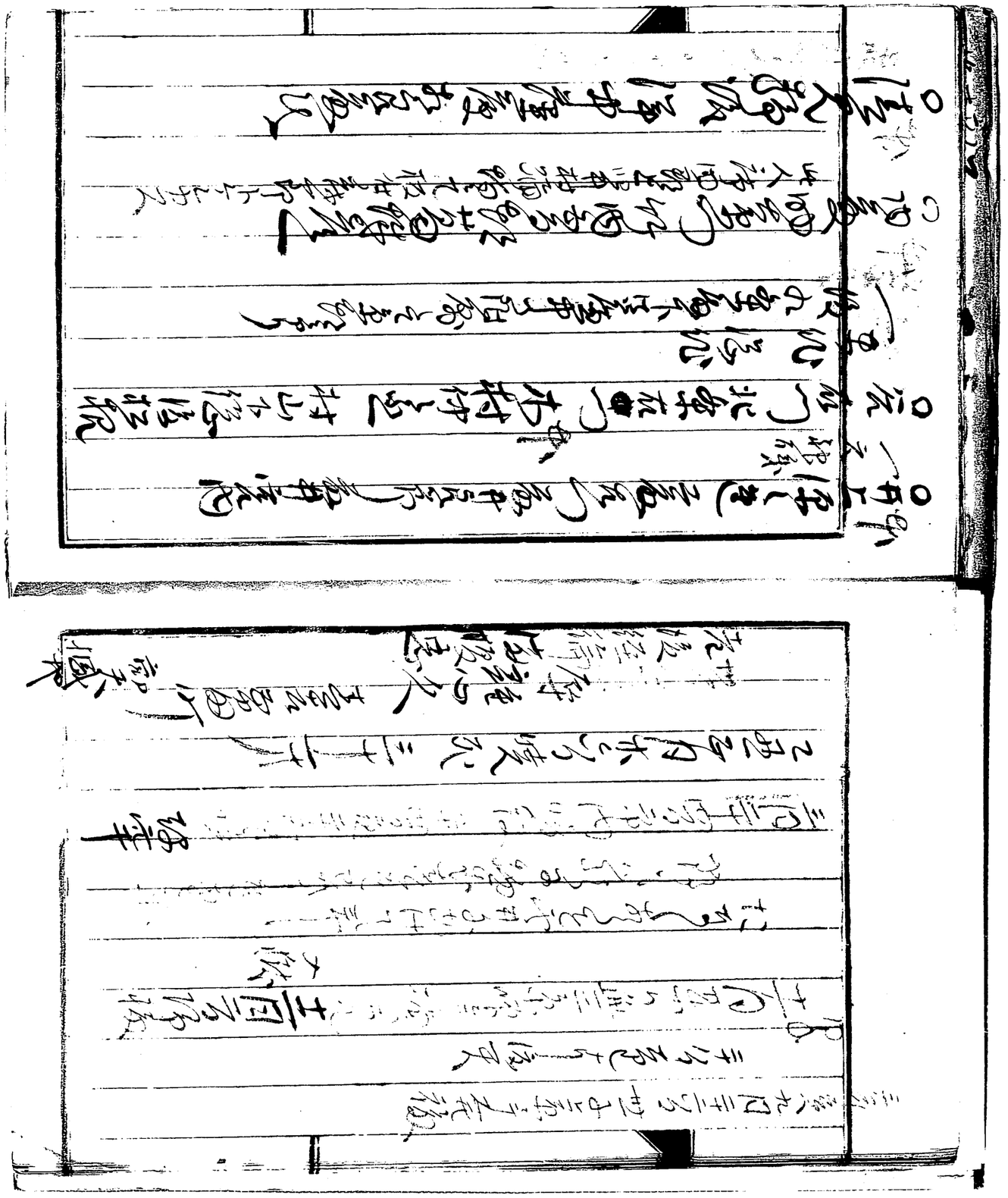


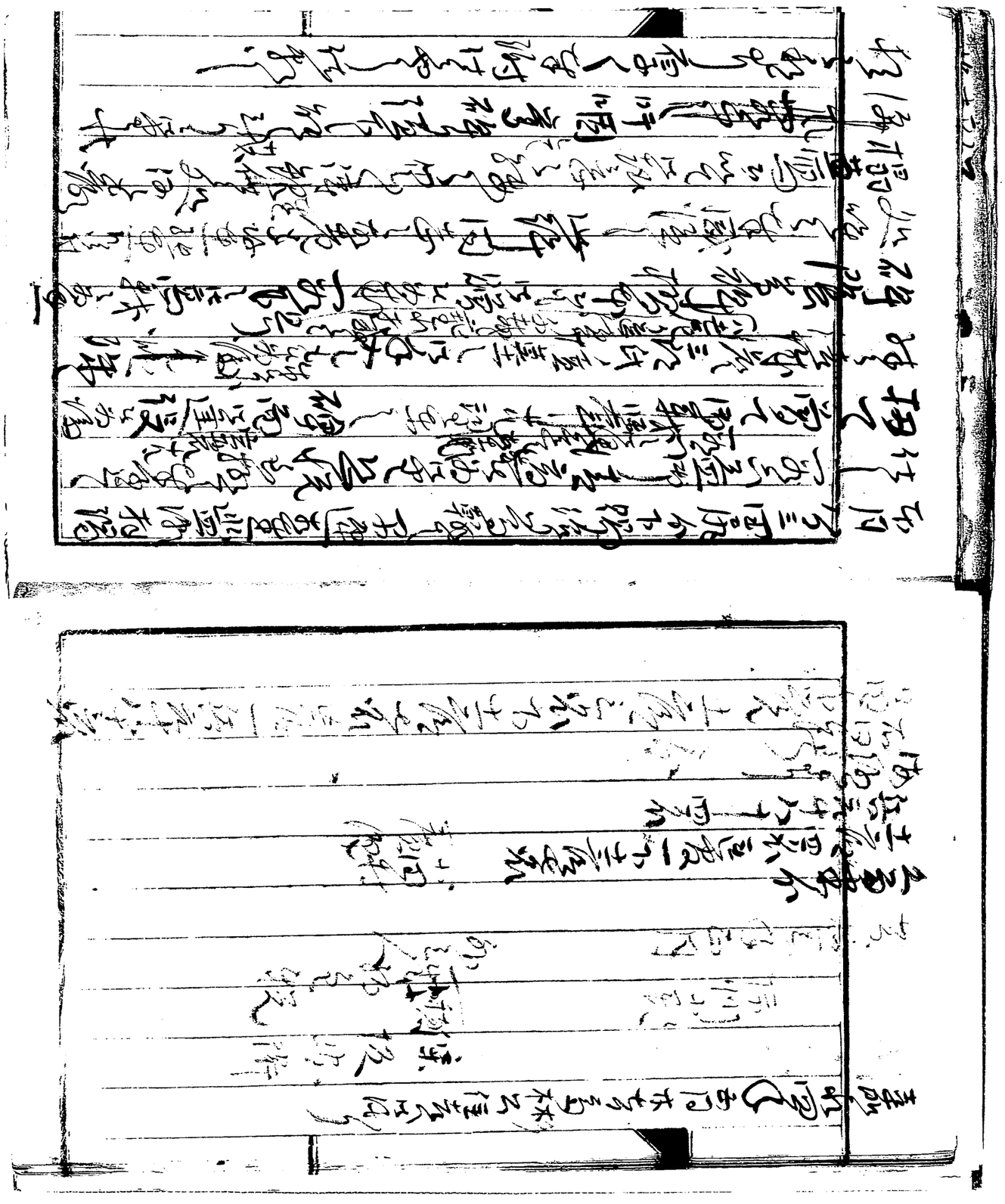




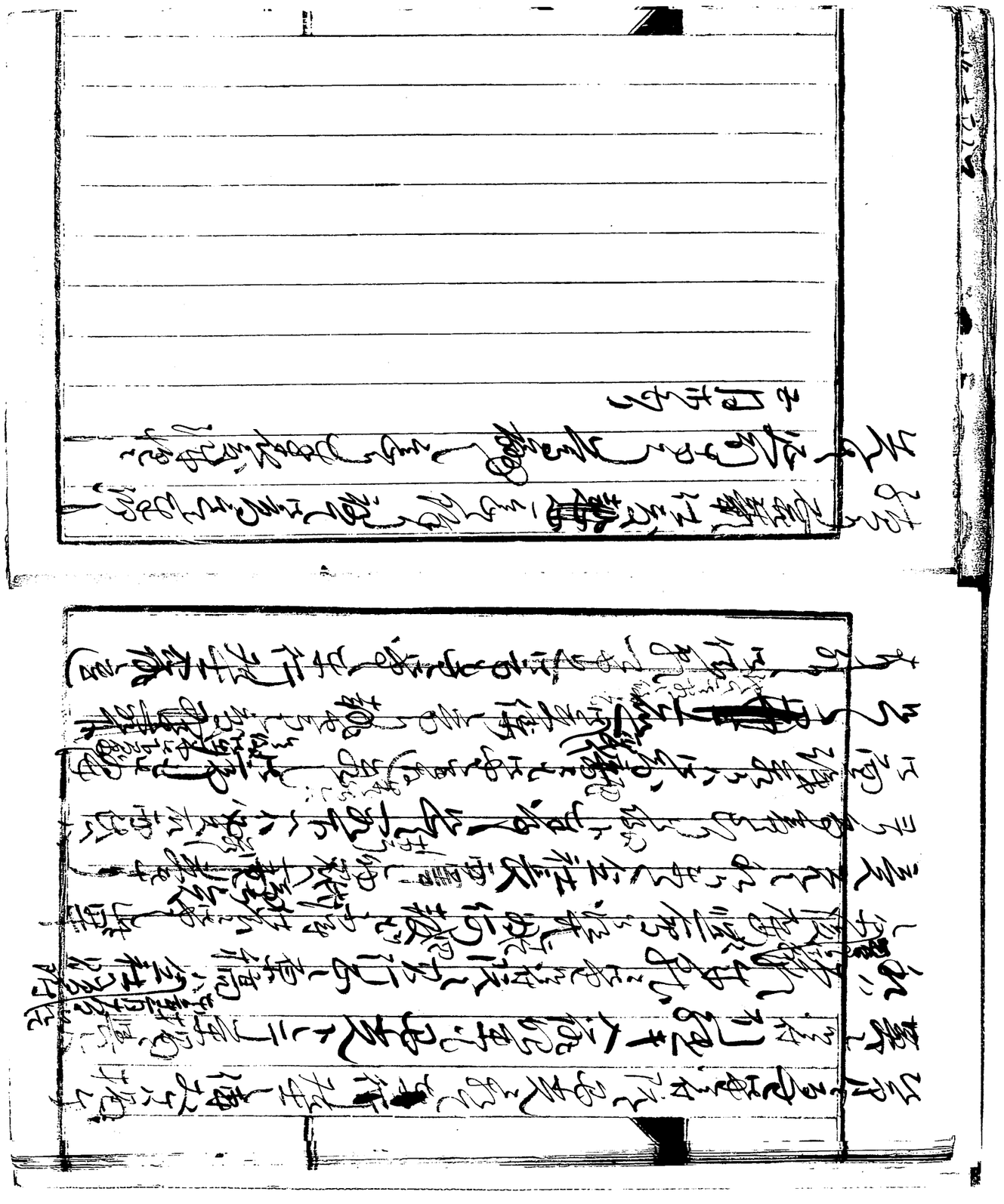


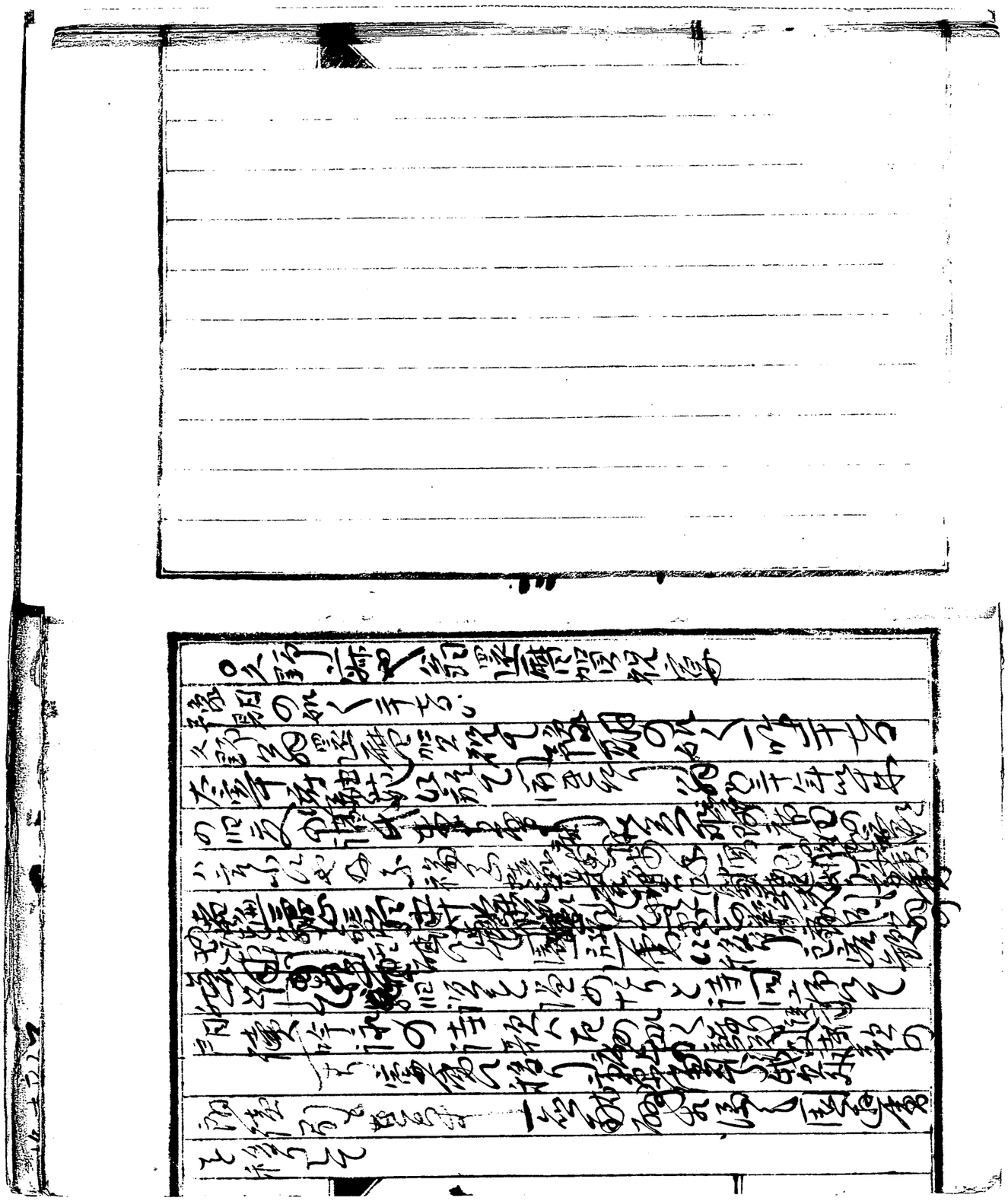






一芸人儒者抱利欲之心[illegible]
[illegible]
[illegible]

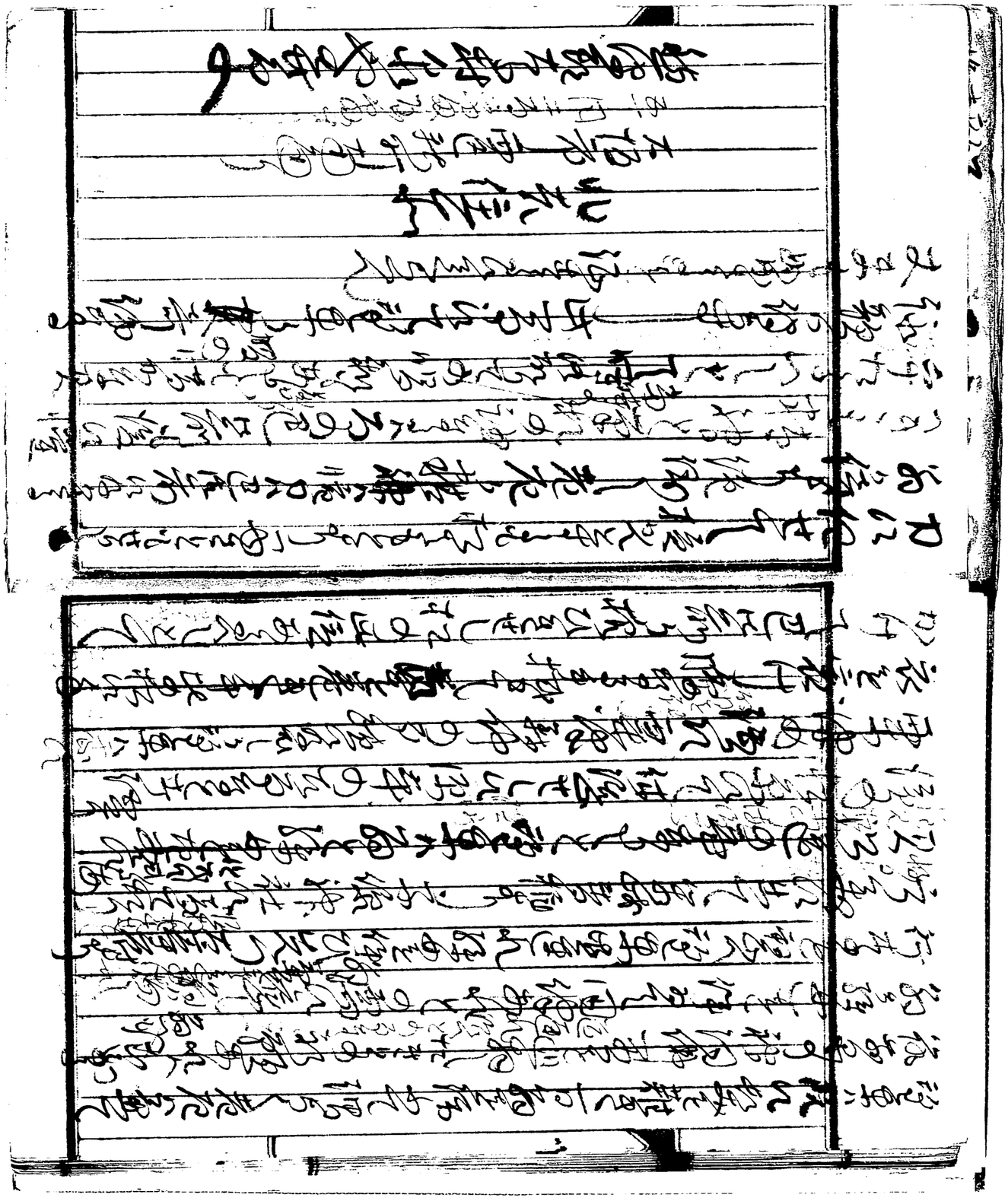


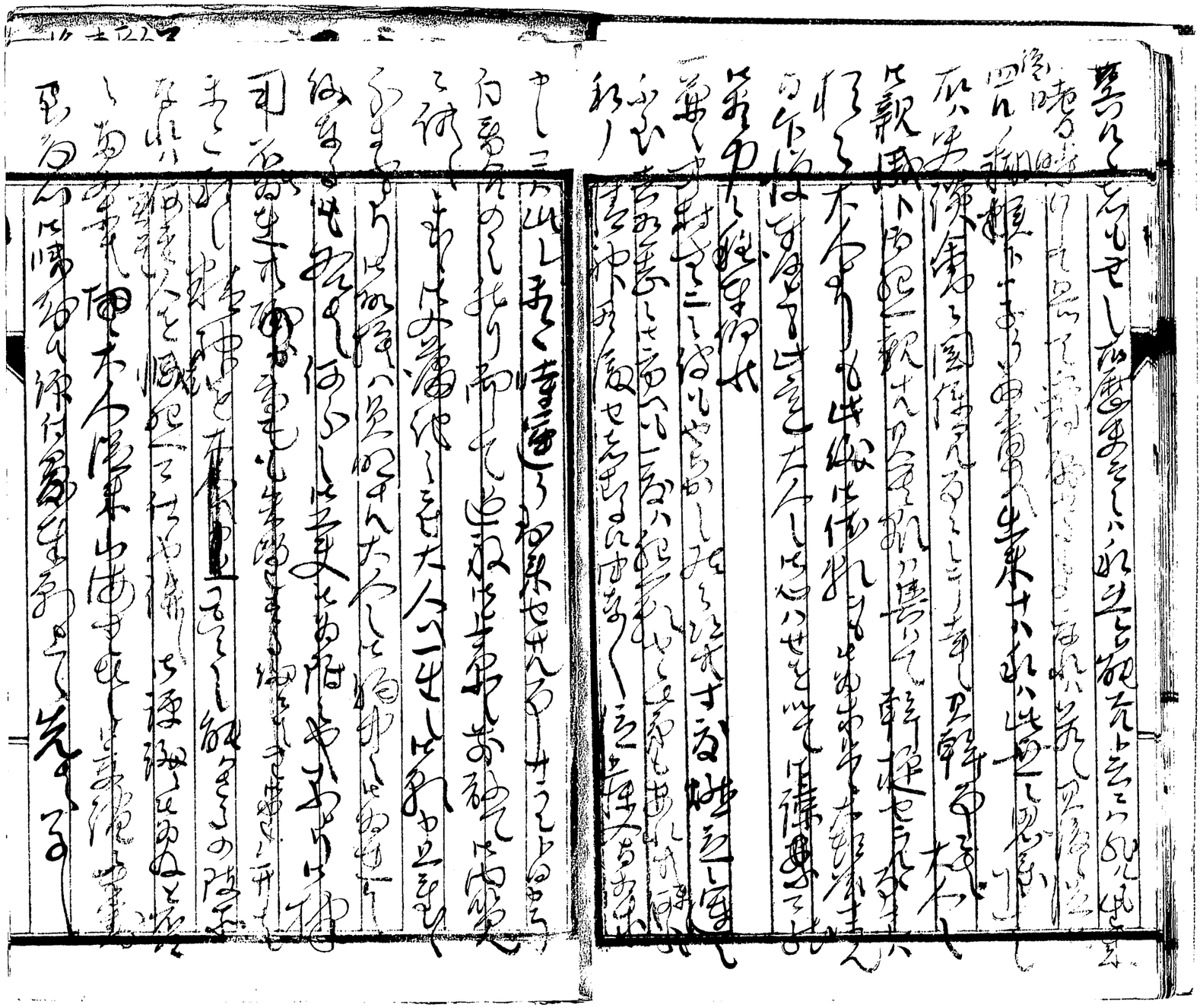


[illegible]

[illegible]

[illegible]





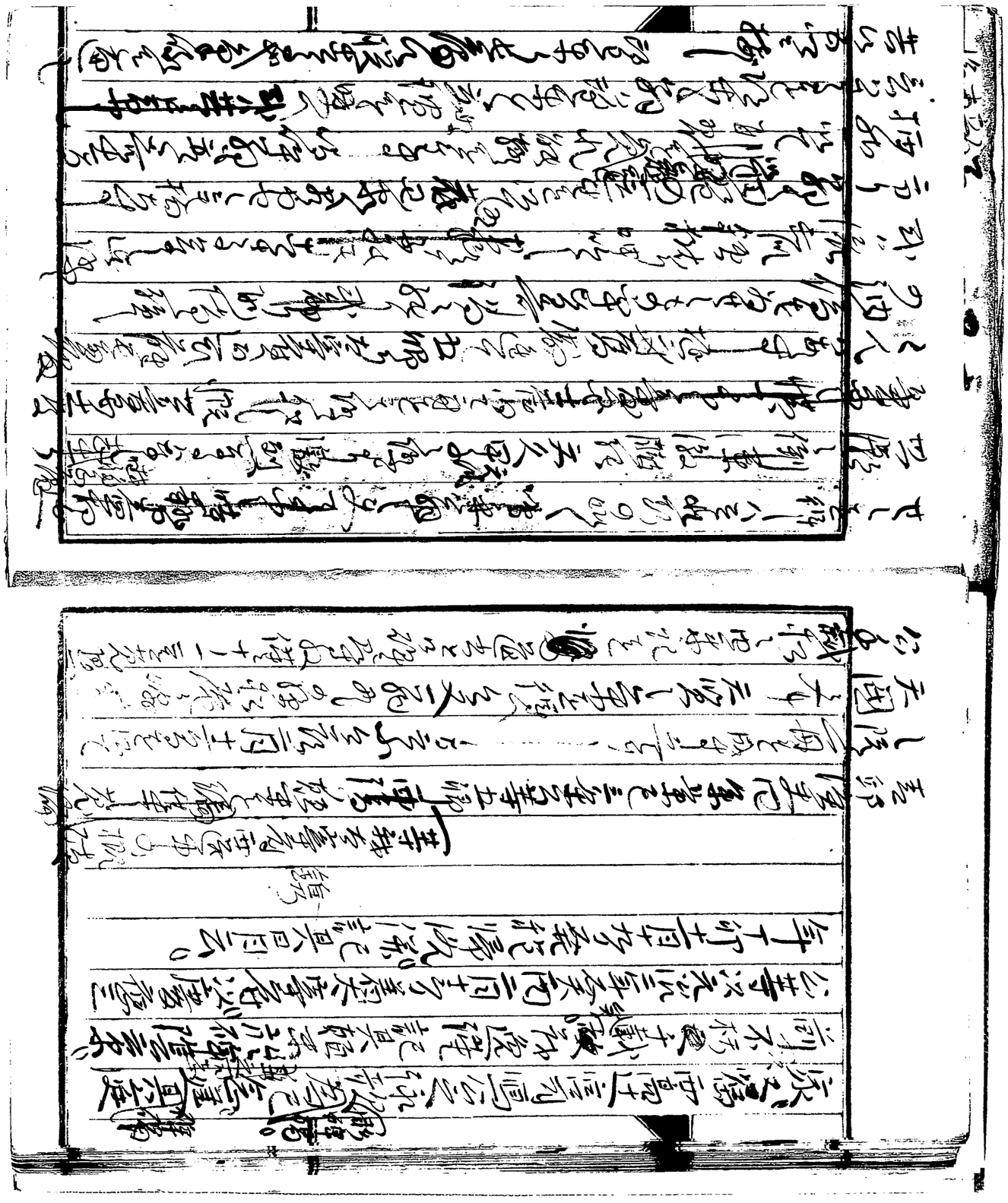
[illegible]

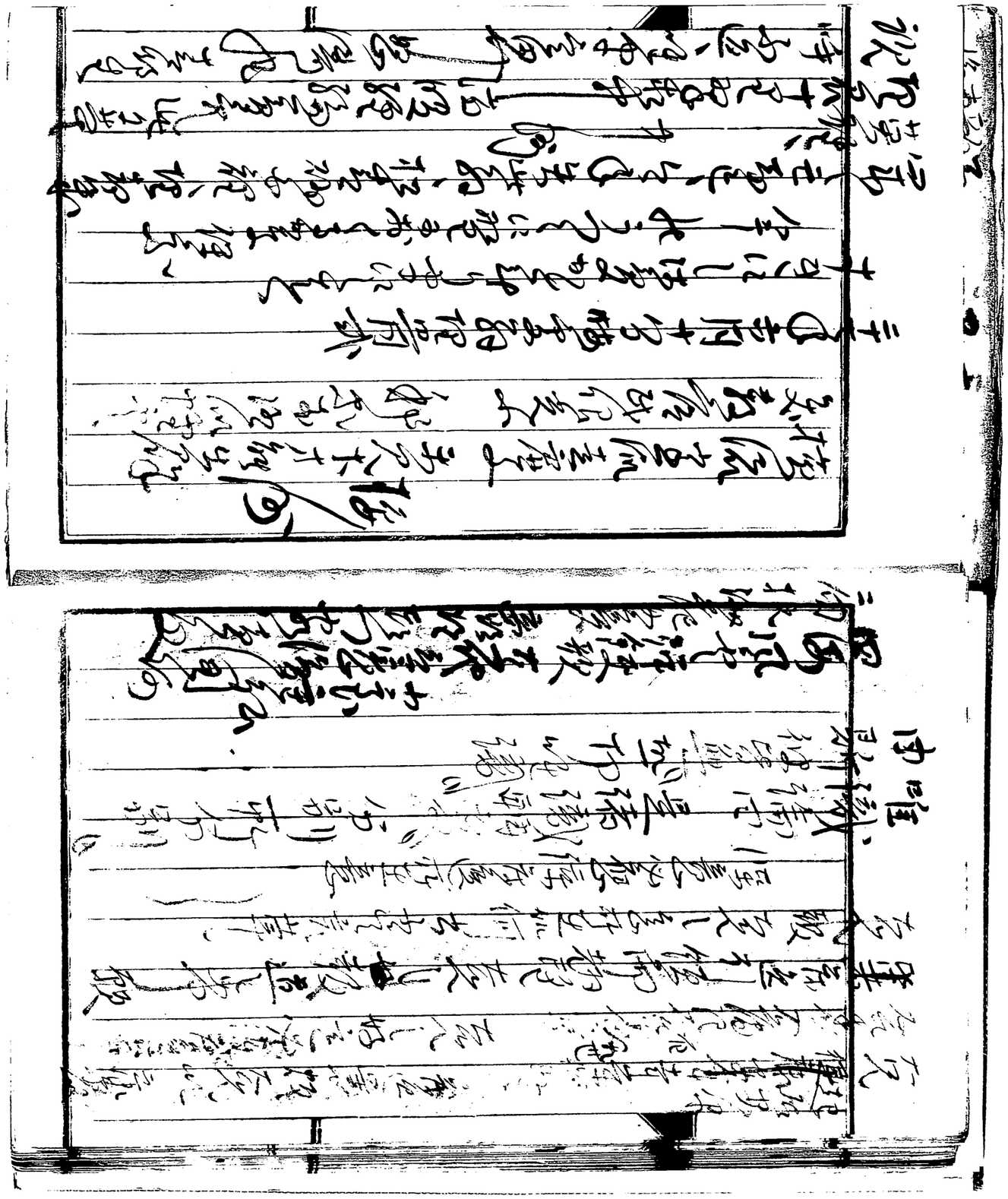
[illegible]

[illegible]

爰所陶山晉公羽老捷虜也。翁世久業鞏固者注
心力於國家。功有概世憂國之懷。未嘗忘京而
閣之傳內府實當公實當公親書赤心報國之
四字賜錄。公每朝揭而拜禮不忘。公之孫爰
之在太寧府也。日臨紹家見其悒懷戀之處。
而洁其臨岩。為孫一詠而歸。公屢朱陷刑旅情。
且必天下之士於變。次密公國家之經綸云。等
之五公卿居之年。天下之大勢。暗々衰旅轉於寧
壞之大統。一朝風雲隨而歸。明治維
新之鳴業起。原於朝三條公之就任也。殊手裁

稗材壱隨新撰新沈為紀念。添以歌章。即稗而所
刻者是也。今也是兩院三拔金年。其稗材敏手成
而殆如宣。嘉而為前院設公亦指世。其遺愛所存。
仰高台之遺德。追愛其物不竟其業也。有感於
之。曾孫相蘇謂曾未盡其紀事。確曾曾高平
偶事詩歌。祖曾先生。其紀事。恢蘇遺記。
乘義兒。蘇遺。編公等世。編之。所不得之。維新起
原太宰府紀念。編。世高。宮刃敵。佑。宮宋金。
二月十六日。供。天賢。土方宮內大臣。傳其意。蘇遺。院。
此望外之產。因。佑蘇又多。蘇遺。輯其由來記。藏于



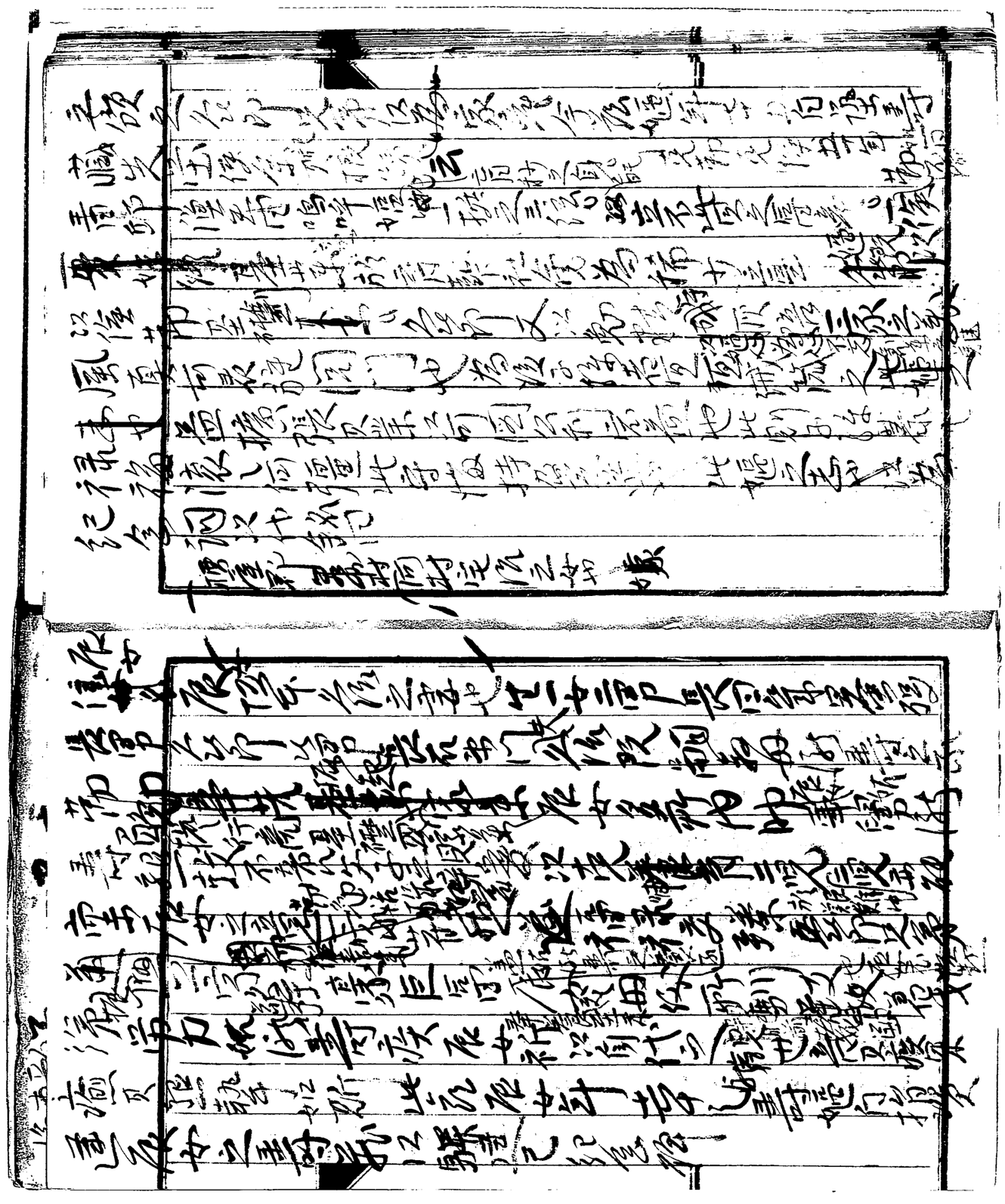


瀧壽永藏

瀧壽永藏の祖父は[illegible]の[illegible]屋敷に住し[illegible]
父は[illegible]世に[illegible]町に住し[illegible]
[illegible]

仮伝

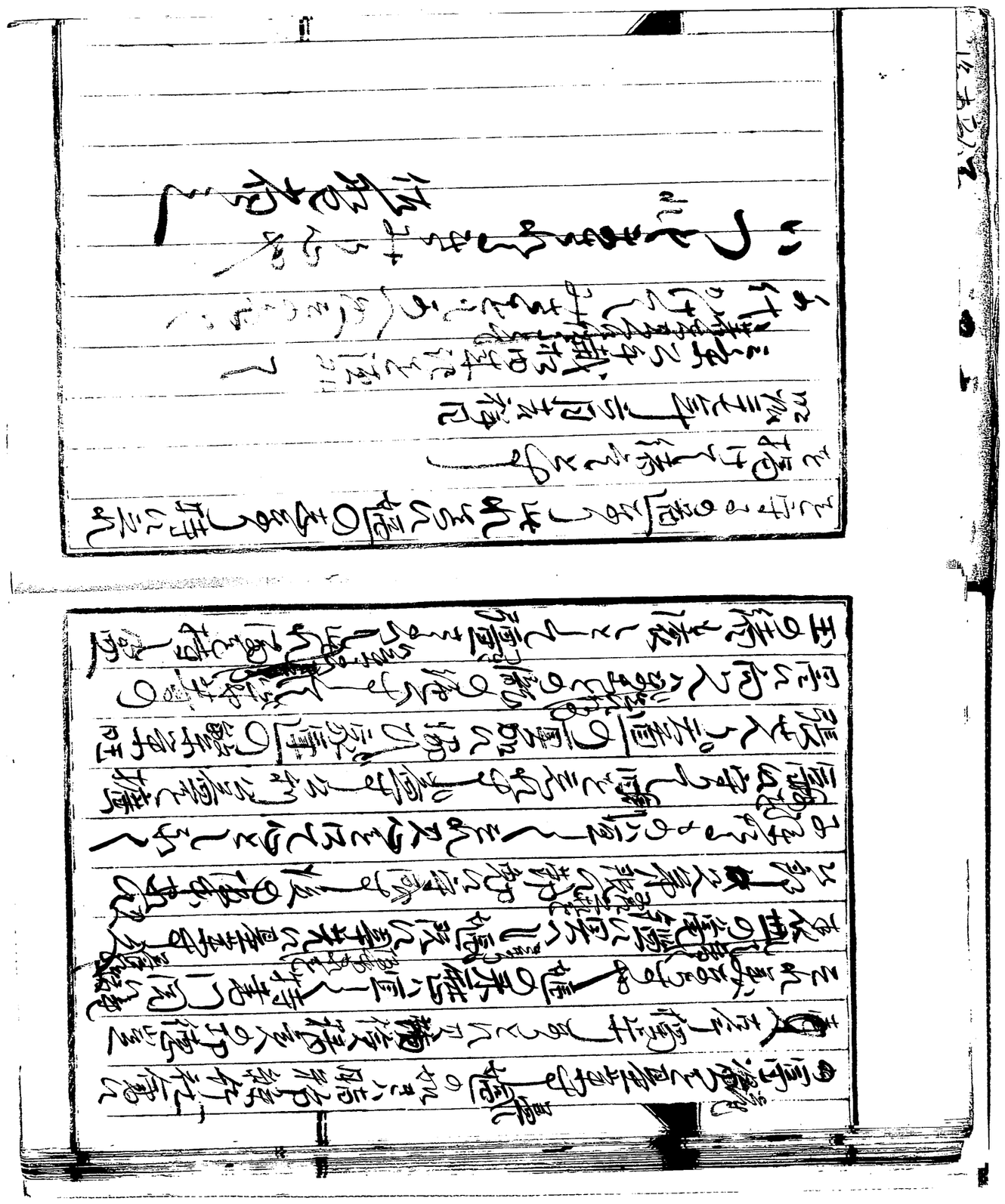
[illegible]瀧壽永藏[illegible]
[illegible]
[illegible]



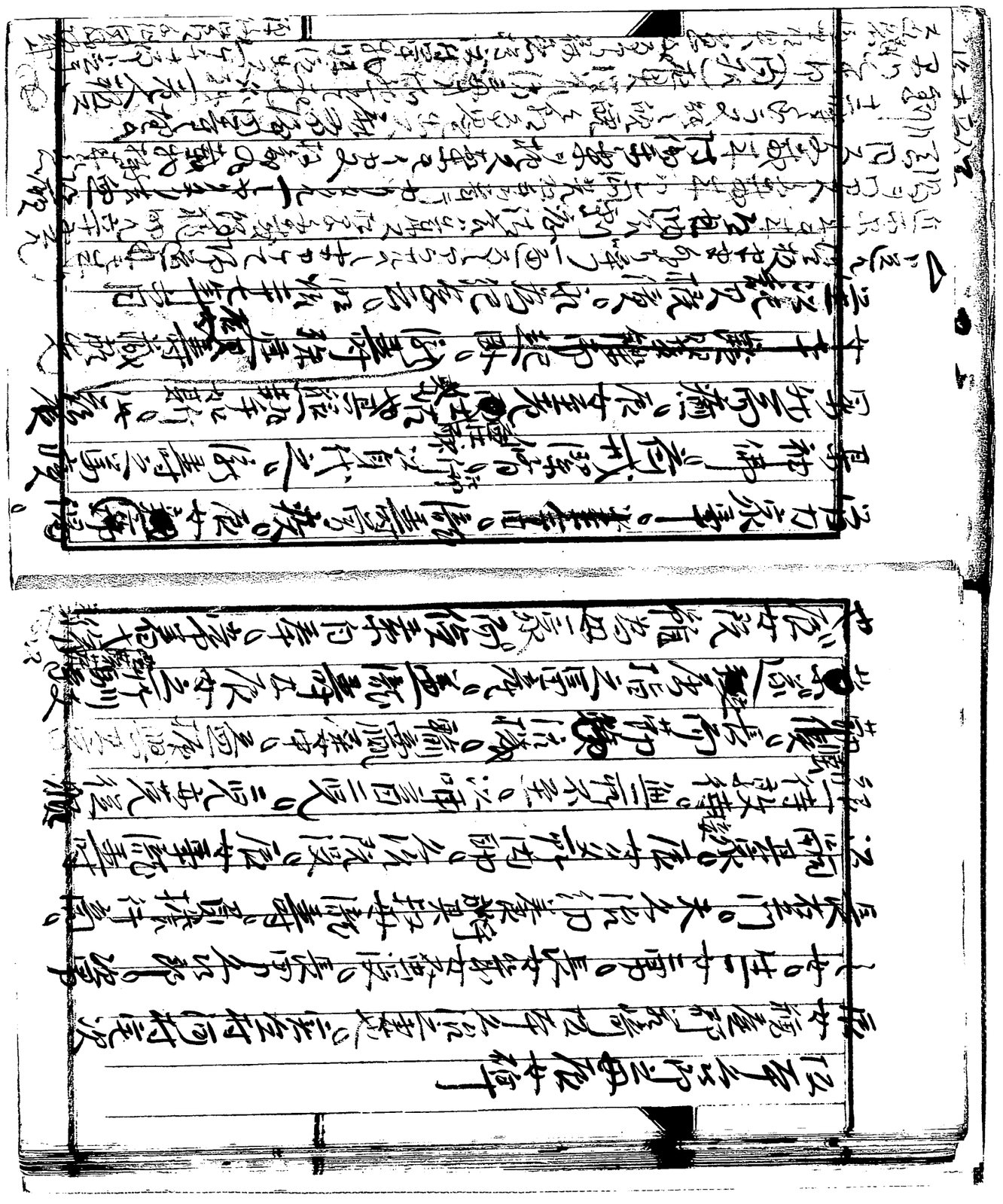
位年滝壽姫赤壁結言

流れ来る滝のもち糸絶へもせずていくらの玉の緒とも
なるらんと昔時書之うゑせしハ彼の屋の郡司崎
の里位年滝壽姫是ハ人の赤壁あ淵ちの姫ハ
初いして明を失ひ音四と苦とし恥しき母なる
産婦を慶積し花子の愛才を動し
如く尚ちずの姫の幸先と信力
を得て遂に敵に敗く高豪の家産を基業
なるし姫と苦節はせをして治へと吃驚

さしもの兵尽るものあらんへ天人執れの兵高を
見居を夢さらん既に是非に弱せハ位しく高帝を
あもへし既に高なりて兵居をとるへし之れ求のへ
あめられさるなるし之れとられ捕られさるとなる
ハ人年ハ姫う赤壁を見てし之れを公言すること情
のうちすゝ彼の弱るを暴稿すき軀幹を持
なかちし彼の炬火を取むへきの眼光を奏きなか
ちし猶強上に行信し餘餘風頑せるものなきこと
彼まる此れ嘆く心老を畫すと畫さるなるもの
なるし嗚呼姫ハ一班の三絃を撥ーはて屋蘭



[illegible]のさためなき世に[illegible]
[illegible]なるかちめや[illegible]久しい公卿の[illegible]は
[illegible]二千にあまりかへる齢をてなりもれ[illegible]年
[illegible]せれ行事も新て[illegible]強の[illegible]
[illegible]
[illegible]



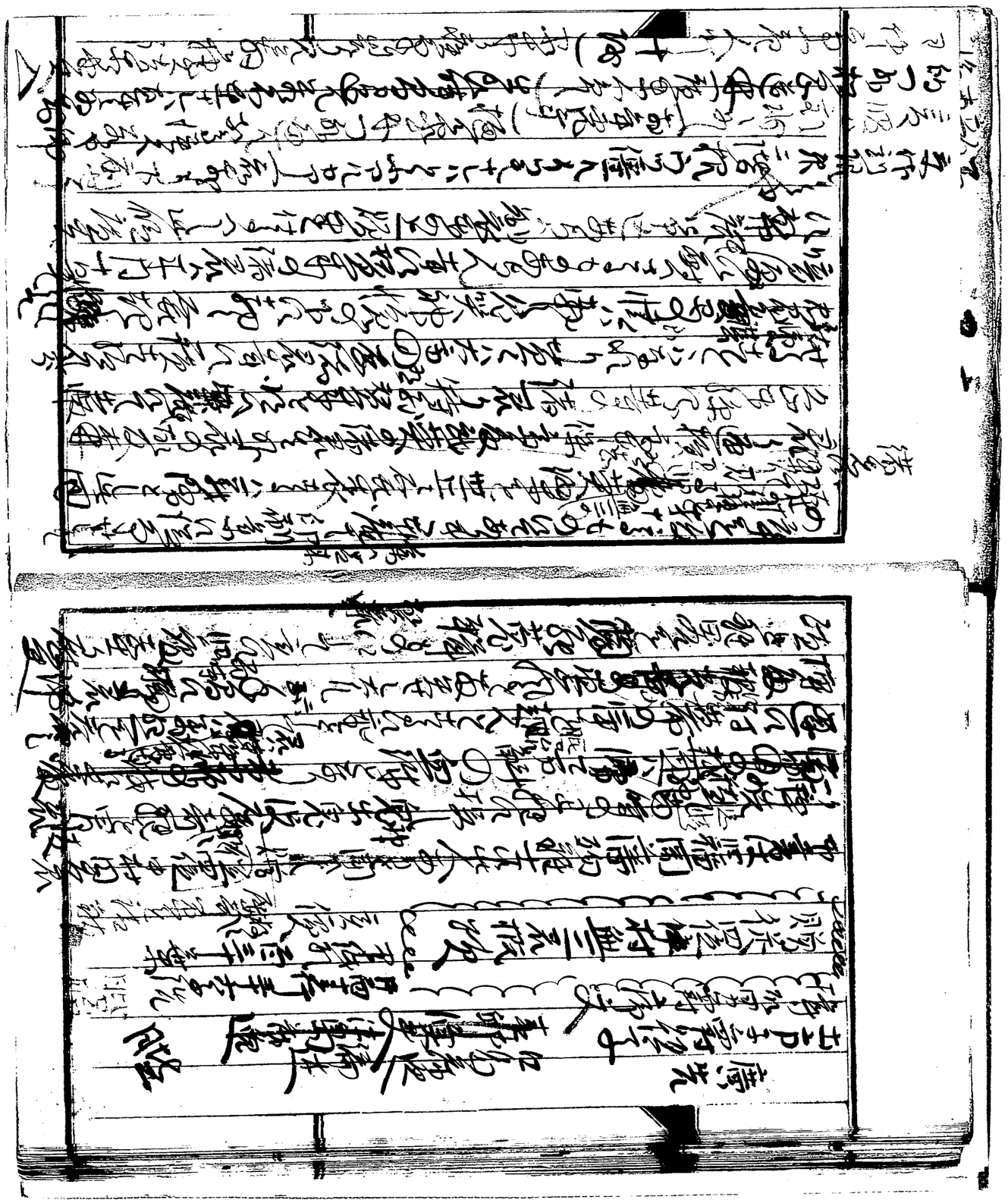
青邱漁史曰く金晨は我太宰春臺遷に係る
る殘簡を蒐集して一冊となす之れを太宰府紀
念編と謂ふ今茲二月十二日春雪
天國の下に達せるの第を仰げり渥丹其紀念に
因係あり陶山一貫高橋原右蔵等の
三家公手載せらるの由を知て又殘簡を蒐集
之を編輯せしはこれ所の如し其の
任務は倩の澎澈せる之久慶意の降より
あらざるべし此の第の事は秋田藩の
の士班師して事を為せしものの事は奇禍に
刑

辭に曰く
として紙く信濃の嬉高を降服し清の
曰く長吉を
の住る所を用ひ
力多く居れり一五の時士と
長は宮て文文野村
とも為へ脱し
陸も自義の
新光
す

[illegible]

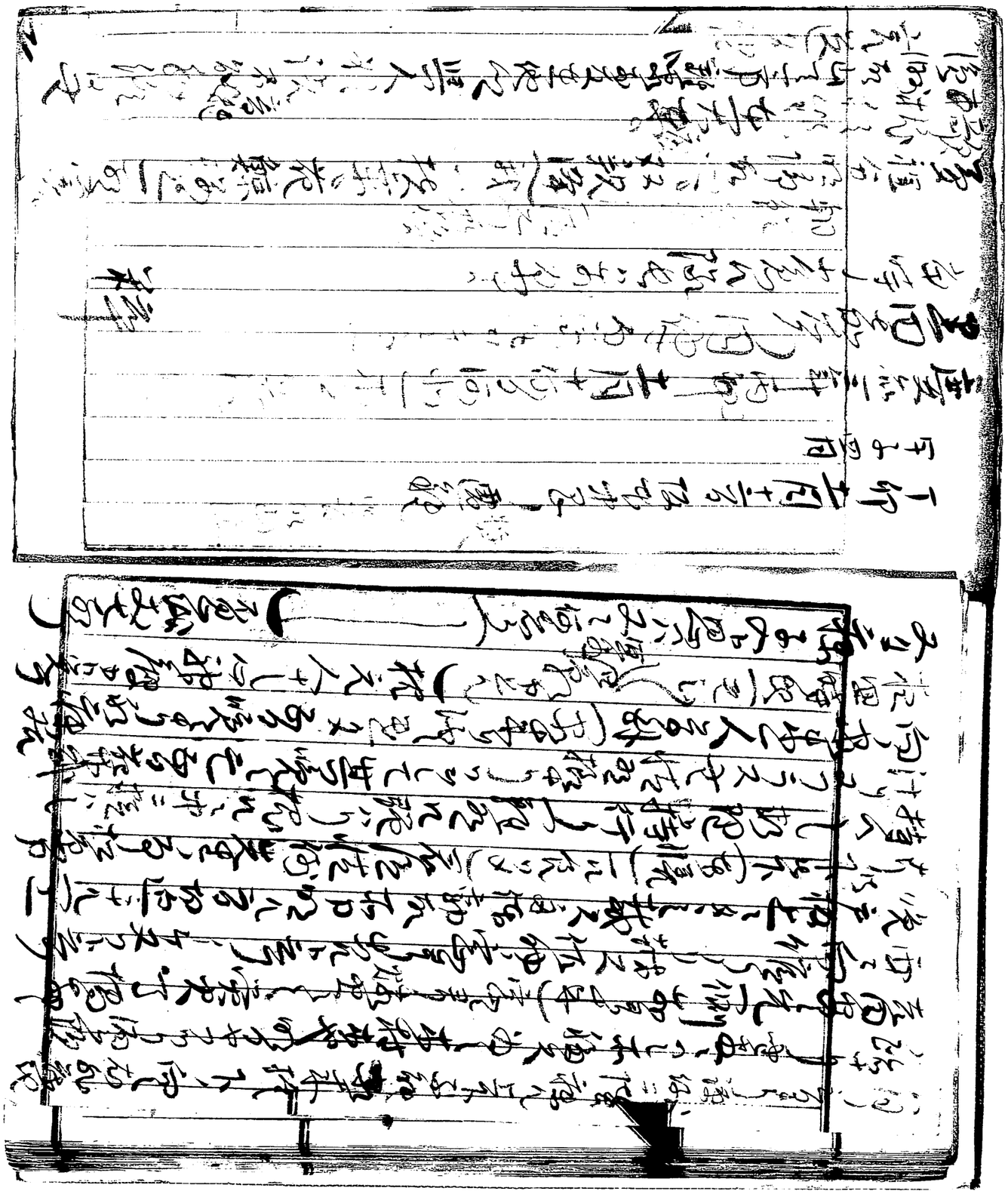
[illegible]

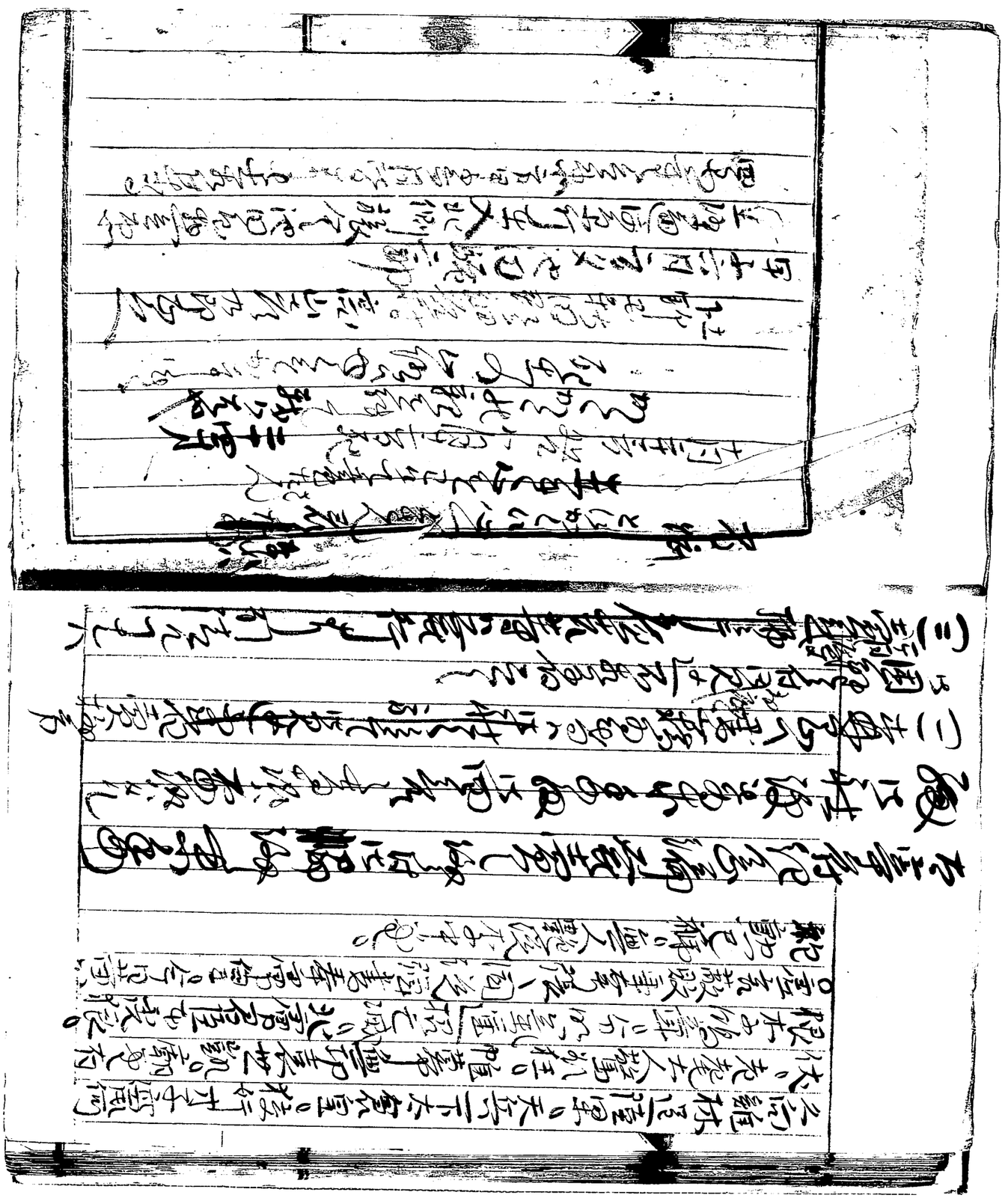
[illegible]



[illegible]

[illegible]





嘉永七年甲寅歟

第十九

福岡藩

[illegible]

第二

[illegible]

[illegible]

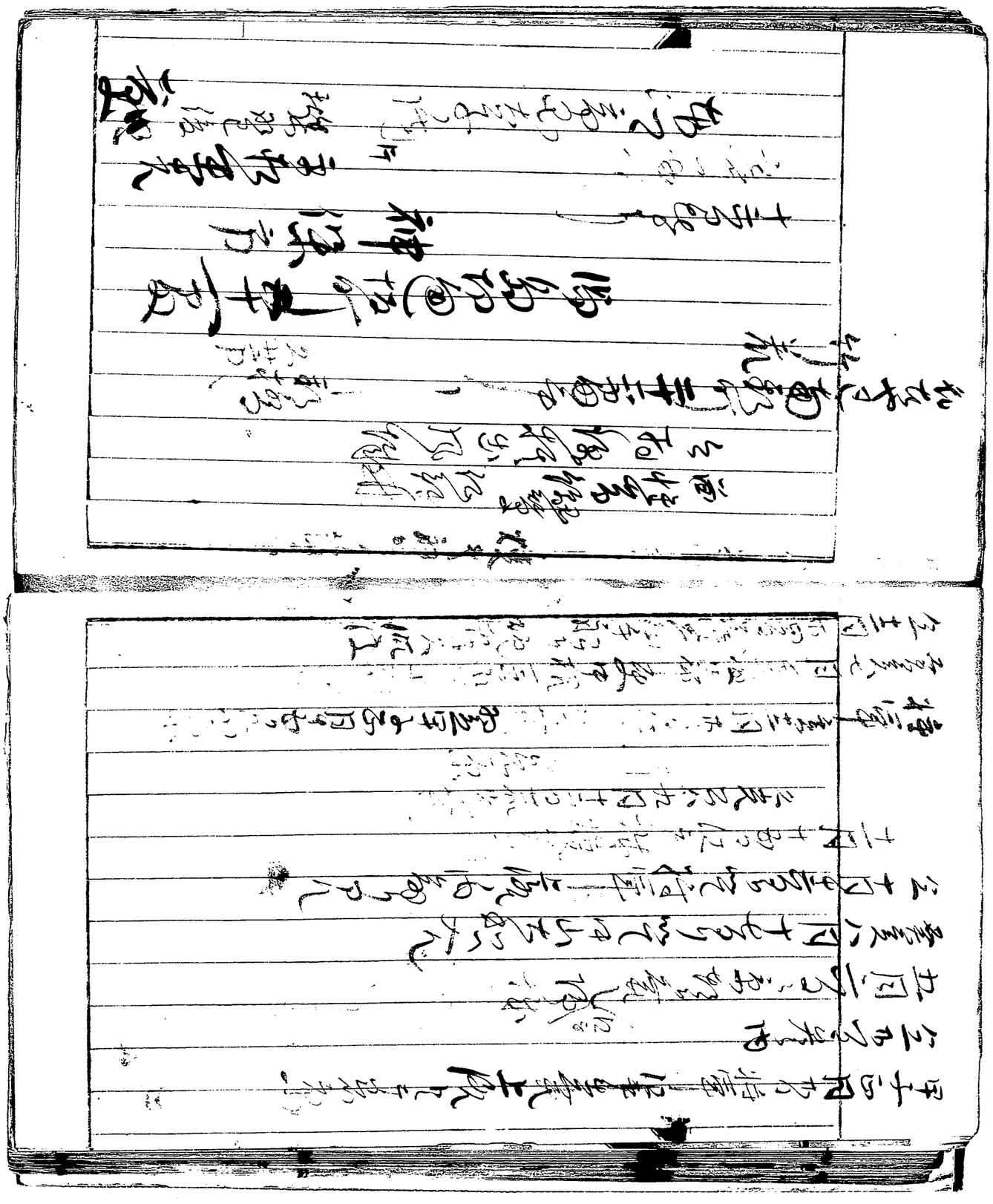
[illegible]

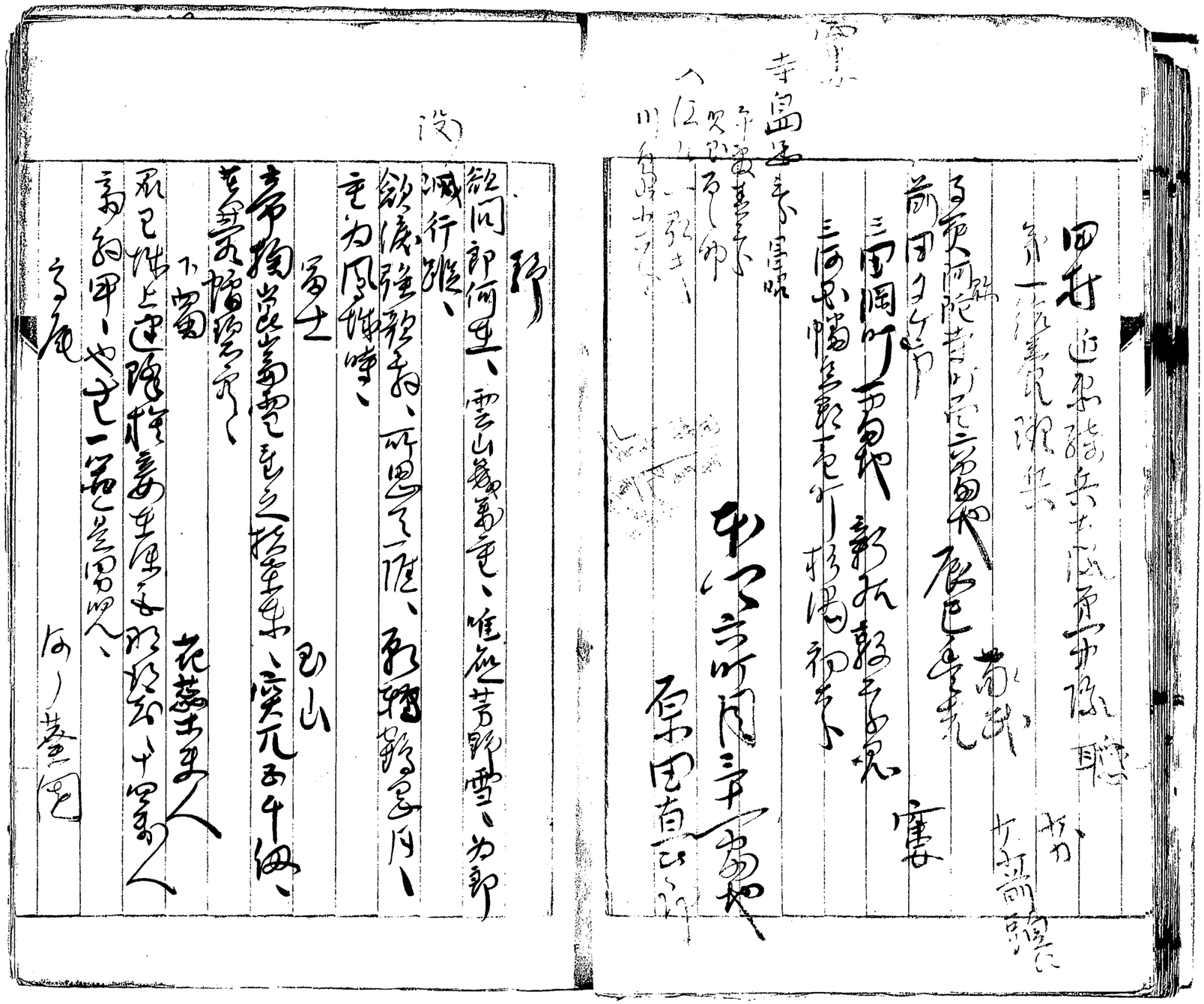
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

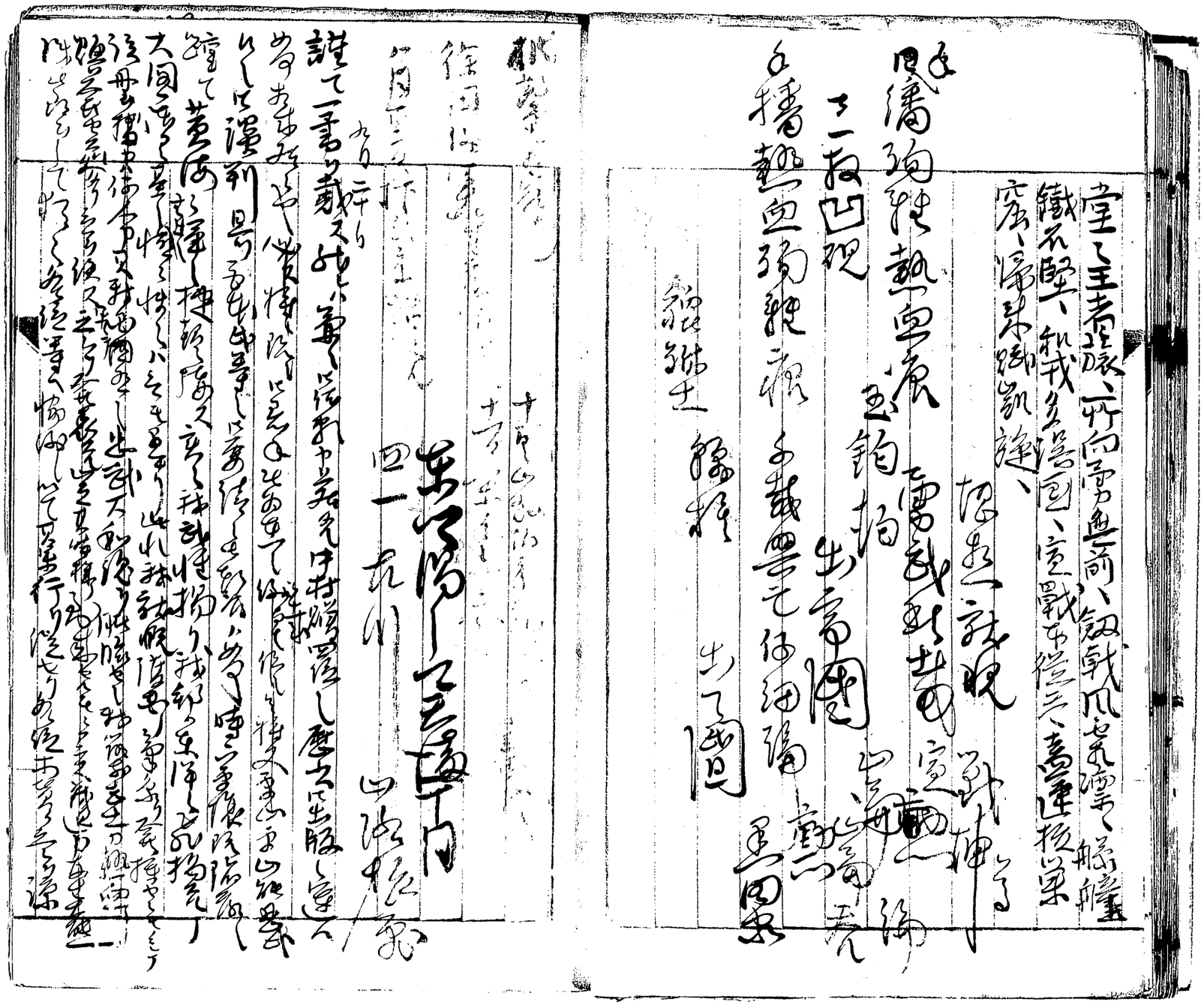




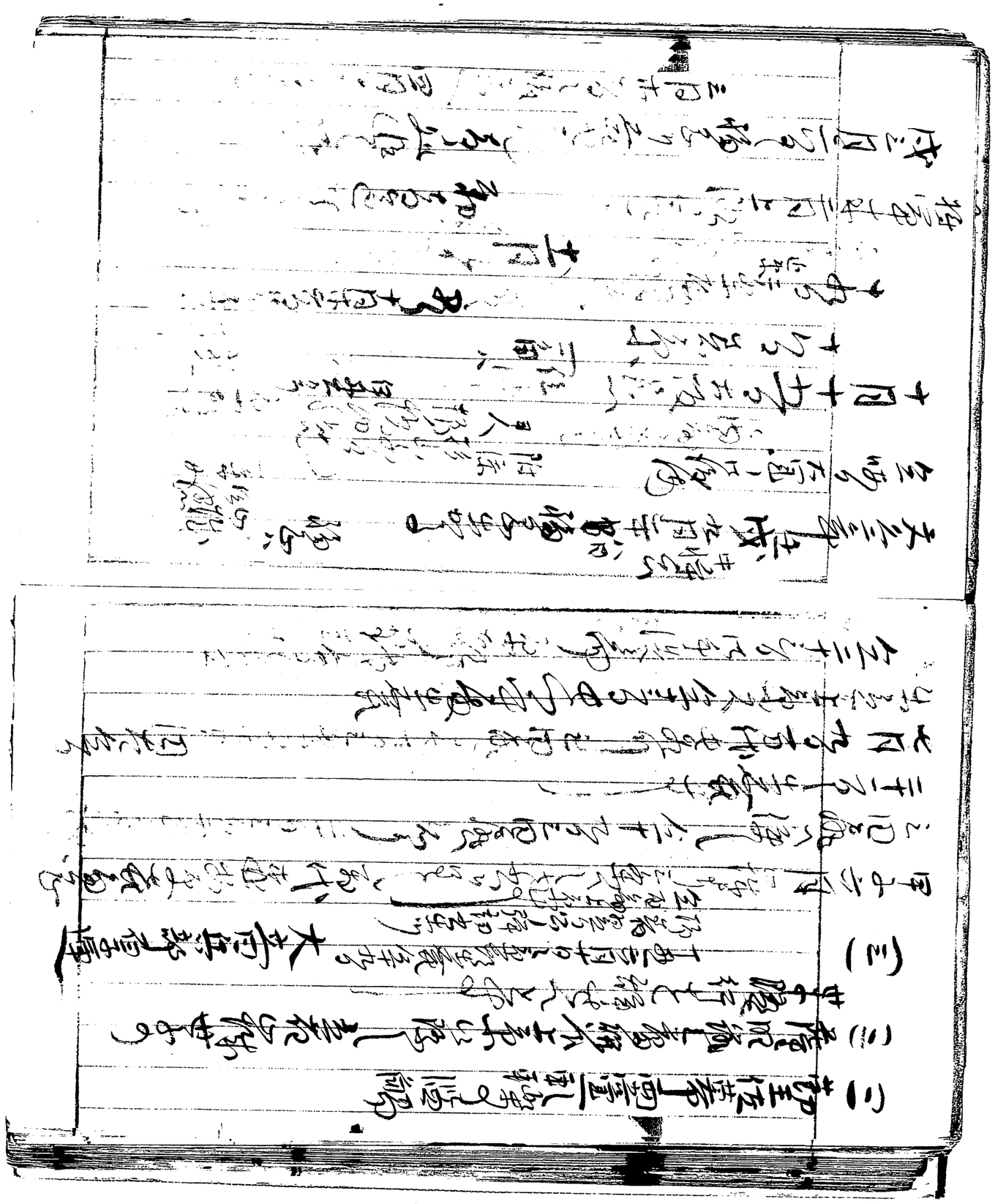
[illegible]

[illegible]

[illegible]

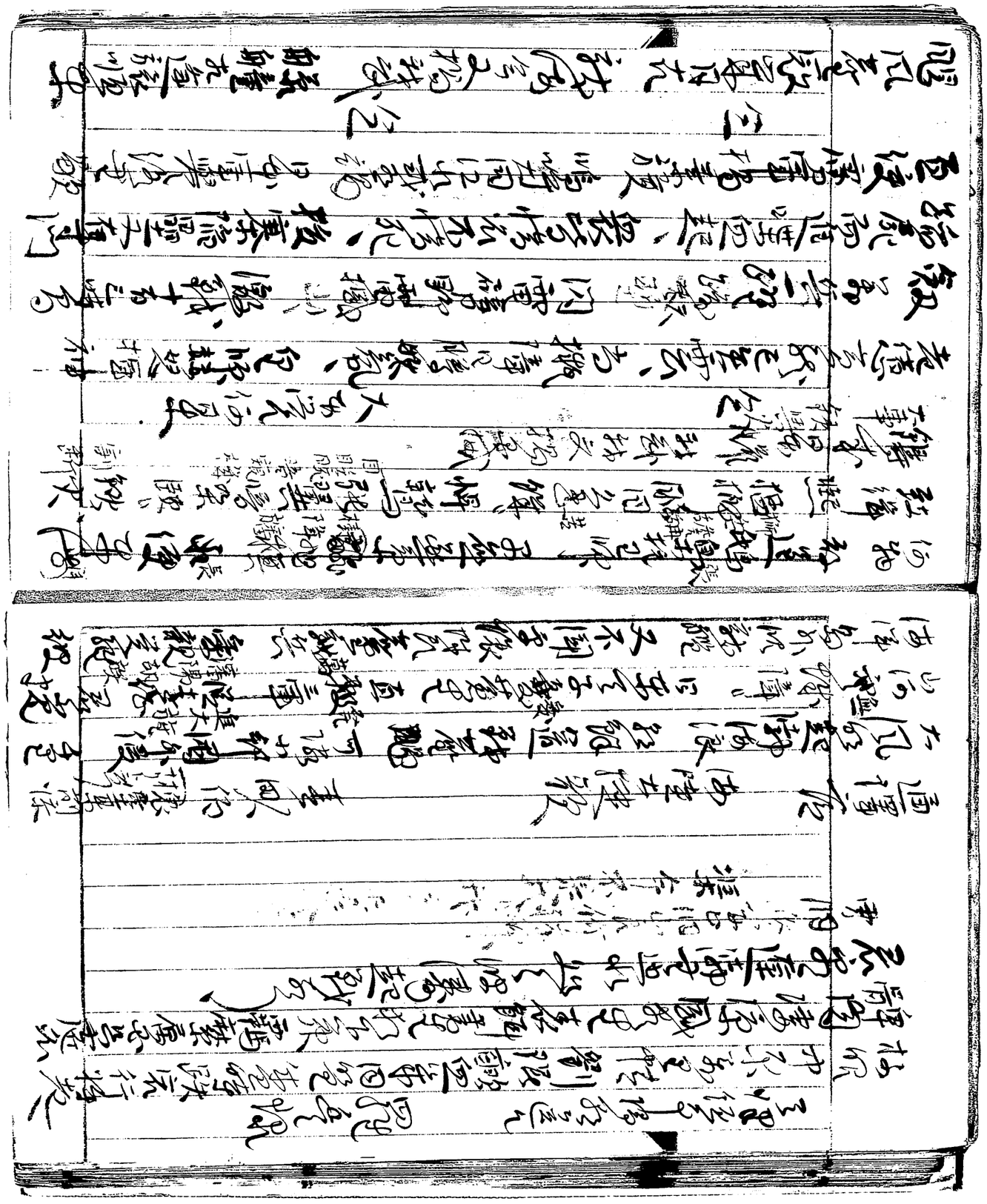


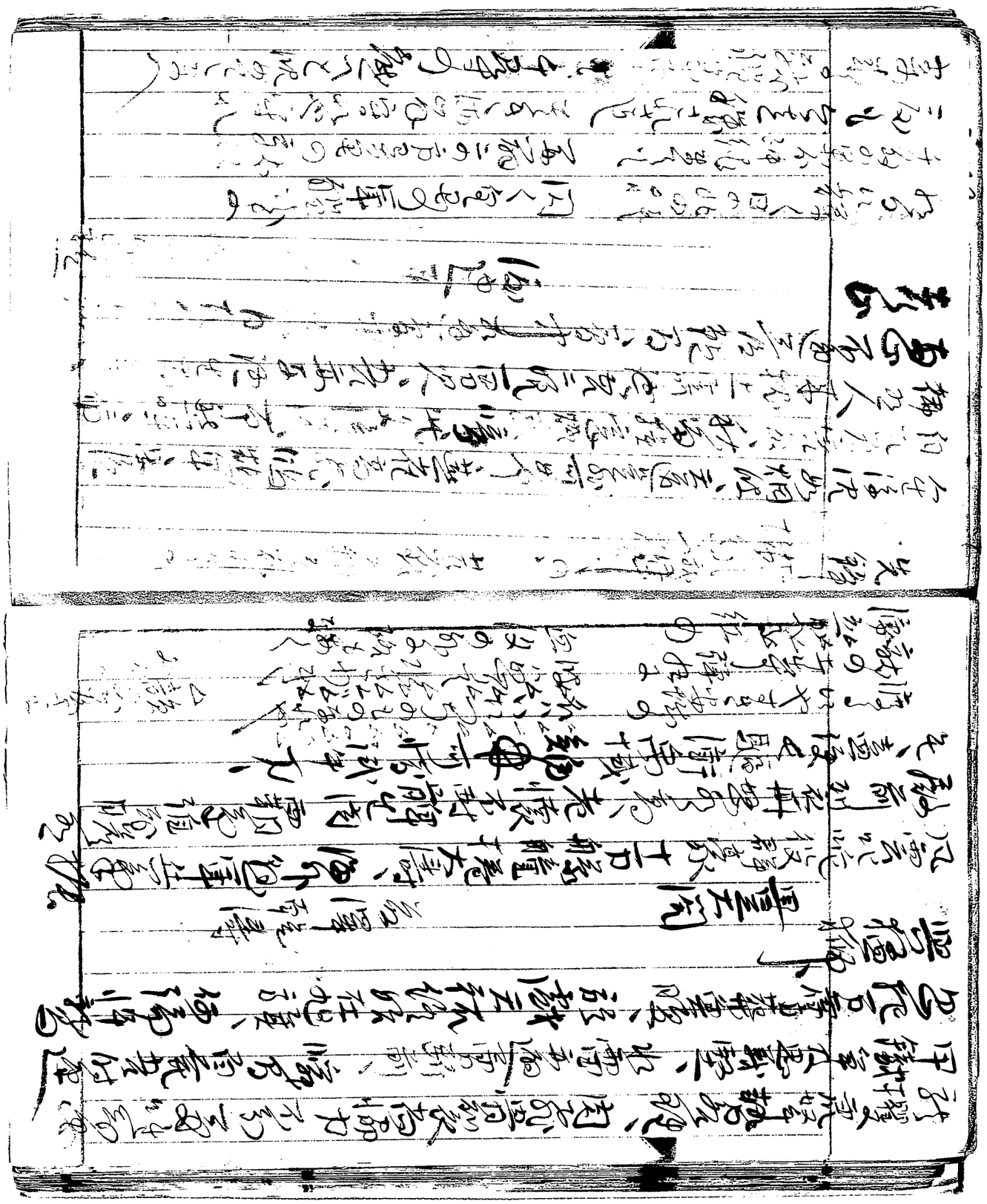
[illegible]

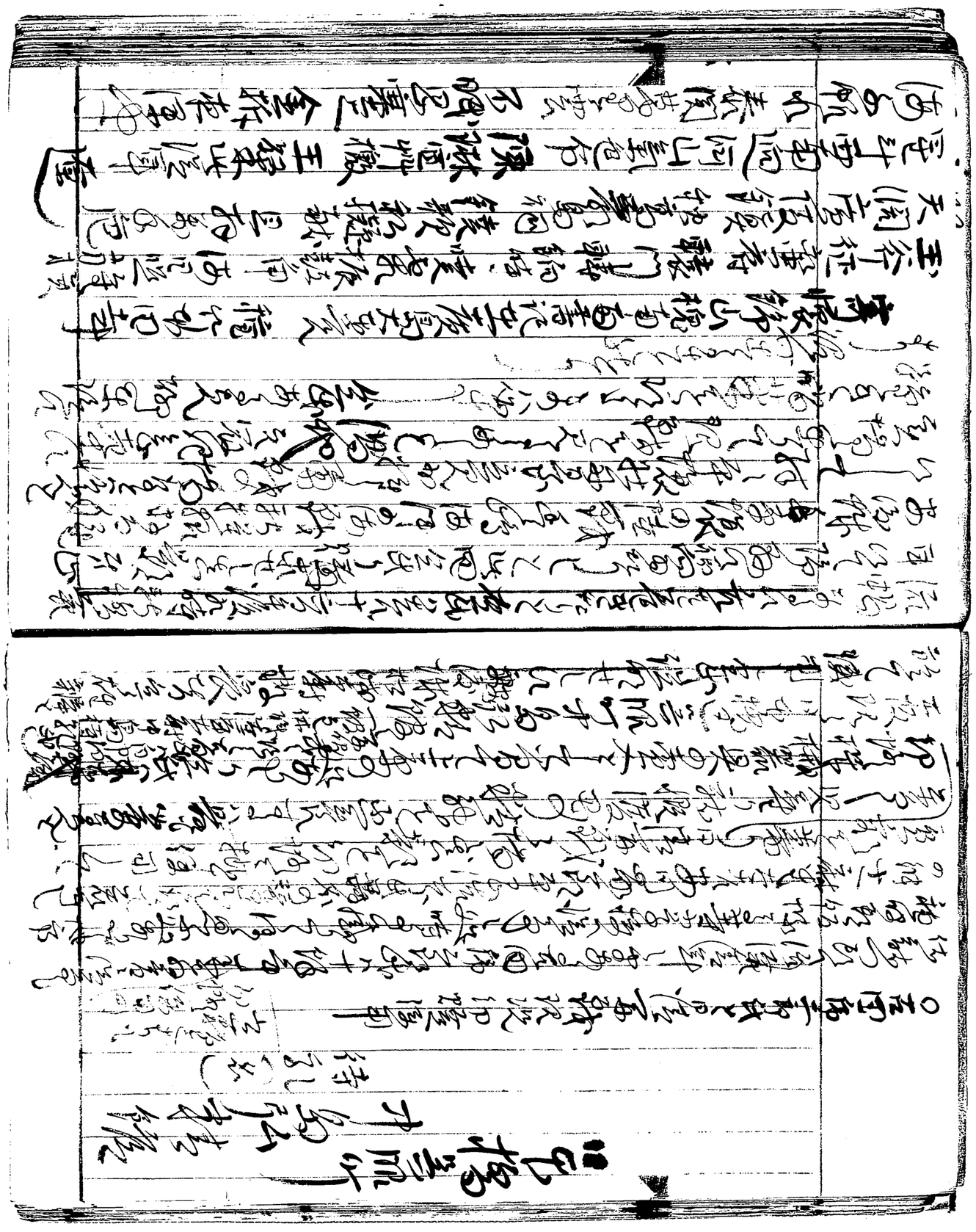


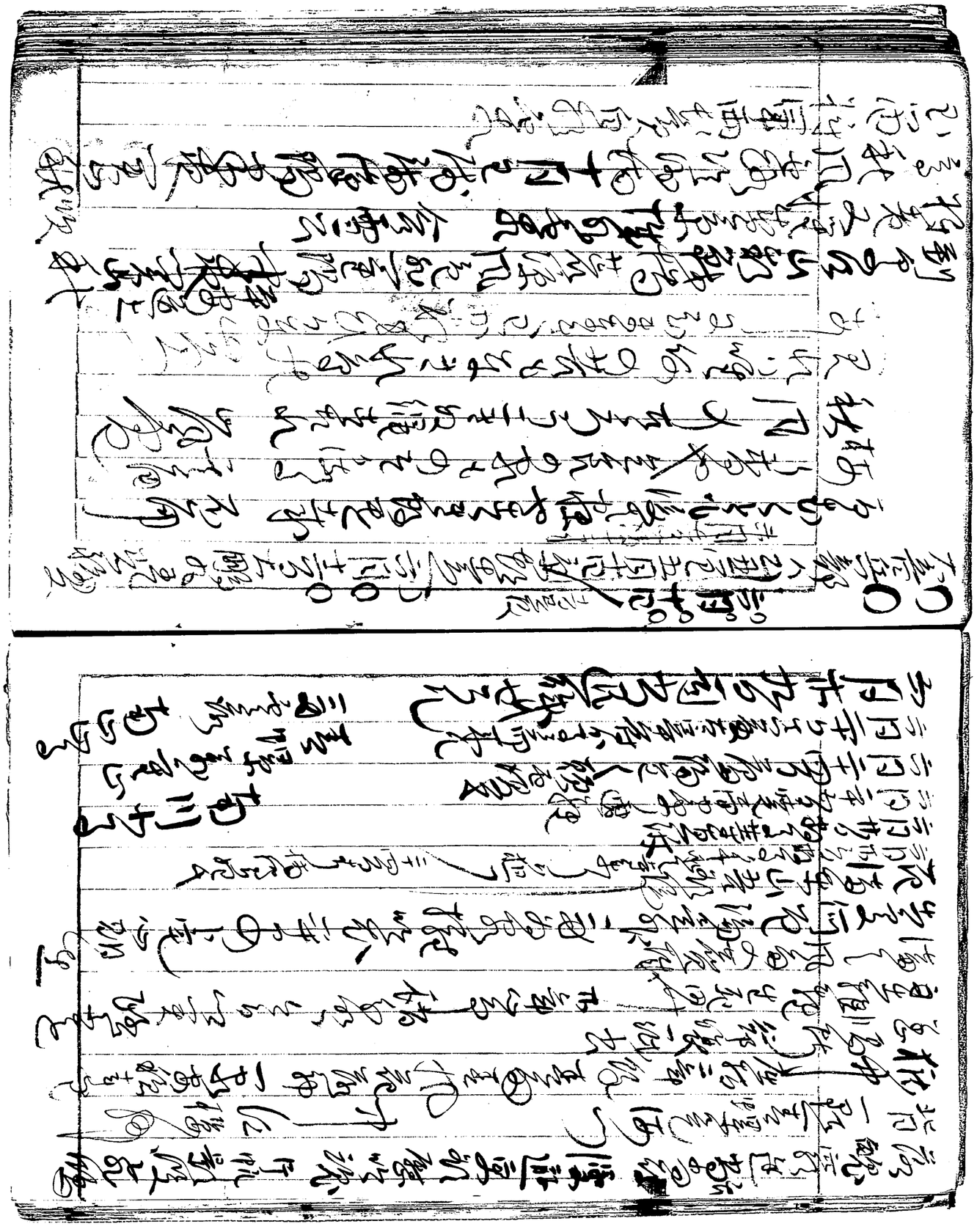
[illegible]

[illegible]









[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

哀さそふ不二翁愛の秋の月　遠連

扇さしつゝ罷の先のけ　こ小

輪違ふてあちこちに雪て　井弟

枯梗の花も咲ぬみはまし　も内

秋思ふやうつみはなちぬ猪は人　馬援

かゝたる雲の嶋ふ嶋ふ　蕃うあよやう　竹雨

切れたる雲の嶋ふ嶋ふ　鞍のさゝ　の分

さし挿して罷を待とる　ほ仁

最初から鼠ふみぬき鍬ふ　猫故

風のやるかね澤屋の京　久し

未るゝまゝてすなしみ月仙

採れ行てそのあ梅　去来

なり忠仲百花園花を吹せたり　七七部

京から遠て孫ぶれなる孫　戸代

手もるて孫利のよい三度のは　小邨

花樽ふさきみ咲おくれふ　月高

親のため島ふ花菖蒲いうと　馬大

はら国茶花のハ色とえ仕ぬ　え大

いたら国ふちきい方いもくきい　馬援

をねとるのとはあ花の一くせ　衣和

お方の親ふハそれ三度の風　はあ芝

信脇ふの罷れそこえ　猫去

此さハきこゝをふの脇ふ面すちん　鈴部

何人なるきゝ元阪時節初年　小部

新田社まいのてゝれたまへ　重大

敷さうちゝてたる杉風　杉敷

秋風みこゝの橋の夏ぶかく　曲元

八ハーもゝ陽のもゝ揺る　高久

芭蕉　みせ出人形　玉元

ひるゐそなのかはの世　野々果

大木の枯のくまを霜掃ひ　老

あまの紙もゝ染ん　ち

十月　廿三日

一中老同新門出行　一九別荘別墨

一定見紀行刷版迄仕廻

一西湖寺十大字

一陵心寺墨掃庵寺門　一外歩形乱

一金所出刷　宇治

○まれ山下右付高長ゝ高ゝ中ゝ高迄けし元

仝廿五日

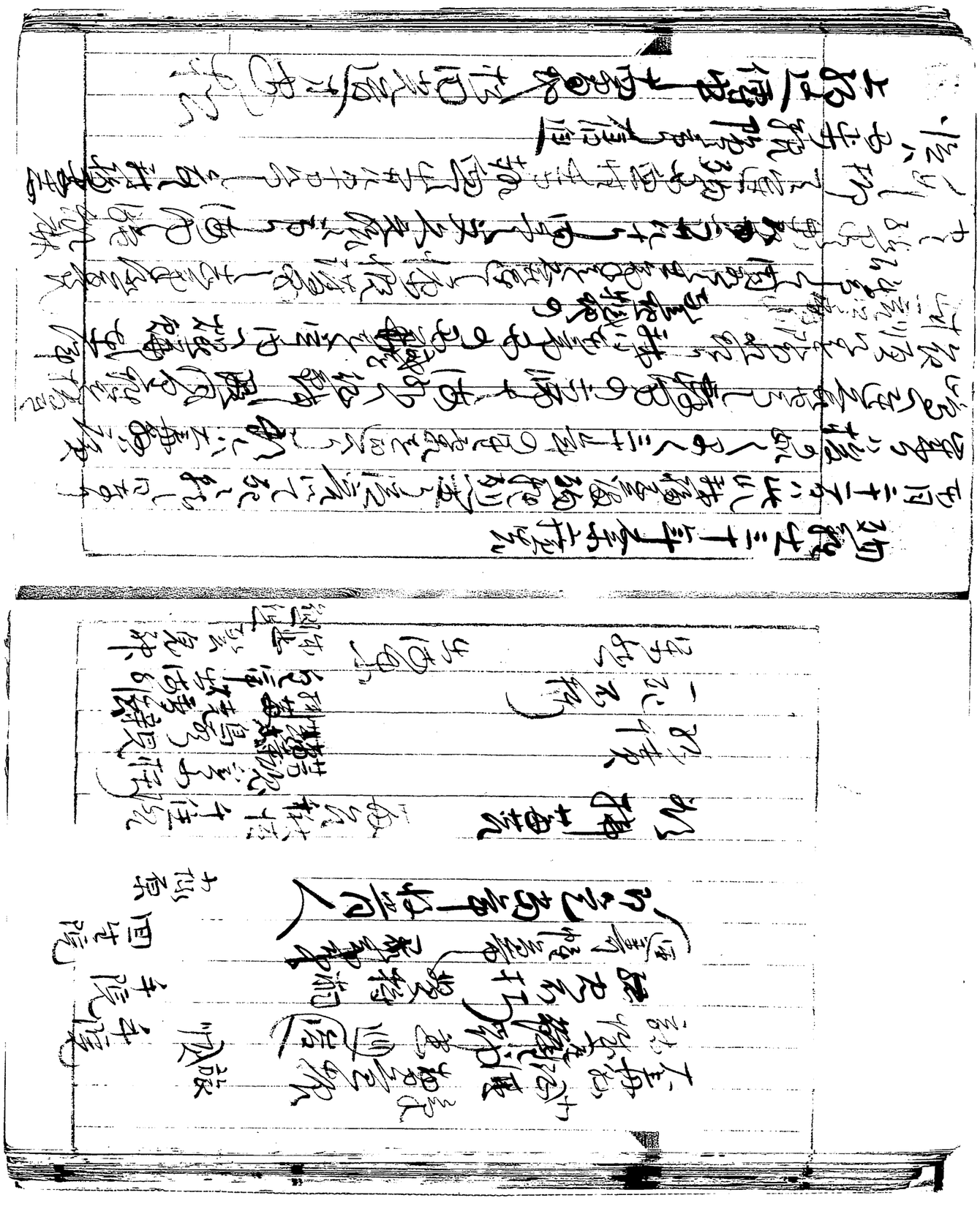
一中老紀行刷版　一定見紀行刷版

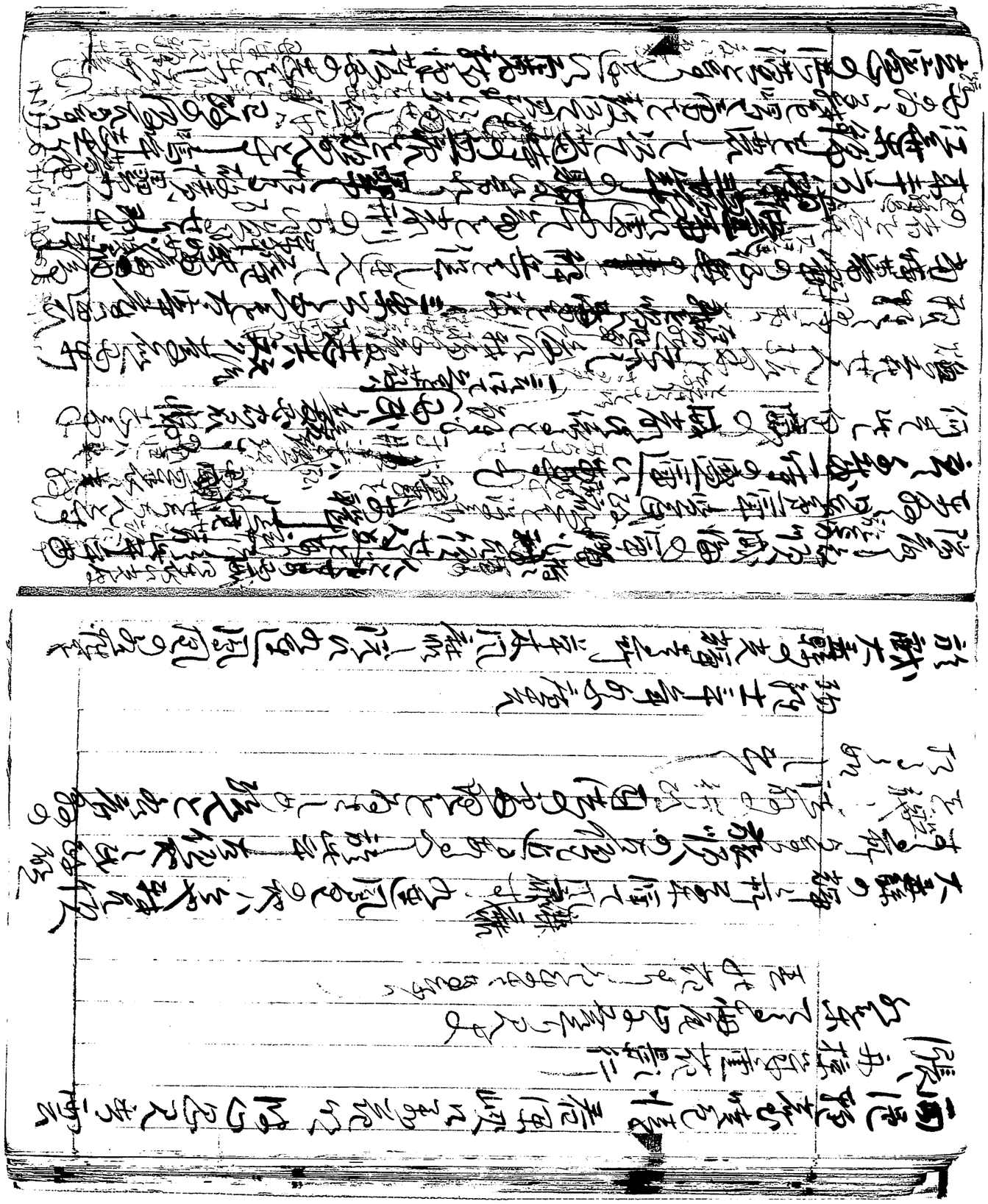
仝廿二十三日

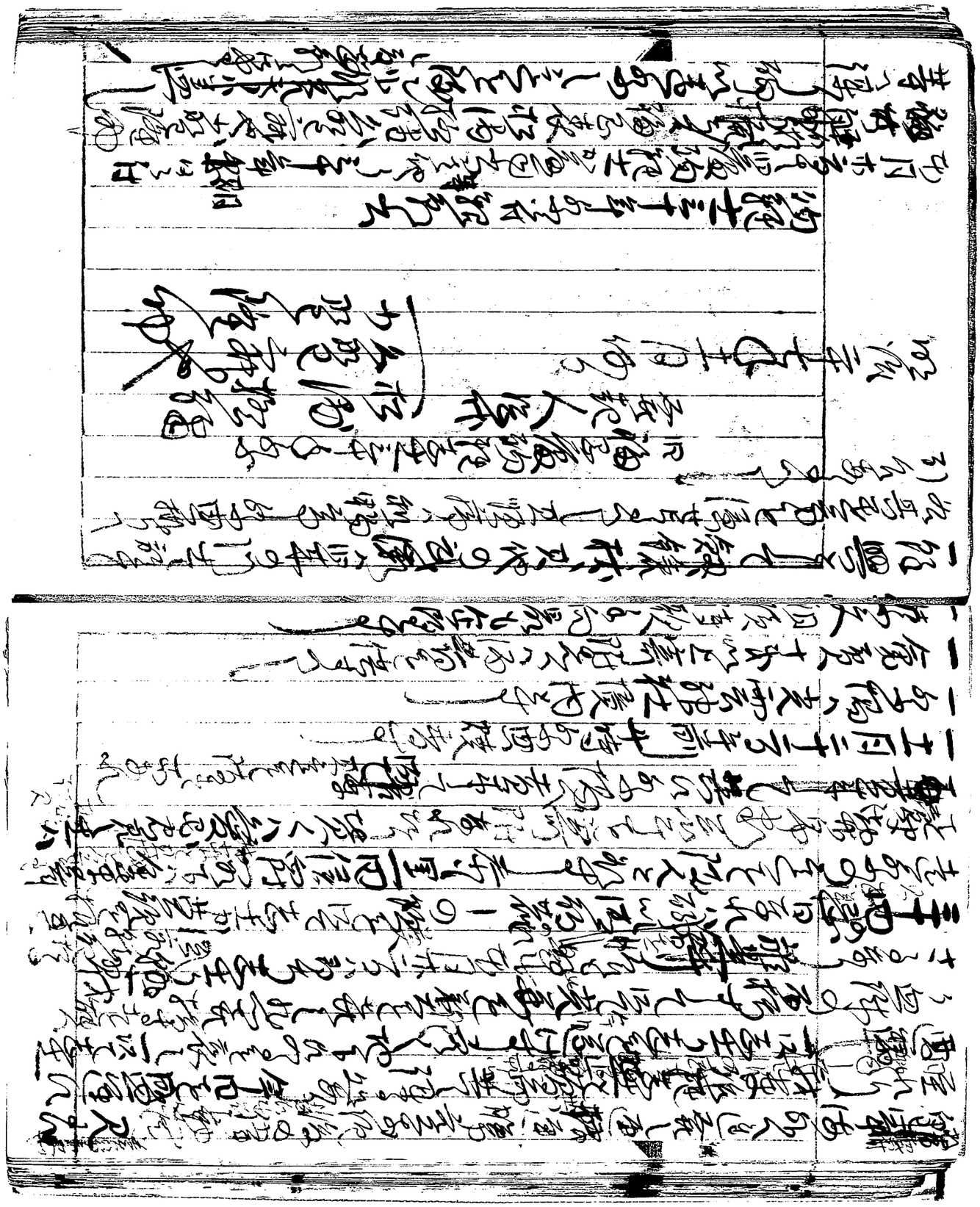
一　写　十一　三　一四日

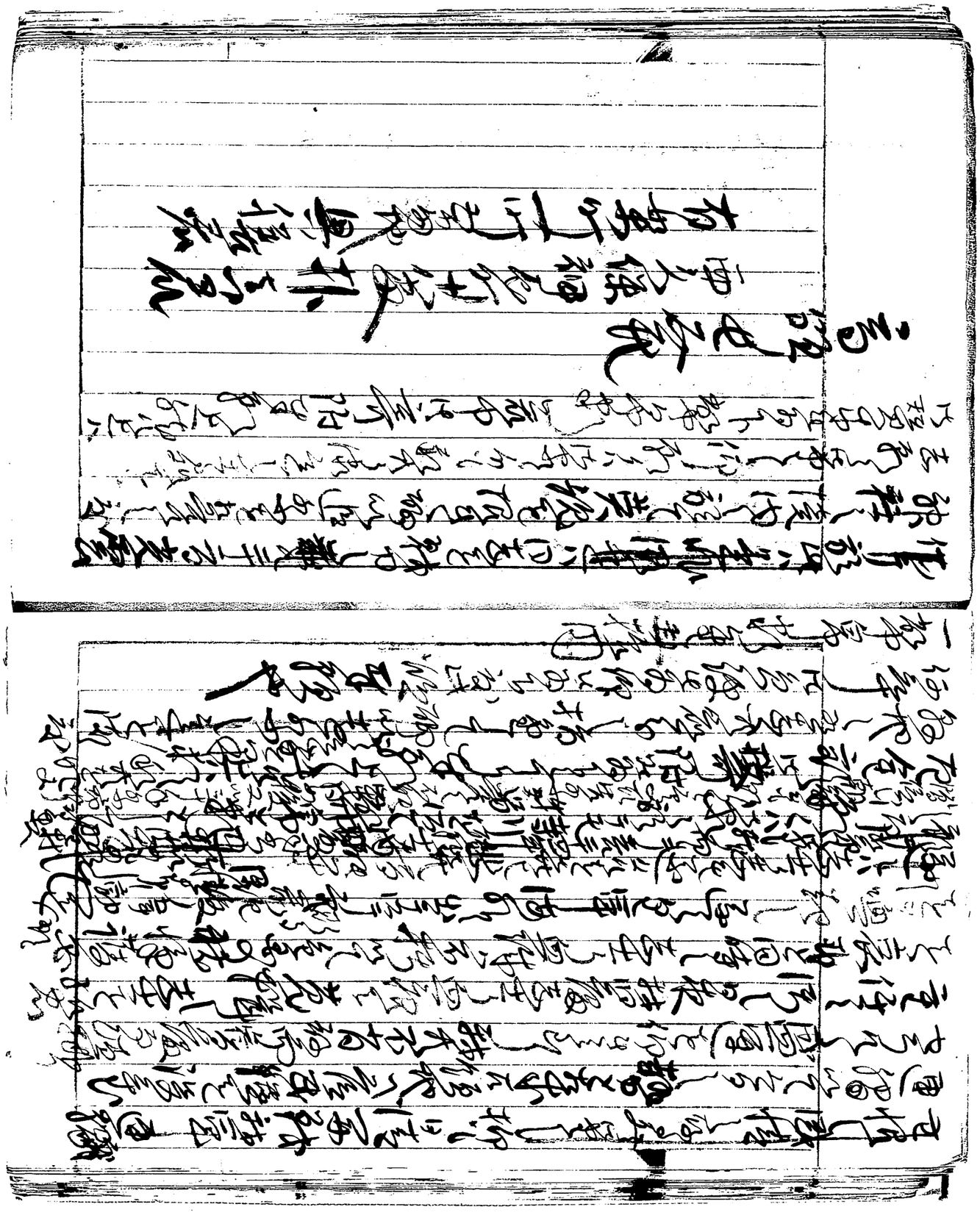
二　ゝ　七　八日　十　十二

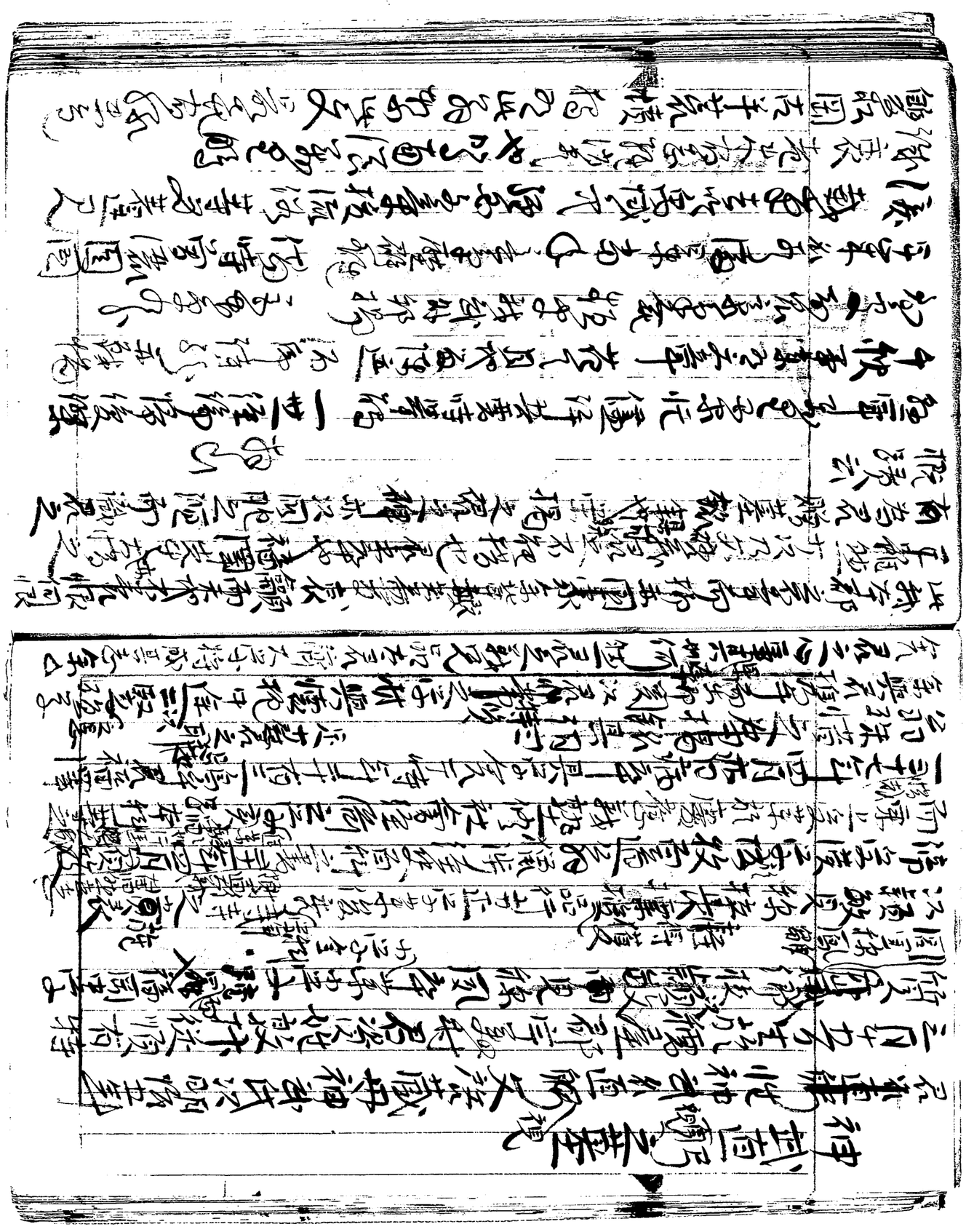
十三　十七　十九　十八　十九　二十　二十一　二十二　二十三　二十四　二十五　二十六　二十七　二十八　二十九　三十　三十一　三十二　三十三

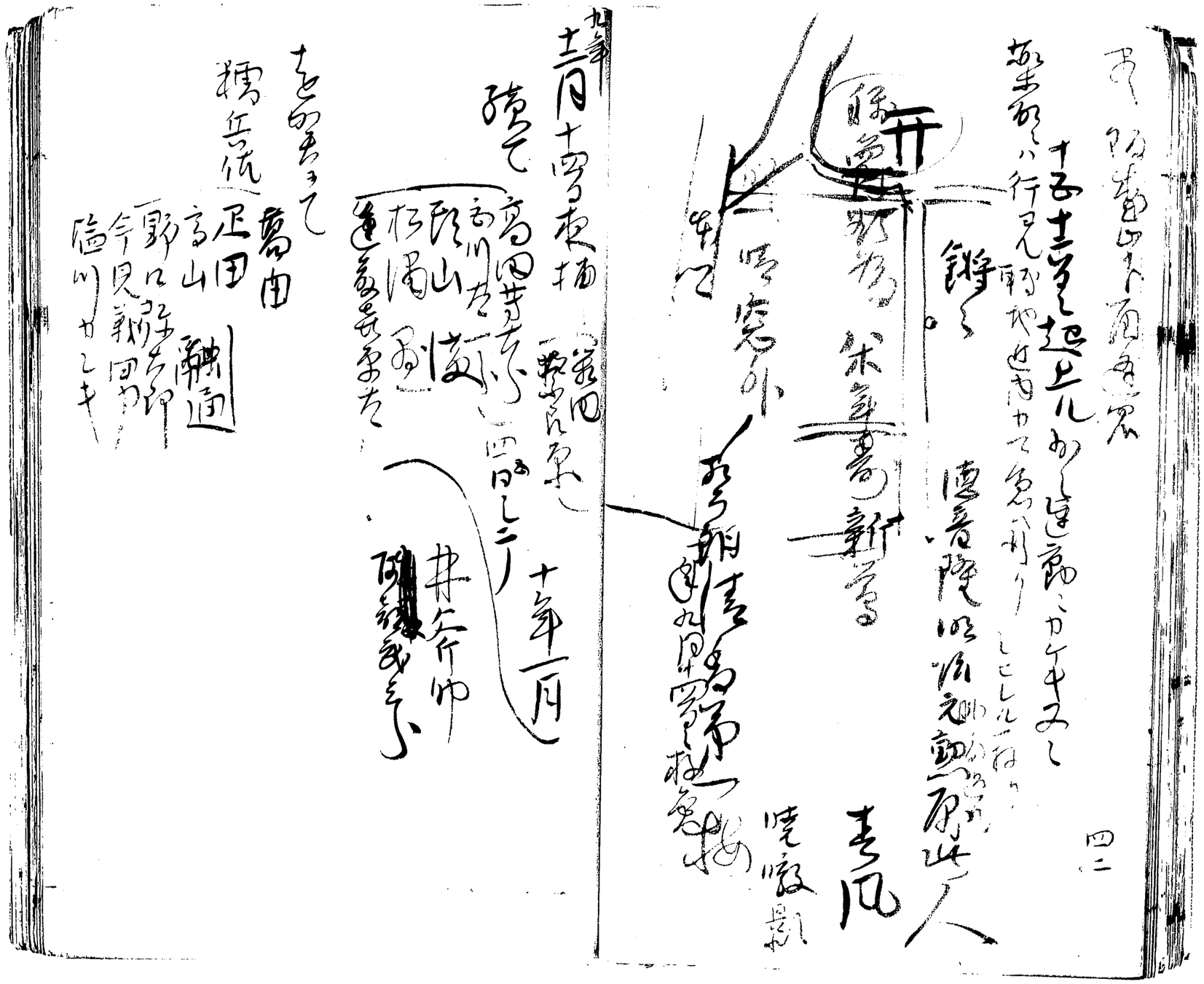


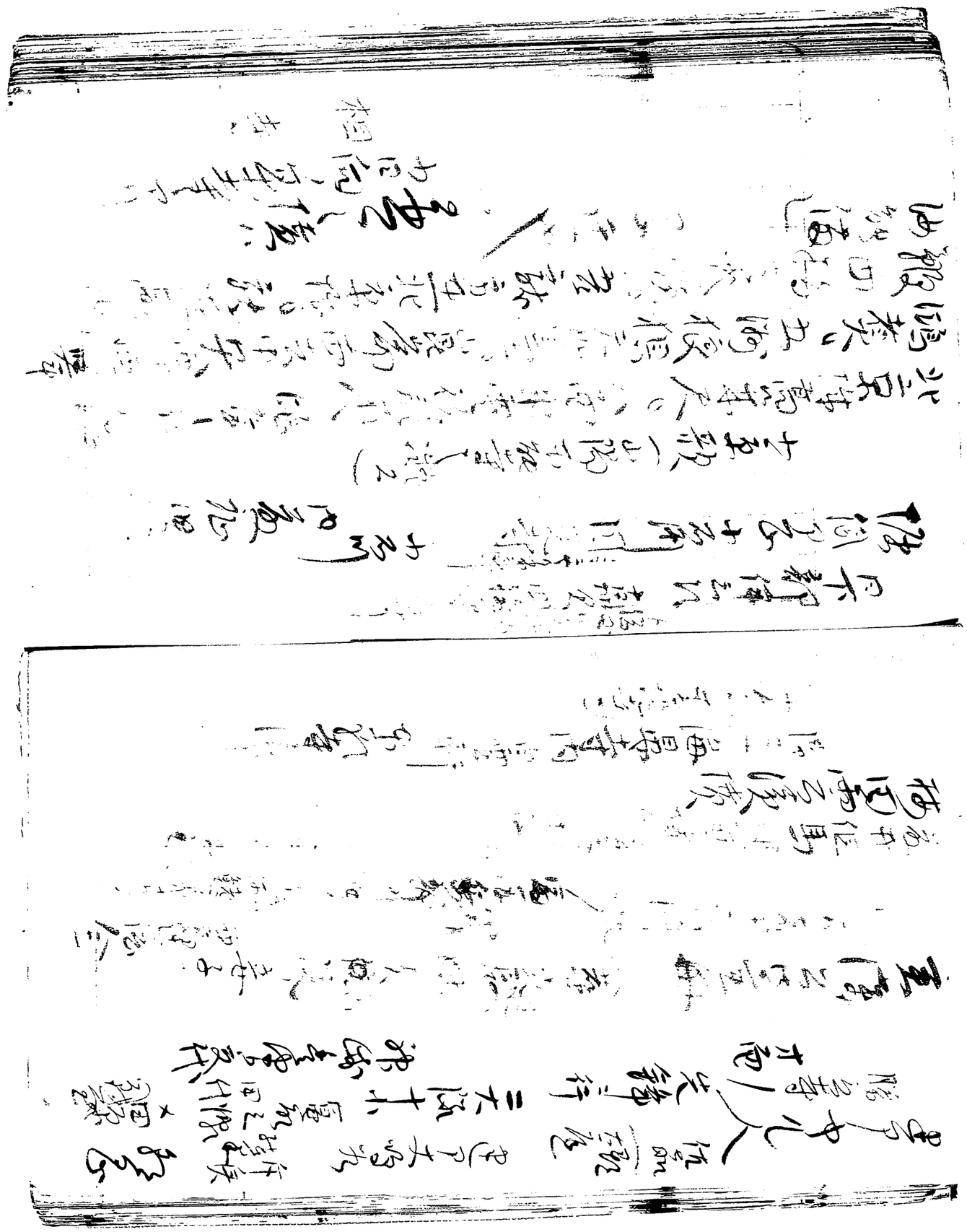












朝鮮日記　袁世凱国辱の話

おぼし申すも仏かしなから。えもいはれぬ。情あるて終に
ゐる。一とせ。紀州の紀ノ国屋の家に。猫。
年ふるさへ血脈やうに。我が
りさへ。我に任せぬ。中山の狐。
地を所にして。隠し
陸奥。また。
北京。
まれて。
開けば味噌の
いつかも。
いるを。
何時の世。
みたまへ。

袁世凱の話

袁は鴨緑江の
そは旅順。
かち。勝。
まて。負。
とあらす。
兵隊。

袁世凱国辱の話

お恥し申すも仏かしなから。えもいはれぬ情あるて終に
ゐる。一とせ。紀州の紀ノ国屋の家に。猫。情を抱いた鳥と
年ふるさへ血脈やうに。我が飛び。
りさへ。我に任せぬ。中山の狐。
地を所にして。隠し
陸奥。また。
北京。
まれて。
開けば味噌の

強の日本に追立られ。
拳を振ひ。
風をへ。
風をれ。

いつかも。
いるを。
何時の世。
みたまへ。

袁は鴨緑江の
そは旅順。
かち。勝。
まて。負。
とあらす。
兵隊。

難儀ハ　ユーテーあるまいもの　自分ハ知らぬ　玉体
なりたしが性根　勝負ハ付すとも　伊藤こよと希望
して　法縁まて　ゆけ　皆さ　みれの　思ひ　ゆけて　信へ
日毎　人が　此西を　なる　心は　ユーマーいかなちん　ゆけて　信へ
殿様　清心　いとしやさのやうに　みると　えらい　みれとは
高能も　清乱　たのもい　隠病　心　ないや　なるを　ありすり

三月四日　新銭　攻玉社（麻布ヒト）

廿八　変化　秋物

電信学校　廿三日　医病院　五月　廿三日

工手学校（造ん　少数）

専門学校　法律学校　医学校

物理学校　商業学校　工部学校

過て　来る　牛込　牛込　工部学校

来て　面倒　なる　日間

三年後　特別　お八時　ならず　物

[illegible]寺

新孫敦於[illegible]

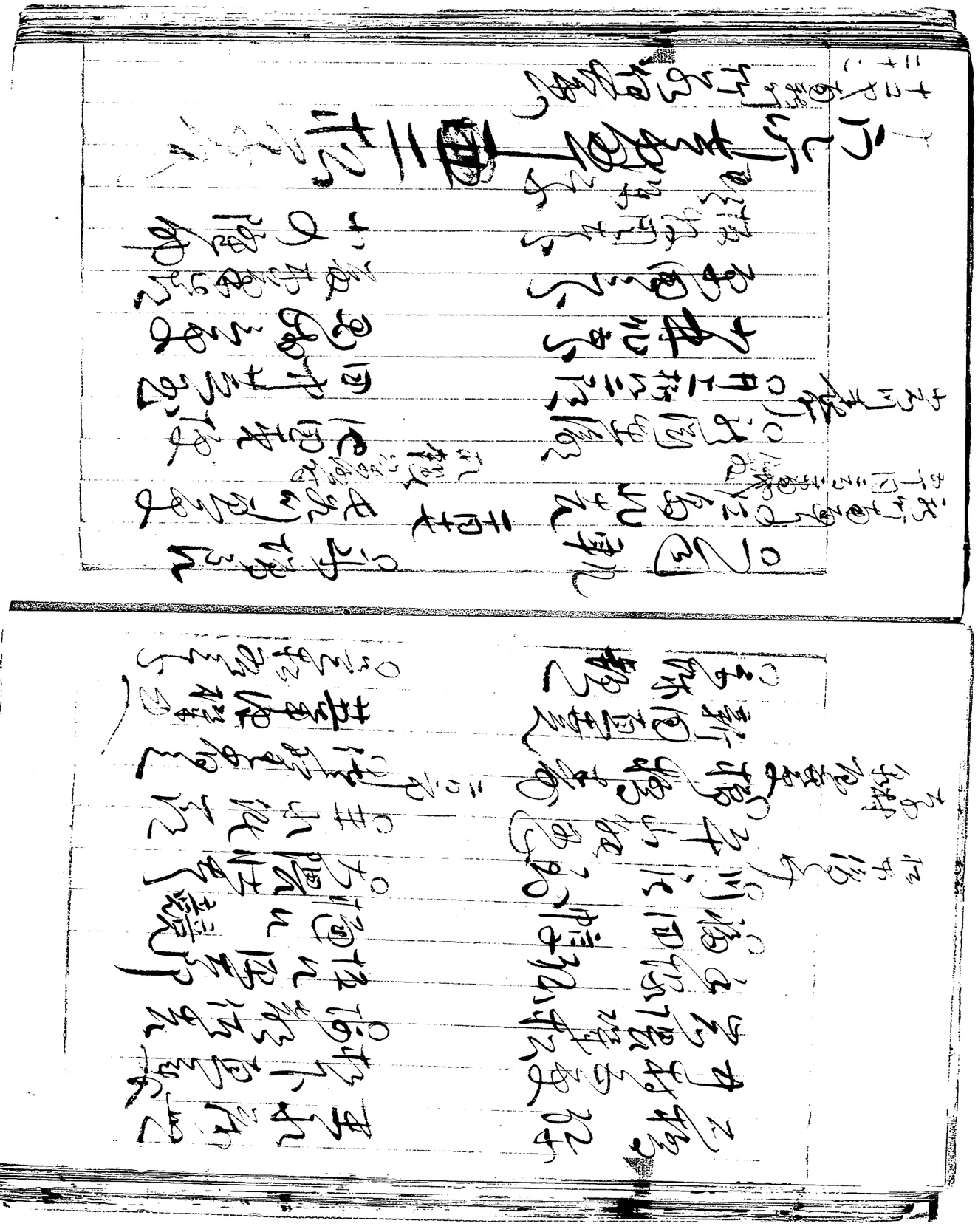
氷川[illegible]寺

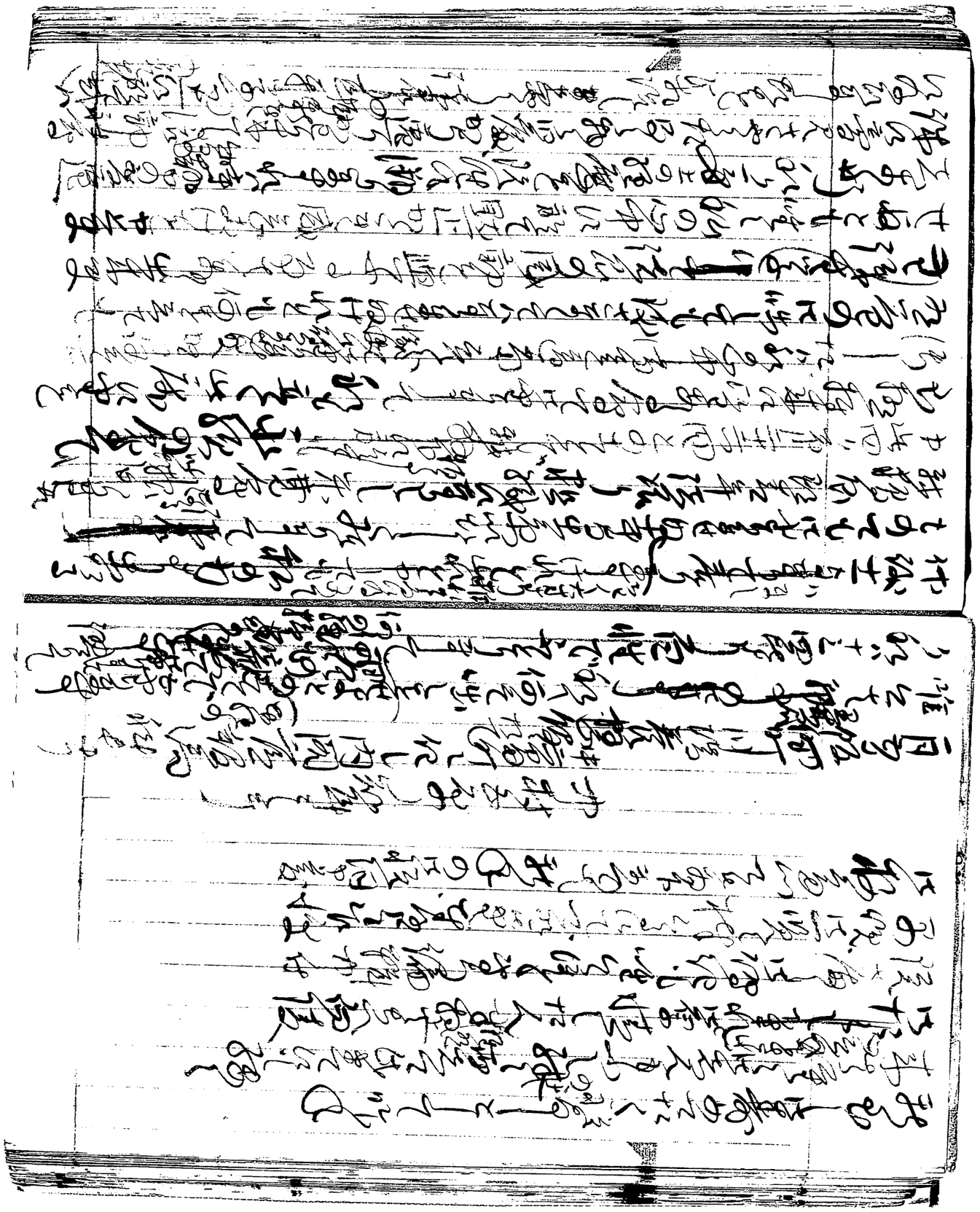
金山[illegible]

[illegible]川[illegible]

[illegible]

[illegible]





[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]命の境ハそうてあります[illegible]
人柱に立ちるゝやうに思ひしなれ[illegible]
[illegible]ハ競て後ひ特別負担をとんで[illegible]
るやうに[illegible]
多[illegible]直接[illegible]
日露[illegible]の文明は[illegible]
[illegible]上の戦[illegible]
[illegible]
[illegible]
軍ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]上の戦[illegible]
[illegible]
を投し外征の軍に[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]

いとして出来ぬ者とも多く出来るへしと云ふ所
前後[illegible]なく思ふのみにて村方ぬけのみなのまゝにて
学問[illegible]の[illegible]を知せらるへしとも云ぬけれとまん
して[illegible]時[illegible]勝手[illegible]仕事[illegible]
清流[illegible]村上[illegible]自[illegible]
土器[illegible]
清兵衛[illegible]
おせ[illegible]
東国[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ものと思ひて居ると云ひたる事に浮るとの戒善に思へらるるあらん
とそれしまれ[illegible]れもまく[illegible]ばるるうれへ[illegible]ますれば[illegible]
[illegible]のものもあのぬめりてさるべきことのあるおそれとて
[illegible]なすまりあわの[illegible]
[illegible]
[illegible]

伊勢のあまの釜一つゝん

神ぬあらさすまとるはもかはしたる陸さとは

無也無唐指歟度　炎帳の業し指歟

法の無量御書[illegible]　仏道無上[illegible]

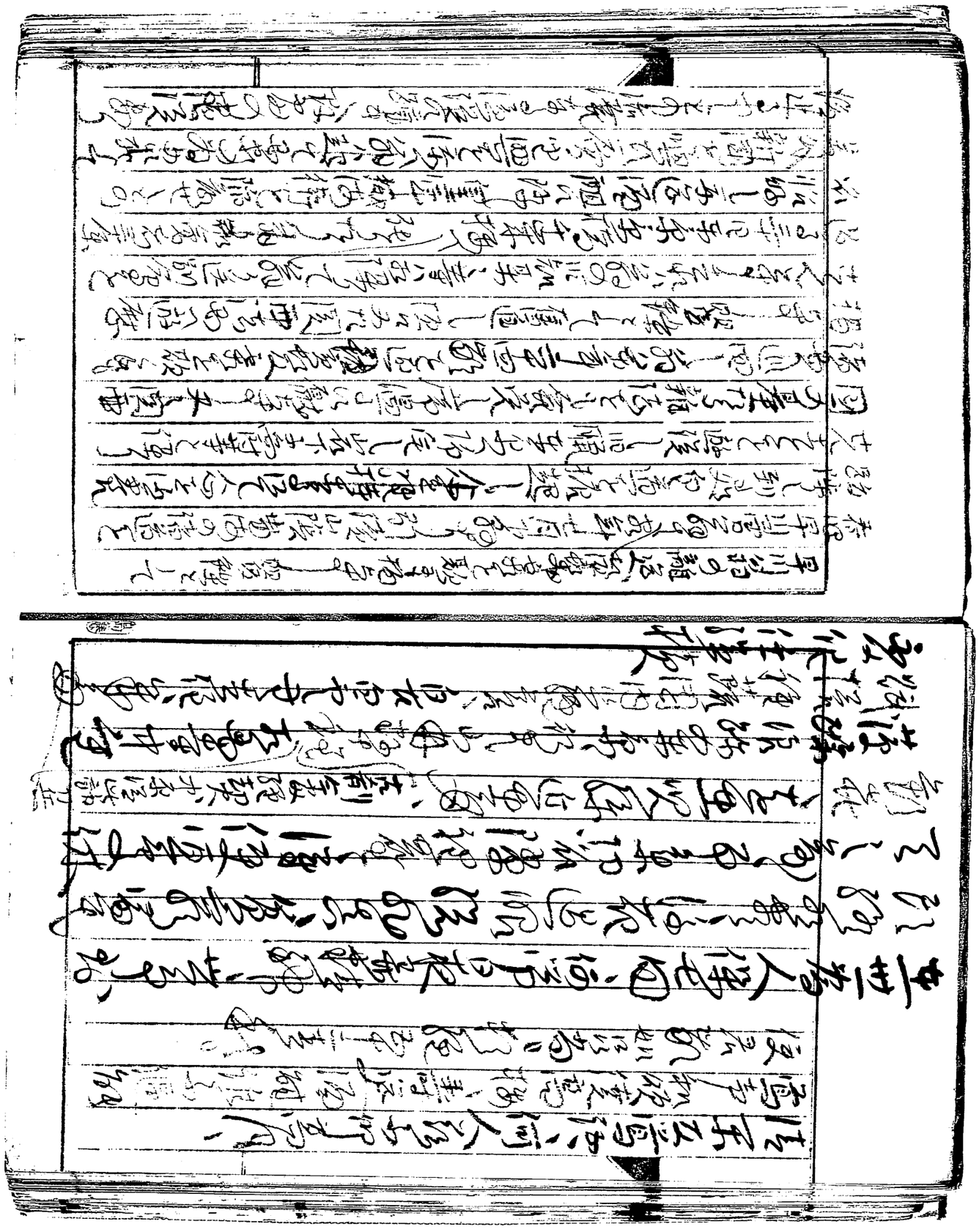
西受弟子遺誡

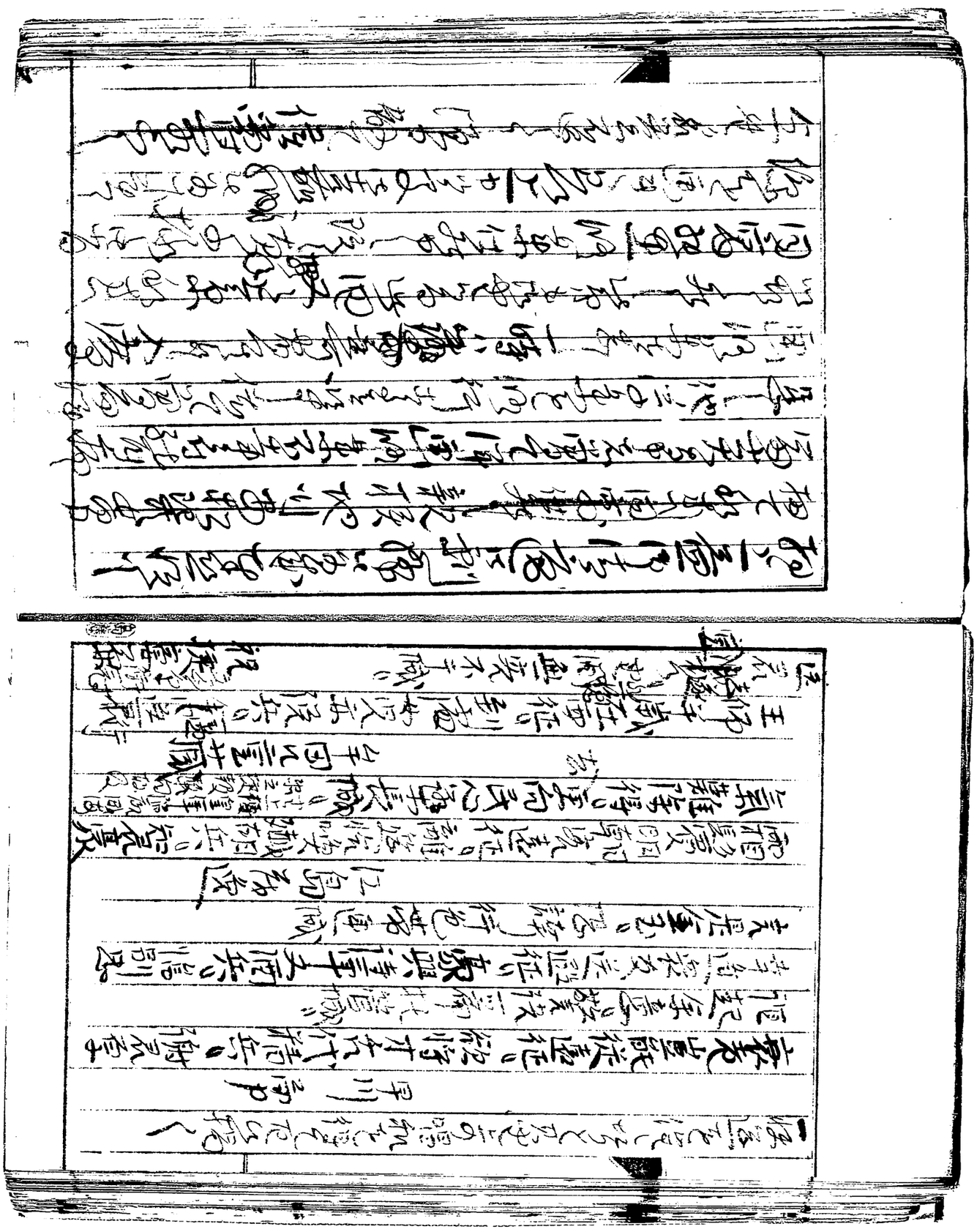
我に三業の弟子あり。右傾倒して猶縁を放棄し、専に
[illegible]と成就と云ふ。[illegible]
[illegible]
[illegible]

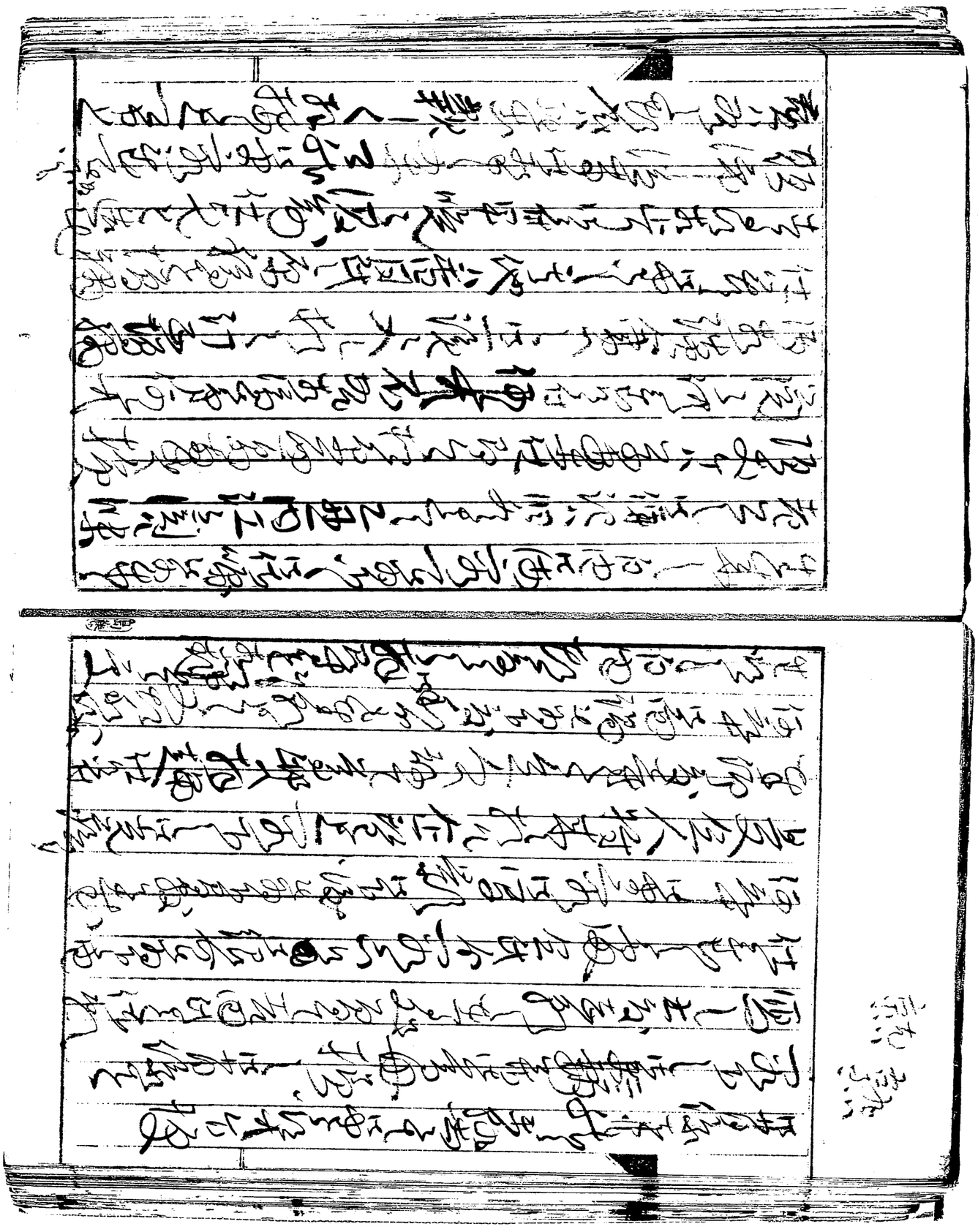
[illegible]

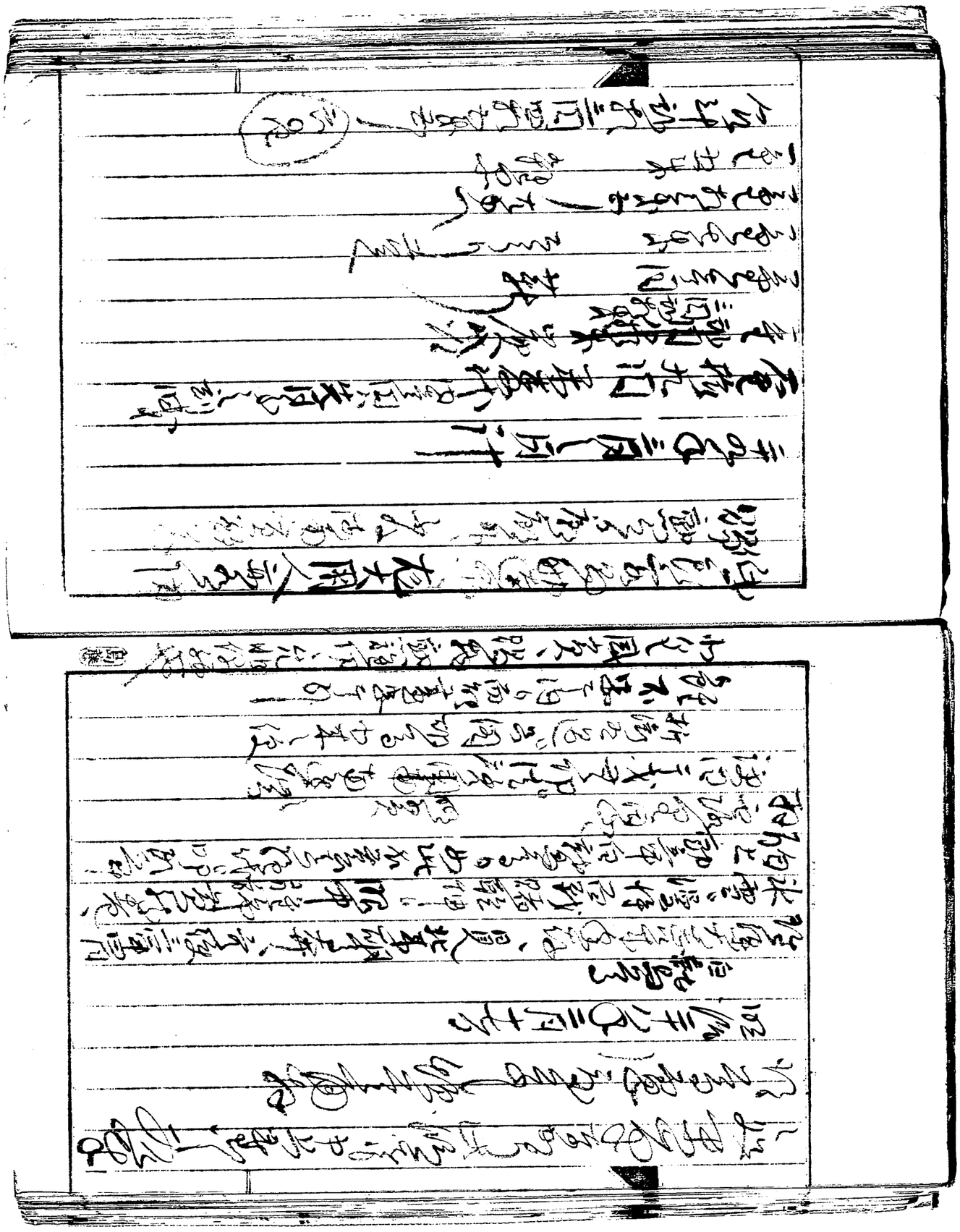
[illegible]

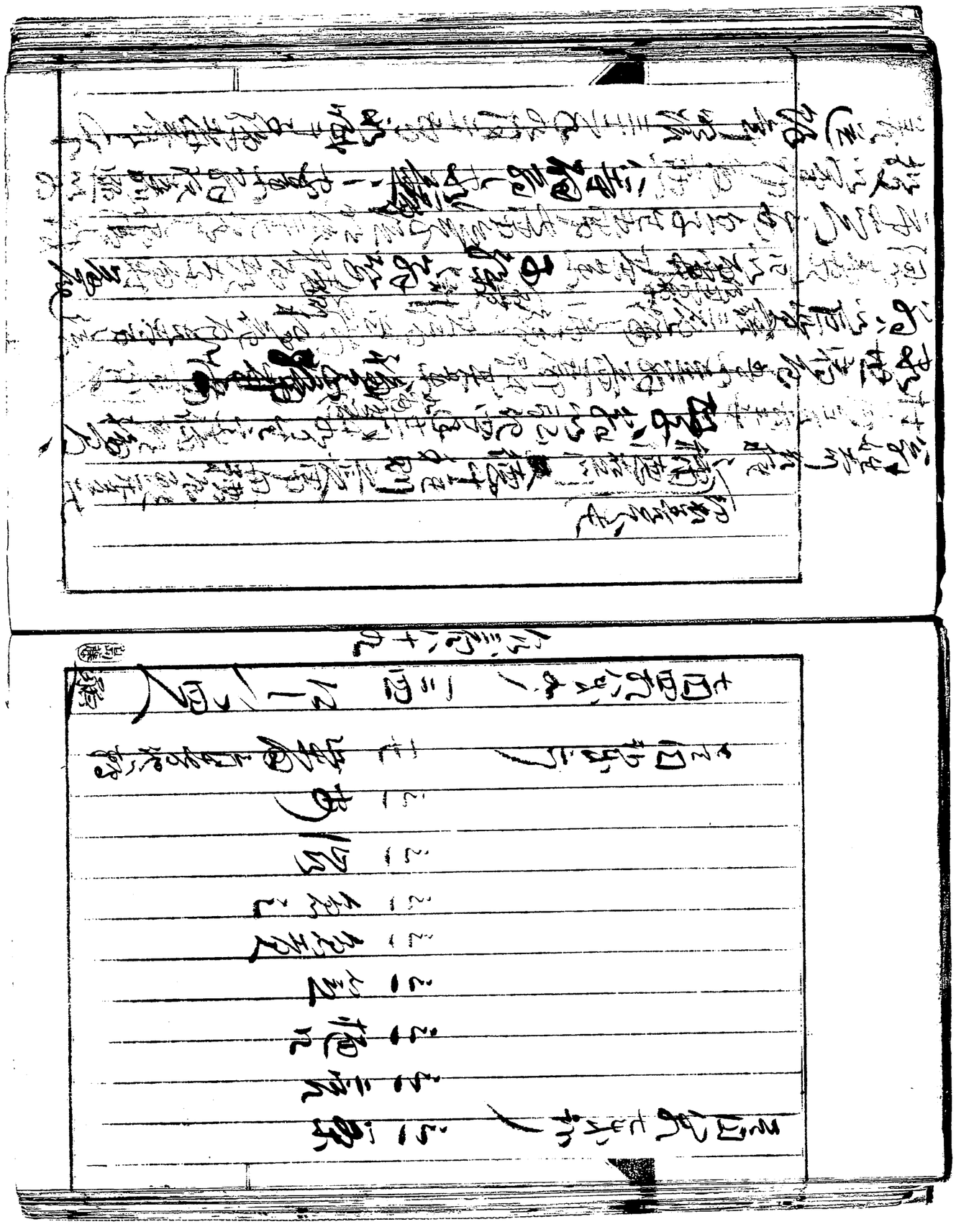
[illegible]

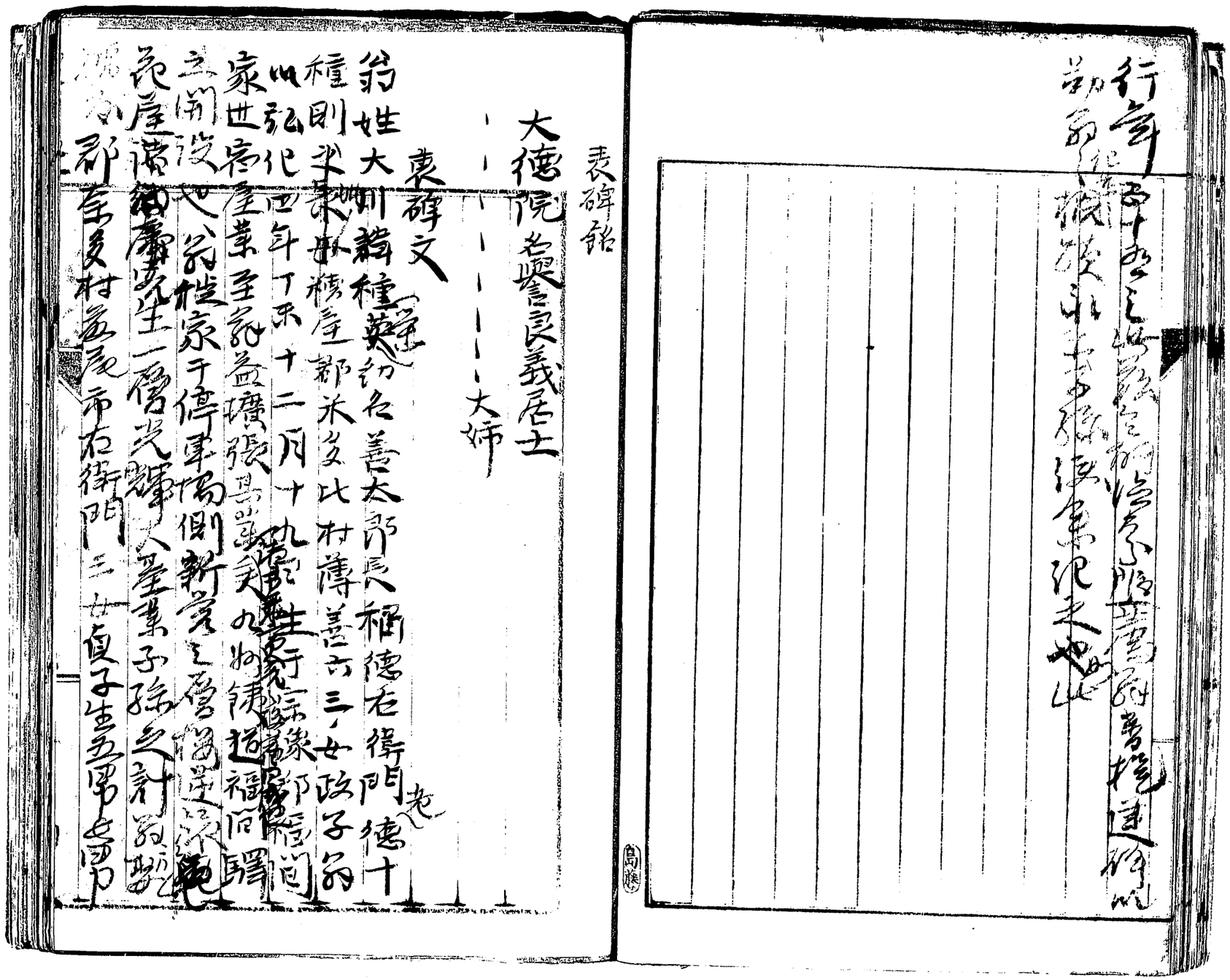












表碑銘

大德院名與善良義居士

大姉

表碑文

翁姓大川藤種蘇翁名善太郎長稱德右衛門德十
種則米屋都米多比村薄善六三女政子的
四弘化四年丁未十二月十九日
家世商屋業至義益壮張其業
之間後
義屋傳
郡
多村益屋市右衛門三女

緒言

本編ハ我か崇高嚴なる設從二位勲三等黑田長溥公閣下之一生に係る系譜なりとす謹而惟るに嘉永癸丑米國の使船來航以て爾來天下之時態ハ著く變遷せるに隨ひ公武之錯亂開鎖之紛糾輪囷ならさりし世運に方り公の烟眼ハ炬の如く夙に時勢の嚮ふ所を看破し早く海外諸國之事情に通曉し蒙昧之世論を排御し首として西洋諸國の兵制其他格物開智之技術を傳習し當時の幕府を補佐して其匪政を匡濟し激浪を凌き妖霧を攘ひ以て今日文物典章善美なる政治の途に於て指南の軌道を啓發せられたり語曰下和三獻未免遭刑夜光投人鮮不按劍宏智嗚呼公英明聰慧勇武豪毅之資性を以て世昏睡を警覺し時

の暗雲を打破し、以て文明の域に誘導せんとせられしや、幾多の障碍を無涯の罣礙に迫り来りて公の進路を圍繞し塞塞せしを見るも何ぞ怪むに足らんや、然れ共其餘響ハ端なく遂に惨毒劇烈なる彼の朋黨の軋轢内訌を惹起し為めに公をして畢生の心膽を爰に粉碎せしめたりき、然れ共這ハ此れ率先啓行者の免る可からざる所たり、公ハ斯る非常の難関に遭し、其豪膽雄略ハ益す堅固にして、當時紛訌の奇禍を未発に救ひ克く之を綏安して以て社稷を泰山之安に復し、巨鍄一定堂々たる大家の福祚を今日あるを致されたり、此際に於ては公の愛國忠君の深き或ハ朝暮への建議となり、或ハ長藩の救解となり或ハ五卿の迎送となり、或ハ征長の軍旅となり、或ハ關東奥羽の出兵となり、遂に維新の創業に嚮ひ、公の遠略宏圖ハ一沈一浮遂に明治之改元を劃し、以て大に煥発するに及ぶ、其蹟と其時とハ即ち本編に於て僅に其仆中の二三を蒐輯し、其一斑を表彰せし處あり、又曰、蓋世必有非常之人、然後有非常之事、有非常之事、然後有非常之功、夫非常者固常人之所異也、故非常之原黎民懼焉、及臻厥成、天下泰平、解蜀父難、とハそれ公の謂哉、嗚呼公ハ非常之資材を抱き、世論の危險を冒して以て非常の事を為し、毫も躊躇せるを見ず、世上の厄難ハ爲りに臻りて益々公の宏圖をして其堅牢を促し、大方の誹謗ハ頻りに湊ひて愈々公の偉業をして光輝を發せしなり、然れ共天下具眼者の少き或ハ公を批議して曰く、公の乙丑内訌を料理し、正士を誅

鋤せられしハ或ハ其德に於て慙る所なきを得んや公の
幕府を翼戴して始終倫らさりしハ或ハ其行に於て疚き
所ふきを得んや吁々是れ成敗の跡に依て其事を論ず世
の皮相論者の常套のみ焉んぞそれ非凡英傑の心膽を闚
ふことを得んや茂逸ハ將に公の功蹟と當時の狀態を證
明して斯る輕薄論者を警覺し迷る謎霧を掃攘し以て公
の明德を千古に表彰せんとするの已むを得さるなり恥
ものあるを
請ふ之を論疏せる所あるへし
抑も公の乙丑之内訌を虜斷せられしを論せんと欲せハ
先つ彼兩黨なるものゝ性質より之を論究せさる可から
す彼の勤王黨なるものハ如何彼の佐幕派なるものハ如
何其時勢に係り各其執る所の方針に於てハ素より異同

漫

あるも均しく此れ一藩の社稷を保全して以て公を補佐
せんと欲す即ち唯々其途に於て過激と遲緩の兩
道あるのみ夫れ鋏石相擊て石火を生ず況んや兩
黨各主義とする所あり軋轢突衝せるの餘ハ血を
見て以て止むに至るハ騎虎の勢ひ制せんからさるも
のあるなり公の斷然彼の過激輩を誅鋤して兩黨火鬪燃
眉の奇禍を其未発に匡救せられしハ稍や故あるなり彼
等の主義とする所ハ如何幕政を倒し王政を復する以て
極據とす其事ハ則ち善し而して彼等の行狀ハ如何ん臂
を張り目瞋らせ隻手を揮ふて攘夷を試んとし甚しきに
至りてハ或ハ謾に人を暗殺し或ハ狴獄を破り罪囚を脫
し國法を犯し藩則を破りて恬として顧る所ふかりし

然れ共其擧動の野鄙なると無謀攘夷ハ或ハ怨さへし唯
〻其國法を悖戻するに至りてハ決して其罪を假せ可か
らさるなり且や彼等か擧動ハ忽ち其反對黨をして口を
藉て其罪を指摘せしめ彼等か自から取りし所なり
と謂ふも可ならん夫れ國法之權ハ一日も其國を去る可
からさるなり公の斷然誅戮して假さゞりしハ即ち其國
憲を維持して以て治國の重典を立る所にして所謂淚を揮
ふて馬稷を斬りしものなりと斷言して憚からさるなり
又た彼の佐幕派の擧動ハ如何既に他か異黨を猖獗
構し之れに誣るに國憲犯を以て之を斃せり且つ彼等ハ
同列比周して公に要し此事を決行せしめしにも拘らす
敢て公をして其處置後に於て一藩士民へ親諭の勞を煩

はしめたり彼等ハ主君を要し其處置を爲さしめ却て其
責を遁れしハ豈にそれ不臣の甚しきものなりと爲言を
るを憚からす何そや彼等ハ政府の權柄を掌握して斯る
一大難件の處置を從しなからも事々物々公の親裁なり
公の趣旨かりと明言して其罪を遁れ他日の禍を主君か
嫁せんとす事爰に至り彼等か職分責任何にか
在る彼等か補佐の責任那邊に存せしそ然れ共此等の事
ハ或ハ恕をへし彼等か其善後策を誤り社稷の浮沉に係
る一大蕃難を主君に歸せし其罪ハ決して遁る可からさ
るなり何そや
抑も幕府か征長の軍を發するや公ハ當時尾張總督に說
さて其解兵を促し邦内干戈を交るの禍を解き國家の危急

を將頽に匡濟せられたり且つ之れに踵き五卿を封内に
相迎へ併せて薩長両藩執隔の調停を試ゝられしハ此れ
公の本慮の在る所にして、眞に公一世宏圖の淵源なりと
す然るに彼等ハ當に補佐して以て其大成を畫せざるの
ミならず天下の時勢ハ著しく變遷し、暗々裏に於て公の
曾て著緒せられし、彼の薩長聯合の機ハ熟せんとするに
も拘らず當時再征長之幕軍か振ハざるにも拘らず彼等
か異黨を忌惡するの餘波ハ異黨か曾て公の深慮を奉し
て著緒せし事業玉石混淆一切排斥して顧慮する所な
く一意幕吏か虚喝を畏怖して事を處し、剌え幕吏小林甚
六郎を迎へて五卿を引渡し、治外謹慎を旨として其事を
爲んとせり此れ彼等か識見暗昧にして時勢を洞見し、一
藩遠大の計籌を運ら能ハざるに出てしを雖も、此等の事
件ハ他日一大難件と變ぜし來りて以て再度公の心慮を
分裂せしめしにあらずや、事爰に至り彼等にして若し士
氣と廉恥の心あらしめなハ、彼等ハ公の處寧を待ざすし
て以て自から決する所あるべきなり、彼等ハ果して然な
るものを、又た公をして其處置を煩わしめたり、何そ其の
公の名譽を毀損し、公の心慮を煩悶せしの甚しき一に爰
に至りしを、嗚呼て丑の内訌ハ豈そ亦公の一世に係り一
大難詰と言ふべきに非ずや、夫れ治國の至難なる其狀の
悲慘にして其禍の然なる朋黨の紛擾より甚しきもの
なし、公當時若し其處置上一歩を謬るあらんか、兩黨悉く
倒れて以て止むにあらざるハ決して戢らざるハし、實に

一藩浮沉の危機一髪を容れさりしも、公は断然忍んで之れが處置を施されしは、真に公の英邁豪宕なる氣畧の本領とするなり、茂邦は進んで公が佐幕論を執り始終倫らさりし所以を論究せんと欲するなり、

夫れ嘉永癸丑に方り米國使が來航して通商條約を求むるや、當時幕府は諸侯に命令して其答議を需む、當時諸侯の答議は如何ん、(甲)攘夷論にあらざれ則ち務めて彼れに確答の期限を遷延し、以て邦内の武備を図るべしとの説相論に過ぎざりしも、公は(乙)斡手として開國の議を執り、毫も憚る所なく數個條の讜議を建てられたり、此れ公の能く海外の事情に通諳し、開國通商の利益を洞見せられしにあらざるよりは、奚ぞ能く妄に及ばんや、即ち其建議は言々公の滿胸愛國忠君の熱情より瀝出せし所にして、殊に國民一般の商買船へ蒸氣船の購入を許可すること、我邦より進んで使節を海外諸國へ派遣すること等の如きは、數年を出でずして今日に實行せられしにあらずや、之を要するに、公は當時開國論の冠冕と仰かれ、率先と認められ、見る處止る處、彼れの攘夷論者が擧動を忌ミ如何なる國難を醸成せんことを憂慮せられしなり、且や當時幕府の時変に接する、優柔不斷に失し、稗政(異論)ならざりしも、彼の伏見一擧を除き其以前に於ては、始終朝旨を遵奉し、祖宗以來朝家より負るたる大權を以て號令す、公は上朝廷を戴き、下幕府を佐け、堂々たる正路に就き、恥驅に範して以て尊攘の大路へ嚮はれしなり、彼の討幕の如き彼の

爰乎攘夷の如きハ公の本領より之を視れハ説過をなす
なり推道を蹈むものたり即ち當時の幕令ハ即ち朝旨に
して朝旨ハ即ち幕令なり之を遵奉せるこそ正論の動王
と謂ひきる可し此際幕府ハ奉勅宸翰を降し
て以て國是の在る處を示す世の過激黨の徒に於てハ或
ハ之を反覆の綸旨として幕吏の模倣に成りしものとし
敢て之を批議せるものなきを得きりしも這ハ是れ大議
論にして我々臣民か敢て論辯すへきものにハあらさる
なり既に聖詔とある以上ハ宜しく之を奉戴して以て其
方針を決し其政を施し其業を當むハ此れ國民の本分
にあらすや公の聖詔を奉戴して當時の幕府を補翼し藩
屏の任を盡されしハ即ち公の公たる所以たり然れ共時
運變遷し機軸旋顧せんとするに及んてハ濫泰雜庇詭遇
も為さゝる可からす權道も顧さるへからさるなり此等
時勢の嚮ふ所を熟察して以て活機の策畧を施し以て藩
主を補翼し社稷の安寧を維持せへきハ執政職の責任
あらすや抑も德川將軍親発して再度長藩の處置を為
んとするや天顔に咫尺して天意を奉伺し優詔之れに降
りて以て之を重んす公ハ之を以て從來朝廷の横りたる
執隔睽離を一掃し公武眞成和合整ひしものと信し大本
を妥に決して以て諸政を指揮せらる然り而して真の朝
意ハ翻りて薩長諸藩の議に依りて其實を奏したり他
日公ハ之を真の和合と認定せしも幕府か虚喝に出しこ
とを発見し其不明を謝して彼等か擁蔽の罪を正されし

ハ茂逸ハ筆を投ーて號泣し憤慨の涙流下せるを覺ゆさりし何をか此れ次ーて公の不明にあらす彼等ハ公の其職を盡す能ハさるの呼敗のミ噫彼等ハ職を分ちなかゆも時勢に疎く公の曾て著緒せられし彼の五卿を迎い て勤王の本意を表し薩長を聯合ーて國是の本を築かれし其機運の熟成せるをも知らすーて腐敗臭饐せし幕政に戀々し以て脱くも藩の方途を誤りたり事爰に至り彼等ハ果ーて何の詞かある彼等ハ實に公の罪人にーて一藩の蟲賊なりと謂へきのミ嗚呼公の慧眼ハ世俗の朦霧未さ霽れす刺激排抗交も至りし時代に於て西洋の政理風俗學術技藝諸種百般の事業を傳習し富國强兵の進路に於て先導誘掖せられしハ豈公の千古冠絶せし卓識

宏畧の旁致にあらすーて何をか公の率先ーて以て西洋の醫學を勸奬し殊に彼の牛痘の如き彼の衛生に関せる諸般の改良を圖られし如きハ是れ公の仁なりと謂へし。

公の長藩か一時之寛枉に惟り嚴譴を蒙むるを傷むや實に薩筑肥三藩聯合ーて以て上京周旋あり其征長の軍に際ーてや上朝幕に對し干戈を邦内に動かすの不利を建議し下長藩に接し恭順謹慎ーて其命を待つへきを勸告し且つ五卿を封内に迎へて以て復官歸洛の周旋を試ミられしハ是れ公の義なり

公の當時幕政か萎靡し日に衰亡なるを歎き飽迄其匪政矯正し之を補翼し朝家を崇尊し海外之交通を開き以て國

是を無窮に確定せるの目途を貫かんとす。故に公が彼の無謀攘夷の國家の前途に不利なるを知り、正明正大なる大路を蹈み、陰險術策の危道を避け、藩屏之任を重んし、幕府と進退を共にせらるるハ是れ公の禮なり

公の曾て其實家薩州藩之内訌を調停せらるるや、閣老阿部豫州及知音伊達遠州へ内牒し、當時之幕威を假用して之を鎮静し、継嗣其宜を得、激昂妄に戰り、一藩をして血雨腥風の惨毒を免かれしめ、又た彼の西南騒擾に遭遇し、公ハ其光躰をも厭ハす、柳原勅使を奉護し、遠く鹿児島表へ赴き、勅旨を公の親族久光君へ致し、臣子の名分を正くし、島津家之名譽を保持せられしハ、是れ公の智なり

公の薩藩逋士か来奔を保庇せられしや、當時薩藩之追躡酷く嚴密なりしにも拘らす、公ハ侍臣に命して其逋士を各所に潜匿せしめ、踪跡を殺せしめ、又た全藩か嚴敷く相迫りて其人柄の引渡を要求せしも、公の一諾ハ恰も磐石よりも重く、飽まて抗辯して其需を拒け、多年封内に保護して以て其危難を避けしめ、其窮困を恤ひ、事平て後即ち帰參し、其志を遂けしめられしハ是れ公の信なり

嗚呼公之事業ハ世之變遷に遭遇して、一低一昂艱厄窘なりさりしも、公の德性ハ五十年一日の如く、磨せす涅ます、以て世に顯章せたり、又た公ハ夙に西洋學術之精密にして實用に適切なるを愛し、以て一藩之學風を革新し、有用之人物を培養して以漸次全國へ普及せんことを圖らるるや爰に年あり、既に脩猷館を再興して以實用の學科を

講習し、其俊秀生へハ多少の學資を貸貸して、其志を遂けしめ今猶斐々として成材絶せさりし、又た公の撰拔及眷顧によりて、西洋諸國へ遊學し、宿圖を果し、其學術技藝を修熟して歸朝せし國家有用之人物ハ幾多なるを知らさるし、此れ豈に公の慈惠の恩澤にあらすや、公ハ又さ令孫長成君を鍾愛せられ、其教育陶薫の周到なる、蓋し公の天縱に出てたり、長成君之聰明俊秀なる、克く公の心を以て心とし、夙に諸學科を研修せられしのみならす、實に英國留學多年、螢雪の下學士の柴名を佩ひて歸朝せられ、遂に今日頭職に上り、公の遺緒を大成して國家の樞機を參畫し、益々家聲を中外に發輝せらる、此れ豈に公の愛育之美果にあらすや、

嗚呼公ハ既に五常の德行を布き之れに重ぬるに慈愛之美を以てす、公の非常事業ハ世の艱難を經て磷せす、縮せす、益す其光輝を生す、厥孫謀を貽して以て子孫を燕翼し、厥嘉猷を遺して以て邦家を補弼す、開國文明之域に率先して以て明治の鴻業を基礎す、宜る哉、公ハ文允武なる天皇陛下ハ公の館邸に臨幸し給ひ、以て優旨を賜りしことを明治旭日の勲章ハ公の胸間に懸りて以て其光輝を添へしことを、朝野の士衆ハ普く開國文明の冠冕と仰き、しことを七拾余萬の舊領民ハ永く父母と慕るて以て[illegible]像せしを識るへし、公の積善の餘慶愛に及ひし[illegible]を即ち公の世譜ハ我黒田家の寶鑑にして而して國家の謨典と謂ふへきあり、舊臣茂逸身賤劣自から揣らす敢て之を

大成して以て其復命を遂けんとするの榮を荷ふや、又其
僭越を顧ミす爰に數言を叙せるや斯の如し。

明治二十九年七月七日

舊臣　江島茂逸
謹首再拜謹白

例言

一公の薨去せらるゝや、我黑田家ハ公の遺言に基き、公の言行錄を編纂して以て永く其家に傳られんとす依て武谷椋亭（侍医）滝田懋吉（侍医）か多年公に親侍し、當時公の長崎警備巡視に隨行し、且つ公の西洋諸國の文物技術を傳習せらるゝに臨ミ、屢々公の命を稟け長崎へ派出し、常に其事に參渉せしを以て、特に斯の二人を徵して其言行錄を編纂せしめらる。椋亭懋吉ハ多年公の殊遇を辱し、公の左右に親侍せるを以て、公の高恩を報酬せるハ此時なりとし、謹て其命を奉し、皆出京して始て編輯の緒を発す。此即ち明治二十一年の春にてありし。于時椋亭ハ齢既に古稀を過ると雖も頗る其記臆に富ミ

公の言行を知識せるや最も明晰なりし懋吉ハ又た頗
る其文材に秀て且つ多年公の側に在りて事を執りし
かハ能く當時の事蹟を熟知し共に協議して之を筆記
す其事たるや公の行狀逸事を網羅し之に重るに嘉永
癸丑以後米英諸國之開港條約事件に係り公の建議等
の事に及ぼしたり然して當時の時勢ハ益す切迫し文
久元治慶應世海の風潮ハ激騰澎湃公の畢生の心魂を
碎き當時征長の軍を調解し五卿を相迎し藩訌を料理
せられし事蹟にハ及ふ能ハすして辭す此間前後四年
を經過したり依て更に香月恕經に囑托して以て之を
大成せしめらる恕經か宏贍なる史材を以て其身代議
士の劇職に在るにも拘らす舊家主家へ盡すの厚き恕
經ハ公務の餘暇を以て呻吟忘食爰に從ふこと又た四
年に及ひ始て公之傳記四編を稿成す於此史書の躰
裁始めて成れり依て假に之を印刷して以て大方の有
志に問ひて其漏洩と誤謬を質せし又た普く其材料を
蒐輯し更に之を修編して大成せんことを期す何を図
らん中途にして病歿す於此又た江島茂逸に特命して
以て其遺業續きて其完全を遂けしめられしハ實に明
治二十七年七月にてありし爰に茂逸自から揣らす曾
て舊藩史を私編して以て先哲の遺業を世に表彰せん
と欲するに意あり今や敢て斯る大命を負ふに至れり
依て敢て其身の拙陋と鄙賤を顧るに遑らす上公
之明德を景仰し下恕經か遺志を襄慕し拮据黽勉稿成

すること茂に三ヶ年の星霜を経たり、殊に舊藩事蹟取調所史誄會員松原方直西島種美の檢閲を經て、遂に漸く本編を大成して、以て復命せんと欲するに至れりこれを本編編輯者の沿革とするなり、

一第一編第二編ハ公の言行錄及公の開國進取之事蹟に係るものにして、之を起草せしハ素と椋亭懋吉に在りと雖も、之を修訂して編次せしハ恕經なりとす、依て恕經を原稿者とし、茂逸ハ啻其編次を補充して完全ならしめしものたり、然るに其論評及叙事に於るハ、間々其原文を訂正增削せざるなきを得さるものあり、此れ本編ハ恕經か私著にあらすして、即ち我黑田家の所命に出て、貴重なる公の事蹟たれハなり、然れ共茂逸ハ之を恕經に面議するを得さるも、元來恕經其業を果さすして途にして病歿せし、遺緒を續き、恕經に代りて大成せんとするの志に出すれハ恕經必す地下に瞑目すへきなり、讀者此の意を諒せよ、

一第三編第四編ハ長藩之救解及五卿迎送及乙丑内訌の正蹟たり、恕經か原稿にも之を編次せしも其重なる事蹟に關しては、恕經歿後に至り、多少の材料を発見す、努ひ更に之を編纂せさるへからす、然して叙事中恕經か語旨たるを示して之を分別せり、讀者此の意を諒せよ、

一第五編ハ重に再征長に關せる事蹟にして、其材料ハ率ね前項と全く更に編次せしものに係る、

一第六編ハ維新以降關東奥羽之出兵、以て公の臨終に及

ふ以て本編を一て始終完結す。

一第一編ハ元年公の行狀逸事を蒐輯せしものなれハ素より公の一世内外事を網羅し、其年月に拘らす叙事す。依て一事に一て數年に亙るものもあるあり、第二編以下に於てハ毎編毎事項年月を以て叙次す。惣一て本編ハ率ね事蹟によりて編次せしものにして、編年の叙次を用ゐへきにあらさるなり。

一公一世の正蹟を編年體にして叙次せしものハ、別に公の畧傳として本編中の概蹟を据集して、福岡藩史と共に発表する所あるきなり。讀者此意を諒せよ。

明治二十九年七月　編者　江島茂逸識

目次

第一編　公之言行

(一)公之氣象及學業

(二)事親及臣下待遇

(三)納諫

(四)西洋醫術

(五)教育及勸學

(六)政事々業及節儉

(七)武技兵制

(八)薩人之來奔

第二編　開港條約に係り公之建議及上京參覲

(一)長崎警備

(二) 米使渡來ニ付公之建白
(三) 米國條約
(四) 魯英及各國との條約
(五) 條約締結後之國情
(六) 庚申十二月之參覲
(七) 大臈驛より間駕
(八) 内命を奉して壬戌九月之參覲

第三編上　長藩之救解

(一) 薩筑肥三藩聯合世子慶賛君之上京
(二) 慶賛君之建議
(三) 長州小郡宿ニ於而筑長兩藩主之會合
(四) 長藩救解
(五) 征長之解兵
(六) 薩長兩藩之調停

第三編下　五卿之迎送

(七) 五卿之迎送始末

第四編上　乙丑之獄

(一) 勤王佐幕兩黨軋轢之濫觴
(二) 黒田山城之擅黜小川讃岐浦上信濃以下續々退職し矢野相摸大音因幡代りて當職し藩論一変す
(三) 京都詰重役大音兵部等密に二條一橋家之餘威を假り退職者浦上救馬等と通牒し陰々公之左右に讒譖を構し痛く新政府負之所論に反對す

(四)藩政基本公示之建議公之左右と政府負之衝突

第四編下　乙丑之獄續き

(五)大音兵部二條家之秘翰を奪へ歸藩して再擧を圖る

(六)吉田主馬朝暮之旨を失し歸藩を命せられ大音兵部再度上京復職す

(七)浦上敎馬等同列集合して回復を圖る

(八)福岡之藩論顛覆す

(九)嫌疑者之處置

(十)處置之善後策

第五編上　再征長

(一)再征長之幕命

(二)永井主水正廣島表へ出張し長藩之嫌疑を糺問す

(三)長藩處置之裁許

(四)長藩專使之拘囚

第五編下　再征長之續き

(五)藝石兩道戰爭概記

(六)小倉口戰爭概記

(七)黑田美作木藩之士衆を督し出勢して遠賀郡底井野村へ本營を張る

第六編上　明治維新

(一)藩政之改革

(二)關東出兵

第六編下

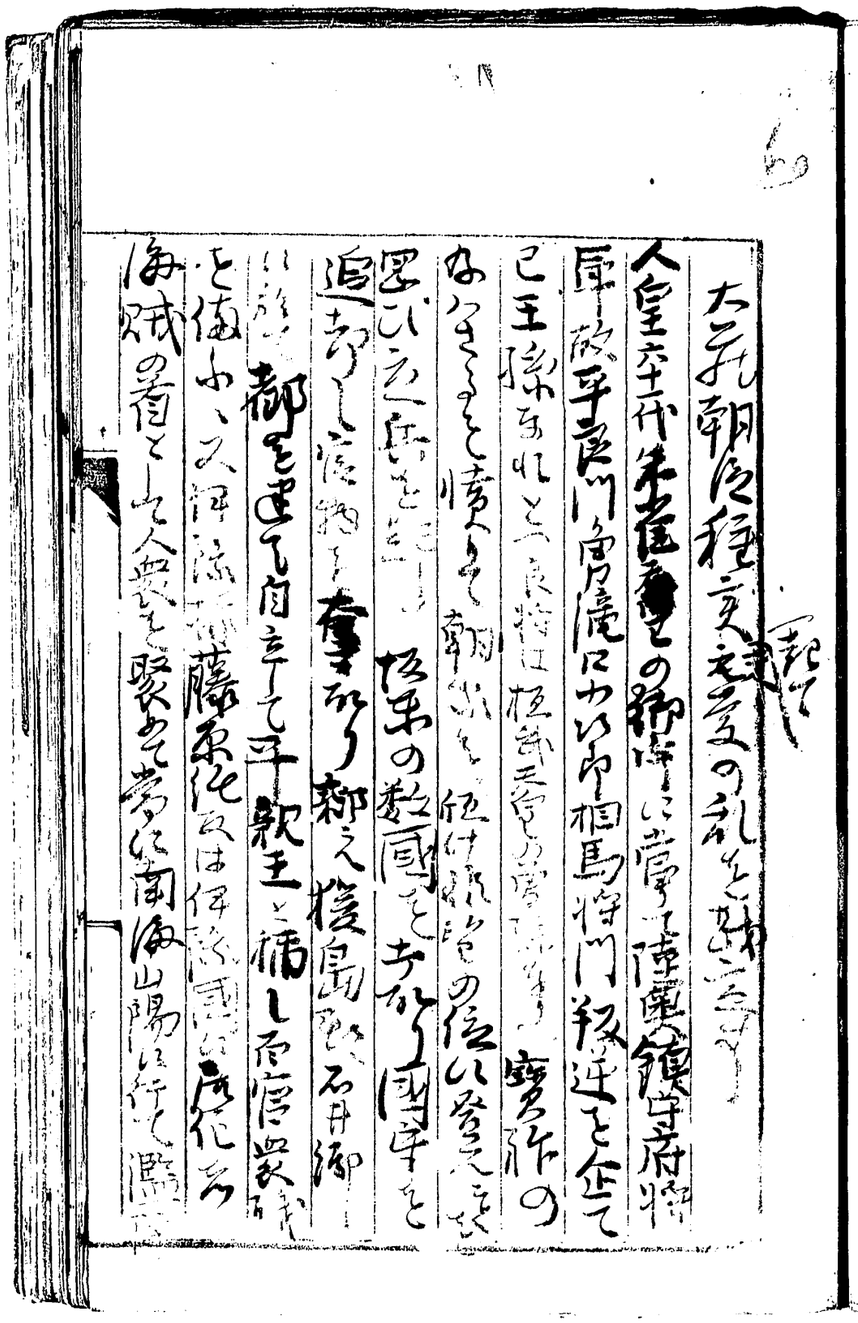
(三) 奥羽戰爭概記

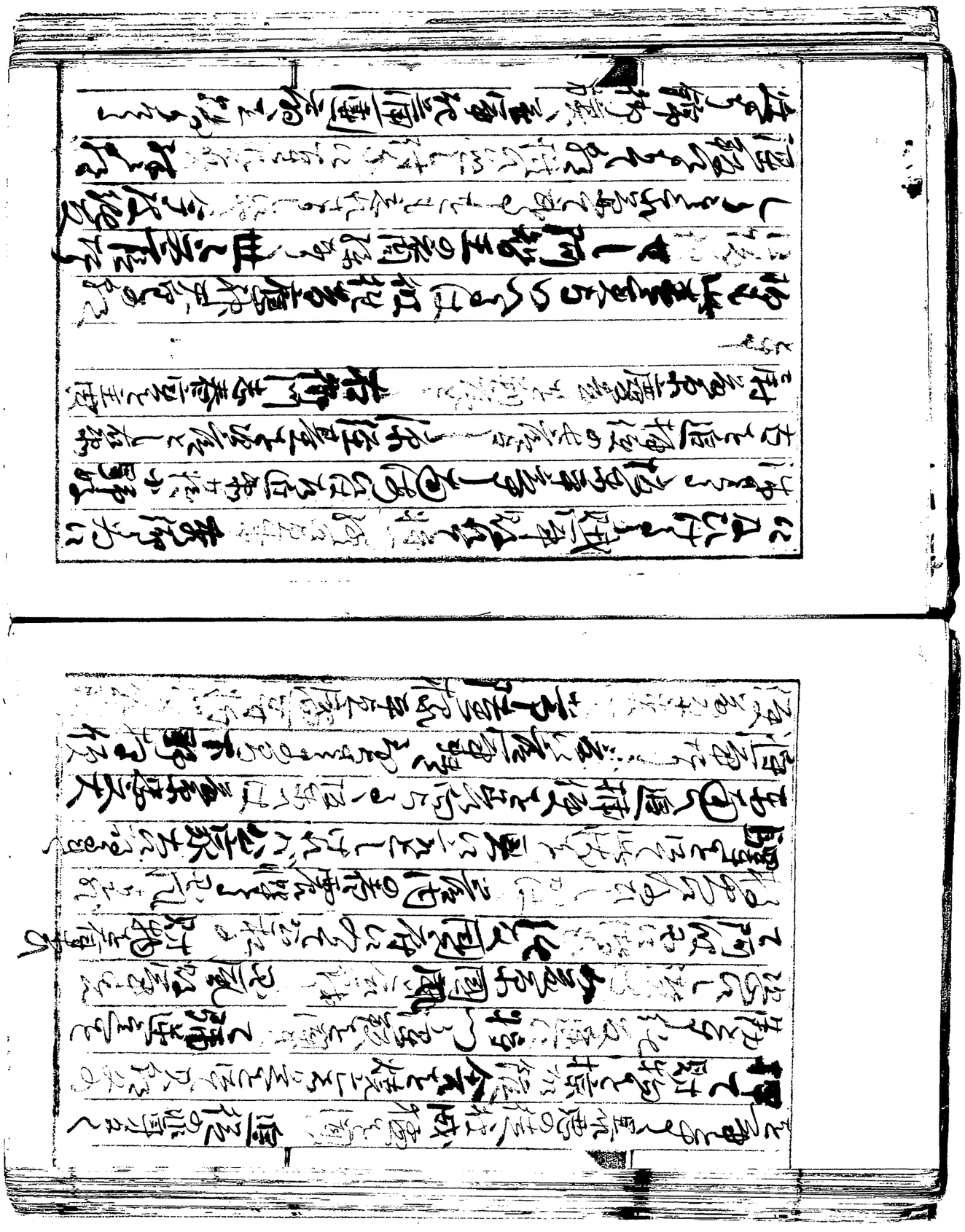
(四) 退隱後之狀

(五) 公柳原勅使を保護して鹿兒島表へ赴く

(六) 天皇陛下御臨幸

(六) 公之臨終





[illegible]

既て宣厚の大軍都督として西海に赴けるが完播磨
讃岐二国に至り戦船三百隻を以て賊地に直に賊地に
向へ出すべきの所に西海に化する時恒例の如く心
奇て窺の賊厚と謀り出て法華山に陣をいたす
此時刑部卿法師の名を海陸両道の面に
とる紀[illegible]八四国に渡せんと事内ちとして九月
四日の夜を期して働せんれば賊徒ちに敗北して化する
行方をしらず亡失せるとてあるべきなり

[illegible]

の財物を奪ひ存を放火し宣厚ど却るすべし聞えな
れば、好方は陸地を押行て春方は海路を
て西海へと急りれける、紀反所々の切所に海賊逆
徒を殺し置て宣厚を遮て先、春宣厚度先
鋒して船を出て海陸二道より流河の切所に責寄せ
賊の[illegible]存を放火し宣厚と大宰府(仲哀の
御宮)に入
ことて博多津に出て陣を引取る

死生を一擧に決せんと待ち受けたり。春宣は梅
と許して海上より押寄せて合戦數度に及ぶ。春宣、
諸軍に先立ち大ヒちハの沖のとまりに浮き出でて賊
中に俵入り四面八方に相當り矩兵急に攻く
春宣が艦風は賊徒辟易して散々に潰れぬ。時
春宣の手に討死生捕られも多くなり。春宣
紀伊の行方知れずなりしかば彼
此の陣列を士卒の心を伐の月日を送るなり
言和に官軍は懶怠に成て日夜賊徒の不意を慢覺
の根を絶ち無用を枯さの頼を廻しける。

四年春正月紀伊の賊徒の船を伐ん為に
押寄せ官軍は清水に陣を取て戰ひ数日を送る
紀伊の手より官軍は防ぎ戦ひ
春宣等勝に乗じて追ひ討ん為に
士卒を下して船を焼き火を放ちて焼ぎしかば
折しも風さへ烈しければ炎焔十方に乱れ散て賊
徒は以ての外に驚きたち是を防ぐに術なくして
或は焼死或は溺死ねと喜ぶて乱れ、此時賊船
八百隻飛て乘れる船の外火を免れて紀伊國に帰

右ゥとりも當國の警固檢校源[illegible]為[illegible]
逆て檢校[illegible]を死せ[illegible]
て捕られ
大日本史
参議右衛門督藤原忠文為征西將軍討之小野
好古陸路、為副將軍、大蔵春實海路、
備前介藤原純友、襲備後、掠略畿内、又
殺及、好古為山陽道追捕使、太宰少弐藤原経基、右衛
門佐藤原慶幸、右衛門志大蔵春實等隷之焉、又
天慶三年、以左近衛少將小野好古為追捕使長官、武
蔵介源経基為次官、右衛門尉藤原慶幸為判
官、大蔵春實為主典、
今昔物語
天慶三年、純友、討手として小野好古、藤原慶幸
大蔵春實等を遣はして、伊予国に渡して
攻戰ふ事、
天慶四年五月、彼賊等、こぞりて太宰府
に、ゆきて、第一の財物を奪ひ、火を放て、府を燒拂
ふ事、後、官使、好古陸路より、行向て、慶幸、春實海
路より、筑前に、渡りて、伊予に向ひて、攻戰ふ、
王代一覽

如天慶五年春實此三人のみを載せり、
扶桑略記、佐友追討記の説に従ふのみ
大和物語、佐友の討手の使に大江中野好古藤原權佐
家のあるじわたりと聞きねつみしら長くりと呼ばれと聞て
了ぬと玉此我くらべは白川の、みつとしあれとも老に
けるかな、此の初句家集には佐友の白川とつふ所に住みけるを
又後撰集には佐友の白川とつふ所に住みけるを
大江藤原興範朝臣のあり巳たる序に水飲
人とて立寄こひ侍りければ水をもて出てあみ侍
りし權佐をふれば我黒髪も白川のしらゝ
あり

斯て西國の兵乱静まりて中野好古藤原厚平
は都に帰り上られ大蔵春實は今度守功抜群
にて内昇位西國に罪に戻しによりて朝廷より官位を進
められ一家侯ひは春實此時征西將軍に任じ逆前豊前
肥前、壱岐、対馬、二島を管領せりとあり　逆前に
備り稼城とて太宰府の要害の為め古城を有
城に置て九州の兵馬を司り治て西府を敬元守し異賊
襲来の不意に備らるとそ聞へし
扨て稼城は天知に天皇四年八月に築きあり西北
筑前国御笠郡肥前国基肄郡の境山上にあり

前大手記　天慶四年七月宣旨凱陣之朝仕功と
賞し封と行のみ　春実あり　慶幸　春実備前
播磨を守とあるもと見へたり　慶幸は備前守　春
実ハ播磨守に任ず
慶輪譜　秋月傳　春実は春実此時対馬守任ずと
俗説平要記ハ秋八月好古帰京　春実備太宰弐
慶幸任肥前守　春実之前任肥前　慶幸之
自筆　肥前国　西国之食家家也
西国　在国之家号品一出れ　の移住
春実は太宰府の警備として長く筑前に住
なり　荷ひ　妻子家族を引ひきし　豊国は拠りし　撰

城の　の蔵　在国　と云ひ　に新に館を　春実のあとし　建物は
云ひ　あれ　春実後に春種と　は　の孫
あれハ名系図と配分して　若原の主　孫　憂運
迄　大蔵氏の　家と　在国　ちゆせし　は
春種の長男を春種と云ひ　（春種の誤り）　春種と
種光の子種村種松　兄帰京家督を兼譲　種弘の子
種資に傳ふ
種資　信の男　様体は国の南部にて博多
中に隠り　遠賀郡　守の後あしく　家を
の時に隠れ　不自由　邪岩
の西の　家と　別宅　ものの

所以種任なし仍依て種資と名乗り種資と称す
付記 結西寺の記に「長徳四年異賊松浦筑前海辺
翌年八月勅太宰府討南蛮海賊、府将軍大蔵
春高貴、軍将賊船、貴封對馬邦、反逆前山石門縣以
相城于岩船」と記す。大蔵長徳迄二十年以後春
貴存命して事業任せしなくいうこあり。
陸奥と書き誤まれるなり。
ちなみに行くべきなりしやもしれざるなり。
又三、嘉永元年大江匡房卿再任太宰帥、大蔵朝臣
種綱為太宰大監、これ久安二年岩門住民種資
為監と、是又文武の先祖なり

種代男子あるを家を制せず、種綱男長男なり、これ種資
なり。種綱を祖とし、家を制せず、種資を祖とし
衡俊と名乗す、此人上下の機を知り、物情を輔知し種
を宗一家を撫、永仁年中大徳山服し、敬て天皇を
悔る。春日神社神領、是種綱の出陣、在京中なり
子孫代代を法とし、大子孫をもって宗門を
附記 近前国宇佐郡東村（古名は上村、今八東本両村合り）
宗田八幡の祠あり。九月十五日の例祭にて神輿御渡あり、又俗
名を素盲なり、村上天皇應和年中宗田氏の祖先もり守
大蔵春種 種州男山八幡宮創建

此社鐘銘序は元八幡宮の鐘銘文良平筆信の作

○八幡本紀、朱雀院御宇天慶三年平將門乱の起し南海に八幡大菩薩の方便を垂て東南に遣し坂東に追討せしめ給ふ神託の霊験を祈れば春霞昔は立いつる梅の香にこゝろ乱れぬ人ぞ知る

二月十四日下総の辛島三子貞國男若宮に参詣せしに此八幡四年三月追討使小野好古を遣せし故なり

○食事物語

此時宇山八幡宮大神の霊験弥々新なりしかば春夏此神徳を渇仰奉る嘉祥此所に鎮座まします宮田八幡宮の験あらたなる此所と宮田庄とてつゝふまれ八幡山古文書にも宮田庄なるべし此邊の風俗も春夏の時節の食事

○糧米乏少なる海陸時に臨み時に随ひ物の代に用ひらるゝ

○前太郎

朝比奈三郎

壇村の伊賀と印く

○前太郎

朝比奈三郎大蔵朝臣種村を世に市て伊賀国の

水陸時節と始めらるゝ

○食事物語

此時宇山八幡宮大神の霊験弥々新なりしかば春夏此神徳を渇仰奉る嘉祥此所に鎮座まします宮田八幡宮の験あらたなる此所と宮田庄とてつゝふまれ八幡山古文書にも宮田庄なるべし此邊の風俗も春夏の時節の食事

○糧米乏少なる海陸時に臨み時に随ひ物の代に用ひらるゝ

○前太郎

朝比奈三郎大蔵朝臣種村を世に市て伊賀国の

往入宛すく宣旨村等左京亮の官兵を率て賊を討ん
首魁五戒員人を捕へうく又弦丸を討ん
後一條院寛仁三年(三月)肥国の海賊平忠恒
為追捕使島と倍し島寄司者京限米と害し島中の人民を
屠殺都あく信濃国甲斐七百余騎
賊船を見て七十三艘八九百人
数百人を乗せ先つ三艘人数を問うて奪り賊
次は弓矢を負ふ者と
備へ三千隊あって名を山に登り野を絶し牛馬犬猫を
屠り老人女児は悉く斬殺し男女性別を問はず進物を

運行て己が船に載せ又外穀の類を奪ひ取ること数を知
ず 紀伊国住人藤原言忠らを遣し賊を追捕す
住人大宰大弐藤原隆経の住人大宰少弐藤原
るもの数人唐房丸十隻人賊に射られ死
同人名日兵を招て宇佐船と問て所御手事と絶
事不審に出しまま住事出
船紀伊島中の人間寄賊
屬にせられしまま多らし子侍大宰府
臣種村名を朝臣頭筑前守藤原
為忠前筑前守藤原伏大蔵先弘藤原友近等と

して警固不怠(ゆだんなく)を守護せしむ同九日の夕賊船
博多湾へ押寄せ上陸して警固所を焼人を殺す
宿兵に敗して退却せしめ賊船多く紐古島に掛る五度
方は海上に横たはり高くして五六丈に及ぶ同十一日未
明に賊徒守護所より去る廿四日賊船
屋敷
に手配して待ち受て防戦
神の守護権現擬非違使
矢に中りて敗走
廿五日朝臣弘行、前豫守種村、大隅守
敬信為賢、同為基、等兵船三十隻を以て海上より
追撃す同十三日賊徒肥前国松浦郡
彼地に赴き高麗の前外渡知と共に郡内の兵士を率
合戦
矢に中りて敗れしもの数人を捕一人を殺前後の生
虜の者は皆高麗人なりとのこれば通事を以て仔細を尋ね
せしに、対馬は高麗属国にして万一賊徒防衛の為め
彼地に赴かれたるなり
仕す同十三日大宰府の官人正五位下行弾正少弼兼前守
原朝臣道潔より解状を以て奏聞
○大日本史、寛仁三年四月廿五日壬子大宰府言、刀伊賊

冠筑前肥前都肥前杉浦郡遣前監大蔵種村藤原
朋範等擊都之云々
帝國秘記云、寛弘四年丁未七月一日乙丑大隅守菅野重
忠於太宰府為大蔵満高被射殺、又に長元四年辛未五月
十七日乙丑今日以外記遣式部卿敦平親王、去日叙
位良國王叙四位、件人有功者也之上已非王氏今被位
記、被問根元、二月十五日辛酉今日云之式部卿敦平親
王停職稱源良國者太宰府監大蔵種村男也、
先年射殺大隅守菅野重忠犯人也、多改姓名謀計
也前大宰大貳惟憲卿坐此事被勘事云々

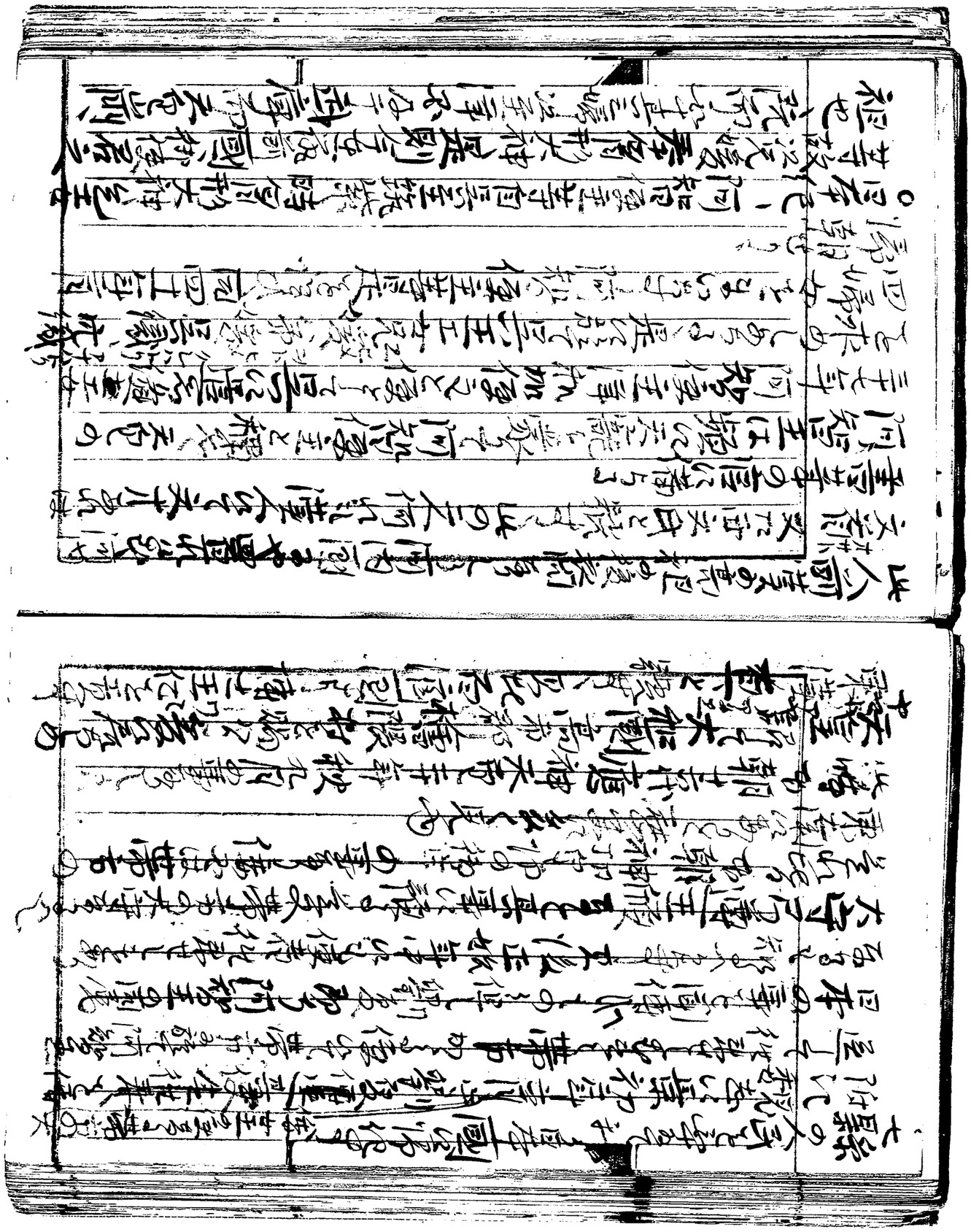
○住元物法　今條判官為義の子稚兵衛八郎為朝都
不敵いとて元ひも心置ゑ子信若無人なりしは身に添て
都に置なは[illegible]
方八郎下すべき存り[illegible]
家なと信八へとけ[illegible]
横ゑそ橋筥もれば只御なちはいて家にそいもそ
動も附さるに生國はらもとにて事内者とし十三の三月の
頃より十五年の十月まで八大事の字をなすべき子細度体と
坂の麻すべく十七不なり[illegible]
自ら信に捕信ら擬まりて思行拙めて名ものもて事
の初人等う都に上り訴へしかば久寿元年十月廿三日宣旨を

[illegible]ることなれば為朝[illegible]海せられ為朝[illegible]て[illegible]
為義[illegible]て[illegible]せられ前[illegible]後に[illegible]せらる
為朝[illegible]を聞て上洛すること[illegible]
歴史に見たる如し

大蔵姓の由

[illegible]中より歴世海西の豪族となり百濟の[illegible]九世に[illegible]大蔵[illegible]
[illegible]大蔵宣[illegible]は姓氏録の清蕃に記せる如し（大宿禰）
檀奈、内蔵、山口、辛田、伯耆、[illegible]、[illegible]井、[illegible]
（宿禰）本は文、石[illegible]、檀前、高安（長寸）火撫、[illegible]

[illegible]抜、直、丹比、民、蔵人、[illegible]（アシヤノアヤヒト）、[illegible]
智王を祖とす、抑も阿[illegible]王は百濟の元来[illegible]邦の人なり
西[illegible]後漢の霊帝の[illegible]孫にして[illegible]系四[illegible]を高[illegible]
卯金刀より出たり、理て霊帝の[illegible]を延王と云ひ延王の子
石秋王、[illegible]阿[illegible]あり仕国産あ[illegible]年漢滅[illegible]
名て霊帝の[illegible]蔵帝[illegible]後を魏王曹丕[illegible]為あり
有すれ[illegible]しかハ立後阿智王[illegible]は出て世[illegible]帝方郡に移り
国色[illegible]て人[illegible]と言し[illegible]り、阿[illegible]王[illegible]世に至て東方に
聖王[illegible]ること国[illegible]は為[illegible]魏の為[illegible]滅せられんことを
計りて[illegible]子[illegible]加[illegible]及び文氏世帝[illegible]こと[illegible]意[illegible]七世氏



之不ら、即獻于大館奉之、

後中大兄の御世に成て三韓の貢物世と共に年々絶ず

儲藏の側に天の内藏と名付て官物を納る国司

始て藏職を建て国司藏所を定む阿知王を主にはして

歴世仕て藏職と勤め給ひ二藏の出納を書代

ちゝ家れり

推古天皇の御代に以来聖徳太子の制り給ひ

国の制度分明にして民の富益ける依て

宣て大藏を造て是に充つ東西の文氏互に相授て出納

簿帳を即領す其後漢氏に内藏大藏の姓を

賜はるし天智天皇の御代に民部を撫育し給ひ高安王

を遣はす

因十四年二月倭漢直を陸奥に遣はす即ち元明朝

和銅元年大藏を置き

国司を聖武の朝天平八年大藏を置き

麻呂の朝延暦元年十月式部卿正八位下佐伯

忌寸木津を大藏卿に

任武の朝延暦中年中国忌寸

清和の朝天慶十年十二月大藏忌寸

仁明の朝嘉祥元年中臣

等此内藏寮に補任せ

又信

朝信の[illegible]

[illegible]

校定[illegible]書[illegible]家訓教[illegible]

[illegible]

[illegible]

生ずと雖も其名簿にのせしてかれ内方に重臣は又其外
馬頭家臣の如き者に種直の嫁せしめ故に種直は重家に
親み懼く重臣の吐言に強に従ひ位に釣る太宰少弐に任ぜ
られ岩門城を守り其威九州に震ふ（方師は少弐の異名）
（手家物語）

○高倉院治承四年戊申三月源頼政白川院法皇を奉戴して
福原を出でんとし押領せられおはしまさるる此時筑紫にて種直入道
嘉摩郡に兵を挙げ種國、家義氣三郎敦種子山崎平次直秋等と
隨兵手勢騎に参ずる

○寿永元年壬寅に法皇法住寺殿に法住寺殿に御幸ありて板屋を作り
押籠め奉る

○同年壬寅十月石四方諸卿種直ら子
佐原太郎夫種為守護を奉ずること

○元暦元年甲辰二月肥後國菊池次郎隆直、緒方三郎
惟義等乱を起すに付て種直九國の軍兵を催し菊池
緒方と相戰ふ其勝利を得たり

○東鑑、治承五年（改元養和）三月廿九日丙午於鎮西有兵
革、是肥後住人菊池九郎隆直、豊後國住人緒方三郎惟
能等、及平家之故也、同意隆直之輩、木原次郎盛實法
師、南郷大宮司惟安、相模惟能者、大野六郎家基、豊後
次郎高直等也、此外長野太郎山寄六郎、同次郎、野中

次郎、合志太郎、菊太郎、菊次郎、以下の兵船駆精兵庭関
山海陸往還、仍平家方人原田大夫種直相催九國軍士三
千餘騎、遂合戰、隆直等郎従多以被疵云々
○鎮西要記、種直乗勝義白肥後、對陣彼月、諸被放
京都云々
同七年平宗盛、家俊肥後守貞能、家俊守家貞の子と云々
に遣ハ菊池結方と追討せしむ、依て種直出勢して貞能
方を攻、肥後に合戰しと菊池勝利を得ハ
陣ハ
東鑑、養和二年四月十三日辛亥貞能為平家使者、此間

在鎮西、所申下官使、相副数輩私使、稲兵粮、廻国郡
成水火之責、庶民悉迷惑、雖之難之費、仍肥後国住人
菊池次郎隆直為通常時之難、今帰伏之由申之云々
○盛衰記、寿永二年七月肥後守能貞降人と為て帰
洛すと、種直と同じく上洛すと、同月平家は木曽義仲に都
を破られ宇佐宮へ行き、所の衆徒方の諸軍勢を
安徳天皇を供奉して都を出て西國へ落ち行く、種
直は二千餘騎を引率して乗輿と称言固め奉る、八月十七日
主上と
平家の
初め奉り平家の二船、大宰府いそつられける、同九
人々大臣殿と初め安徳天皇に奉て後矣と驚て

結歌を張て宮仕へせらるゝ中にも本三位中將重衡ゝ時に
住まれしふるさと都北嶺しさは神も昔に思ひ知らん
平家は筑紫に都を定めて内裏をも造ちゝへしと公卿詮
議ありしかとも都もあまく定まりぬれば主上とは種直ゝ岩
門の館に入れ奉りて宮仕へ暫時らく長途の煙とは休めき
せまひらる
附録
今岩門の東徳村御所跡は異基趾あり又龍神山の壕
是宮時敬事国の戒士を置し所なりと傳ふ其跡は今安
徳帝出御梶栗村の堀ゝ又た御所跡を屋人は安徳
宮と云まゝ此形高北間計り四つ上い唐平の代に八所より

畑地あり八是西の隅に道路書ポヤ其は埴田家
普提寺の跡あり又是西の岩戸川の向側所村の内い
道路書ポヤ御迎と云ふ所あり當時種直出て安徳
帝を奉迎せし遺名なりとゝ云ふ
斯て種直は主上の勅を奉して國二島い觸廻を、屋敷を
偖き集めて後陣より上方への通路を塞ぎ非常を戒め野心
の者とは間隙て時日を移さず政の從へ或は國中を逐出しけ
れば異國高麗に逃るゝもの多かりけり
東鑑に元暦二年六月十四日に五条河守範兼同内五郎義長等
後鳥羽帝の使者を於高麗國之間、對馬守親光帰着彼島云々
是去々年自當島欲上洛之節平家要害を落て鎮西之間路次依不

通、不能解纜、惟況在國處之中納言知盛卿、并武
種直等奉行、可令奏三屋島之由、及催九州三島中国等
諸雜從于平家之方、親光・惟遠・志源家之間不行伯仍
三個度被遣追討使、所謂高次郎大夫經直（種直家子）
西度非御使宗房・種益（家子）一箇度也、山賊・海賊下國或
知行國務、或令合戰、雖存命之間、凌風波去三月晦念
越渡高麗國云々
かくて西海道は種直・惟盛に離れ、平家いたくもなりとして
同九月三上太宰府（奏聞を給はるべきの由）
れしかば、京に都帰り、木丸殿とも申さへしと人々申侍しぬ、大宰
府に移り、樹八しますとも申さへしと人々申侍しぬ、大宰

所の豊後の住人緒方三郎維義は、宗像氏に属し、仁木
戸次、等、是に同心して、太宰府を攻んとする間、聞へしれは、三位中将
惟盛・兄弟・菊池次郎隆直・波下の官軍は、防ぎ難かれとも
多勢に敵しかねて、遂に主上は太宰府を落させ給ひて
箱崎に移り、香椎宮、宗像、山内浦濱、蘆屋なと云ふ
所を經て、山鹿兵藤次秀遠を頼み、山鹿の城に入せ給
しかば、種直は秀遠を不和なりしかば、山鹿の城に入て秀
遠の下知に付て事を隔て口惜なるへしとて、
菊池次郎隆直は宗國・卿の下知と愛て肥後國に
山の関（南の関ともいふ）を堅めしと切れ、主上をとへ

奉ちむとて道より立帰る杉戸次杉浦豊は疾に平家を背き源氏に降伏そなれば平家は西国に落ぬ落ぬ者は迷ひけるの中有に西ひけるの

附録

松童國盈の疾病の折部唐土の医師流前に渡りて永居ありしに唐流といふ医師より

いとあらさりしかは國盈に

通せしともいはゞ童國盈は治業三年八月

豊西記に曰国次郎永秀は後の平家御方結

雖誘諾永秀敢以不業引奉属源氏侍鎌倉下知依之

種直可追討有其間先引篭柳嵜城官軍三度雖

押寄兼度不陥城遂合戦之間終奉属源

之時永秀初押寄城三度遂合戦之間終奉属源

平家也此時永秀嫡男帝三郎永隆嫡男四郎永俊

弟也兄弟種直妹也平家逆乱誅罰之上他国者也此

曰国氏は曰国兵太夫とて元昔大宮殿三の子紀州熊野

大蔵大夫に在国て大夫と云て本姓を号す且つ祖慶西の比より

丸ねいとり文徳元年仁寿元年始て曰国郎司隠たり

と記せり

祖の家祖の事は

以後を続いてより平家しまものの事

平家の当家を種直の此内

渡豊前国に北條小次郎下河辺庄司、渋谷庄司、品川三郎等を
先登として今日於葦屋浦大将種直子賀摩兵衛尉等引
隨兵相逢之挑戦、行平重国等射之、彼輩頻攻戦為
皇国神威、行平誅美氣三郎、敦種手負、三月廿四日
種直戰于葦屋浦、復又子嘉摩兵衛敵兵殺夫、死骸
又二月十日
蘇原軍記
聲高種直於豊後
初め主上
[illegible]
[illegible]
肥後守
[illegible]
[illegible]
[illegible]

人をそうし元暦二年五月廿日西海を経行の儀なく曰可召上
美気大蔵卿に於召寄事、可召上乾糧之儀、雖被
仰下之旨、度々、薩摩国に下向之輩、今彼朝臣尋
院之宣旨、二品申れ朝臣、全義経、手家法眼、全種重、種
遠、秀遠等所領、国々地頭、山鹿平所領事、被定補
地頭之輩者、美濃国住人、心静可被帰洛之由、又亀鶴の
言上状に、種直隆直種遠秀遠之所領者、依為後白河之
所、任先例、可置御家人職之由、雖令侯、豆先下津国之
国司、今不成敗、何況自餘之所、不及成敗、所詮
餘令召寄者、事内、此等れハ、京ハ禅門に所詮
を後世に、のみ、耳目聞事、召寄れ、手山武
者所、乗事、陳申れ、扇子、笠、鳴り、時以、
月と、寄れ、
附二年
大臣、秘別宣、文治元年十月廿日、両使奉院宣、被
国司種直、薩摩国、地頭、義経、
者、不敢、時、知代、手事、無、巨細、欲、置、院宣、
院宣、

て毒にて死する

土方氏四天日記要用し廣し書抜

文久三年八月廿六日あり京師郭撞

十九日曉方伯へ長藩より夜四時伯へ着し蒙出火

ミテ焼失

二十日芥田川高崎氏し郡山ニテ生捕一人長人ハ高

三十日伊達高田藩氏ハ発船

二十日備後ノ新ハ高田藩船 土方ハ義州ハ侵者トシテ

れノ丹後ハ同上隆彩ハ佐賀藩ハ同伊ニテ死亡

り

ホ方ハ又廣島高

三日 廣島ヲ発 百姓ニテ毒ニテ死ノ例ハ明

廣島ハ渡し蒙氏高島

十八 [illegible]

十九 [illegible]

廿 [illegible]

廿一 [illegible]

廿二 [illegible]

廿三 [illegible]

廿四 [illegible]

廿五 [illegible]

廿六 [illegible]

廿七 [illegible]

廿八 [illegible]

廿九 [illegible]

十 [illegible]

二十日 平野二郎丹州丹波国へ行 永禄元年十月十日
丹波三郎兵衛尉元秀但馬国へ逗留為々仙石秀久
多田城を攻落行 二十三日 信国今日出立之云
長門守公此夜に大和国へ行
二十四日 長門守公朝に大和国へ行 西条平ノ二郎
年寄山へ行
十月二日 平野二郎山へすり帰へ此夜暇公脱去
平野の陣番十二郎高兵衛尉と云三十人計に供て大騎
御起に直し宇野三郎左衛門尉追掛久世四郎に出会陣
時不定御直さり待つ
三日 平野すり帰へ追駆うへ不及と云暮比引
返し

九日 無二三島国へ行 陣番
二日 百姓番号ノ田代に印ヶ瀬より九州へ越く
十八日 流前へ行 久世方へ
廿五日 大聖寺尾し三郎物語
二十日 長山三郎に暇乞 宇野兵衛尉為逗留上京
ひすり方に山本番号ノ陣へ
二十二日 上ノ国へ入
二十三日 豫州長浜へ入
二十四日 大内伯下へ着
十月十日 大州伯方へ着
九日 三ヶ浦へ着
十三日 三田尻へ陣取

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

高綱より書面上ゆし[illegible]大乱寺天王山之
有志ども[illegible]書面を以出雲守仕[illegible]
陣せうしゝと両村[illegible]
二月十五日尾張[illegible]
八日無三度部新三郎[illegible]晩方義足し今日[illegible]
[illegible]上ゆしゝ[illegible]
[illegible]
九日[illegible]
[illegible]
十日[illegible]無三田所壮輔
今日[illegible]
井上河内へ面会[illegible]
[illegible]無三壮輔ト別れ

[illegible]
十三日 世よの五郎[illegible]義[illegible]
十四日 [illegible]
十五日 三条西[illegible]
十六日 [illegible]
十七日 [illegible]
十八日 [illegible]
十九日 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

十九日 靭出帆

二十日 九時伯耆大島着船

二十一日 朝出帆 上ノ国ニ直ス

二十二日 大島出帆

二十三日 藤島着船

二十四日 上ノ国ニ直ス

二十五日 大島出帆

二十六日 藤島着船

二十七日 七ツ屋ト云ヒ長崎ニ出帆

二十八日 出帆

二十九日 大島着船

二十日 九時伯耆大島ニ着ス 七時ニ上ノ国ヲ出帆ス 夕方ニ大島ニ着ス 夜ハ直ニ引ク

靭出帆ニ引カレタル船ハ九日ニ直ニ引ク

二十一日 靭出帆ニ引カレタル船ハ上ノ国ニ出帆ス 上ノ国ニ出帆ス

二十二日 上ノ国ニ着ス 夕方ニ出帆ス 夜ハ直ニ引ク

二十三日 大島着船

二十四日 上ノ国ニ直ス

二十五日 大島出帆

二十六日 藤島着船

二十七日 七ツ屋ト云ヒ長崎ニ出帆

二十八日 出帆

二十九日 大島着船

二十日 九時伯耆大島ニ着ス 七時ニ上ノ国ヲ出帆ス 夕方ニ大島ニ着ス 夜ハ直ニ引ク

靭出帆ニ引カレタル船ハ九日ニ直ニ引ク

二十一日 靭出帆ニ引カレタル船ハ上ノ国ニ出帆ス 上ノ国ニ出帆ス

二十二日 上ノ国ニ着ス 夕方ニ出帆ス 夜ハ直ニ引ク

二十三日 大島着船

二十四日 上ノ国ニ直ス

二十五日 大島出帆

二十六日 藤島着船

二十七日 七ツ屋ト云ヒ長崎ニ出帆

二十八日 出帆

二十九日 大島着船

二十日 九時伯耆大島ニ着ス 七時ニ上ノ国ヲ出帆ス 夕方ニ大島ニ着ス 夜ハ直ニ引ク

靭出帆ニ引カレタル船ハ九日ニ直ニ引ク

二十一日 靭出帆ニ引カレタル船ハ上ノ国ニ出帆ス 上ノ国ニ出帆ス

二十二日 上ノ国ニ着ス 夕方ニ出帆ス 夜ハ直ニ引ク

二十三日 大島着船

二十四日 上ノ国ニ直ス

二十五日 大島出帆

二十六日 藤島着船

二十七日 七ツ屋ト云ヒ長崎ニ出帆

二十八日 出帆

二十九日 大島着船

二十日 九時伯耆大島ニ着ス 七時ニ上ノ国ヲ出帆ス 夕方ニ大島ニ着ス 夜ハ直ニ引ク

靭出帆ニ引カレタル船ハ九日ニ直ニ引ク

二十一日 靭出帆ニ引カレタル船ハ上ノ国ニ出帆ス 上ノ国ニ出帆ス

二十二日 上ノ国ニ着ス 夕方ニ出帆ス 夜ハ直ニ引ク

二十三日 大島着船

二十四日 上ノ国ニ直ス

二十五日 大島出帆

二十六日 藤島着船

二十七日 七ツ屋ト云ヒ長崎ニ出帆

二十八日 出帆

二十九日 大島着船

二十日 九時伯耆大島ニ着ス 七時ニ上ノ国ヲ出帆ス 夕方ニ大島ニ着ス 夜ハ直ニ引ク

靭出帆ニ引カレタル船ハ九日ニ直ニ引ク

二十一日 靭出帆ニ引カレタル船ハ上ノ国ニ出帆ス 上ノ国ニ出帆ス

二十二日 上ノ国ニ着ス 夕方ニ出帆ス 夜ハ直ニ引ク

二十三日 大島着船

二十四日 上ノ国ニ直ス

二十五日 大島出帆

二十六日 藤島着船

二十七日 七ツ屋ト云ヒ長崎ニ出帆

二十八日 出帆

二十九日 大島着船

二十日 九時伯耆大島ニ着ス 七時ニ上ノ国ヲ出帆ス 夕方ニ大島ニ着ス 夜ハ直ニ引ク

靭出帆ニ引カレタル船ハ九日ニ直ニ引ク

二十一日 靭出帆ニ引カレタル船ハ上ノ国ニ出帆ス 上ノ国ニ出帆ス

二十二日 上ノ国ニ着ス 夕方ニ出帆ス 夜ハ直ニ引ク

二十三日 大島着船

二十四日 上ノ国ニ直ス

二十五日 大島出帆

二十六日 藤島着船

二十七日 七ツ屋ト云ヒ長崎ニ出帆

二十八日 出帆

二十九日 大島着船

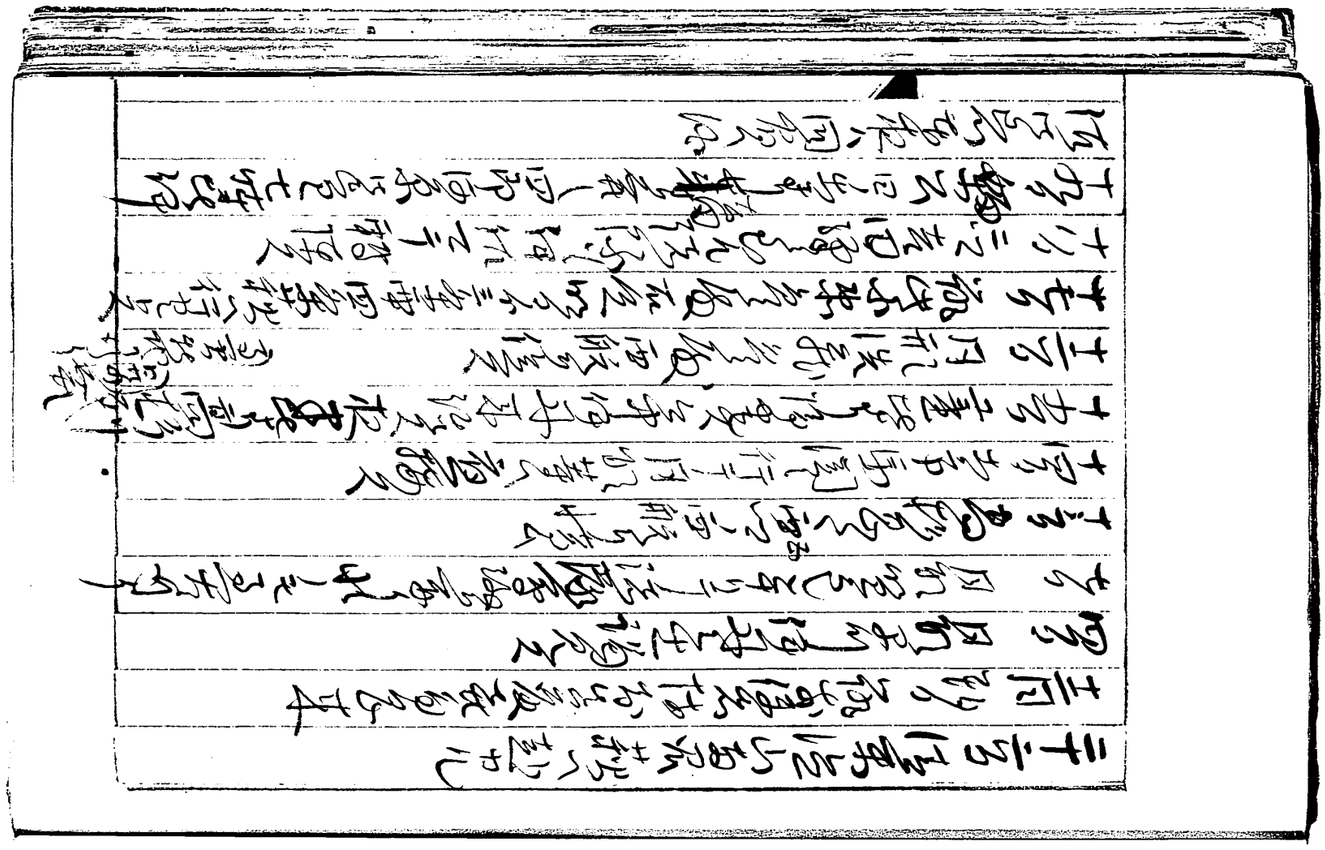
[illegible]

[illegible]

[illegible]

田所壮輔方夜居陽久
十月一日和川筋より五郎兵衛(両番)久保田伝兵衛方ヘ
大心配久
十月廿三日晴天ニ付
廻状
十月廿四日土曜ニ付
十月廿五日晴ニ付
九州筋ヘ旅行
十月廿六日晴ニ付
肥前ヘ行り
十月廿七日晴ニ付
永ノ信濃ハ多賀芽野人役所ヘ行キ両番久前田好方ヘ渡
遠山義方ヘ大和西ノ坪ヘ行島寺義ヘ行ル弥八郎

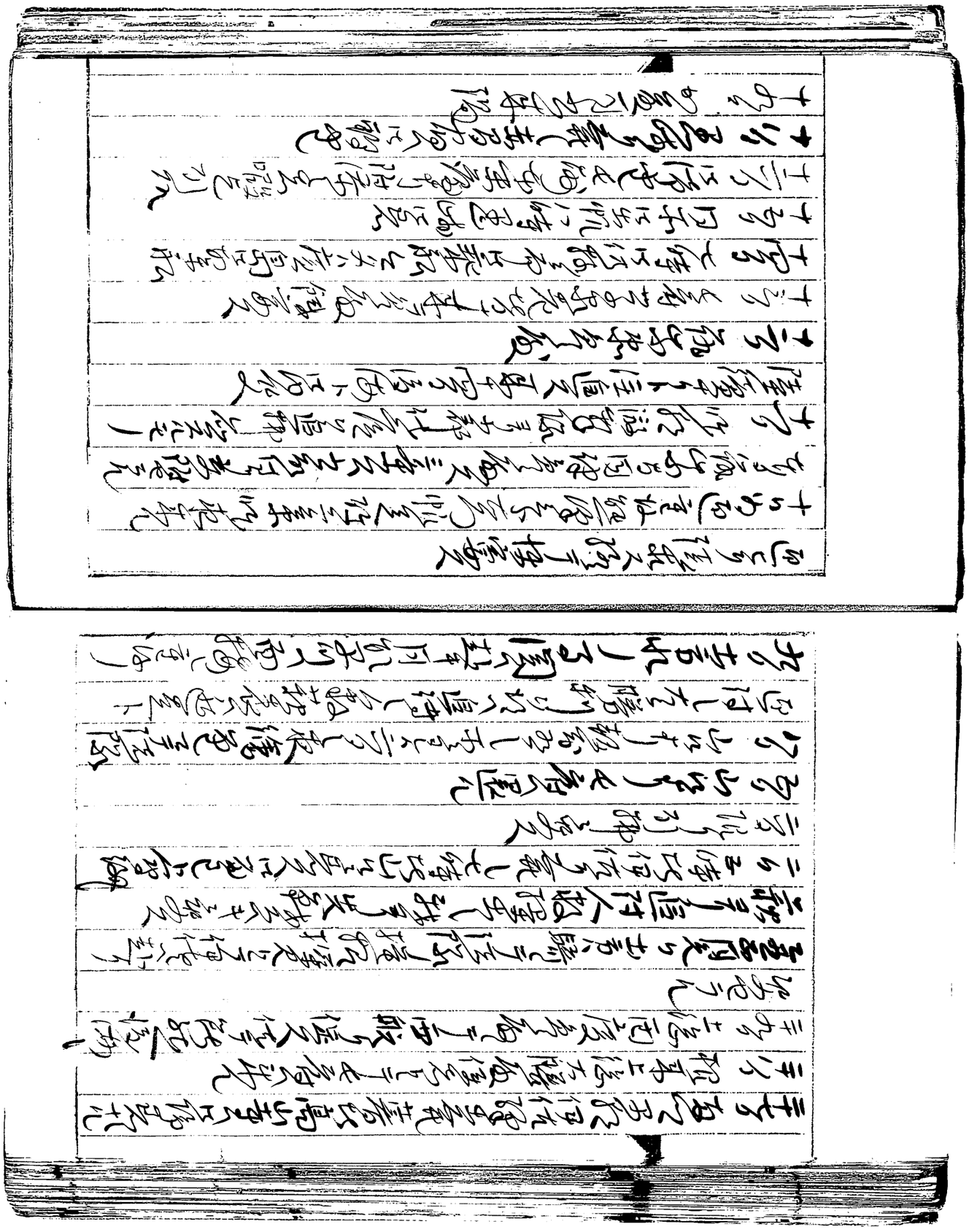
廻状
十月廿八日晴ニ付
十月廿九日晴ニ付
十月晦日晴ニ付
十月廿日晴ニ付
十月廿一日晴ニ付
十月廿二日晴ニ付
十月廿三日晴ニ付
十月廿四日晴ニ付
十月廿五日晴ニ付
十月廿六日晴ニ付
十月廿七日晴ニ付
十月廿八日晴ニ付
十月廿九日晴ニ付
十月晦日晴ニ付
十月廿日晴ニ付
十月廿一日晴ニ付
十月廿二日晴ニ付
十月廿三日晴ニ付
十月廿四日晴ニ付
十月廿五日晴ニ付
十月廿六日晴ニ付
十月廿七日晴ニ付
十月廿八日晴ニ付
十月廿九日晴ニ付
十月晦日晴ニ付
十月廿日晴ニ付
十月廿一日晴ニ付
十月廿二日晴ニ付
十月廿三日晴ニ付
十月廿四日晴ニ付
十月廿五日晴ニ付
十月廿六日晴ニ付
十月廿七日晴ニ付
十月廿八日晴ニ付
十月廿九日晴ニ付
十月晦日晴ニ付
十月廿日晴ニ付
十月廿一日晴ニ付
十月廿二日晴ニ付
十月廿三日晴ニ付
十月廿四日晴ニ付
十月廿五日晴ニ付
十月廿六日晴ニ付
十月廿七日晴ニ付
十月廿八日晴ニ付
十月廿九日晴ニ付
十月晦日晴ニ付



[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]過刻し失禮に至るべし[illegible]隙論議いつ[illegible]
[illegible]年の追附根来[illegible]入来しは畢竟附弾院寺
[illegible]し論地[illegible]中度の石[illegible]論[illegible]後れハ仕不[illegible]
[illegible]御琴[illegible]度[illegible]已す[illegible]

十二月二日

[illegible]

月[illegible]

[illegible]孔子[illegible]子路[illegible]
[illegible]武士[illegible]氣象[illegible]人物
[illegible]人孔子[illegible]子義以為[illegible]教
[illegible]文子[illegible]国と[illegible]可使[illegible]
[illegible]方[illegible]方義[illegible]自
才義以為[illegible]学問と一国に推及[illegible]
[illegible]天下[illegible]国[illegible]学問[illegible]角[illegible]

及ビ其工夫ヲ之上ニ大祖重職ヲ家ノ小者
之諸士ヲ賞用ヲ學問ヲ加ヘ用ヲ任ス
上ノ御政道ヲ以テ治ル日ヲ以テ
上ヲ取ヲ以テ聖賢ヲ道ヲ以テ其ノ中ニ其ヲ
大ニ學問ヲ加ヘ御武術ヲ以テ引
立ル趣ヲ御出ス一ヲ家ノ家中一統
奮励仕武術ヲ以テ強ヲ武士ヲ

義ヲ為ス隙中ニ手ヲ藝術ヲ張ル
働ヲ報ヲ如何程ヲ勝利ヲ為ス
甘ヲ是ヲ大ニ武道ヲ以テ又推及
ス諸方諸藩孔明後主ヲ上ル言
中府中為一體ヲ高中ニ奥ヲ
府中ニ表ニ御政道ヲ其奥表
體ヲ万事ヲ打合ヲ不成ル不

[illegible]

[illegible]

[illegible]

無御年御家老し善御兵本に為成度伝
書形は且御年寄
無雲院様御成功為之に所領
より御幼年を一段為の賜度御中先これ
以付古屋に立寄記度御大人様し御書へ
出国家し中御人御り出一万中未御差年故
之御長下位に御打捨り出に義也 之為也
而分家の為御中屋に又御部屋位下一万一
御無命に為の年成程為之人子若八家老
に命と之人に八百俗に一年程御下国り出
御出国改に為御打に分御国主し出報之不
に為年に為賞の為に
無雲院様先前御年国し初矢恐御部
屋位に屋に御国移し御中に屋に又七時と

八財務ハ無ノ稽ニ[illegible]ル唯今夷情難測
文ノ中国ニ不穏形勢ヲ察シテ[illegible]
ハ一案ニハ[illegible]
無雲院様御代ノ乱ニ絶唯今ノ乱ニ[illegible]
中若ハ偽造遠乗ノ仕時[illegible]
存ル

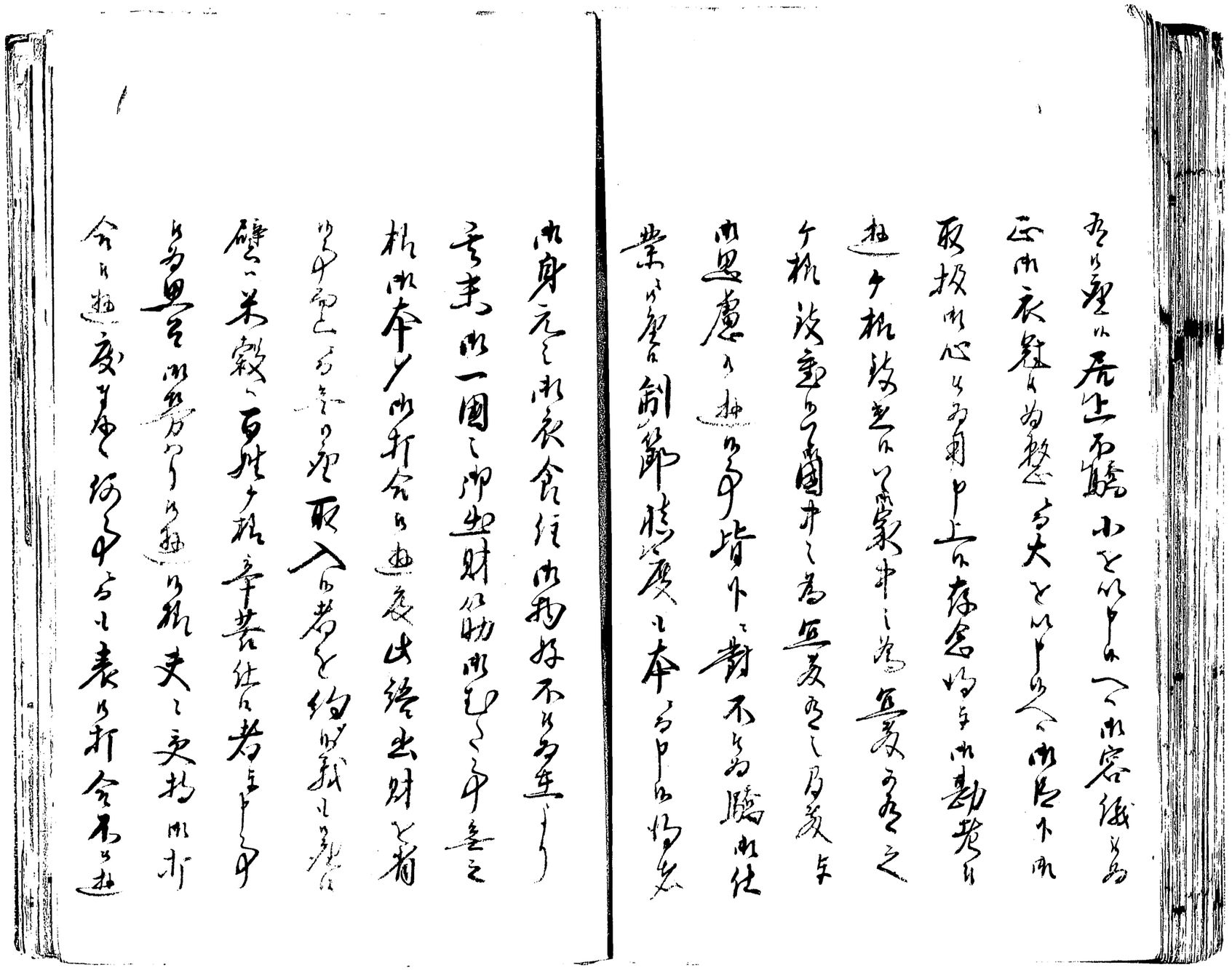
一御書問ハ御国政ノ根基本ニ分明ニ励ル也[illegible]
[illegible]書問ニ部分ノ時ニ[illegible]
[illegible]ニ[illegible]
高位ニ[illegible]御孝道如何ニ[illegible]
[illegible]ニ[illegible]
書問仕リ多文字ヲ覚ヘシ中ニ用ル
八ツ[illegible]文字平リニ[illegible]
或書物ニ文字ヲ用ル多識ル

人と輕侮仕り称列り寄抵を以て兎角侯
書に一句と異なる一事し用迚志を
当一に是を大なる経書とり扱り理
之事否平之事歟とり為て和漢歴史と
為讃為て事迚とり為て武仕法武国
弱大に成此計策を以我に勝利を中
御心り為に為御聰明を為益助教

而に手迚史記に綴り迚手に頂戴本紀を
我国家を以身学人時に土平為我し勝
利を成中り為知国紀を後に沈舟を
示土平必死と為て高祖本紀を略迚
大度と英雄才藝勝れ三傑と為て
侵迚り中り為国紀接り我を備と
軍に大中中為韓信孫臏に倣

[illegible]奇正互用因敵制勝之中[illegible]
馬穰苴し傳[illegible]軍中立威行恵之中[illegible]
為[illegible]之報[illegible]和書[illegible]身[illegible]
逢[illegible]報[illegible]人[illegible]排[illegible]一[illegible]吏[illegible]益中[illegible]
[illegible]寡[illegible]中[illegible]逆[illegible]保[illegible]為月[illegible]之安
[illegible]會[illegible]為五[illegible]側[illegible]自[illegible]上[illegible]之[illegible]会し常
紀綱[illegible]一人[illegible]拾数平し[illegible]吏[illegible]根

[illegible]武[illegible]し平[illegible]結[illegible]毋[illegible][illegible]
養[illegible]一助[illegible]
門孝道根元[illegible]吏[illegible]理[illegible]孝
經[illegible]上不驕[illegible]恭制義[illegible]度[illegible]後[illegible]国
家[illegible]保[illegible]諸侯[illegible]孝[illegible]
上[illegible]光[illegible]成[illegible]報者[illegible]定[illegible]
就[illegible]吏の知難[illegible]郡[illegible]



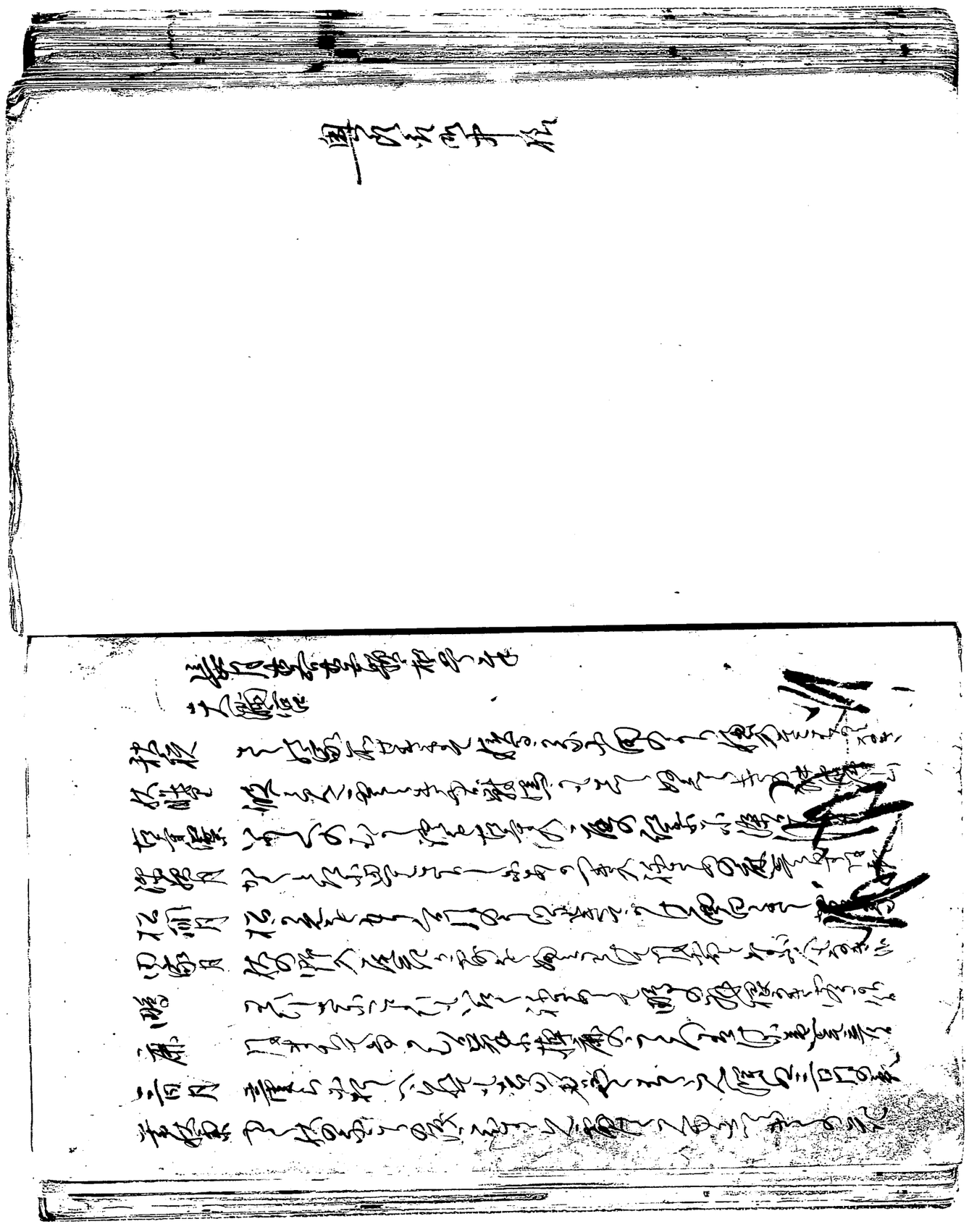
五穀ハ人ノ命ニシテ一日モ不可缺ものなれハ
正ノ衣食ハ為政者ノ大切ナル事ニシテ
取扱ノ心ヲ以テ中上ノ存念ハ勿論ノ事ニ
相違ナク機敏ニ為ス事ニ
ナク機敏ニ為ス事ニ
出来慮ノ如ク手皆下ニ対不為賜ノ仕
業ハ制節ノ度ニ本ヲ以ノ為ス

ノ身元ニ応シ衣食住ノ為好不好ヲ生シ
ル事ハ一国ノ御知財ノ物ノ乏シキ中ニ
相応本ノ所行合ノ通度出給出財ト者
ノ中ニ多ク取入ノ者ヲ約ノ義ノ者
壁ノ米穀ノ百姓ノ孤幸者ノ者ヲ
為ノ事ノ為方ノ為ノ通ノ為ノ夫ノ更ノ所ノ
合ノ通度ノ事ノ御ノ中ノ表ノ所合不ノ通

為こゝ有程善所仰付為年中所改革之題目
中善事こゝ徒善不足為政之中に歴
所又日書養志之養口體こゝ中之諭に大孝
之志を以て父の先祖の開り平家風と能勤年
法御当家を以
御先祖様の御事武こゝ家に中
御代こゝ御文拝板こゝ中

御文上様の御志こゝ中後年こゝ為
合拝家風こゝ為年中上こゝ為年中文
頂り無こゝ養志中こゝ年中こゝ為年
也恐御慶發興起こゝ為年度仰付新
為こゝ奉こゝ候所尋不指出合徒の者
所此如こゝ所問こゝ為年為こゝ用こゝ羅
所こゝ別段所合こゝ
八月廿六日

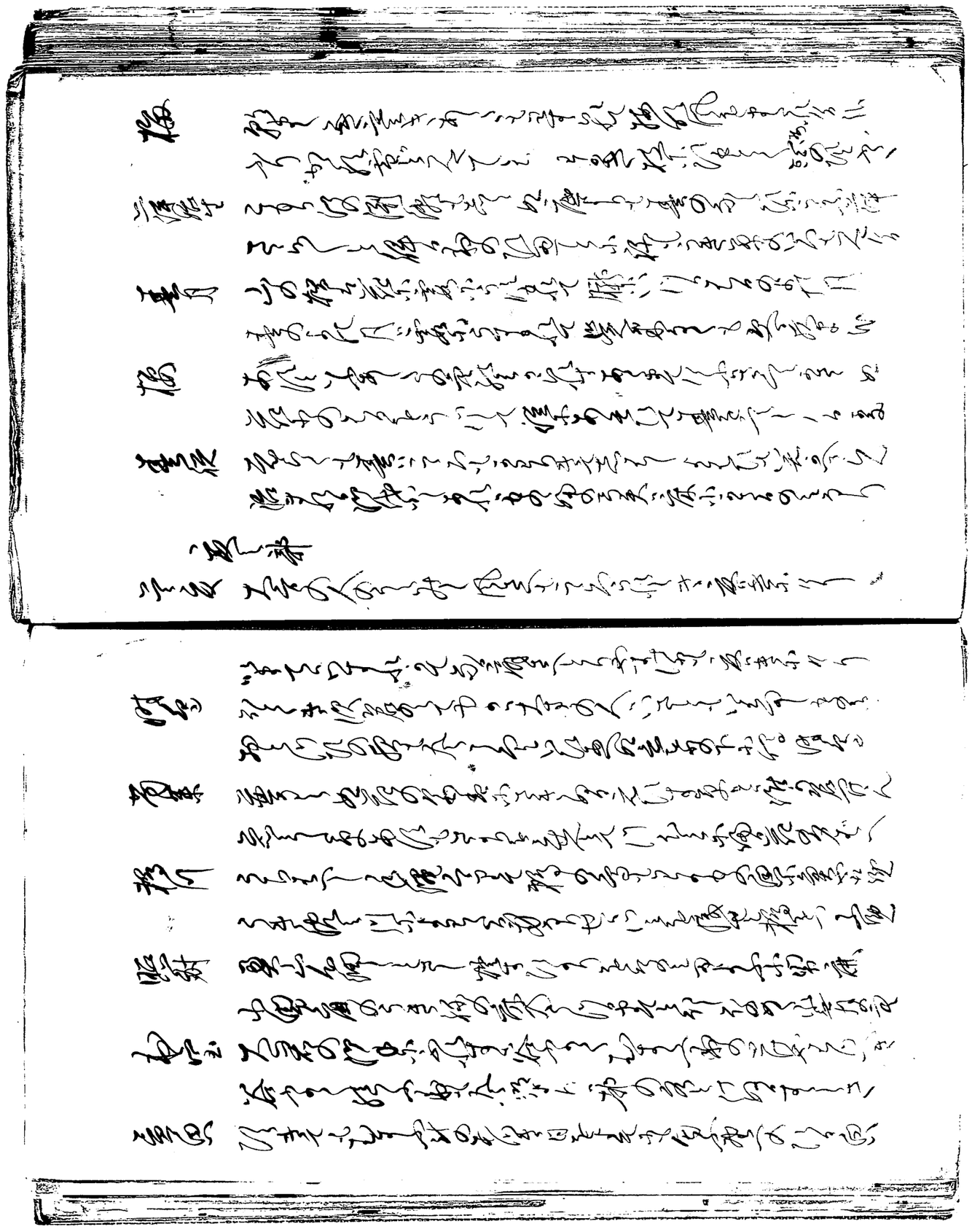
寛本 巻八

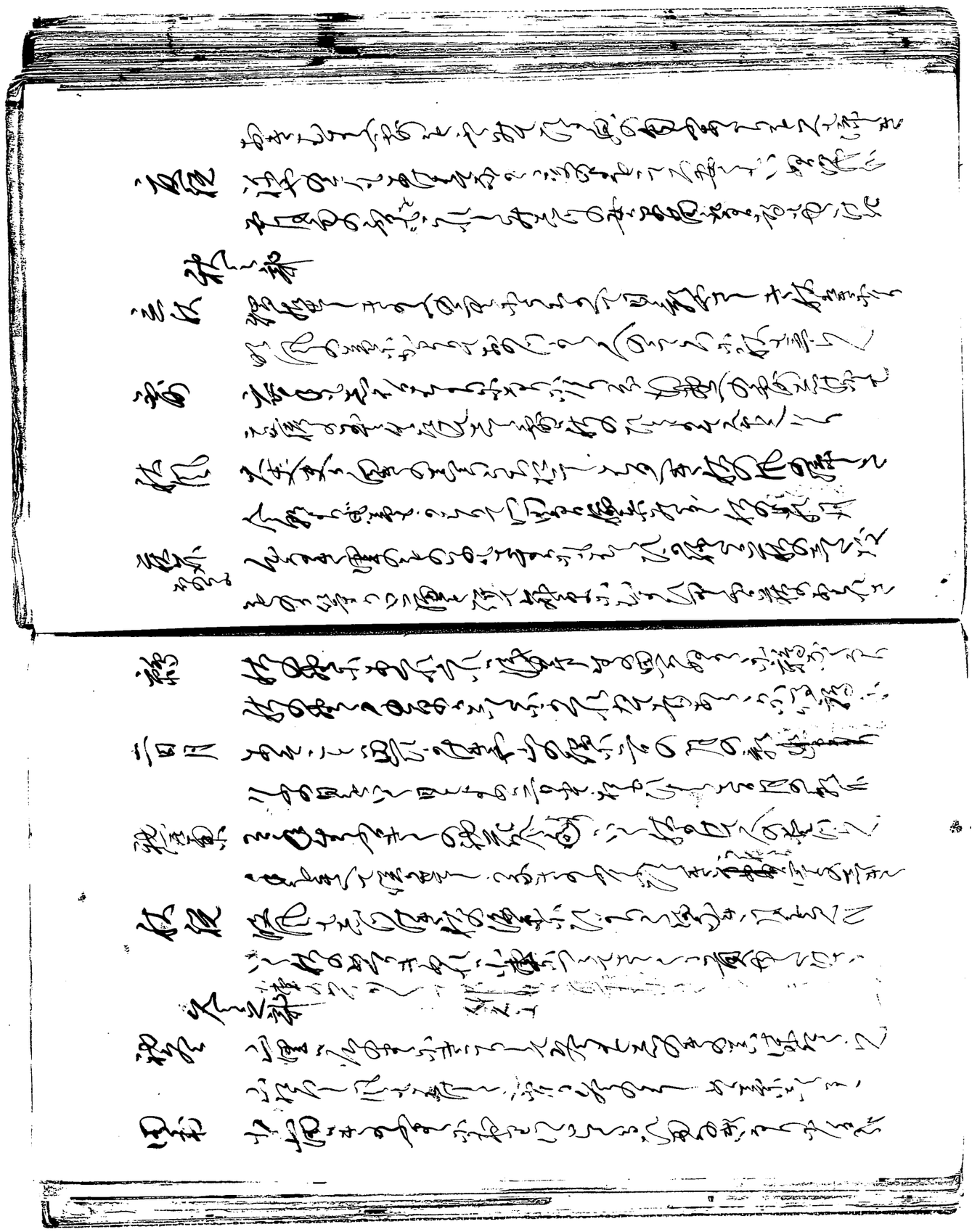


[illegible]

[illegible]

[illegible]





若狭

[illegible]

[illegible]

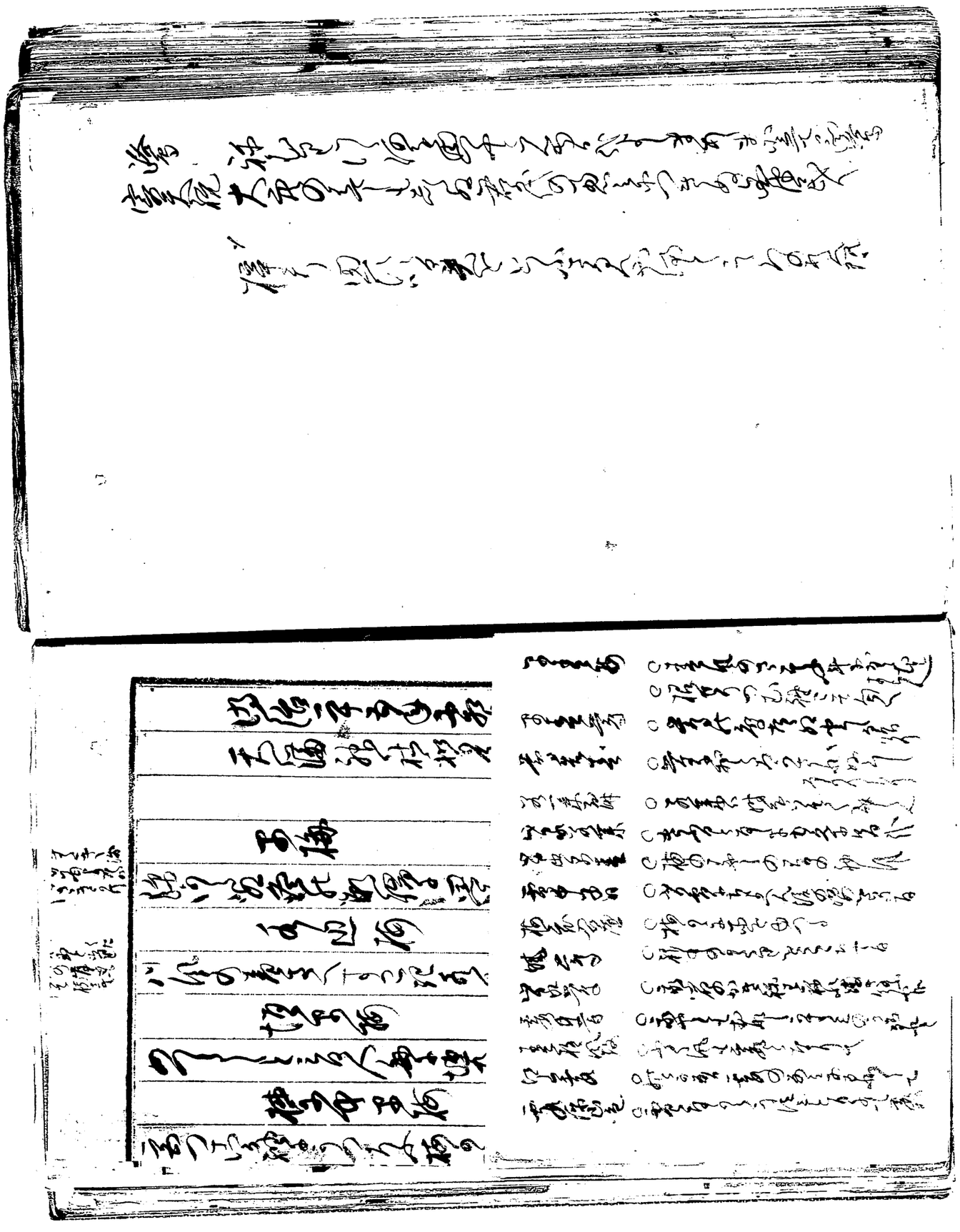
[illegible]

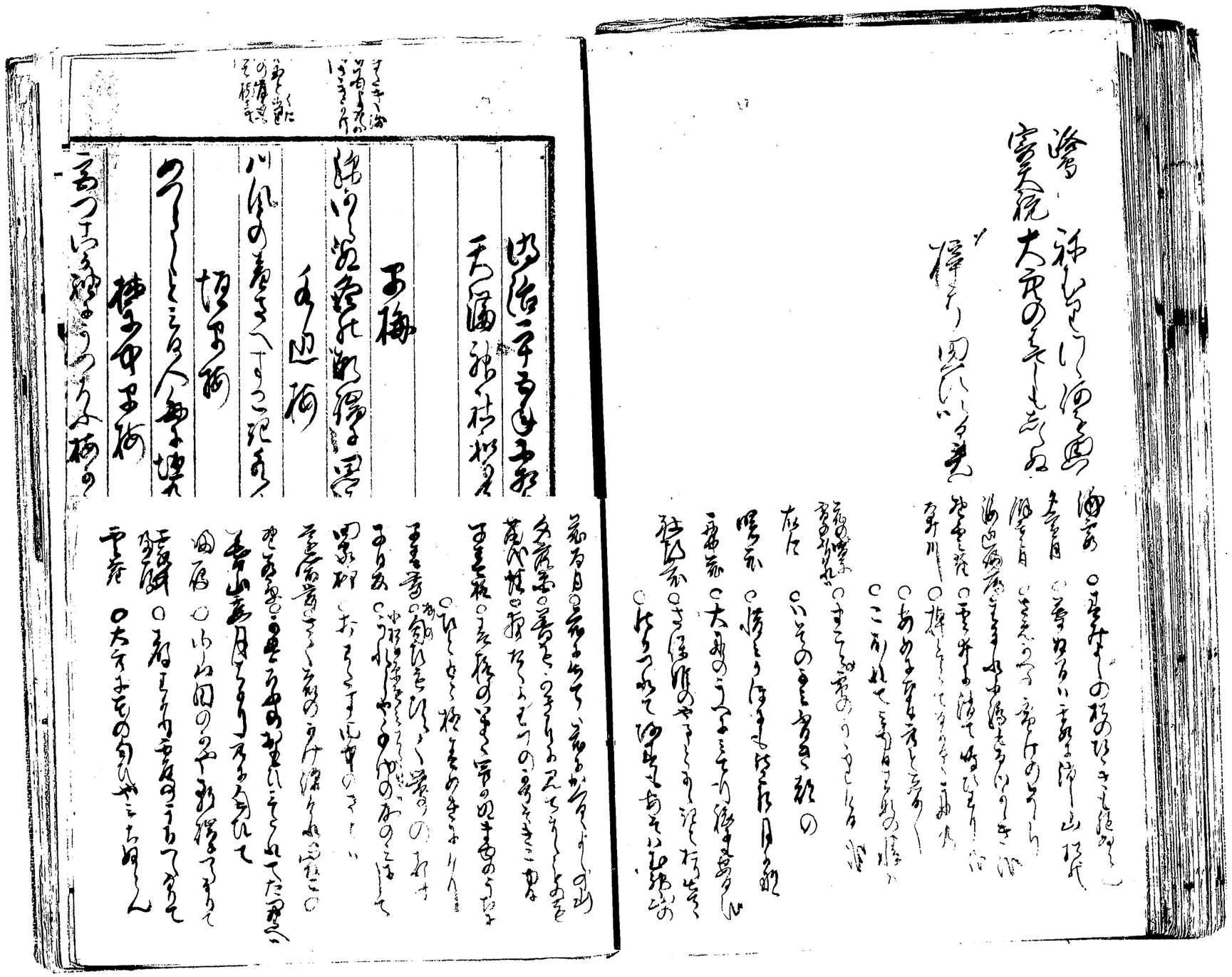
奉　天満宮二千年祭和歌　神奇月　花香

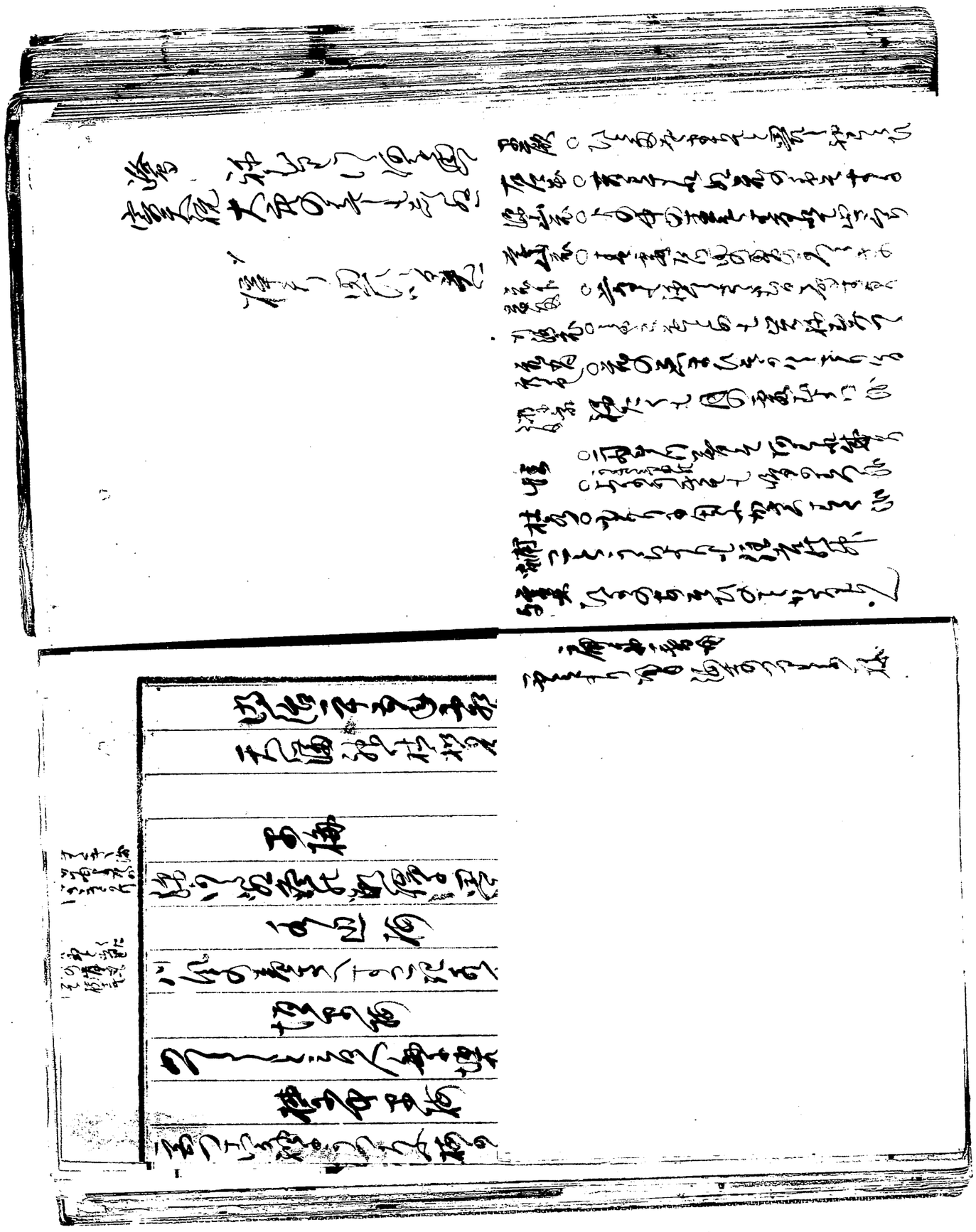
[illegible]

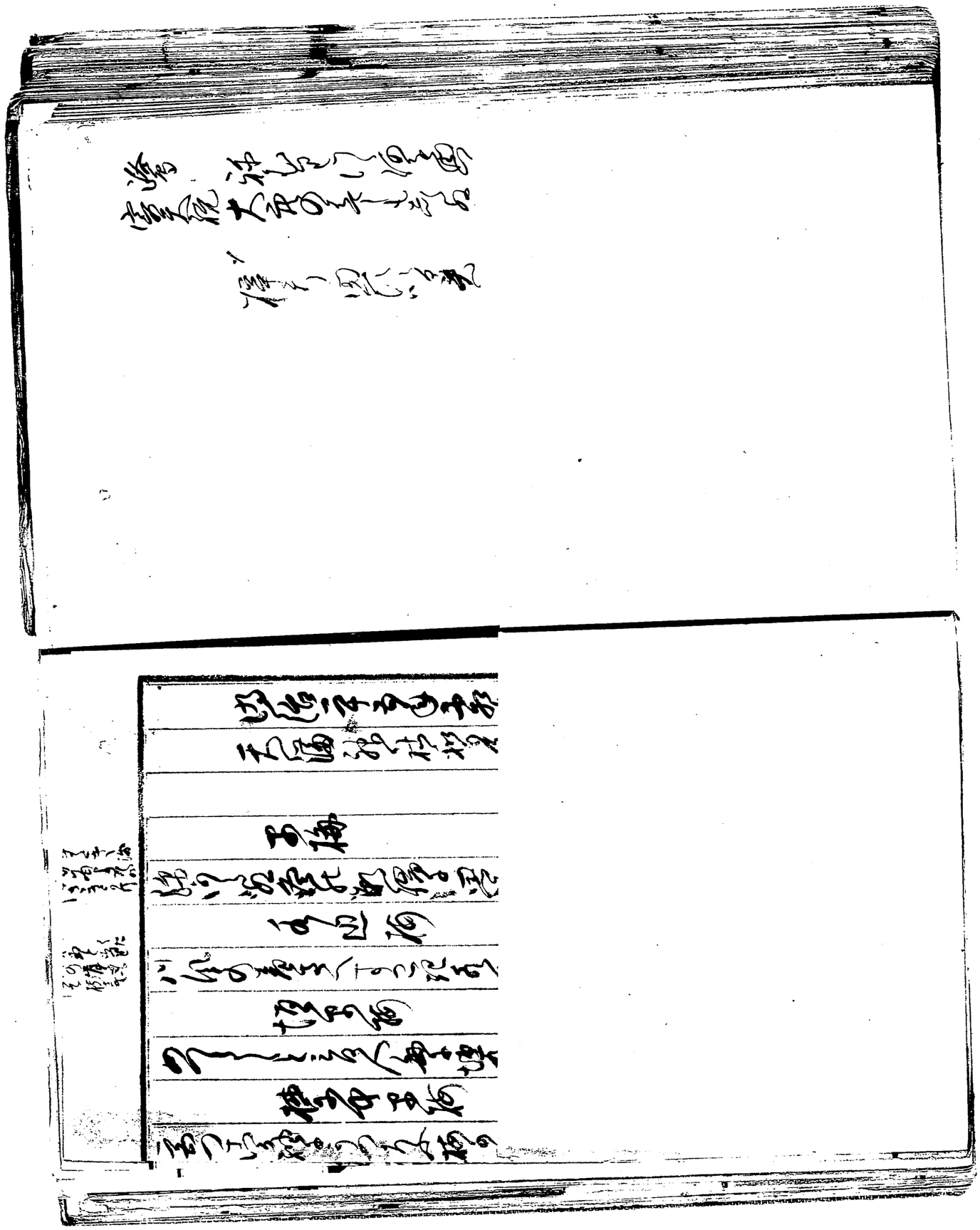
[illegible]

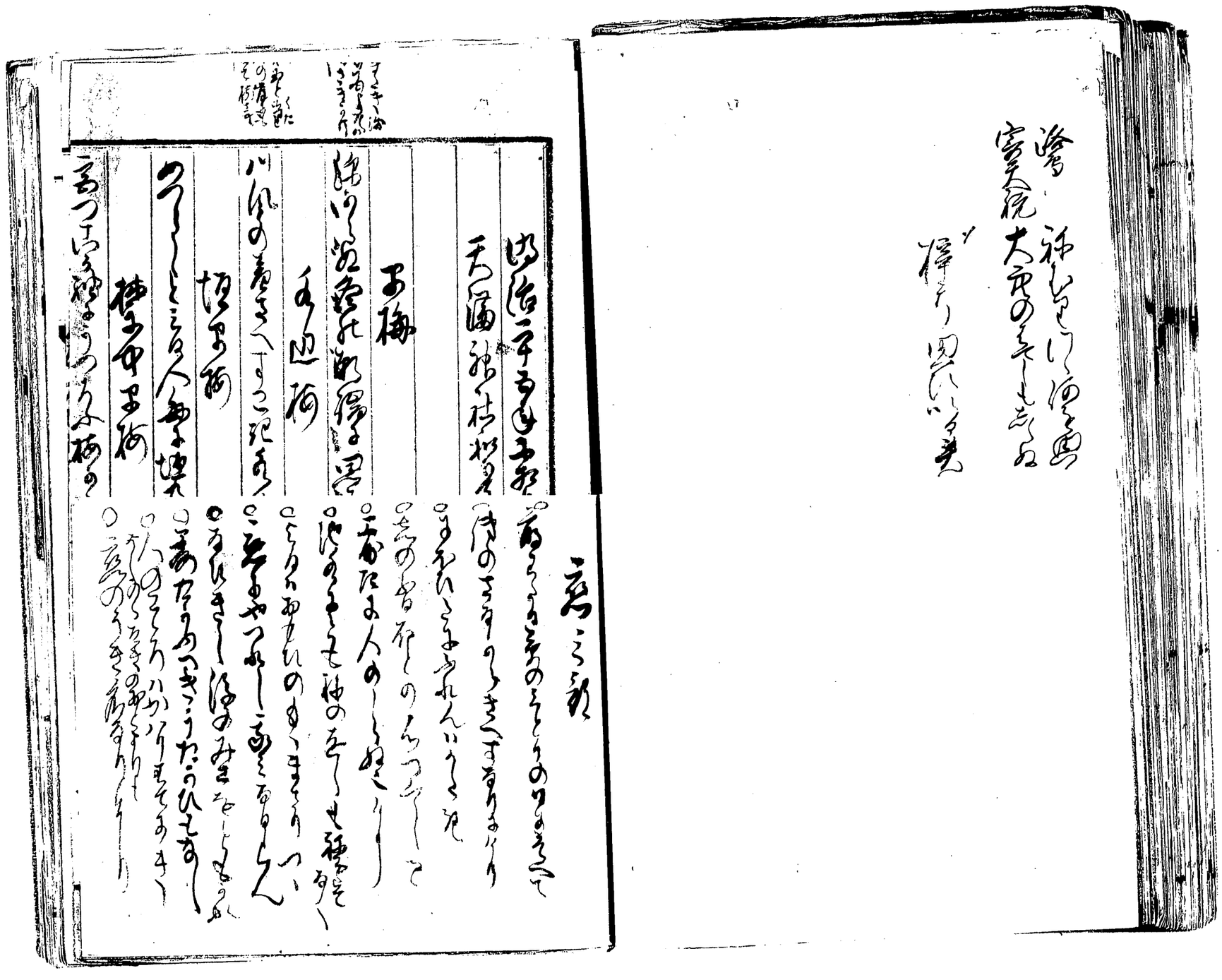
[illegible]

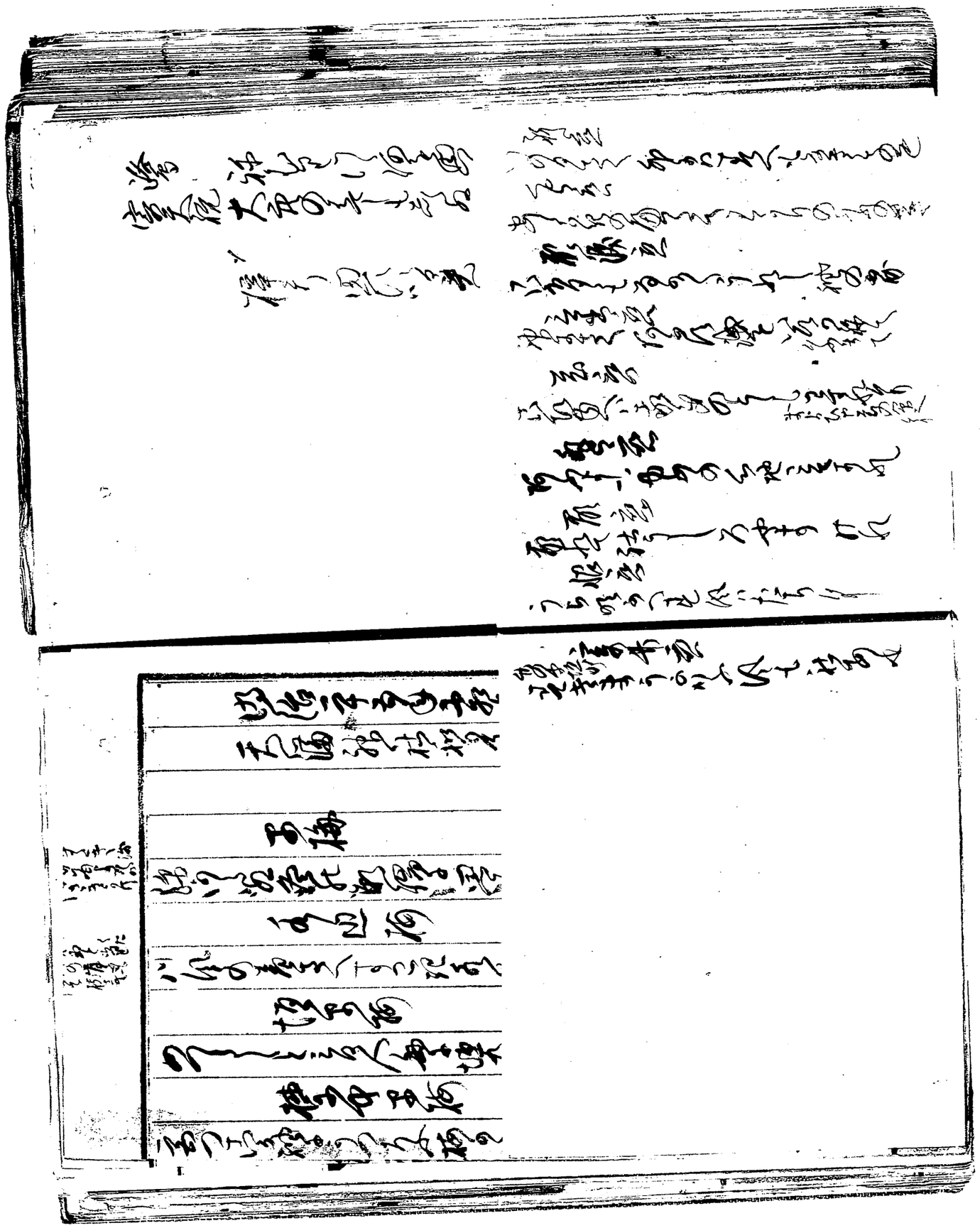


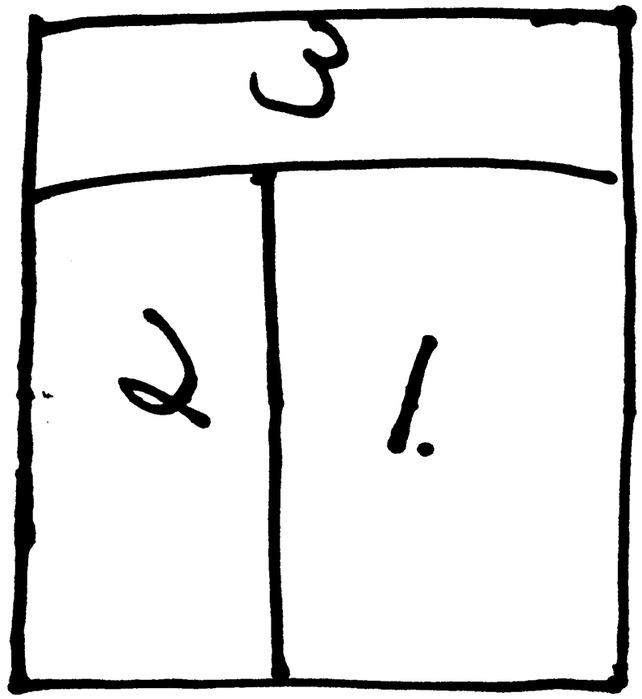




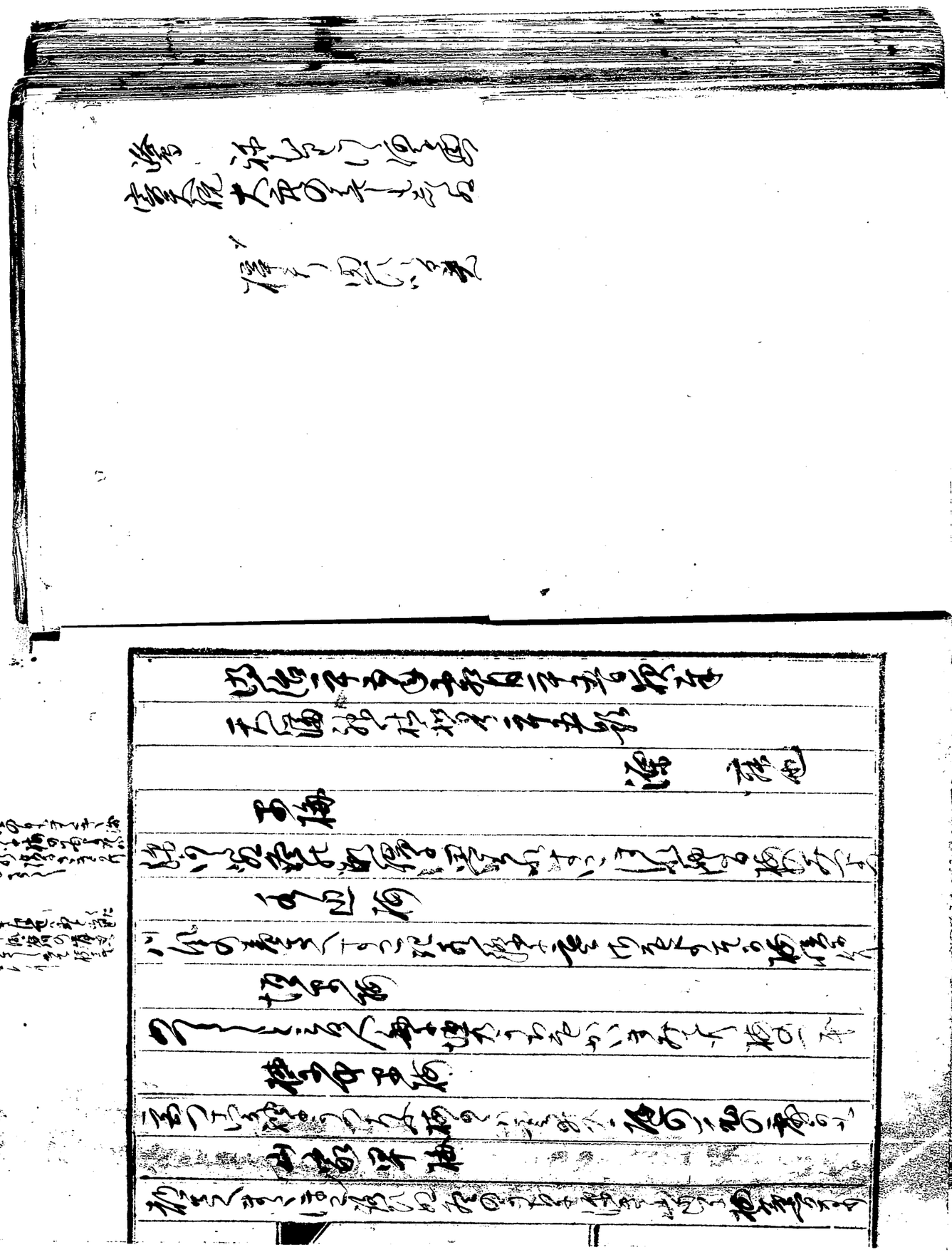


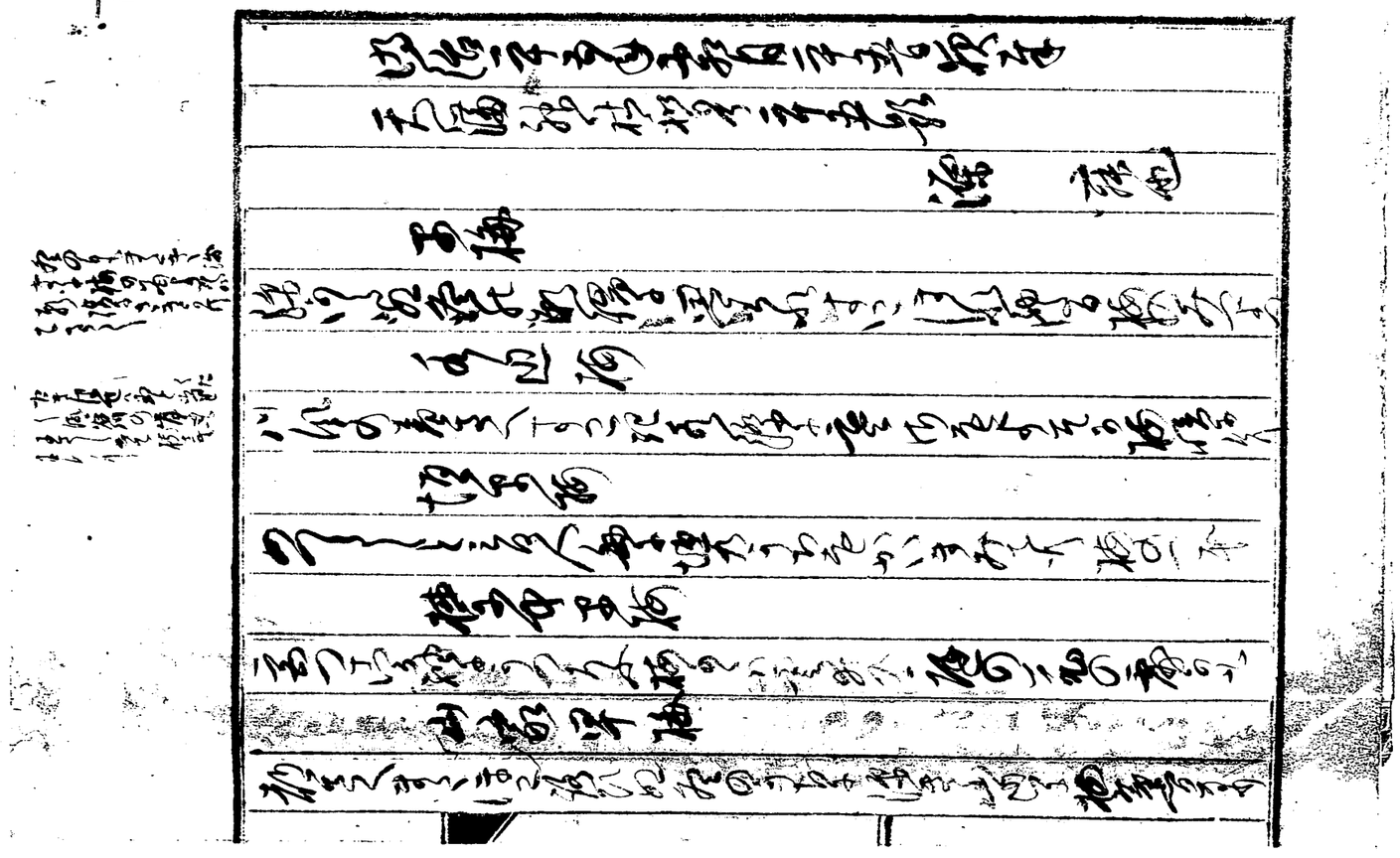


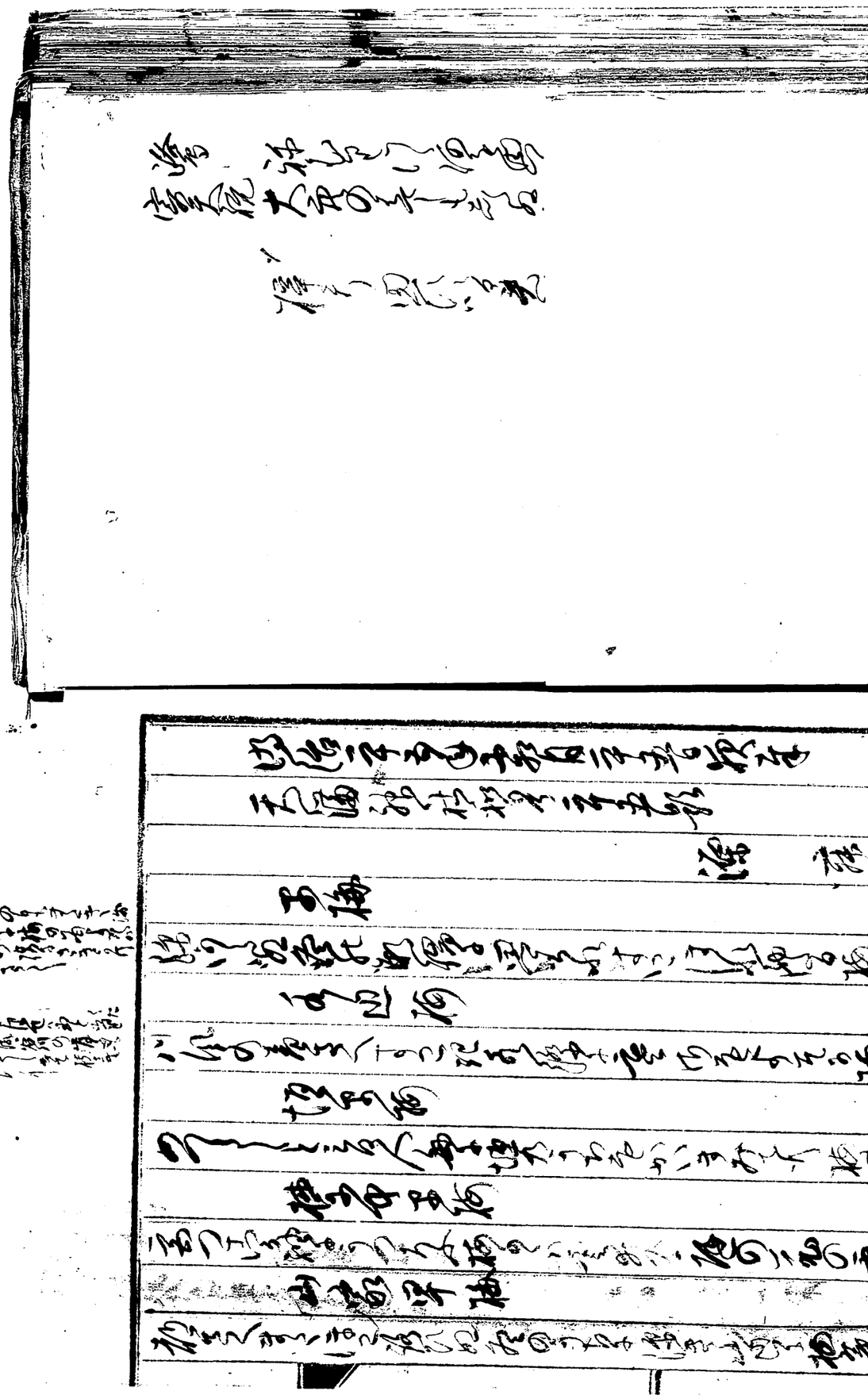




1.
2.
3.
の順序で
分割撮影







尋梅

梅初見

重年梅

重年梅

梅

夕梅

梅

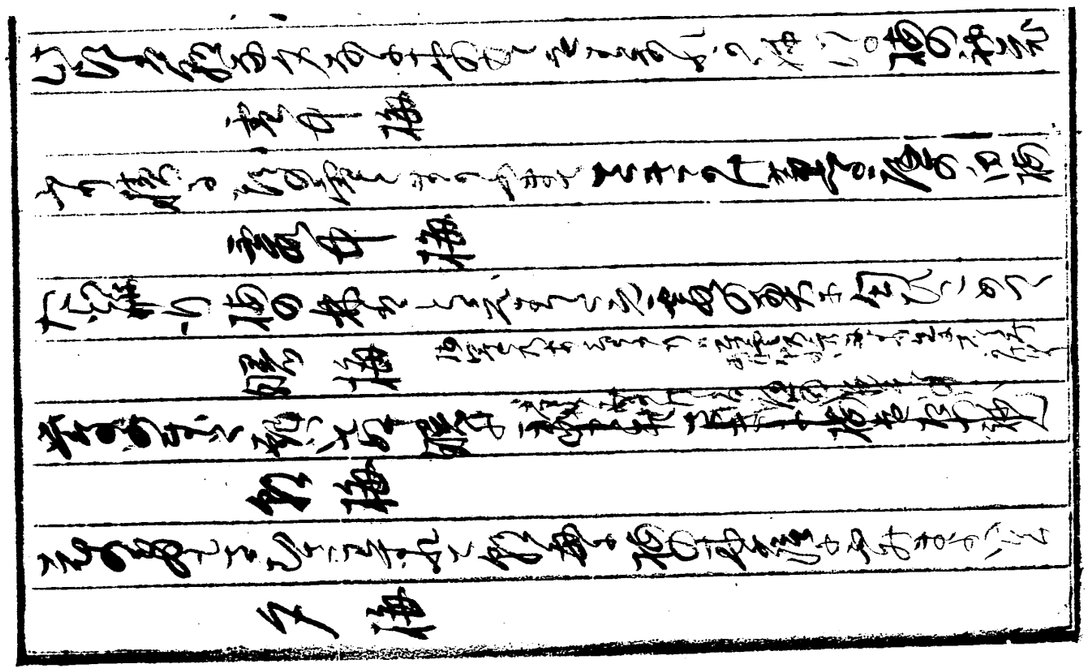
梅

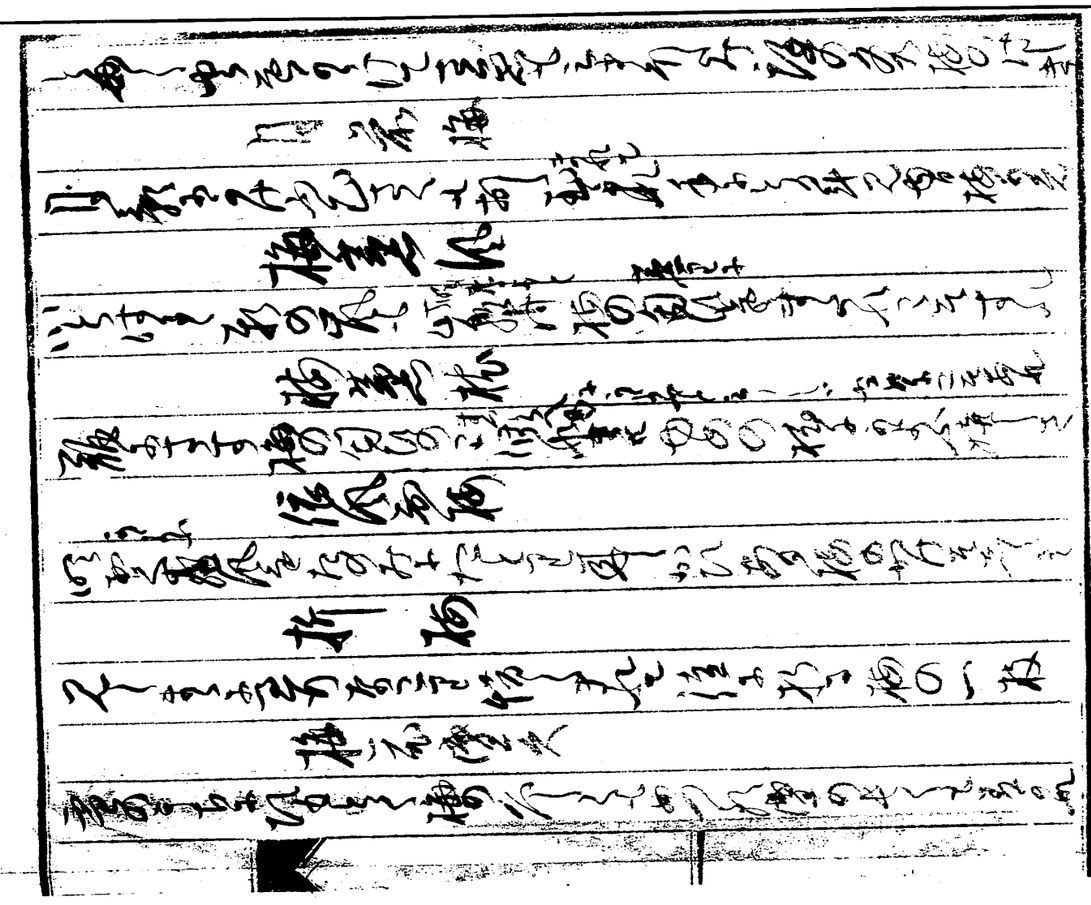
梅

梅

梅

折梅





梅

[illegible]

山梅

[illegible]

山梅

[illegible]

帥梅

[illegible]

帥亭梅

[illegible]

玄梅

[illegible]

祐房梅

[illegible]

太祇の隆盛と[illegible]梅の[illegible]を[illegible]

作[illegible]

梅

[illegible]

山梅

[illegible]

山吹梅

[illegible]

帰梅

[illegible]

帰亭梅

[illegible]

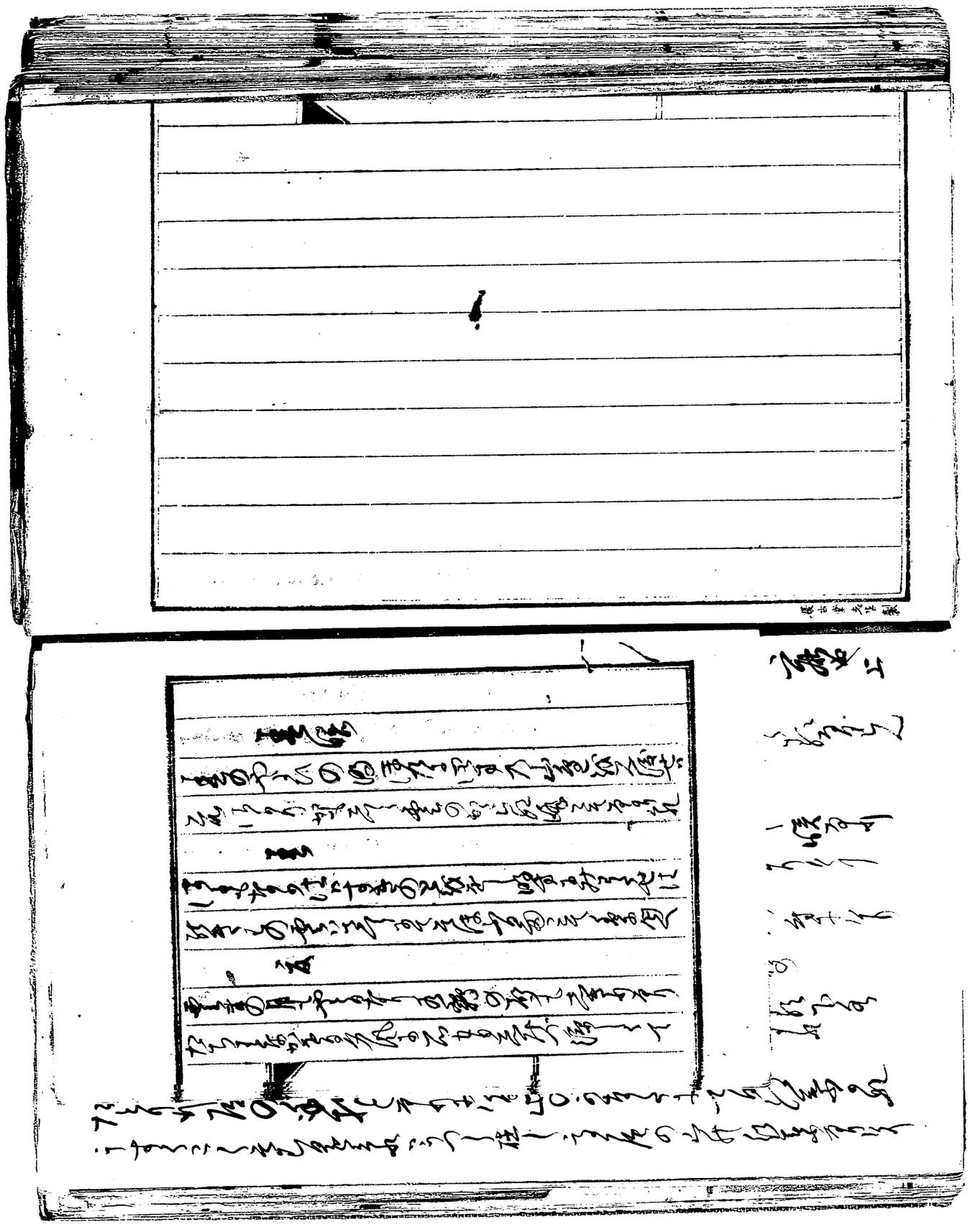
玄梅

[illegible]

祇園梅

[illegible]

[illegible]



秋

[illegible]

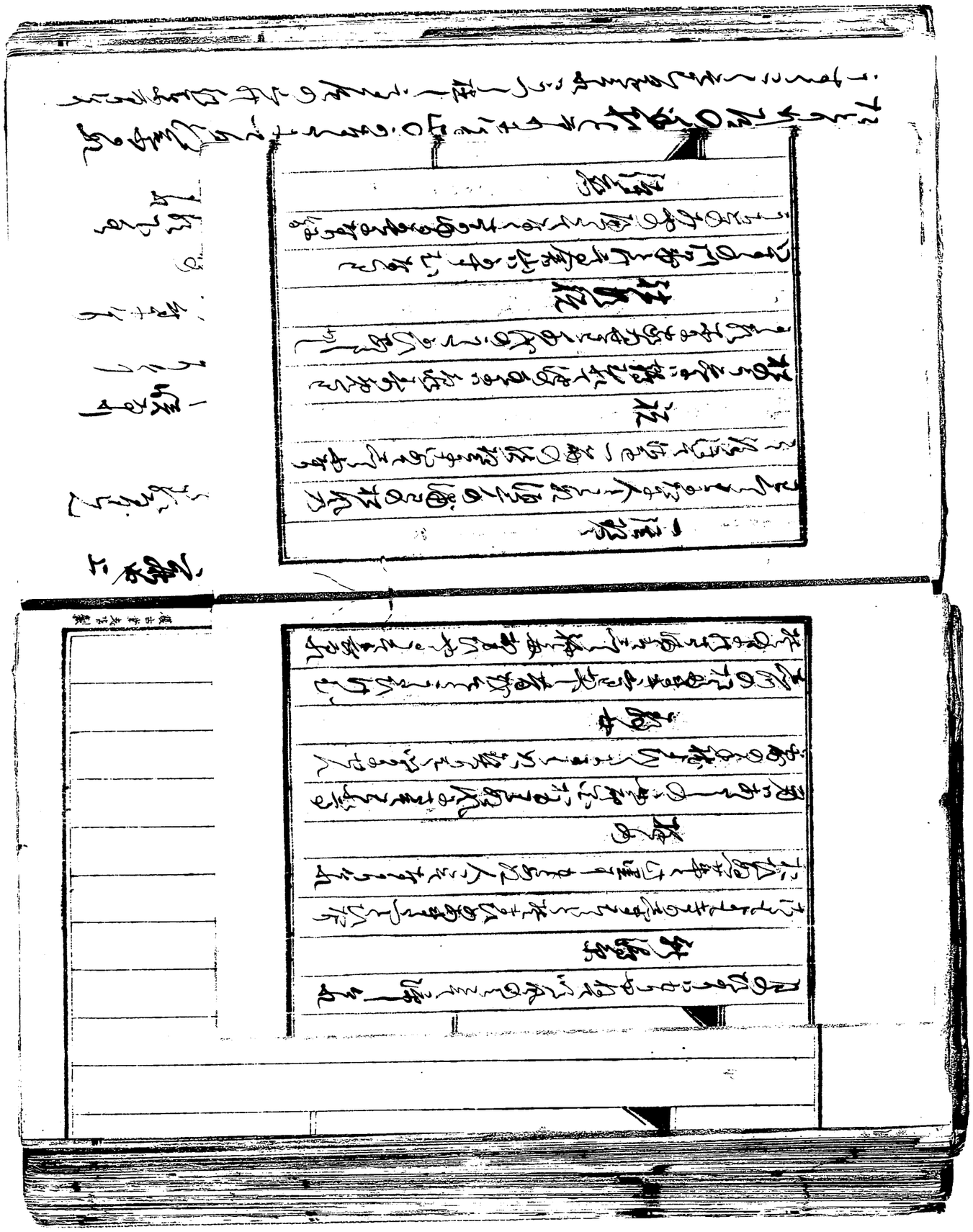
[illegible]

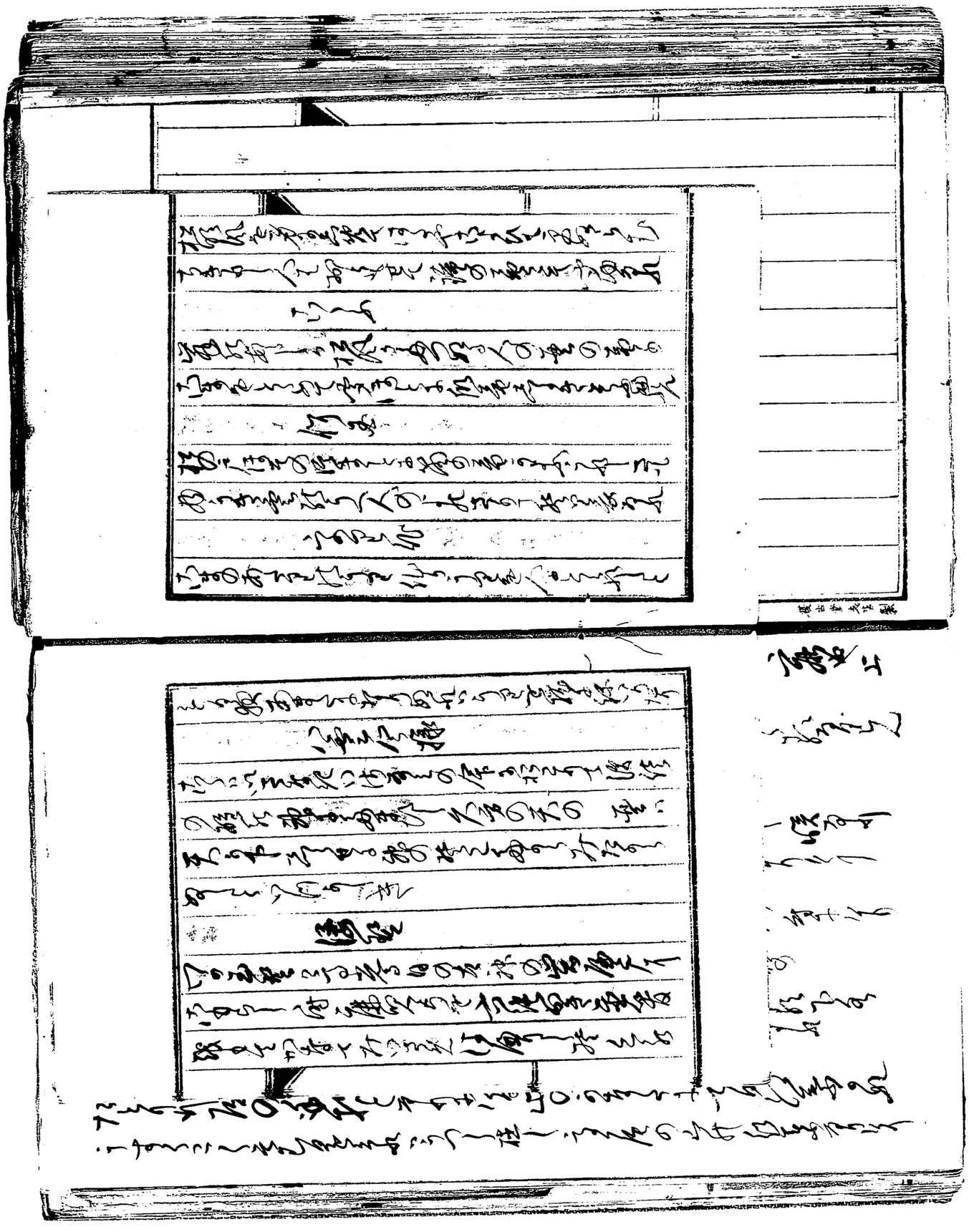
月

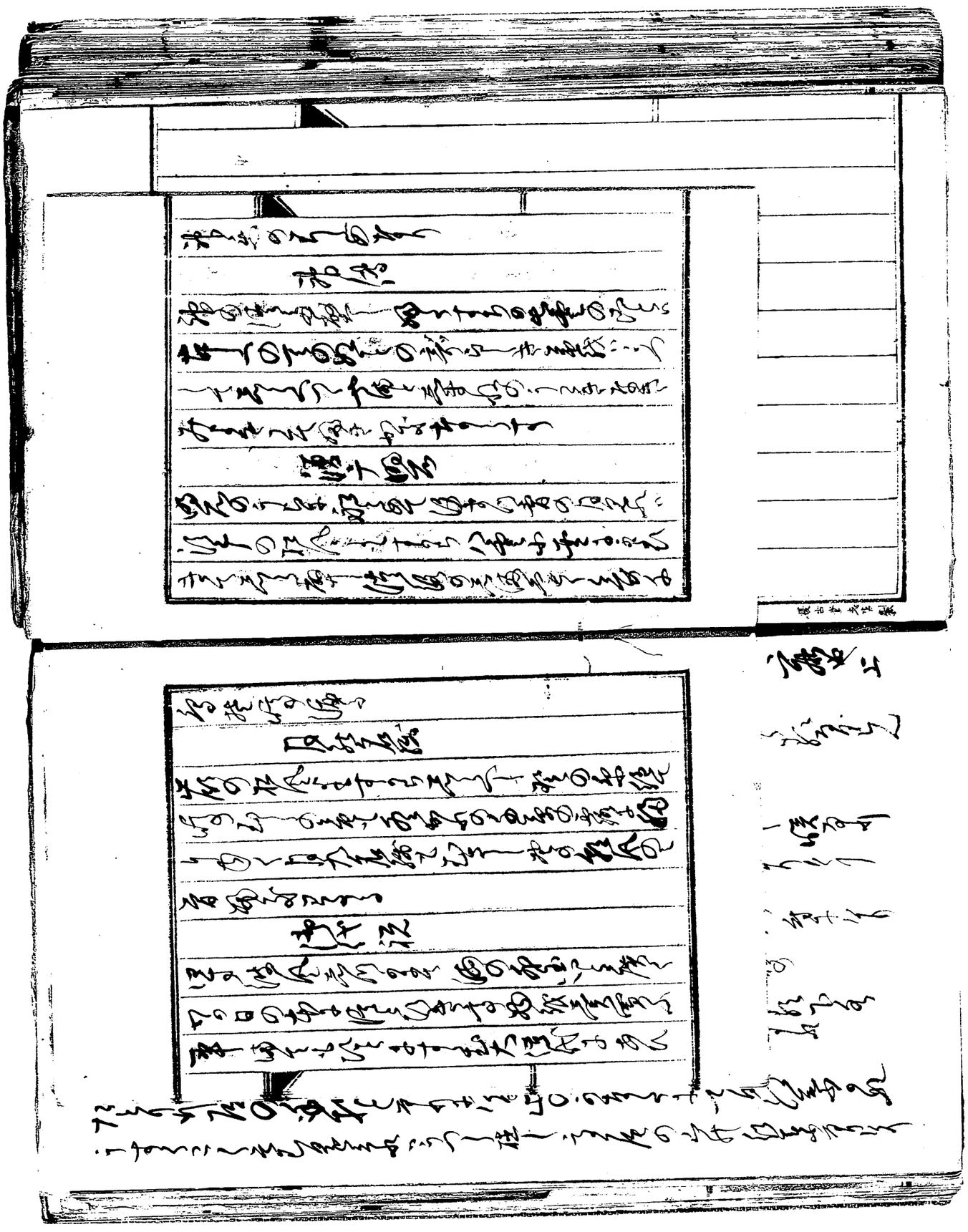
[illegible]

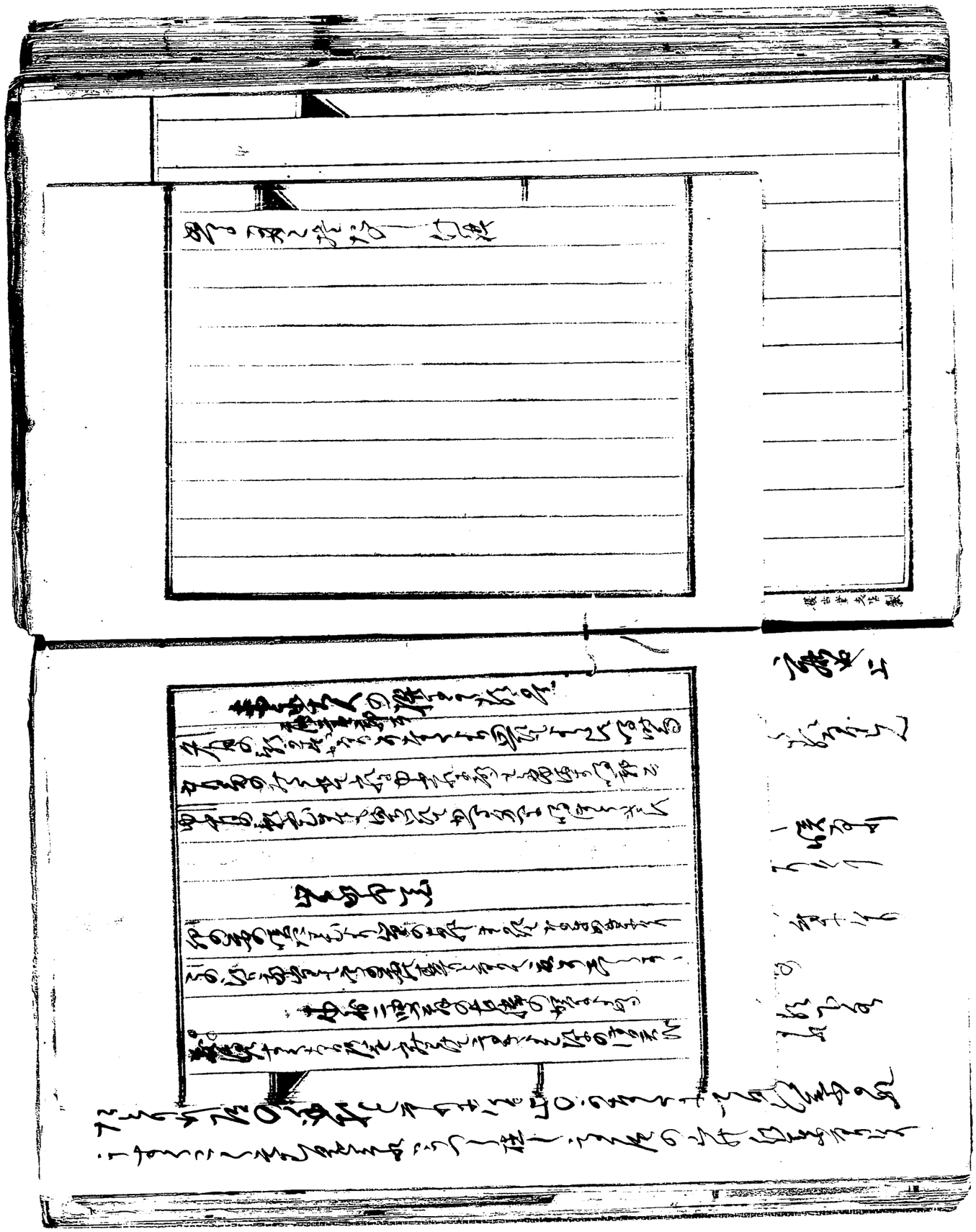
[illegible]

[illegible]







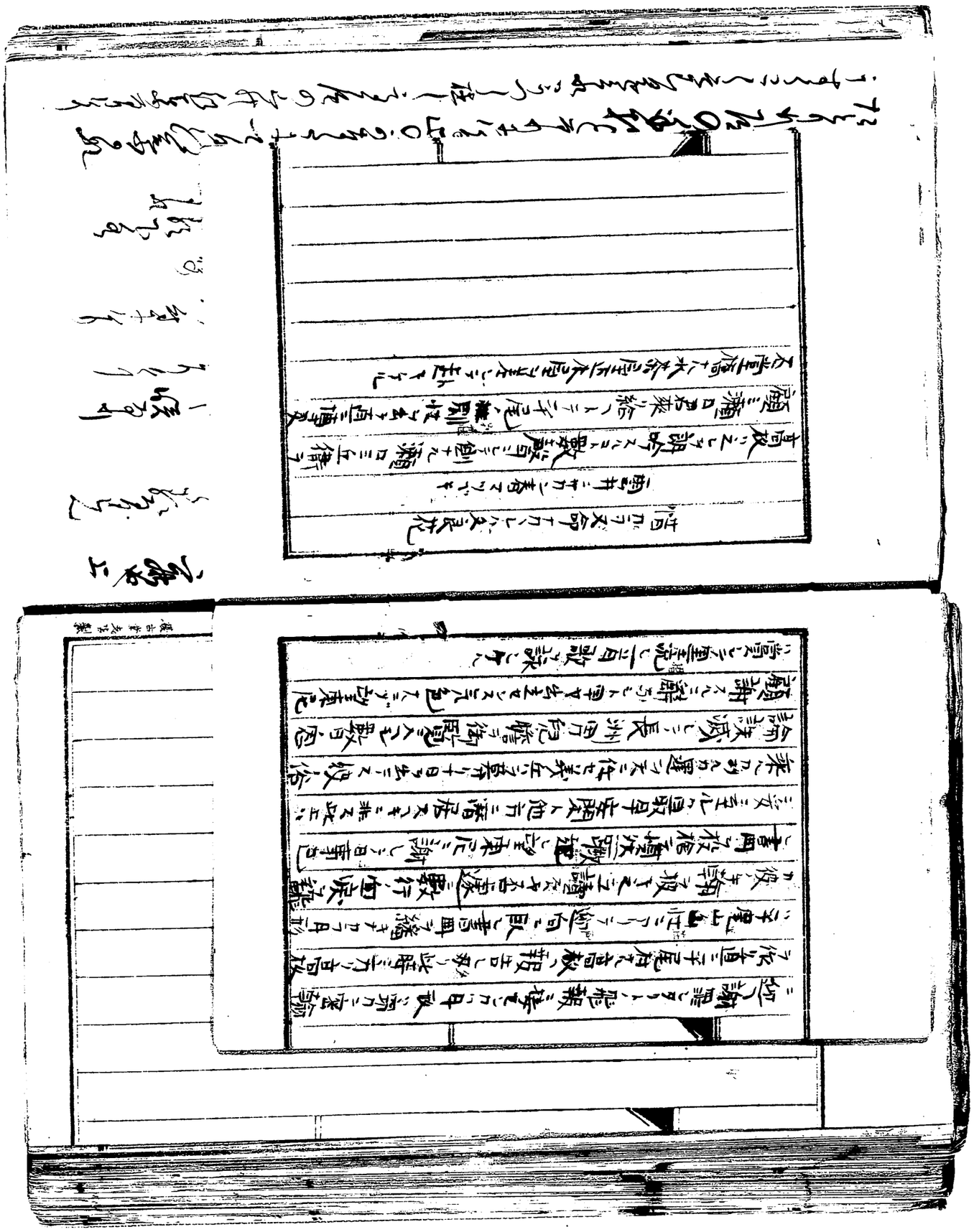


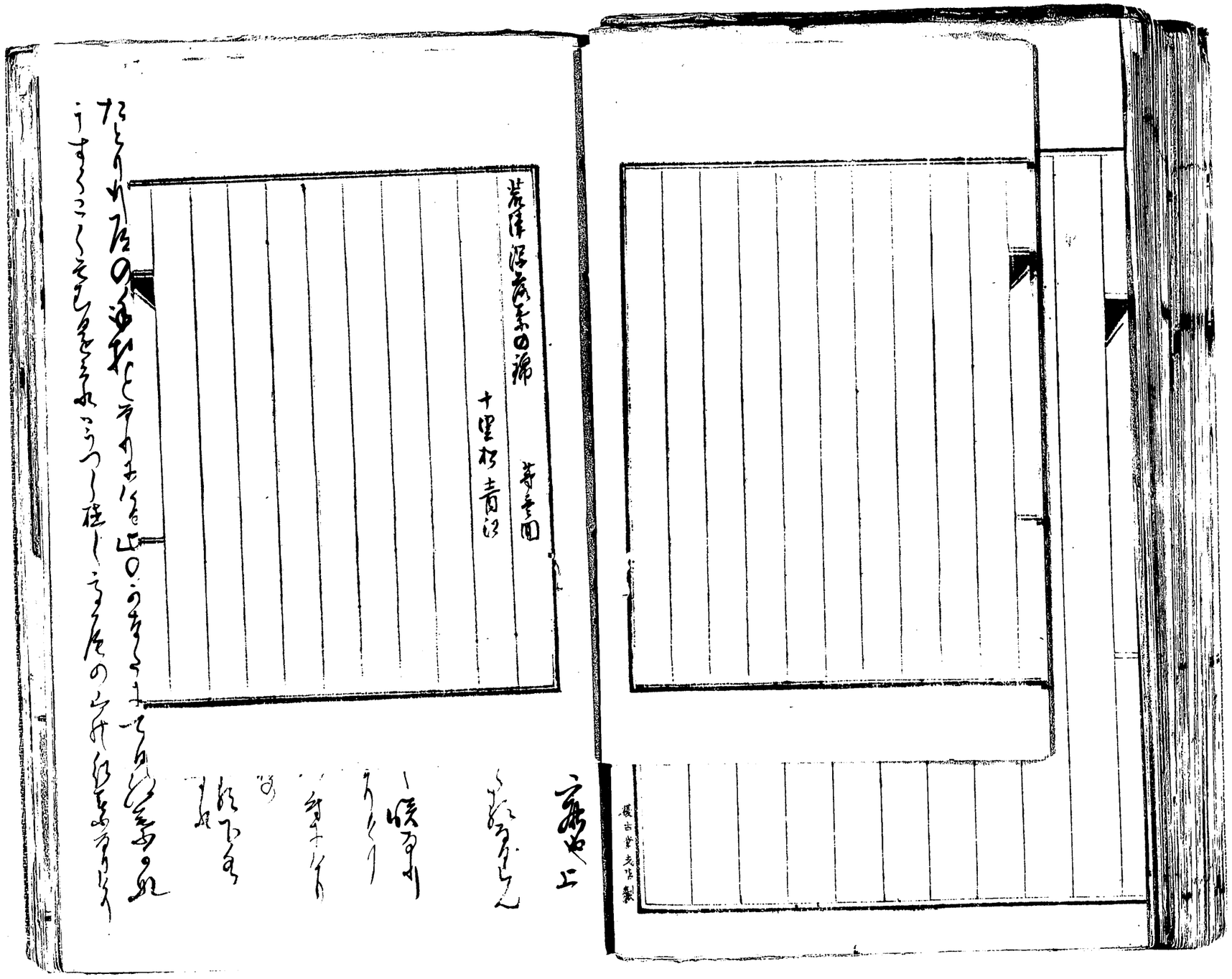
十里松林　長年逸人作

扨て東行先生高杉春風ハ唯一人博多水車橋ノ側ナル畫工東園カ庵室ニ潛伏セシニ該所ハ市街ノ近接シテ嫌疑ノ甚シキアレハ月形等有志者ハ皇ニ其潛伏所ヲ議セシニ幸ニ福岡城下ヲ距ル二里後ニ半尾山ノ野村望東尼カ庵室ニ人跡ヲ絶チ閑雅幽遠窮僻潛伏所ナルヲ愛シ喜板ヲ迎ル事ニ決シ笑ヒテ瀬口三兵衛等ニ和ハ舊知ナリ水坊主ニシテ順可ト稱スル頗ル(人ニ乘慨アリ)親ヲ隔セシ人ナリ此望東尼ト乃チ同志者野村助作者カ

禄三百三十石ヲ頒ス）祖母ニシテ容貌温和志操俊邁ニシテ具
ノ気慨ハ男子ヌ及ブ所ニアリ繼續ノ姑ノ梅花抹茶諸
藝ニ熟シ殊ニ能書ヲ能シ和歌ヲ詠シ四十ヌニシテ夫新三
郎貞賢ニ別シ後ハ薙髪シテ望東尼ト稱シ此庵室
ニ閑居シテ風雪月露ヲ楽ミ高吟酒落ニシテ文筆ヲ
能クス又ヲ雅畫ニ巧ミナリ尊時此庵室ニ潛伏モ自度
東尼ト相談笑シ一個月ガリ過ギケンニ誰カトモナク長
洲奇兵隊浮浪當地潜伏シタリトノ風説出デ家迫ミ
捕吏ノ手ヲ從事ニ及ブ月政等有志者ニ更ニ協議シテ
博多下對馬路對州邸（今月ニ井物産株式會社ノ）

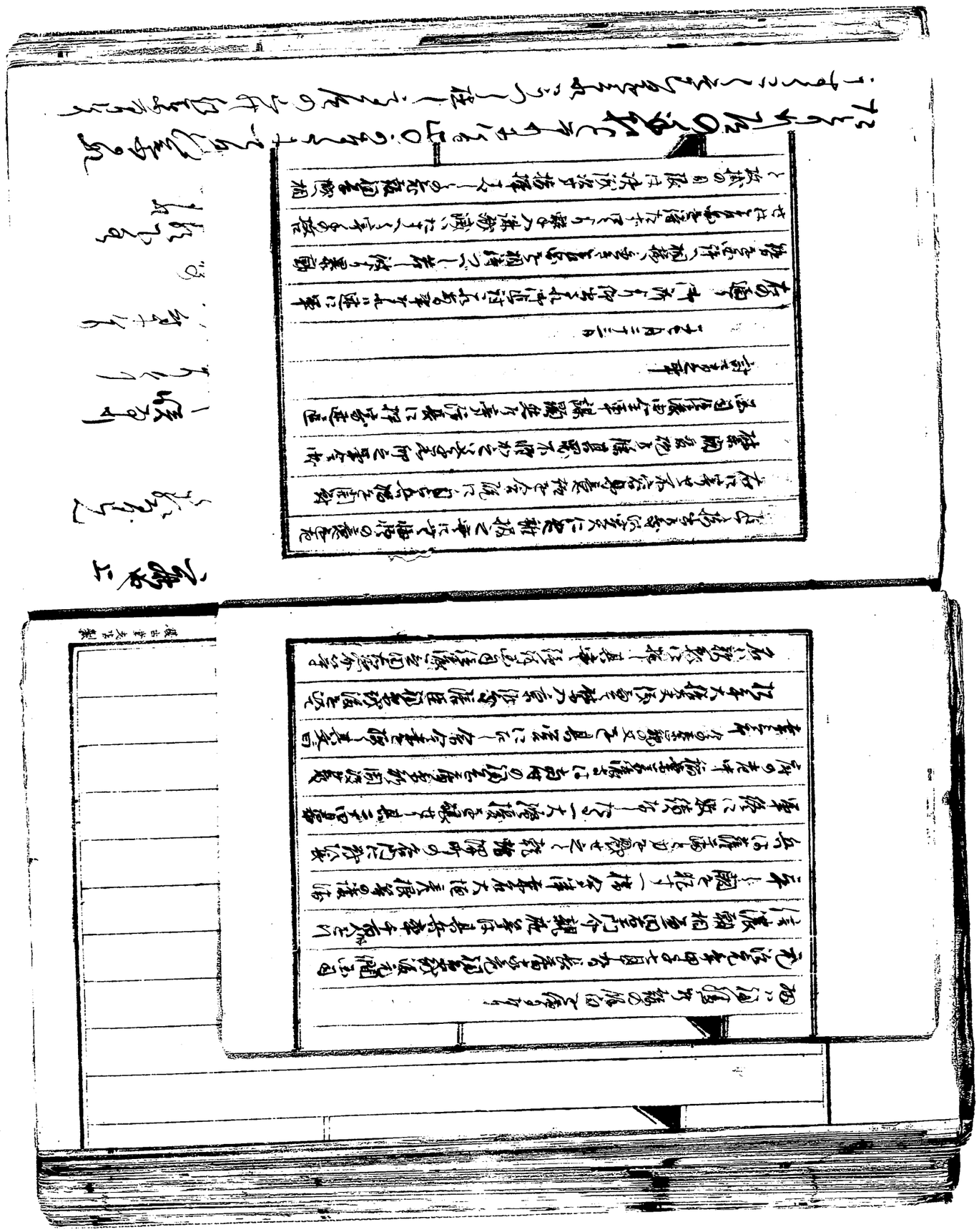
三里ノ其留守役多田荘蔵弘恭ニ謀リシニ拾三日ニ此時
彼ノ周藩周代郎ノ留守役平田大江モ同情ノ情アリシ
来博セシ會シ月形ヨリ高杉來奉ヲ告ケ平田ヲ
田口兩志程能義引キ免南當藩邸ニ連越サン（ヤ）去
ルヤ捕吏等假令十里三十重ニ圍ムトモ我手死ヲ以テ保護
シ若シ切迫場合ニ至ラバ手船ヲ以テ迫ニ到州ノ航セシム東
言ヲ折柄ニ長藩ニ於テ俗輩當事藩主ヲ要シ正義ノ
徒ヲ誅鋤スルニアラス彼犯闕ノ罪ヲ三家老四三謀（左
久間左兵衛猶蹟彌八郎清義）ニ歸シ屠腹ヲ命シ志
道安房其首級ヲ獲テ尾張総督ヲ藝洲草津

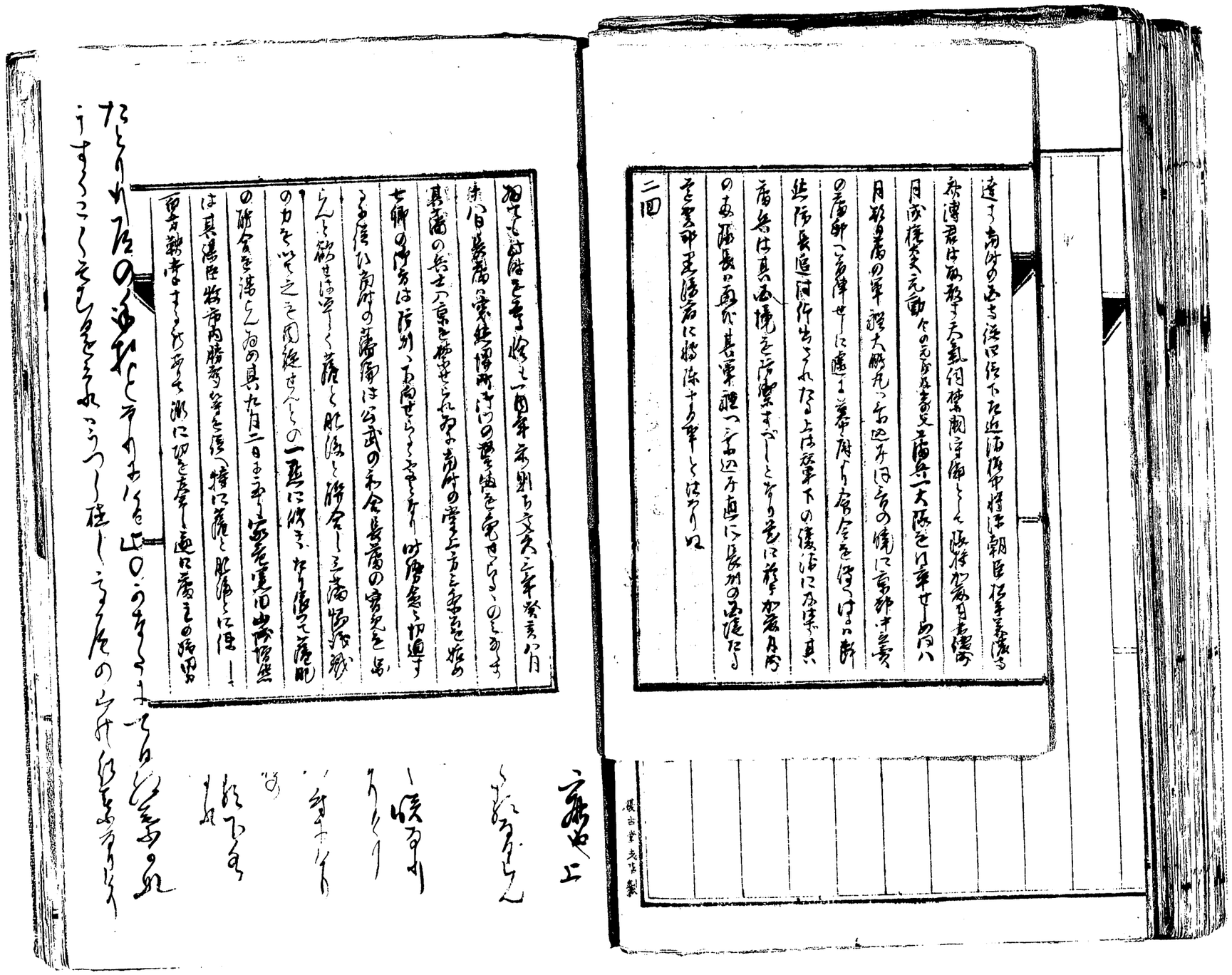




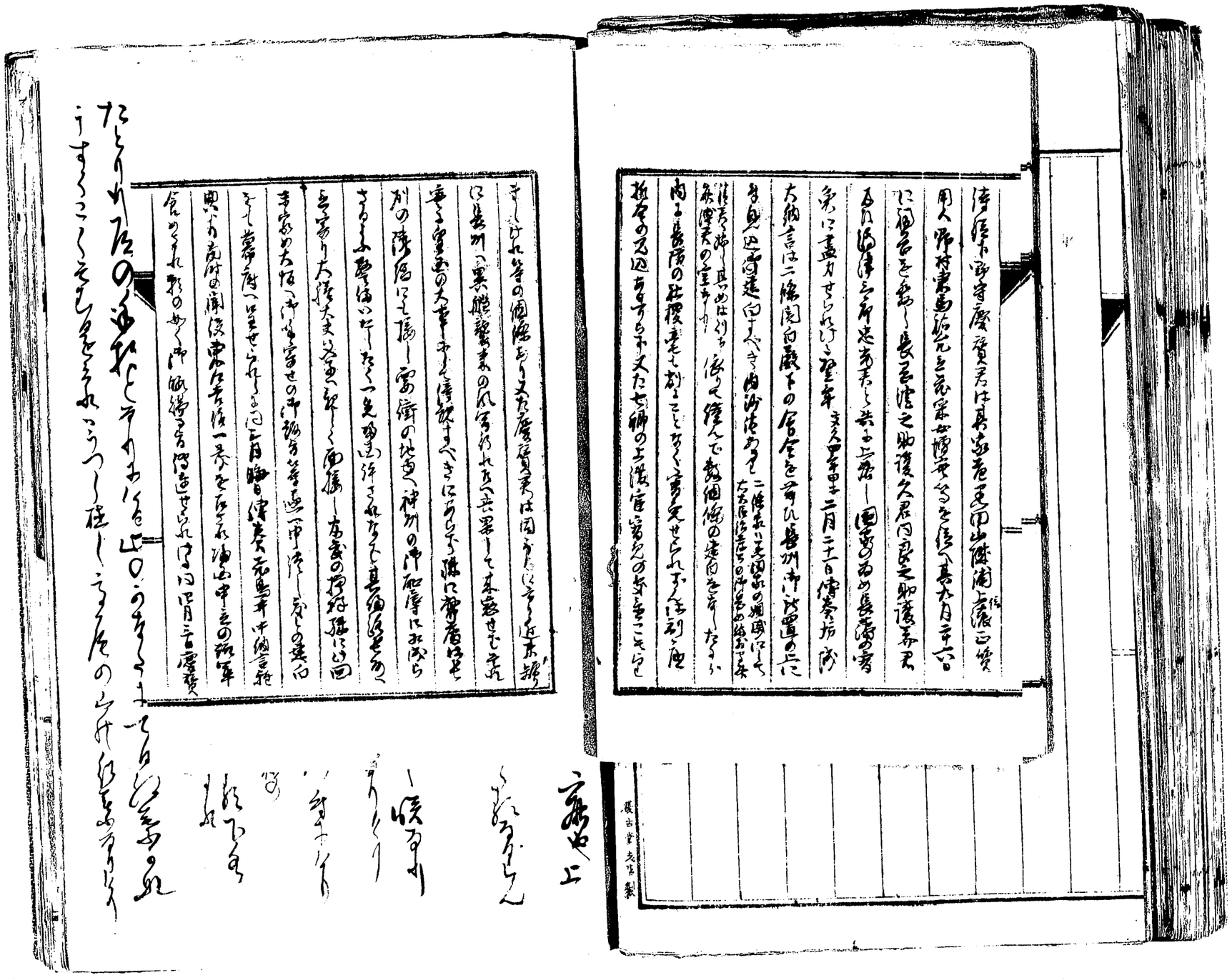
十里木林　青丘漢文墓

高麗の使者を例したる事は前きに御覧の若は御覧きく
けりと雖も彼の國王の国書を長題し漢文は
特筆に感ずるあり心懷ゝゝ寂られぞ四海を廣
き志を天下に長文を振性と
して公儀に帝り諸藩との和合五郎の逆道の
事を論ぜんと理減に論せんとす漢文之を情外四番の数
帳したる文書と文化の紀德を見れば彼の中部を怪から
す敬て之れを蒐集し因縁ある志者の参考に供せんと





樓山堂老舗製



[illegible]

[illegible] 天正頃歟神[illegible]五色神法度一紙を
[illegible] 神[illegible]に[illegible]法度[illegible]神[illegible]宣旨より[illegible]
[illegible]の文に曰

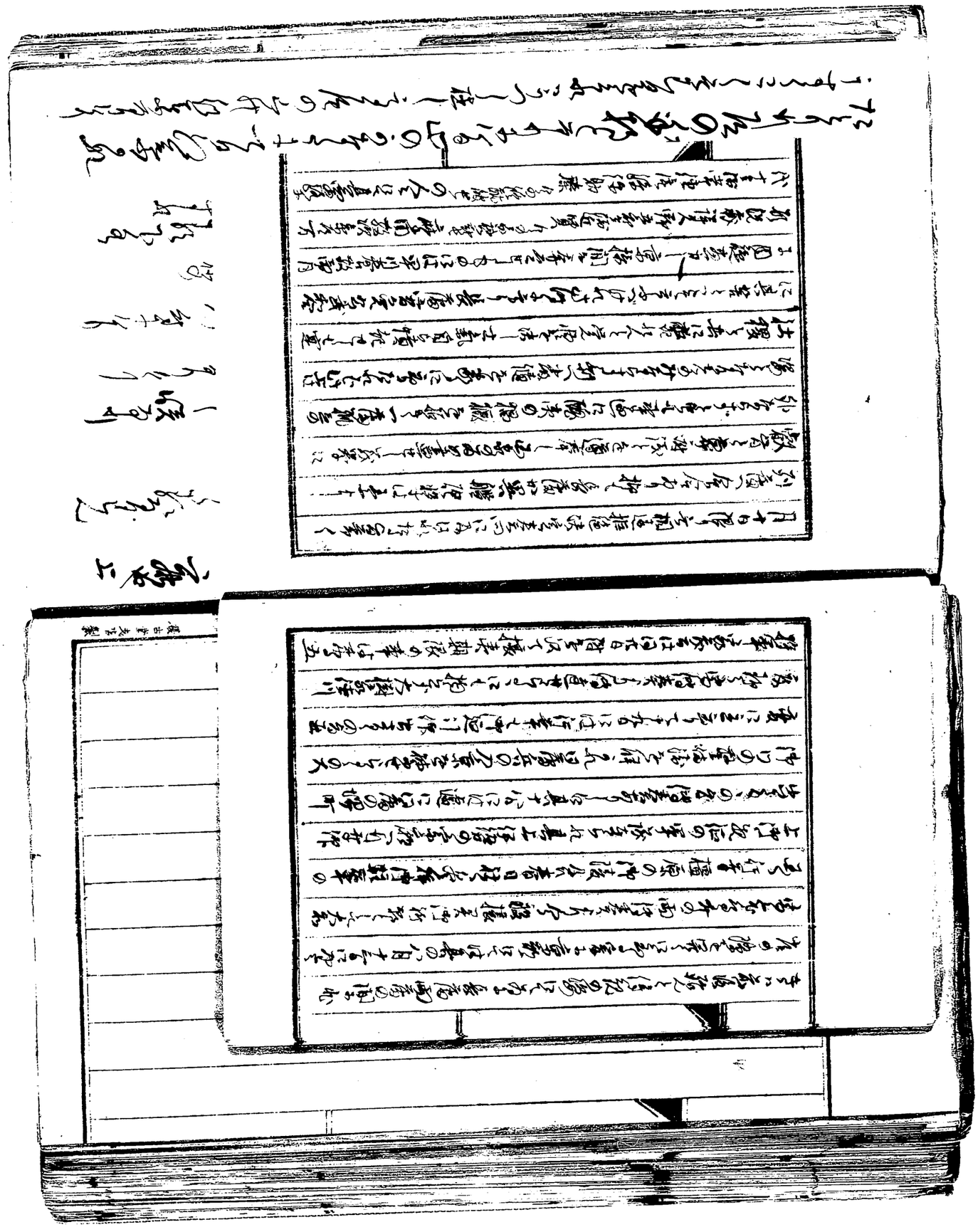
[illegible] 平右衛守

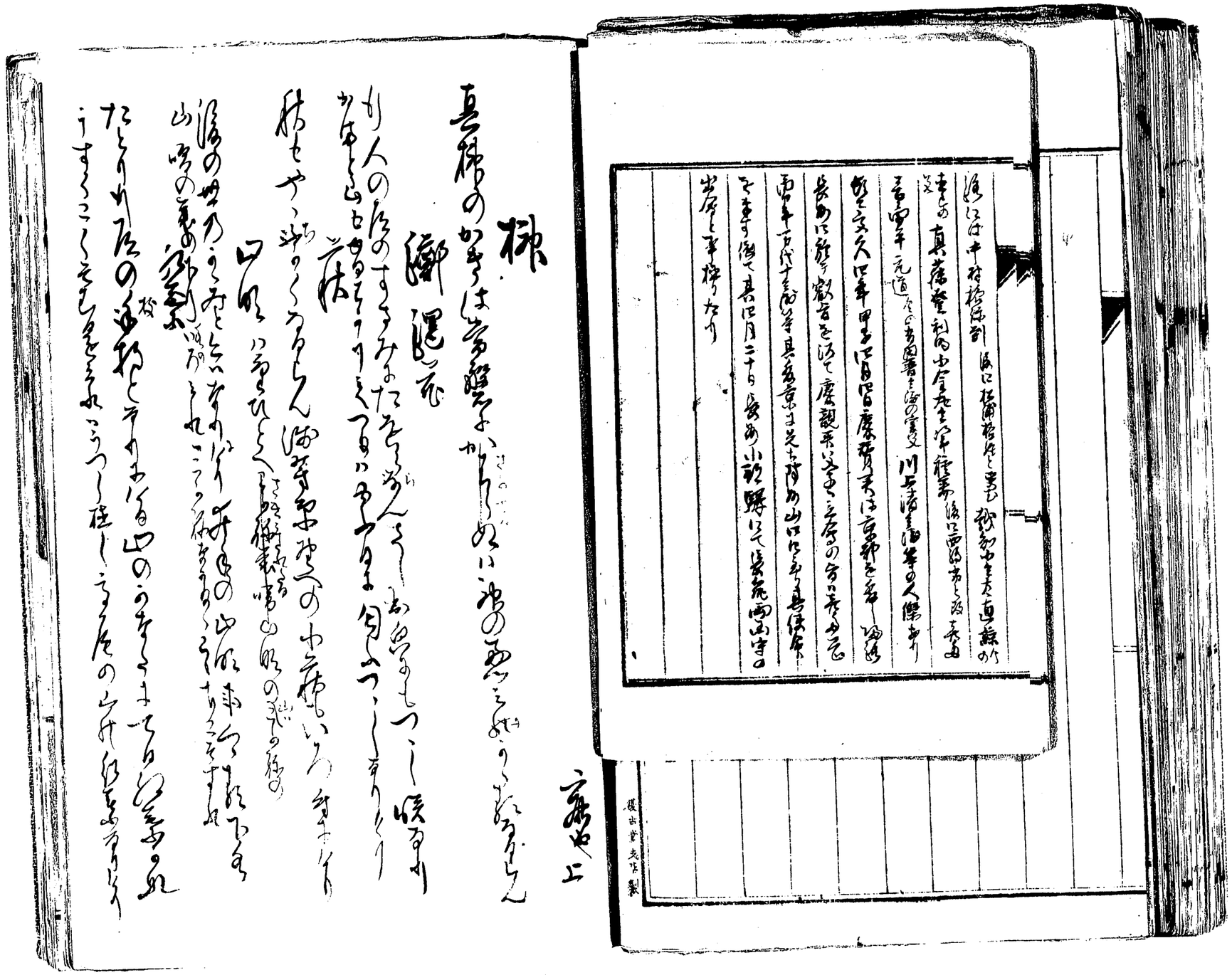
[illegible]州[illegible]家悔[illegible]之[illegible]
[illegible]

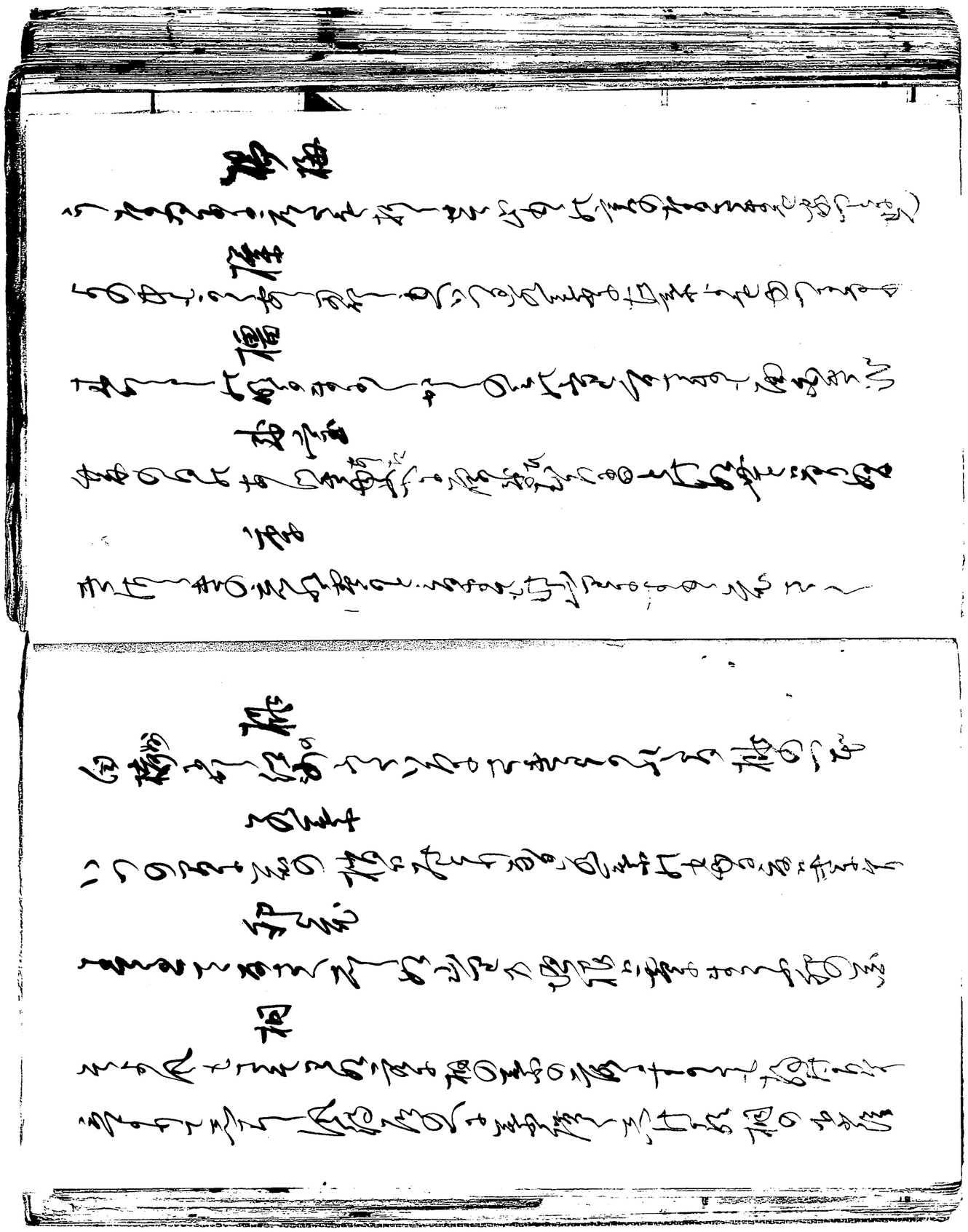
[illegible]月[illegible]

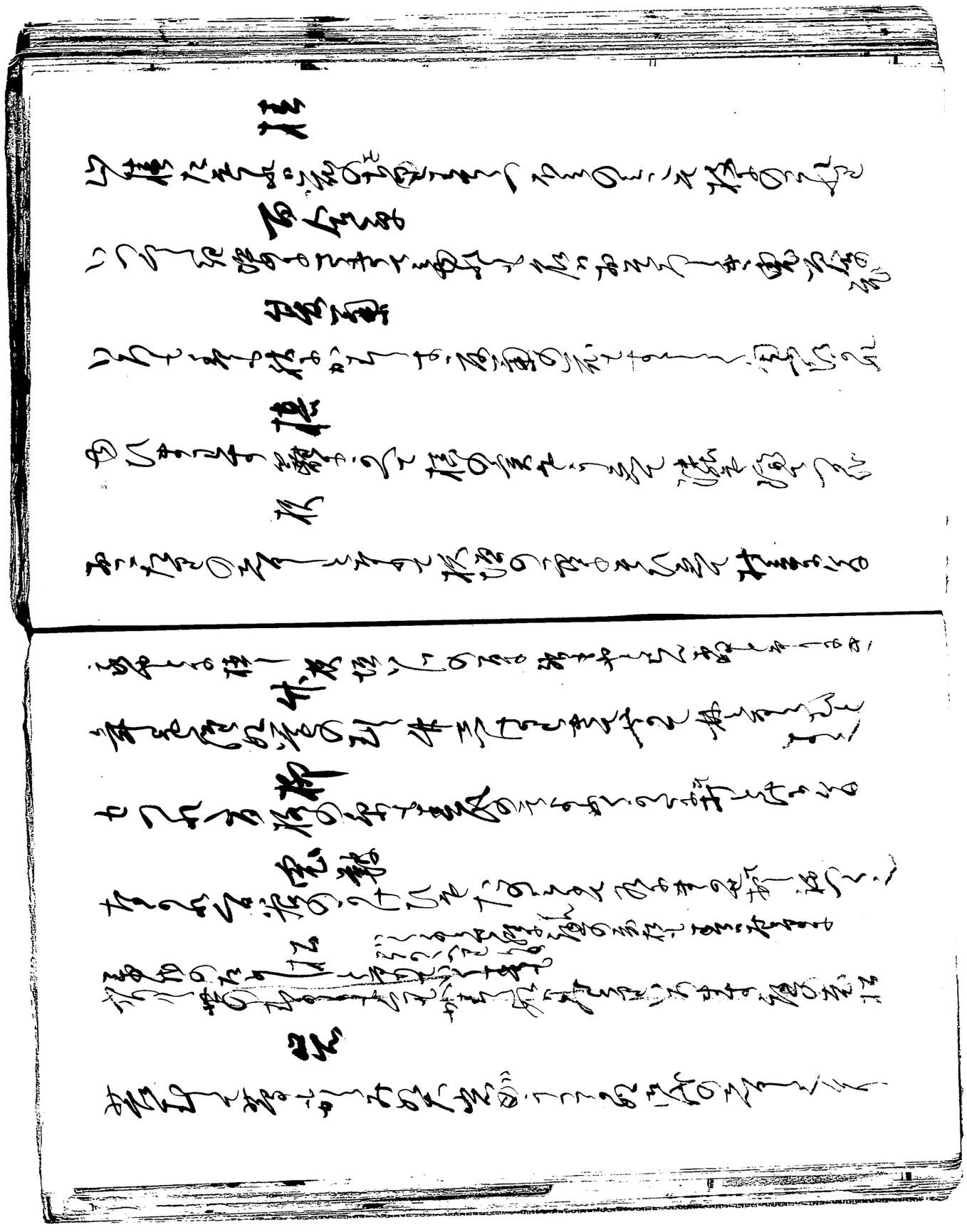
[illegible]

[illegible]





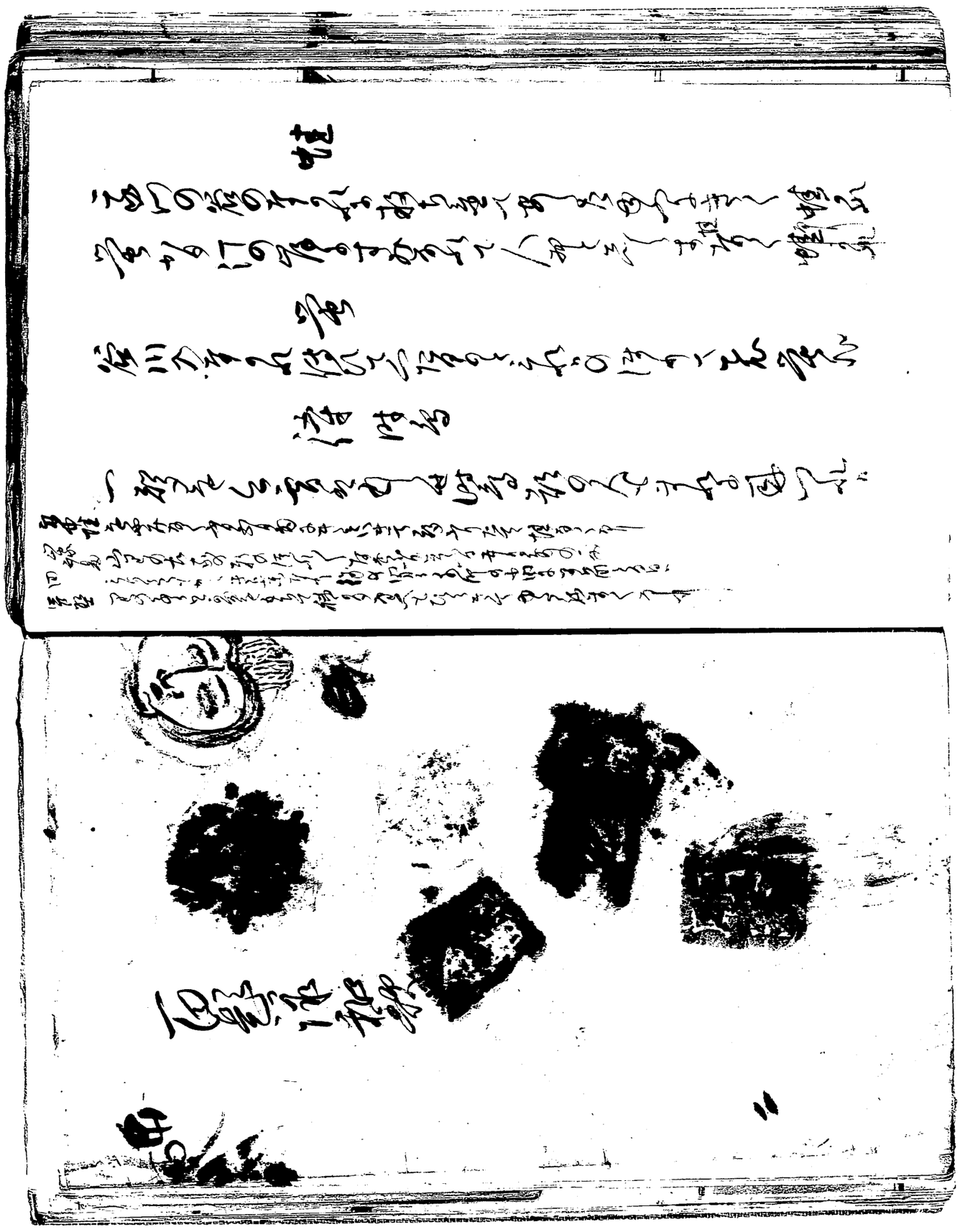


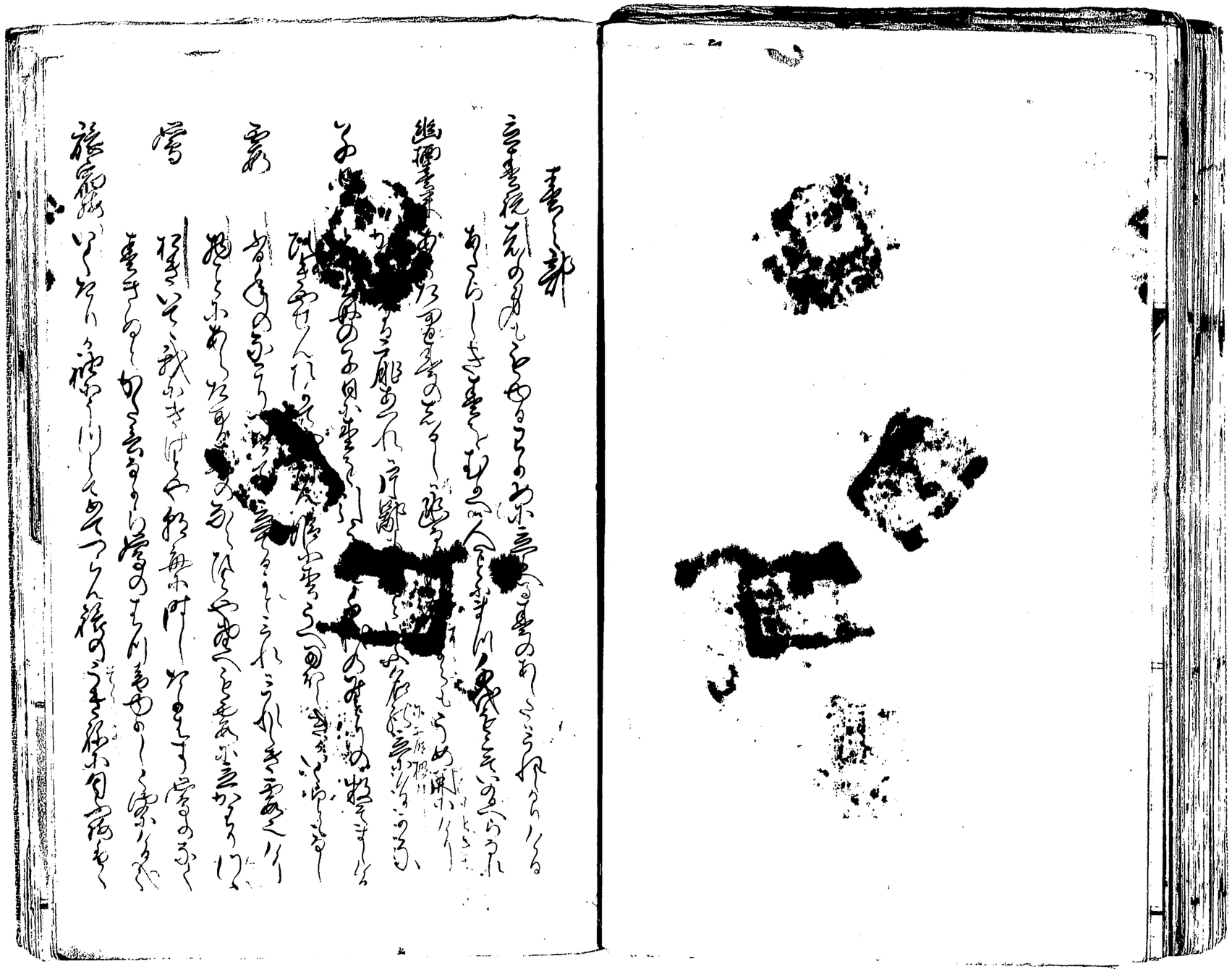


[illegible]

[illegible]

[illegible]





いろは

[illegible]

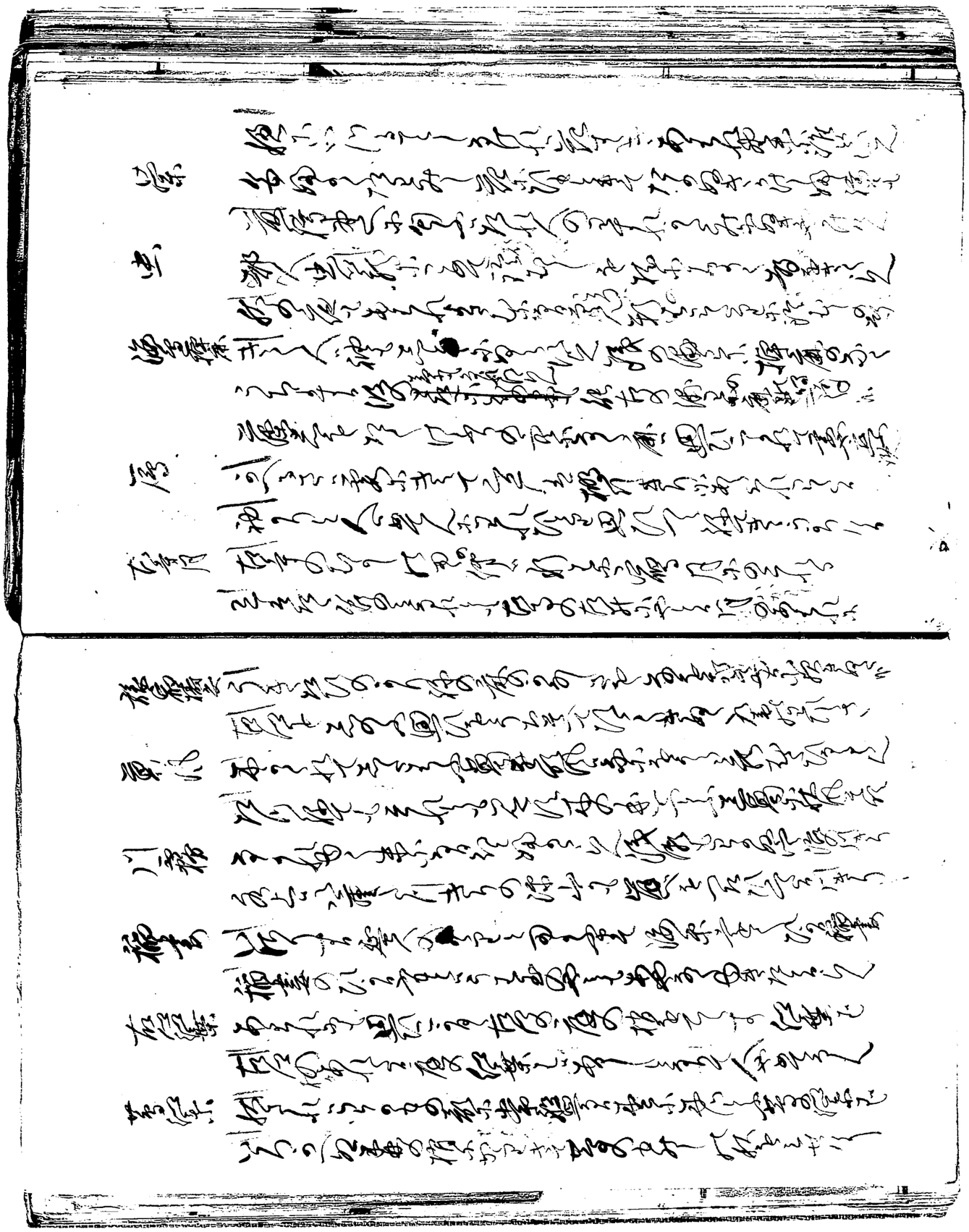
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



秋ノ月

冬ノ部

霰

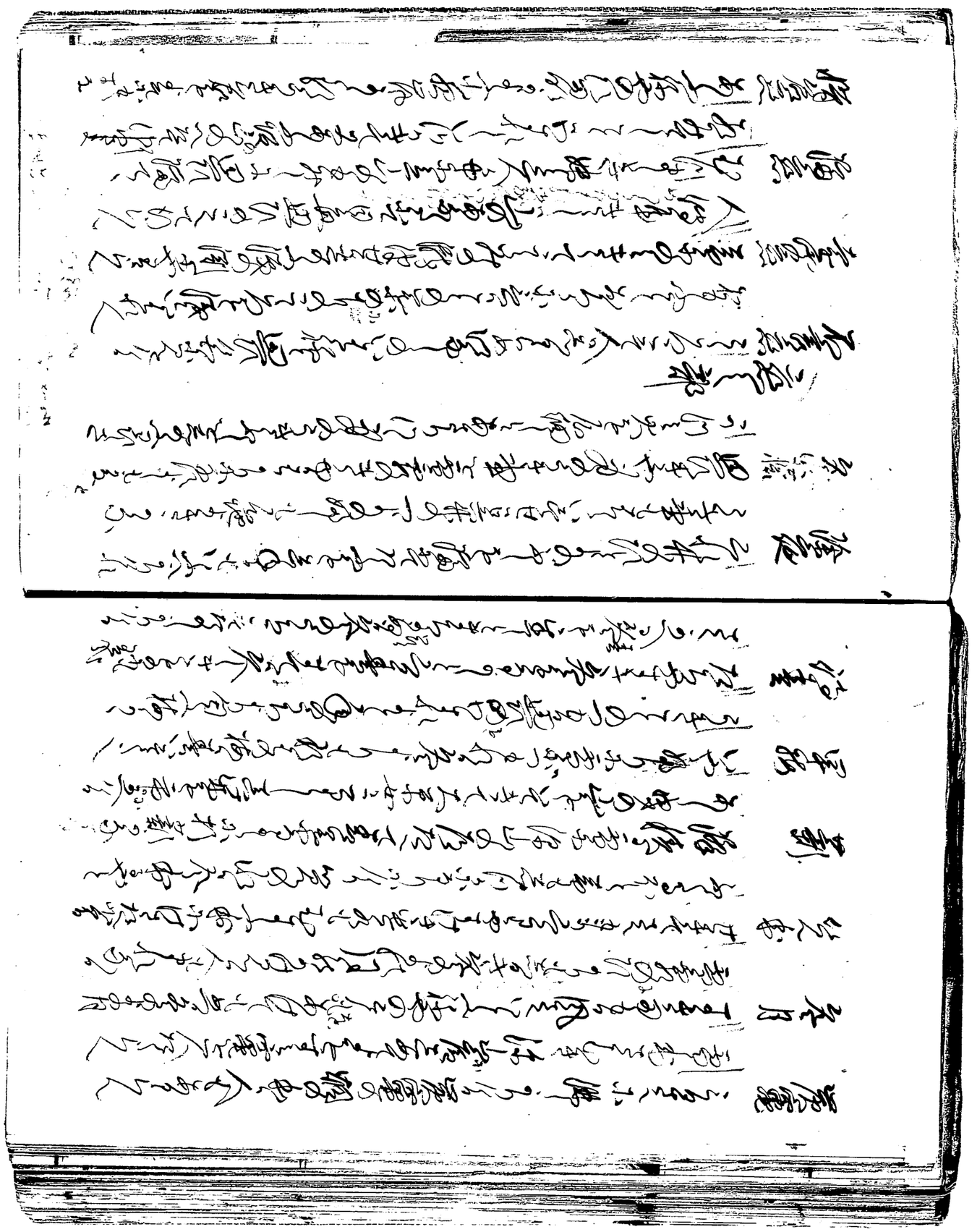
[illegible]

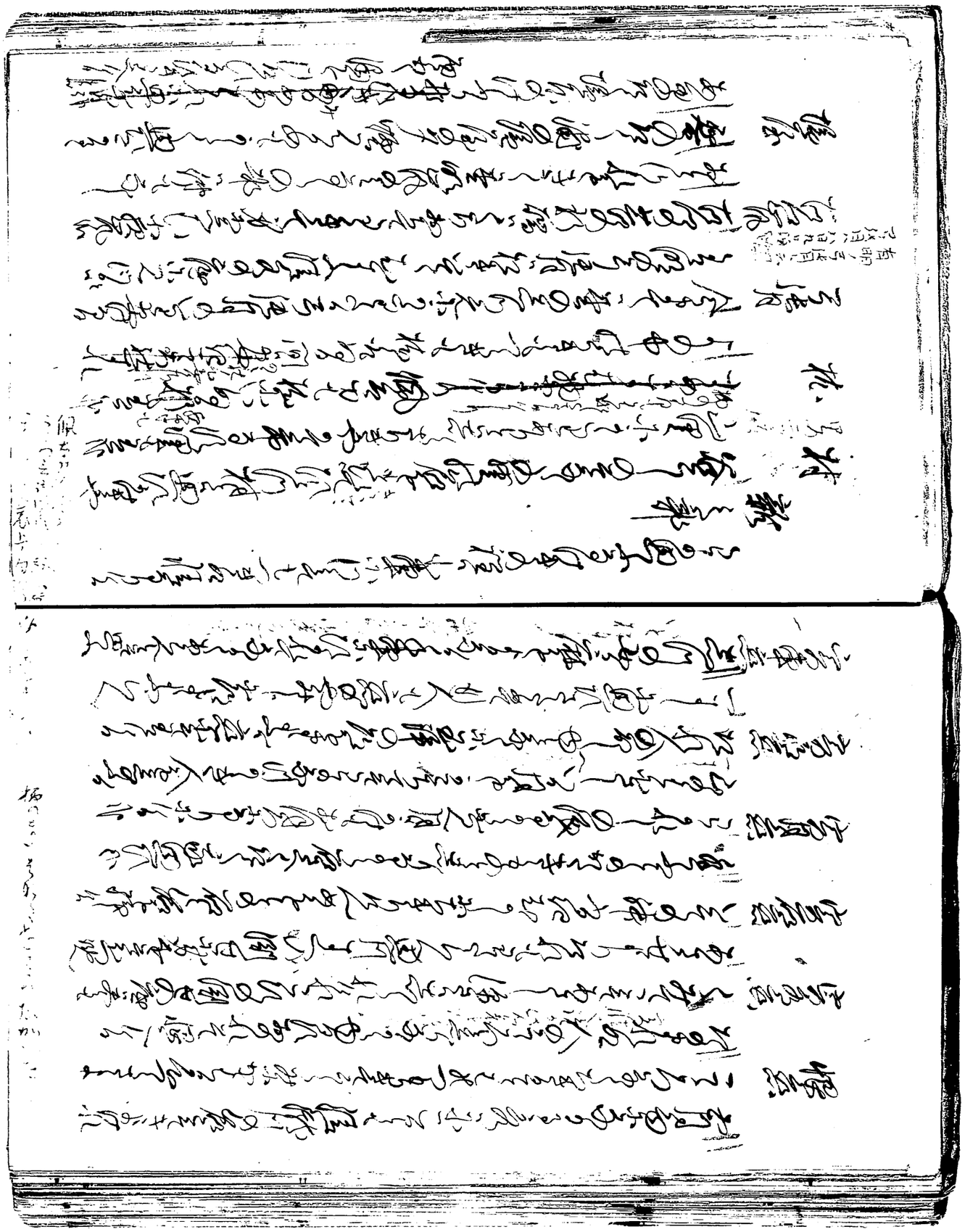
時代

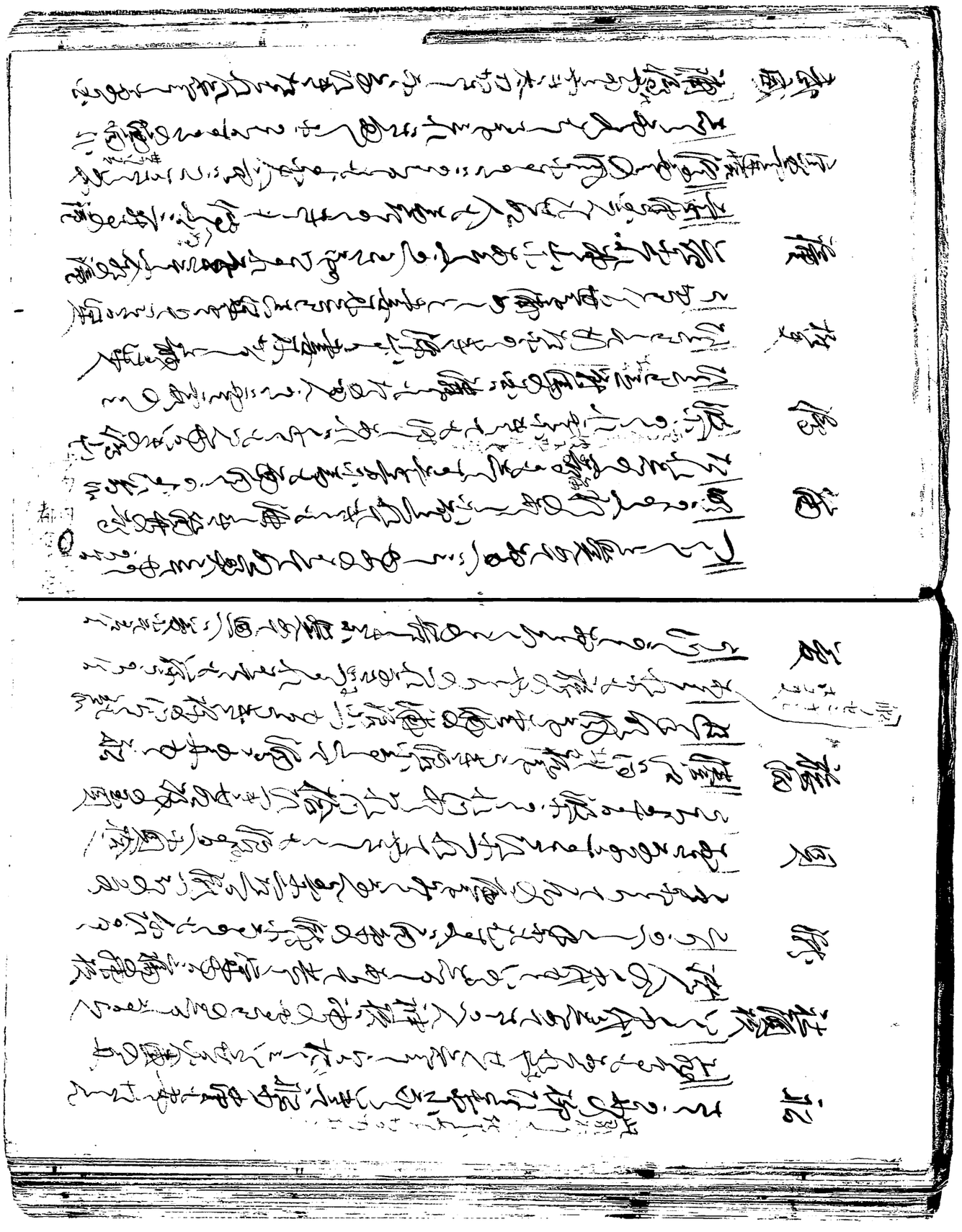
[illegible]

煙火

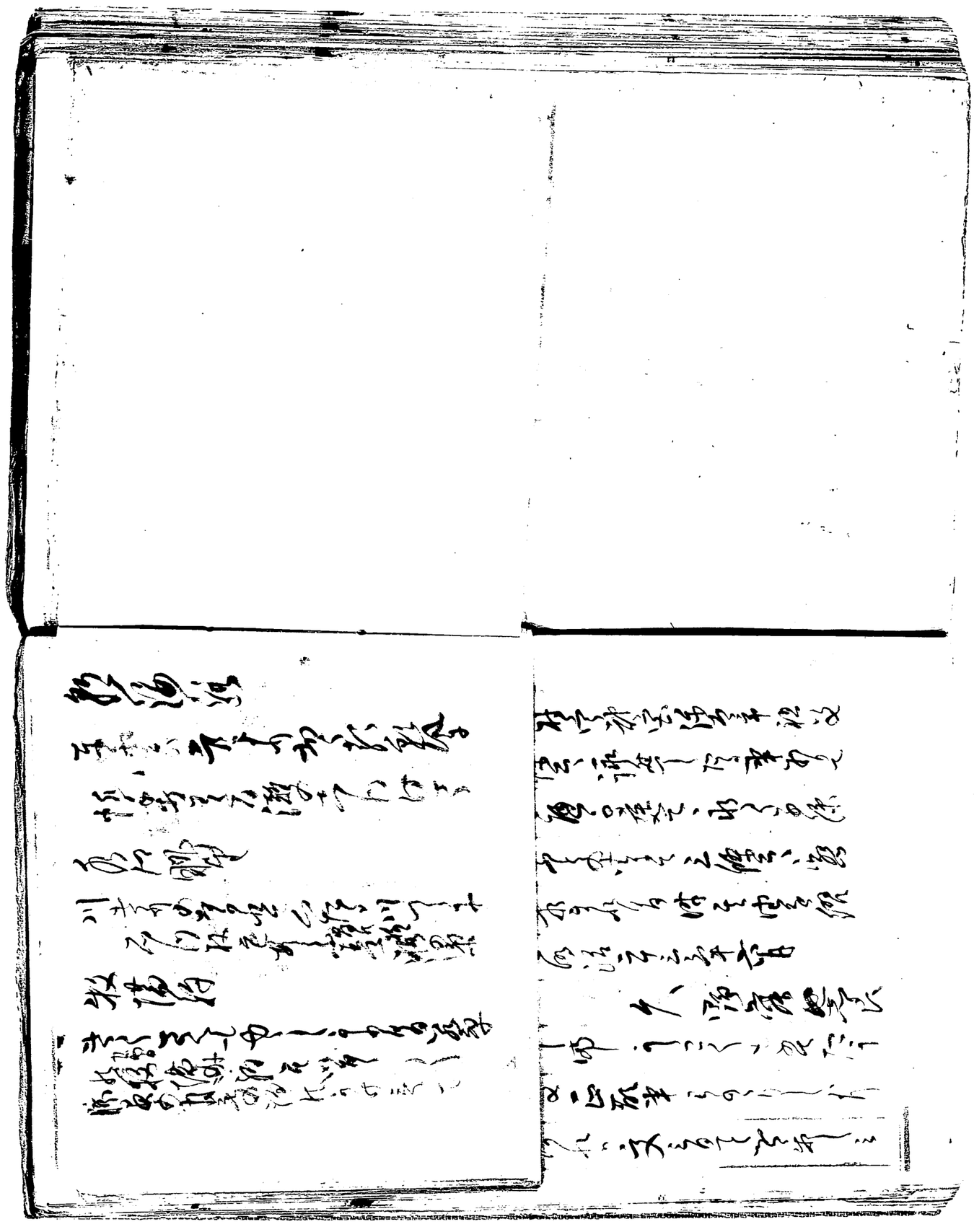
食

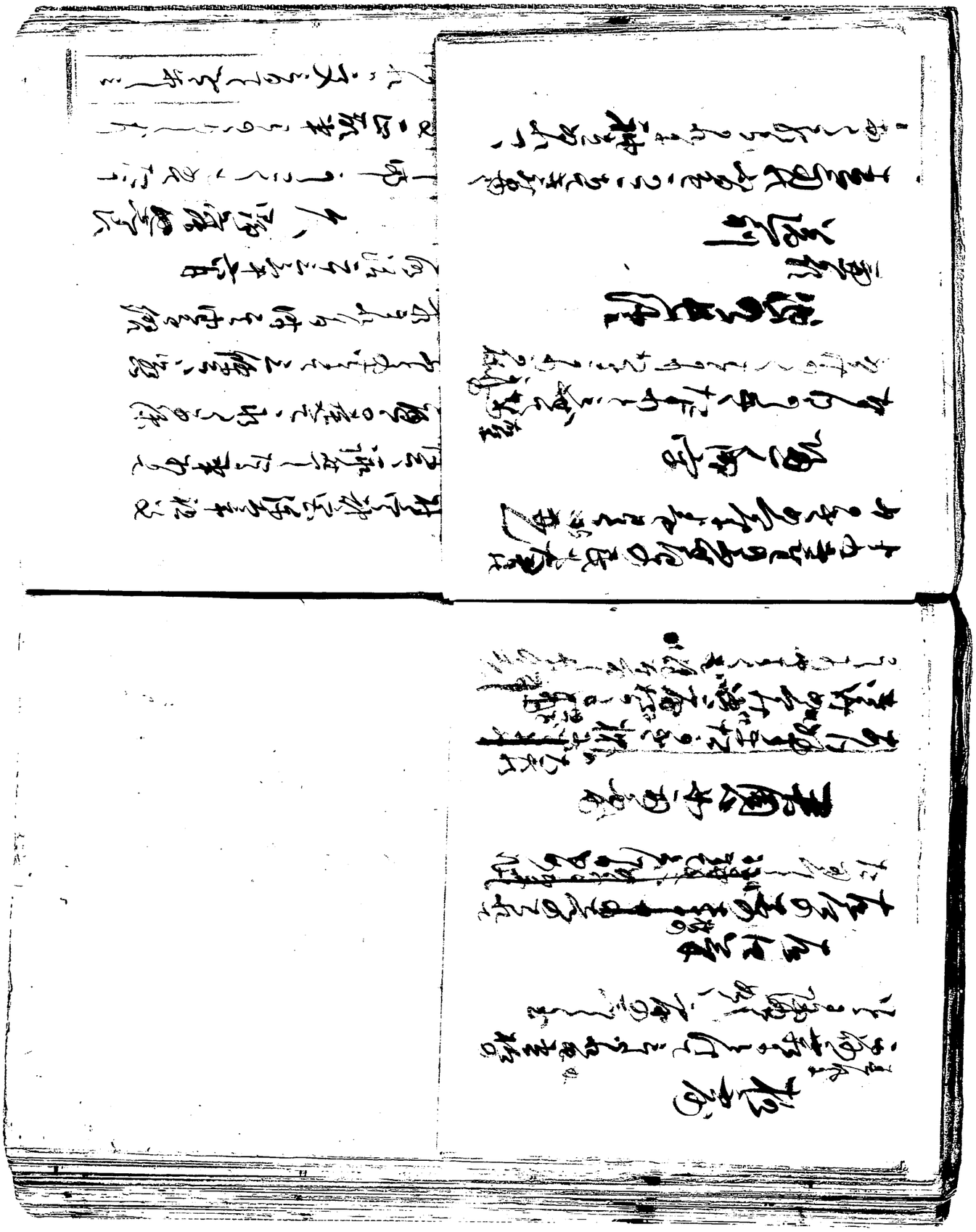


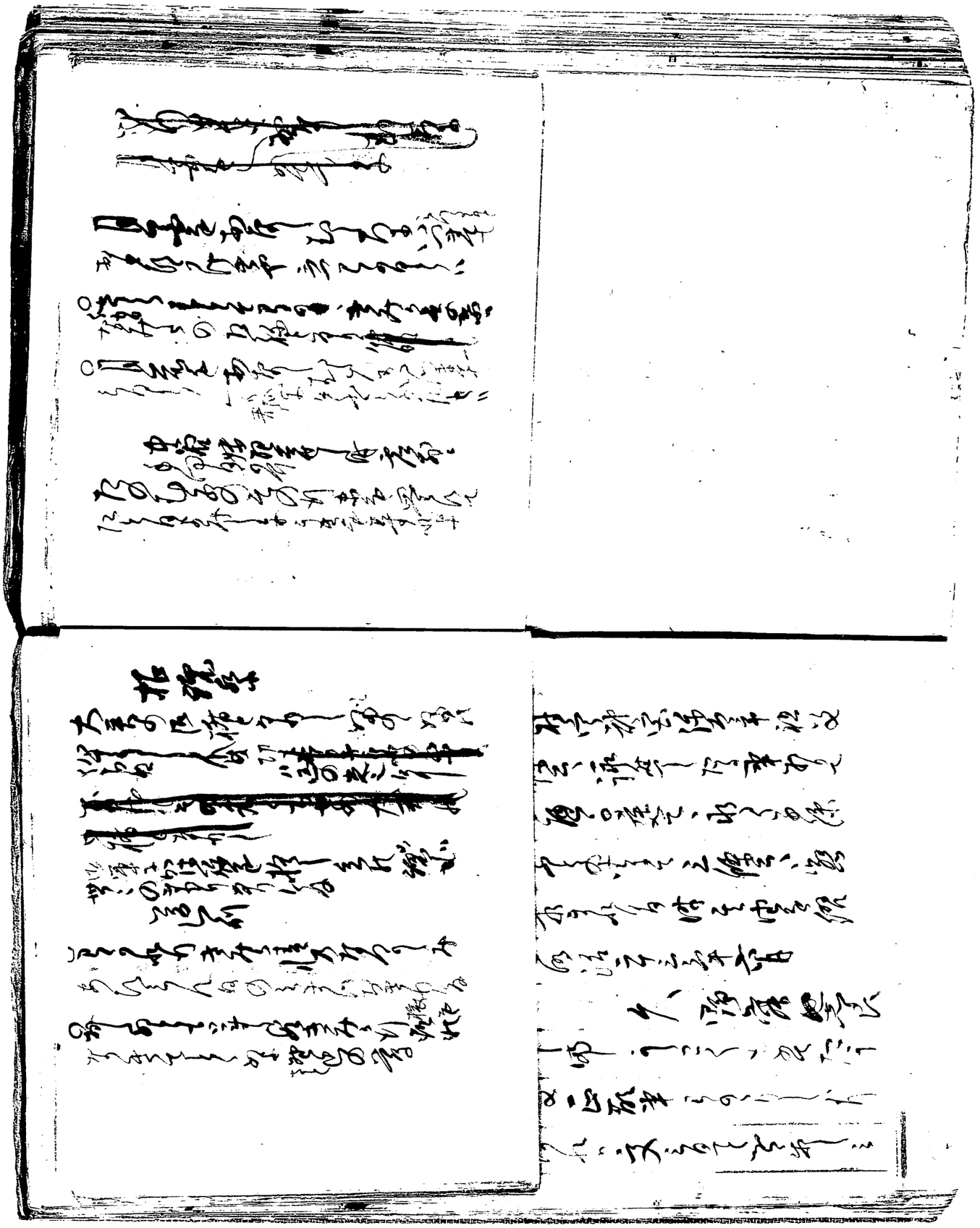


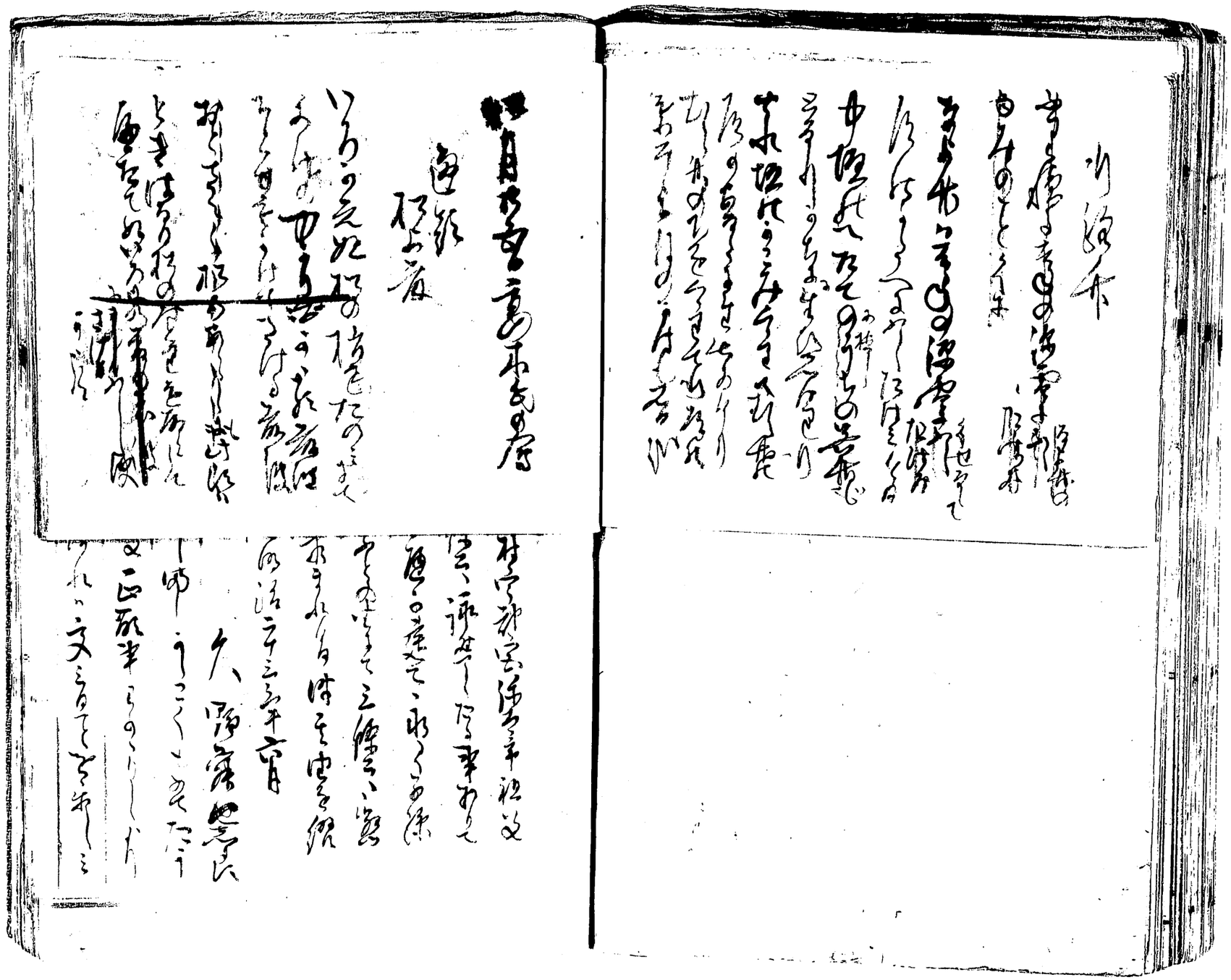


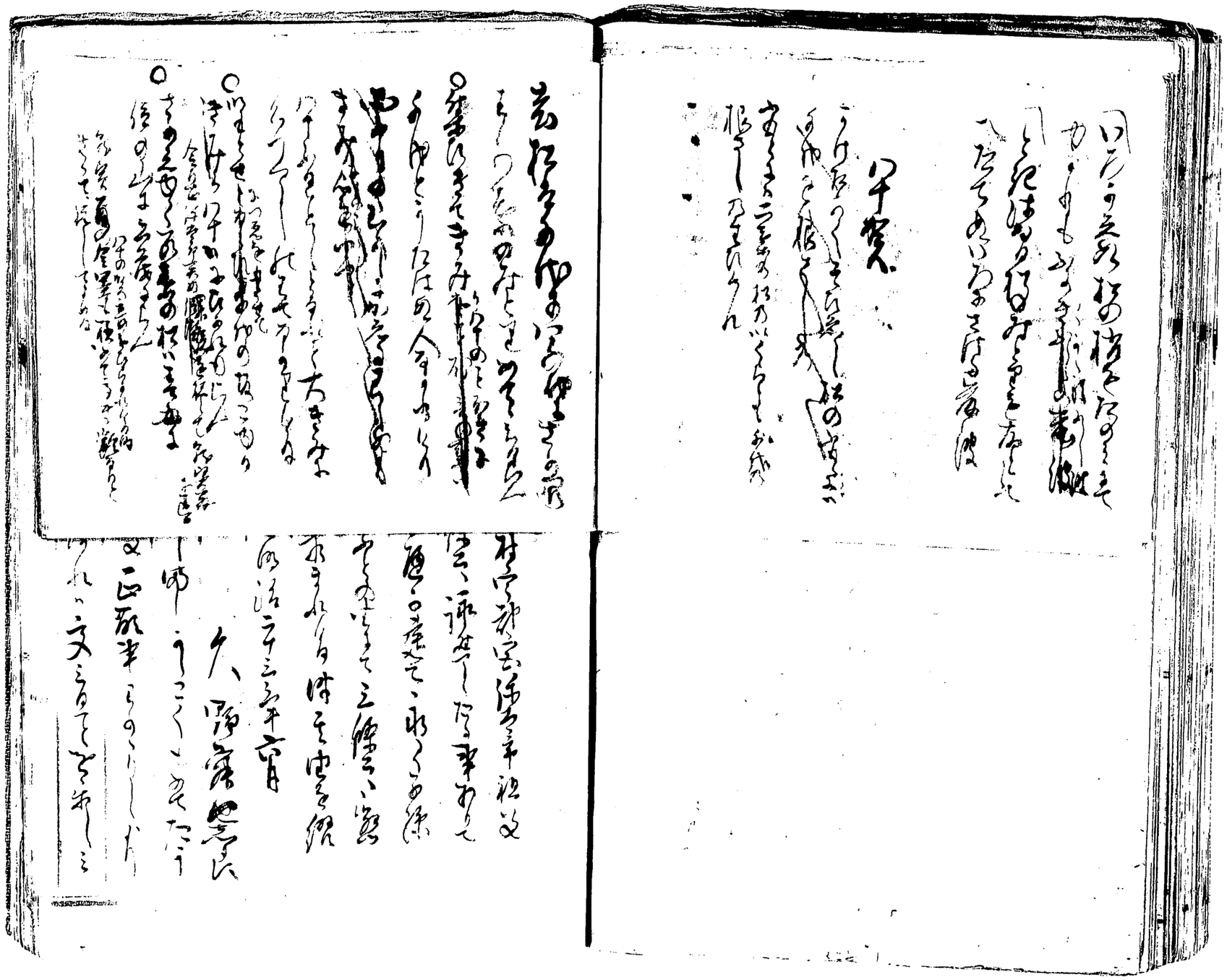
詠草
草稿

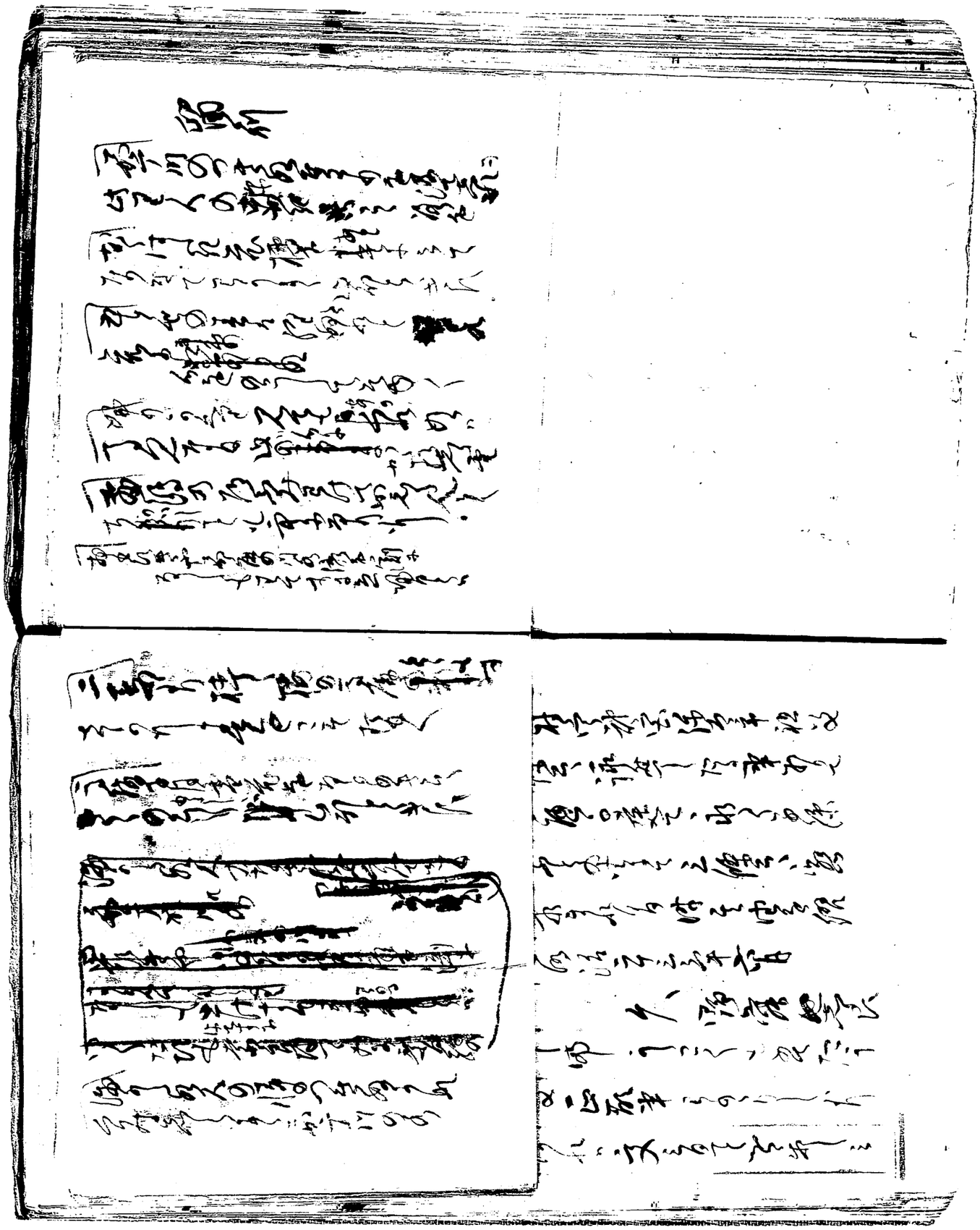


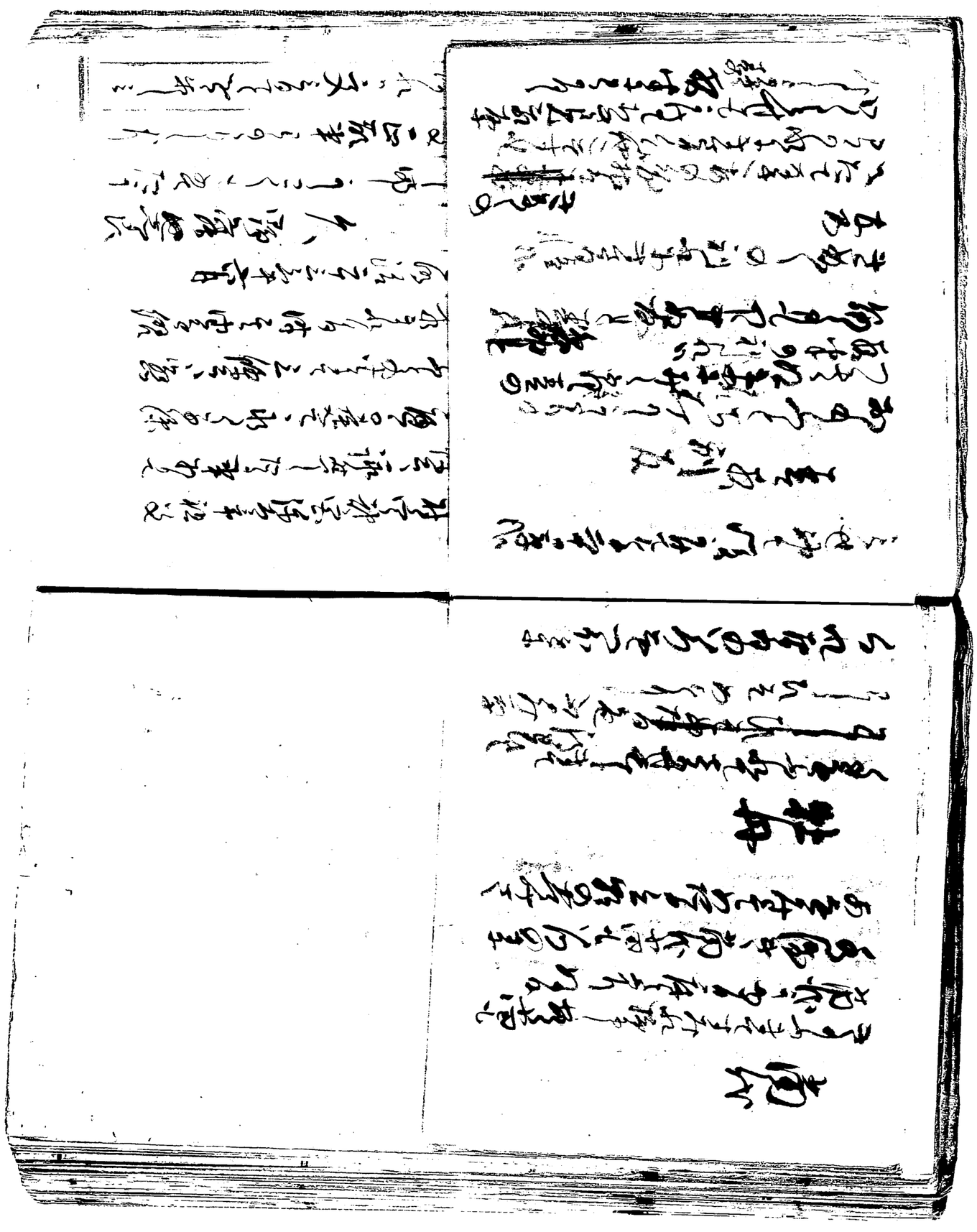


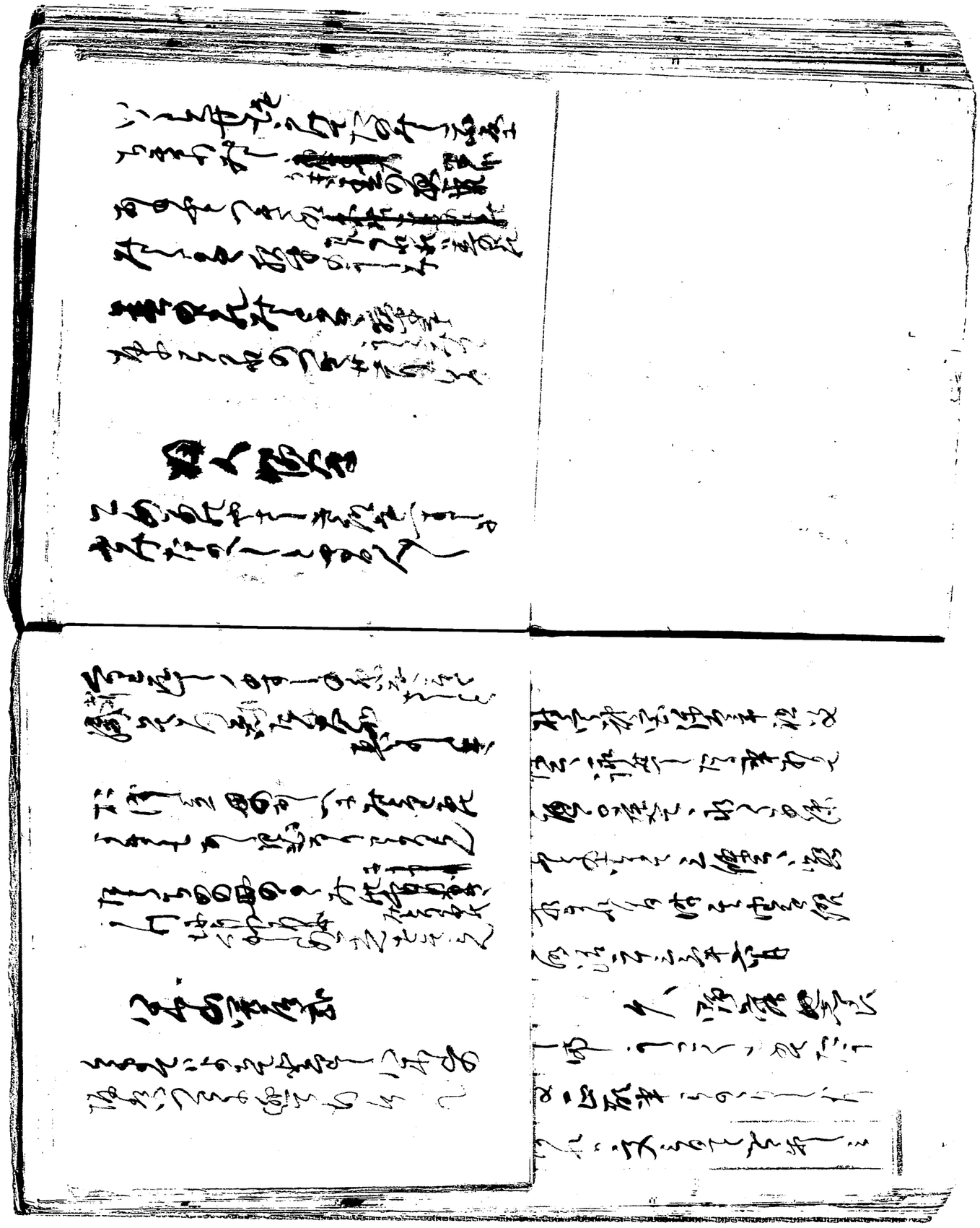


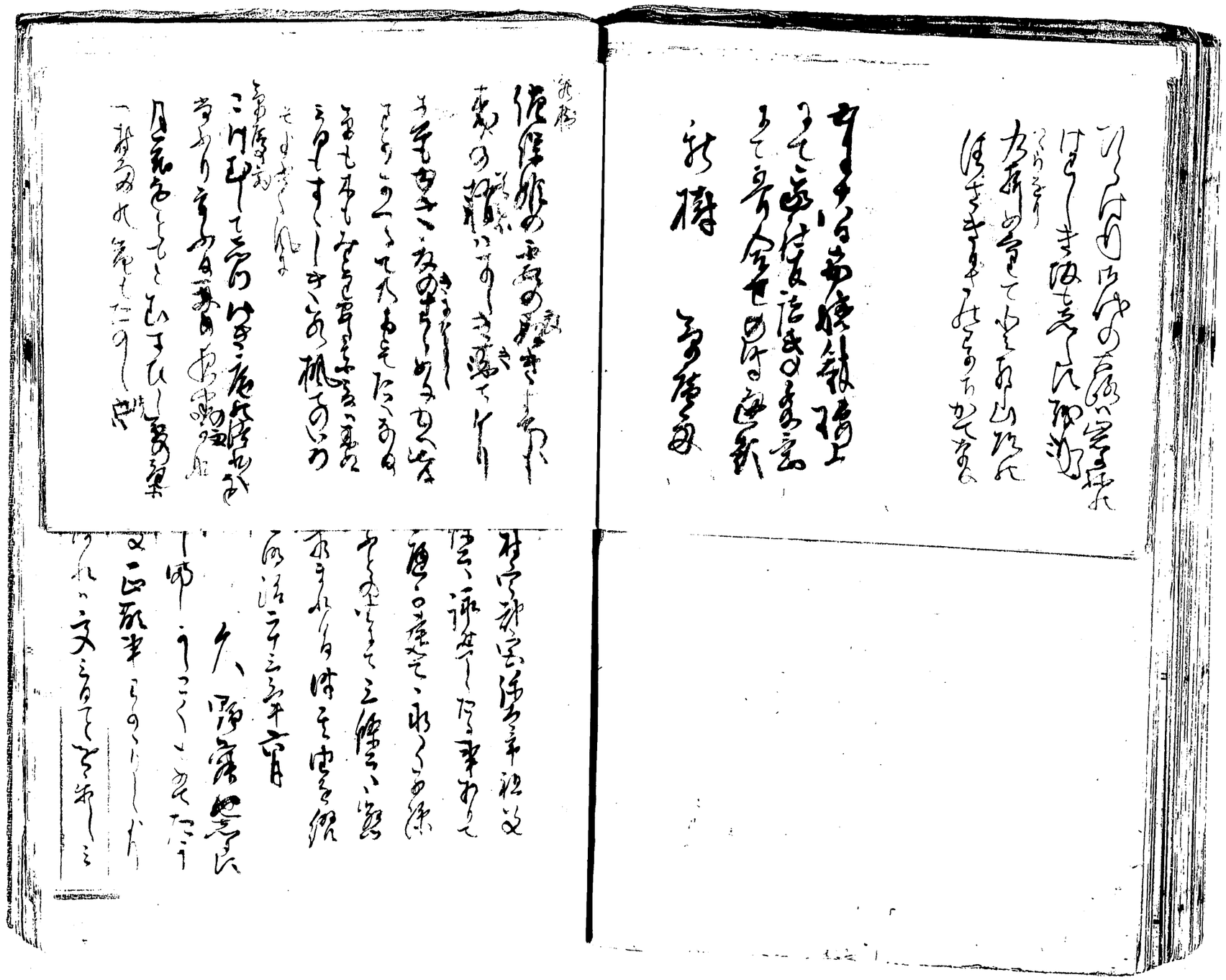


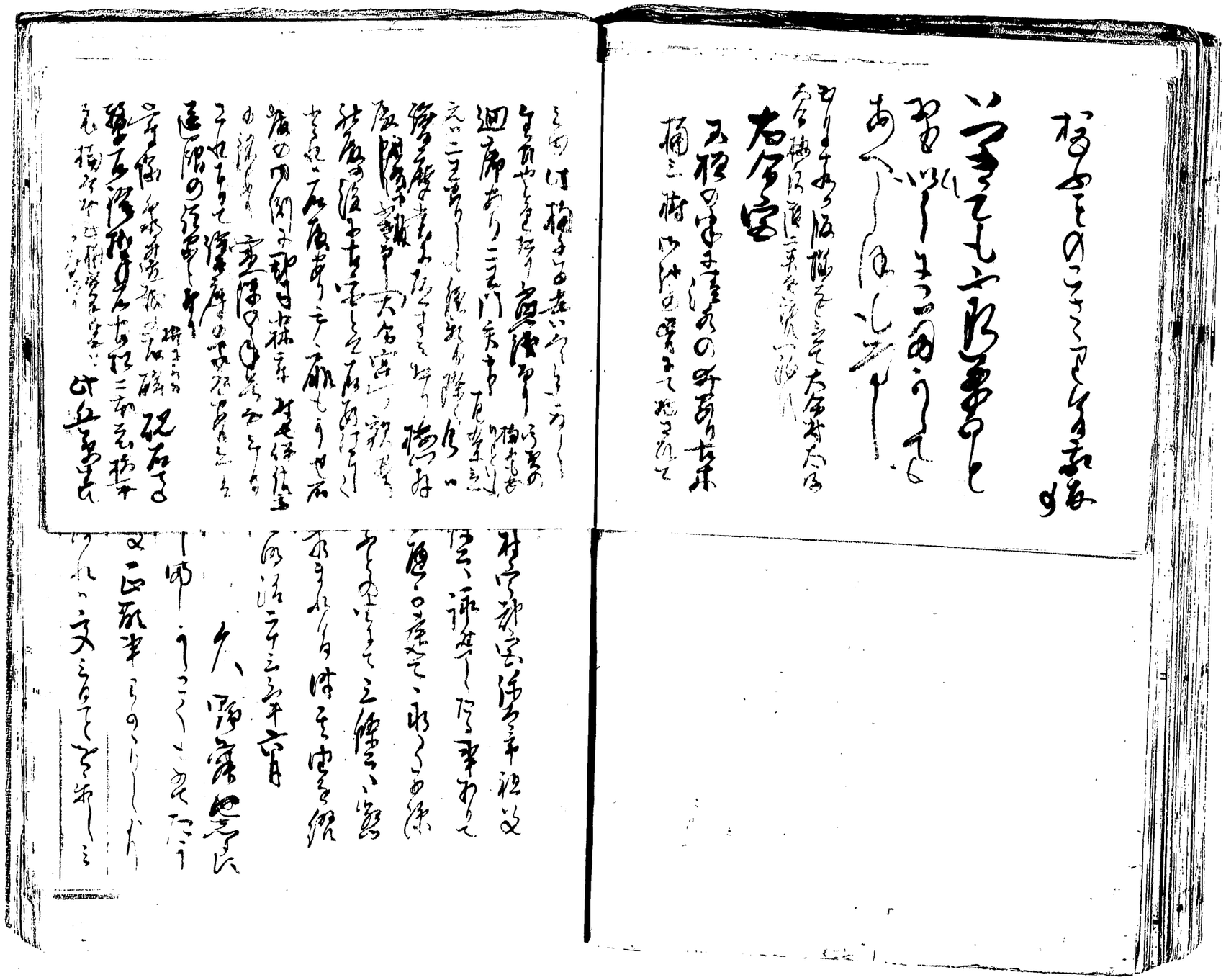


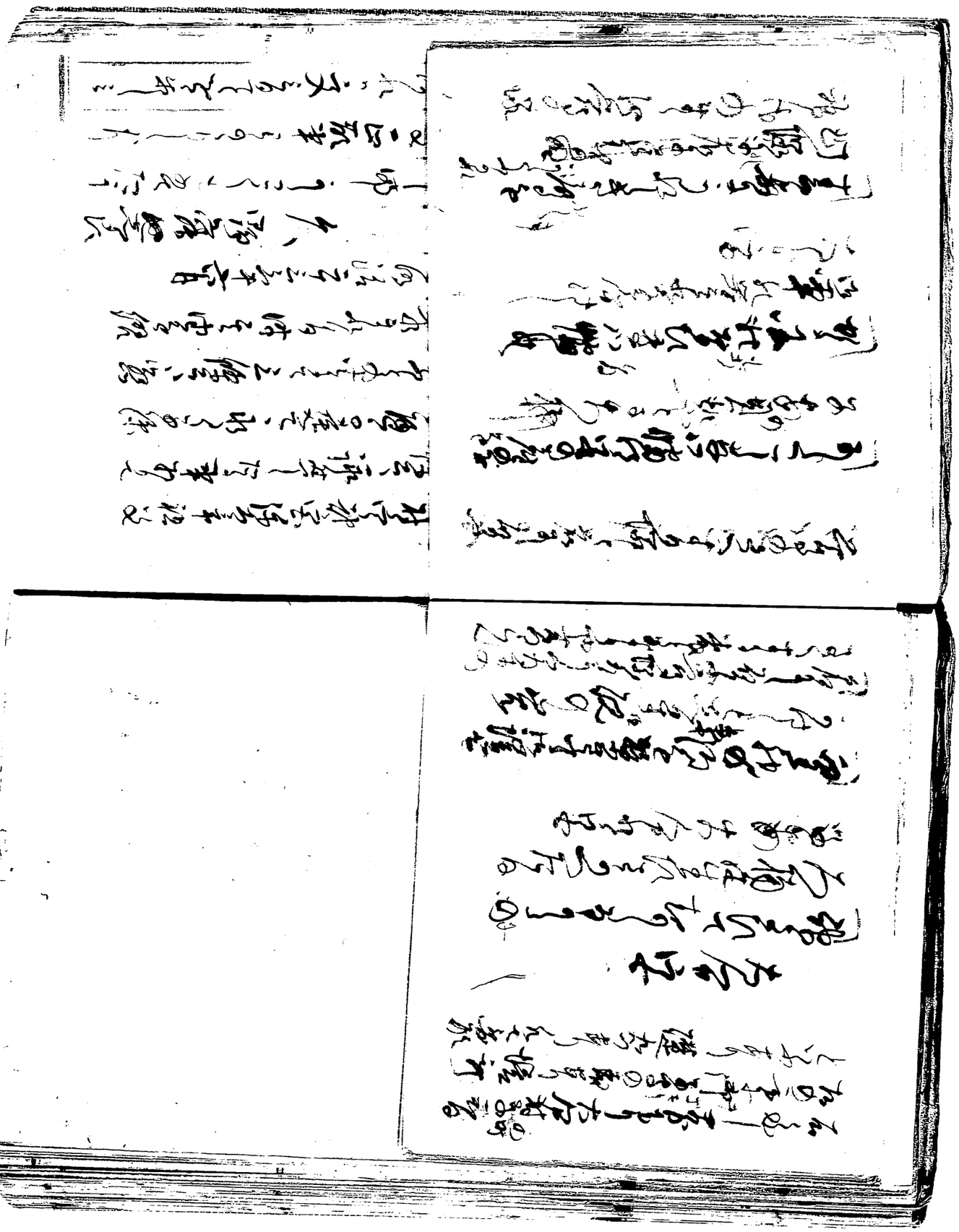


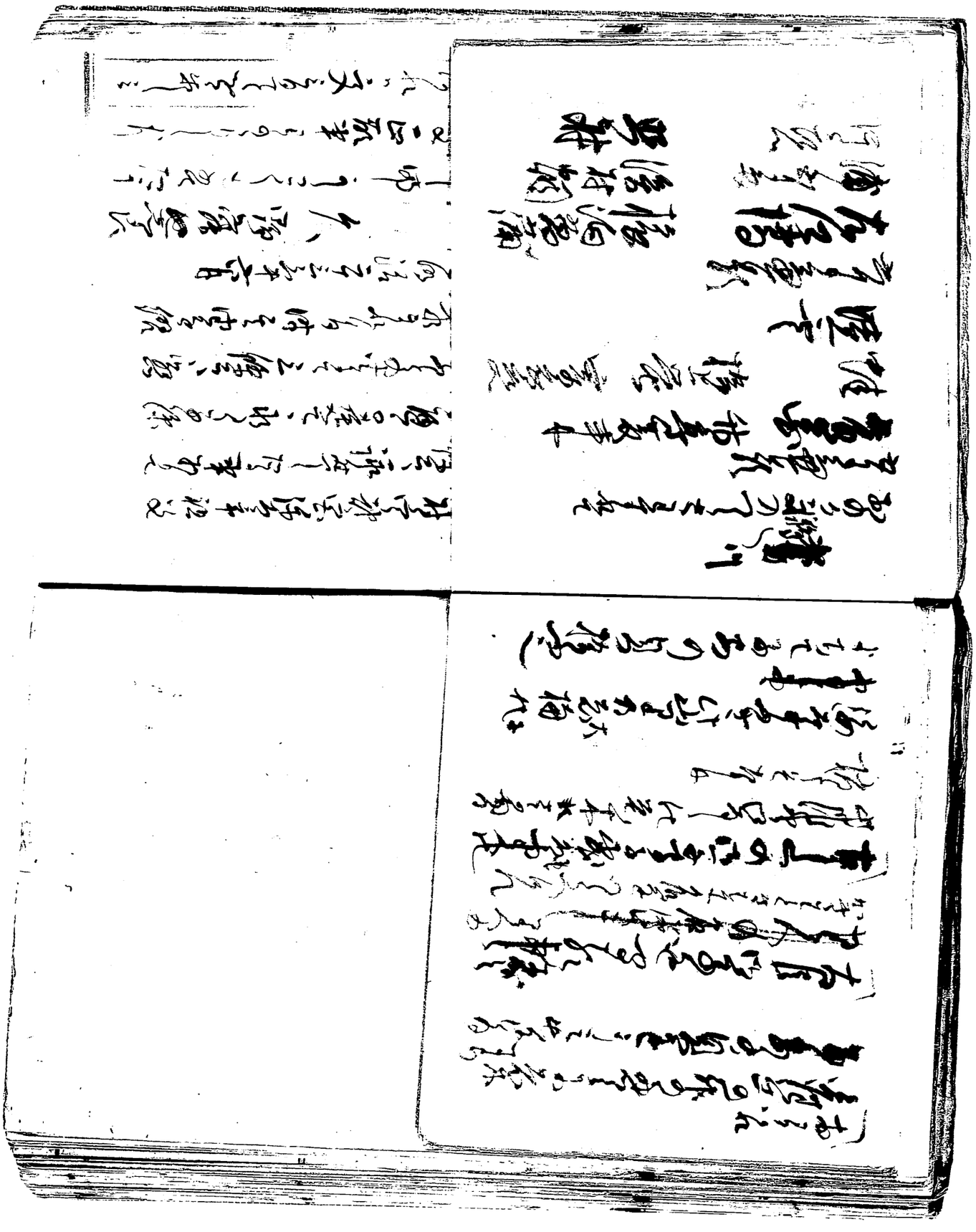


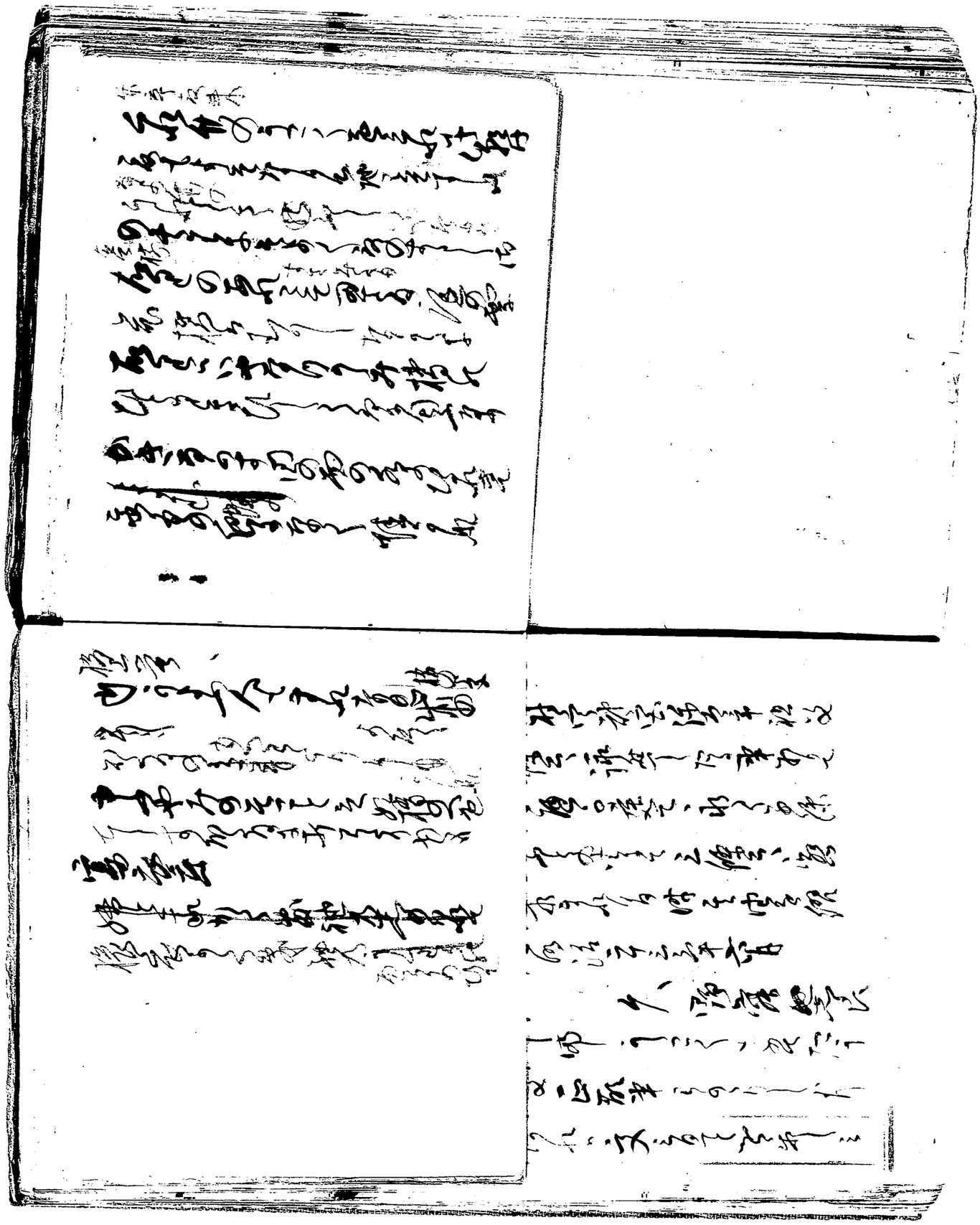


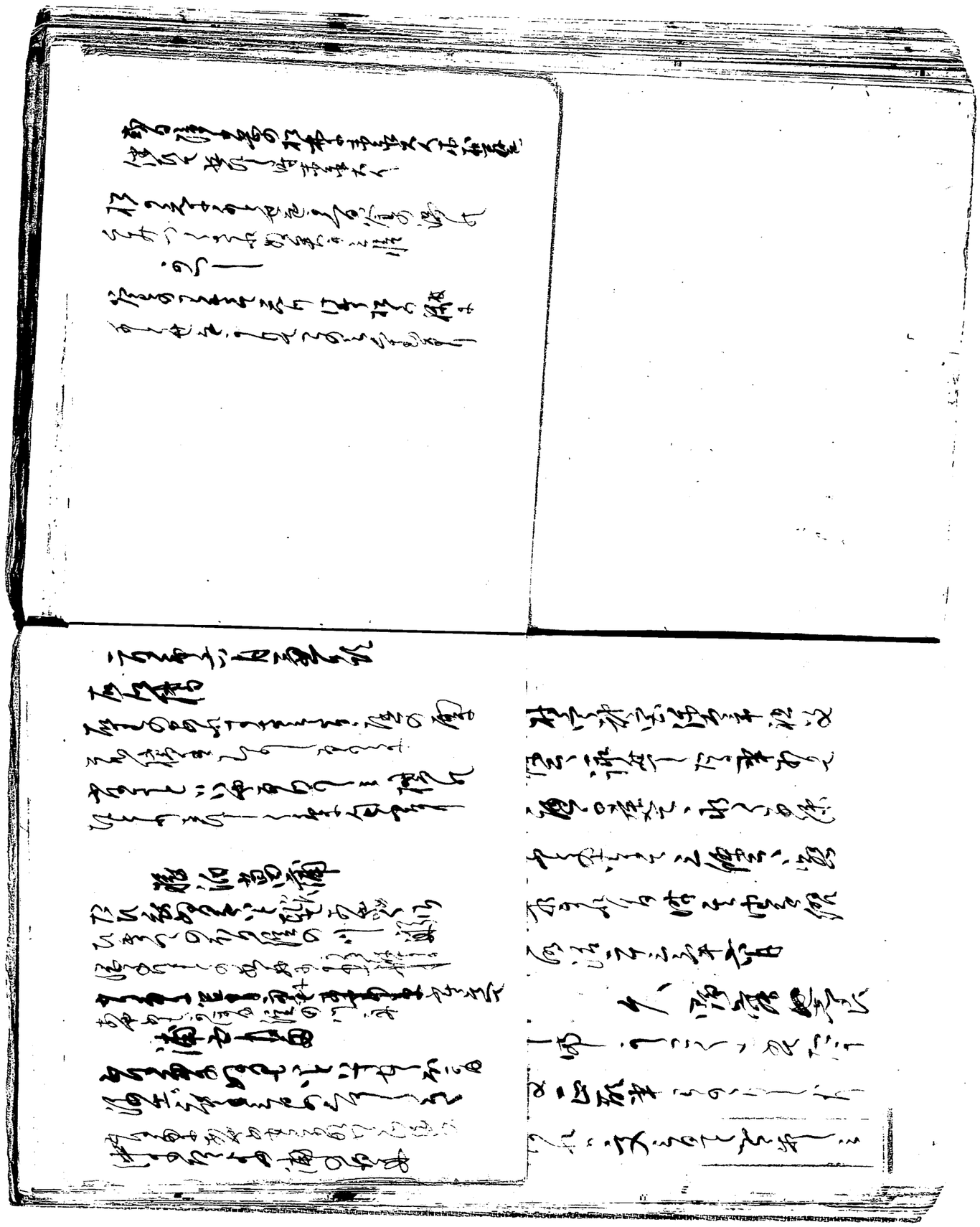


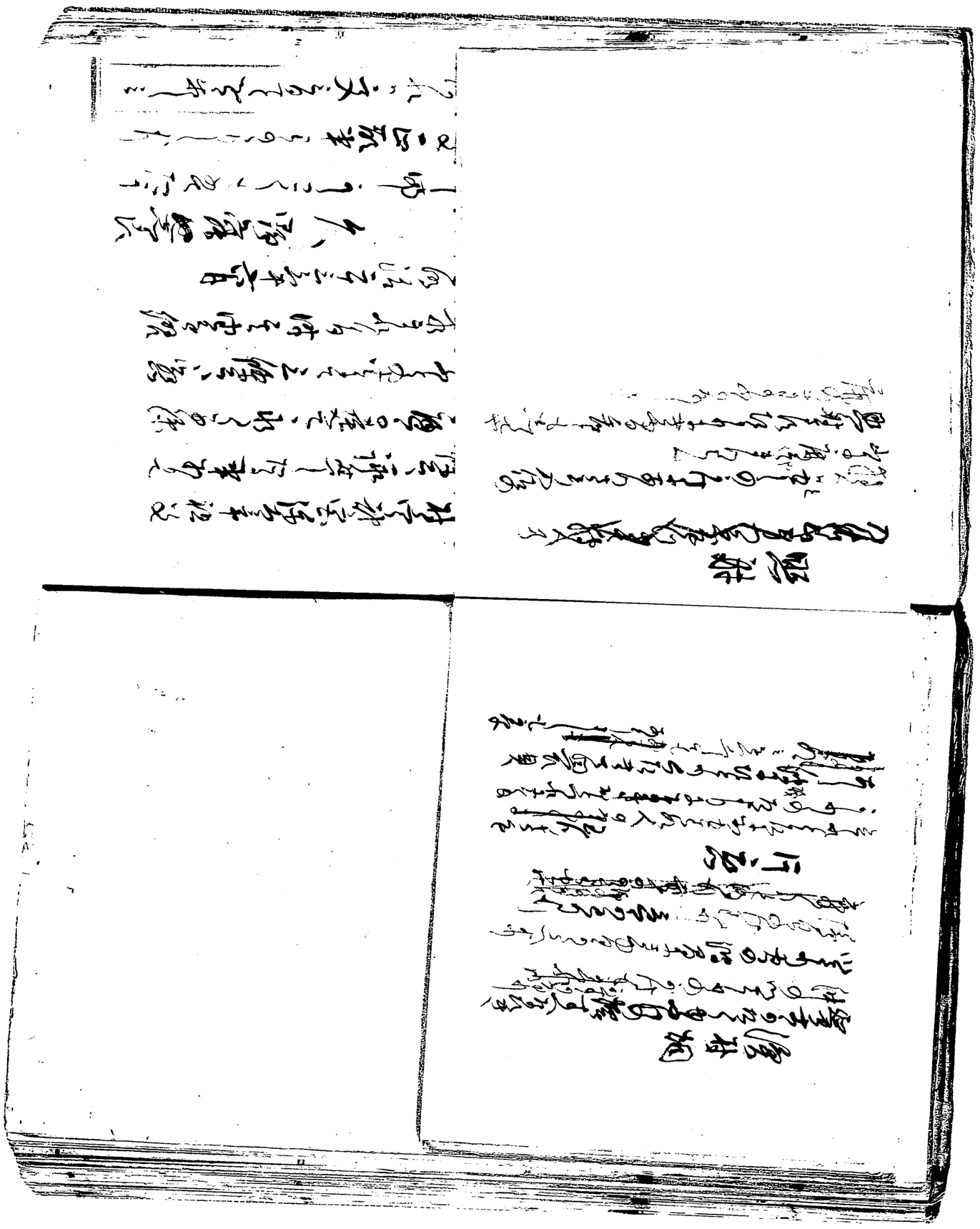


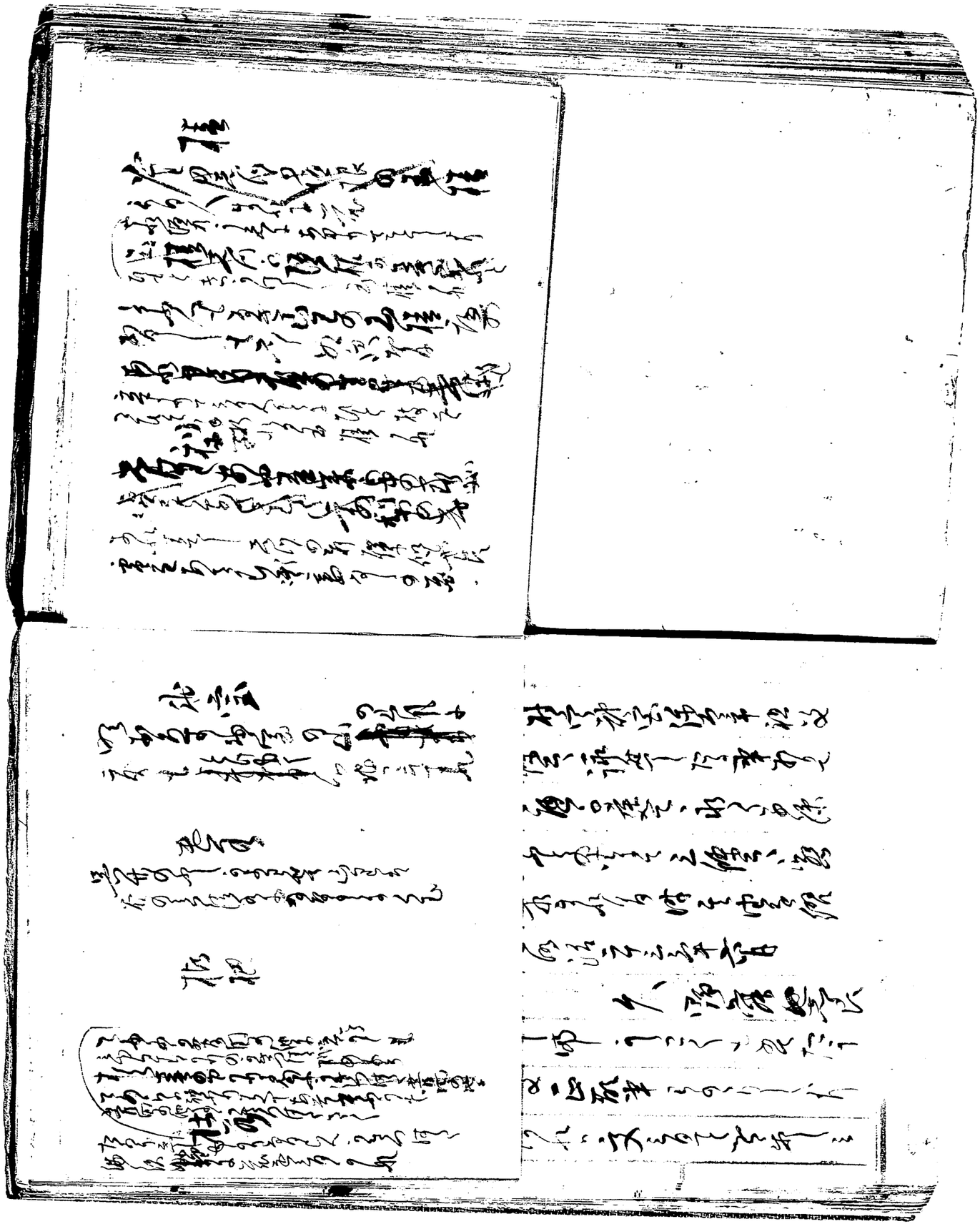


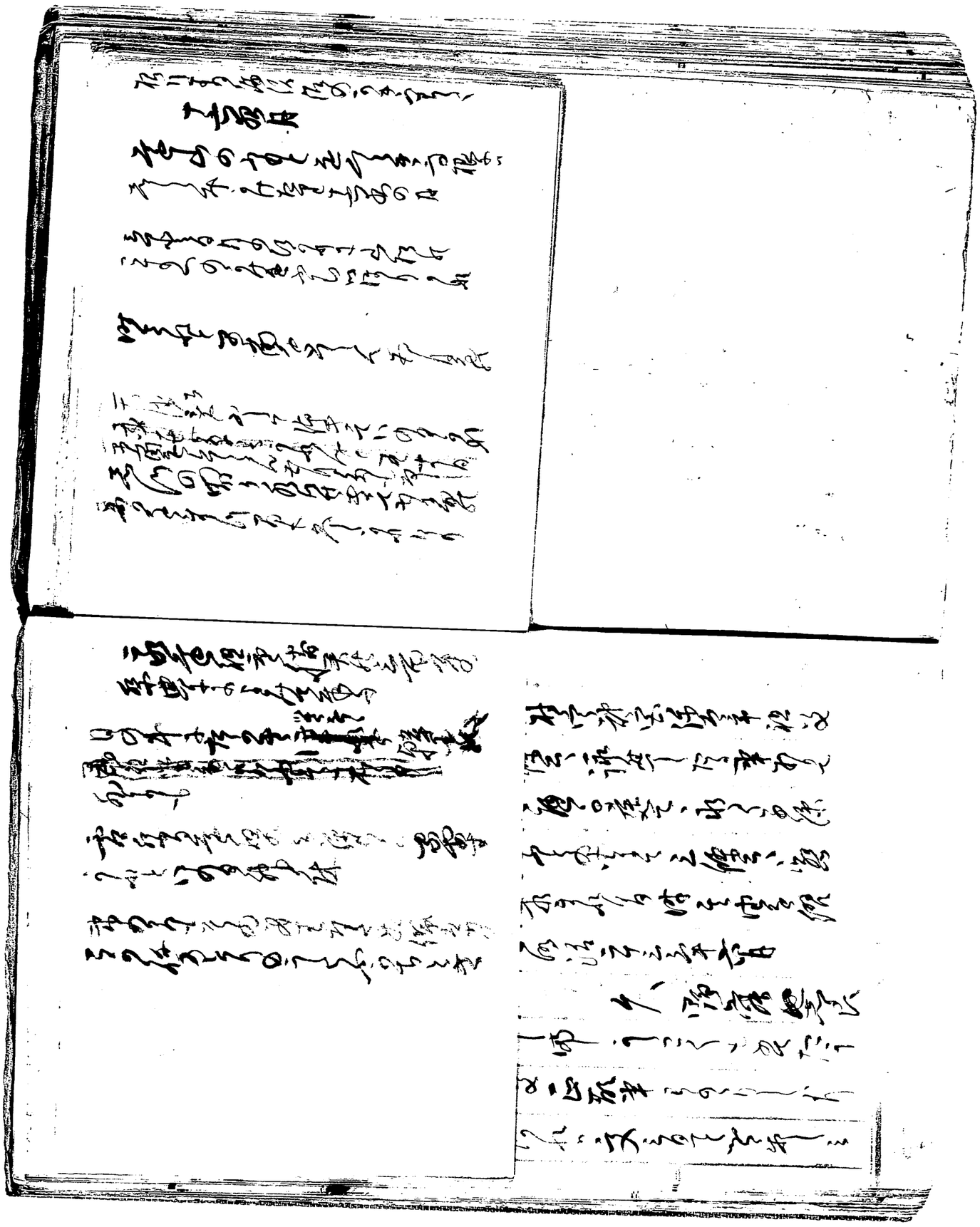












六月板

[illegible]

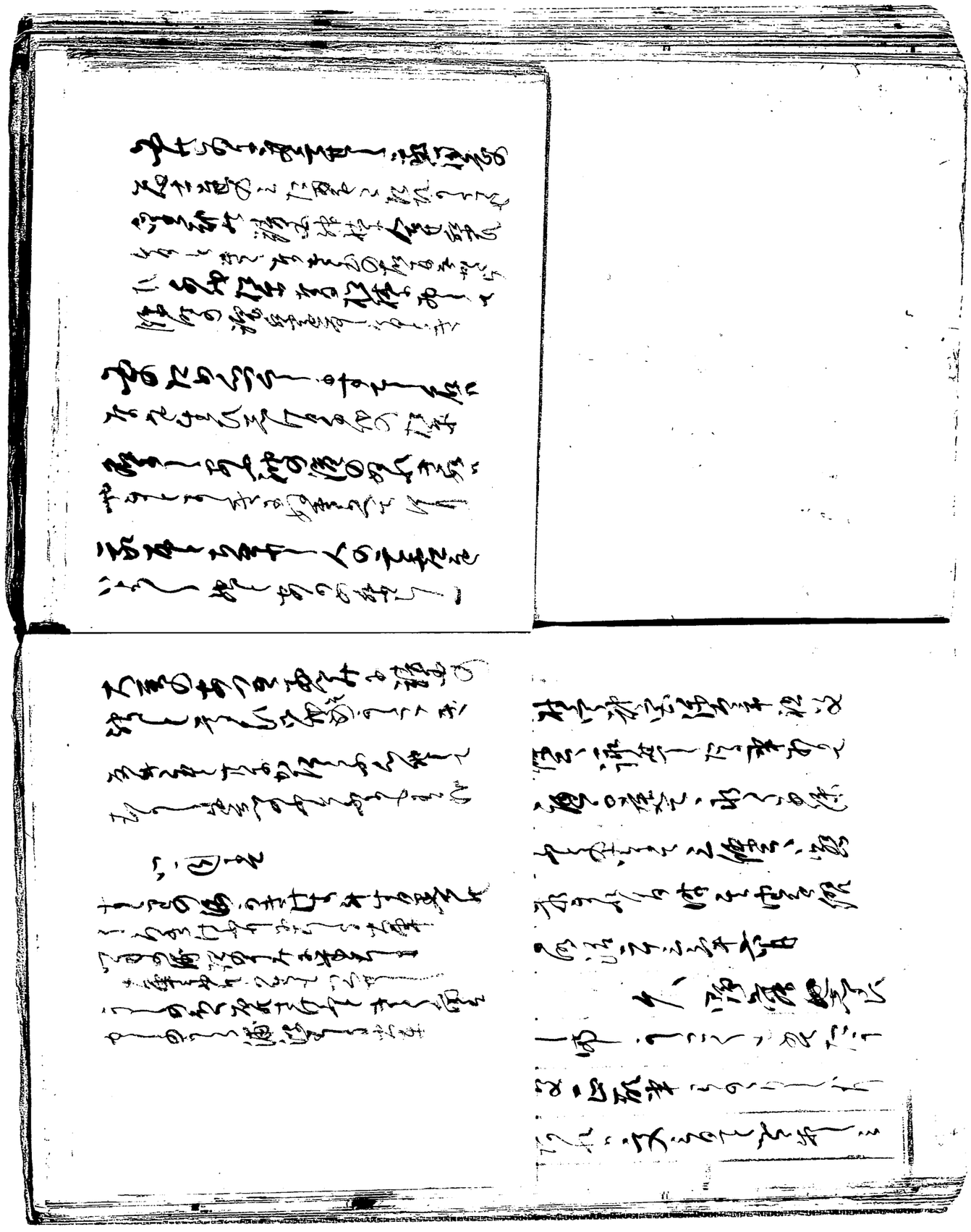
[illegible]

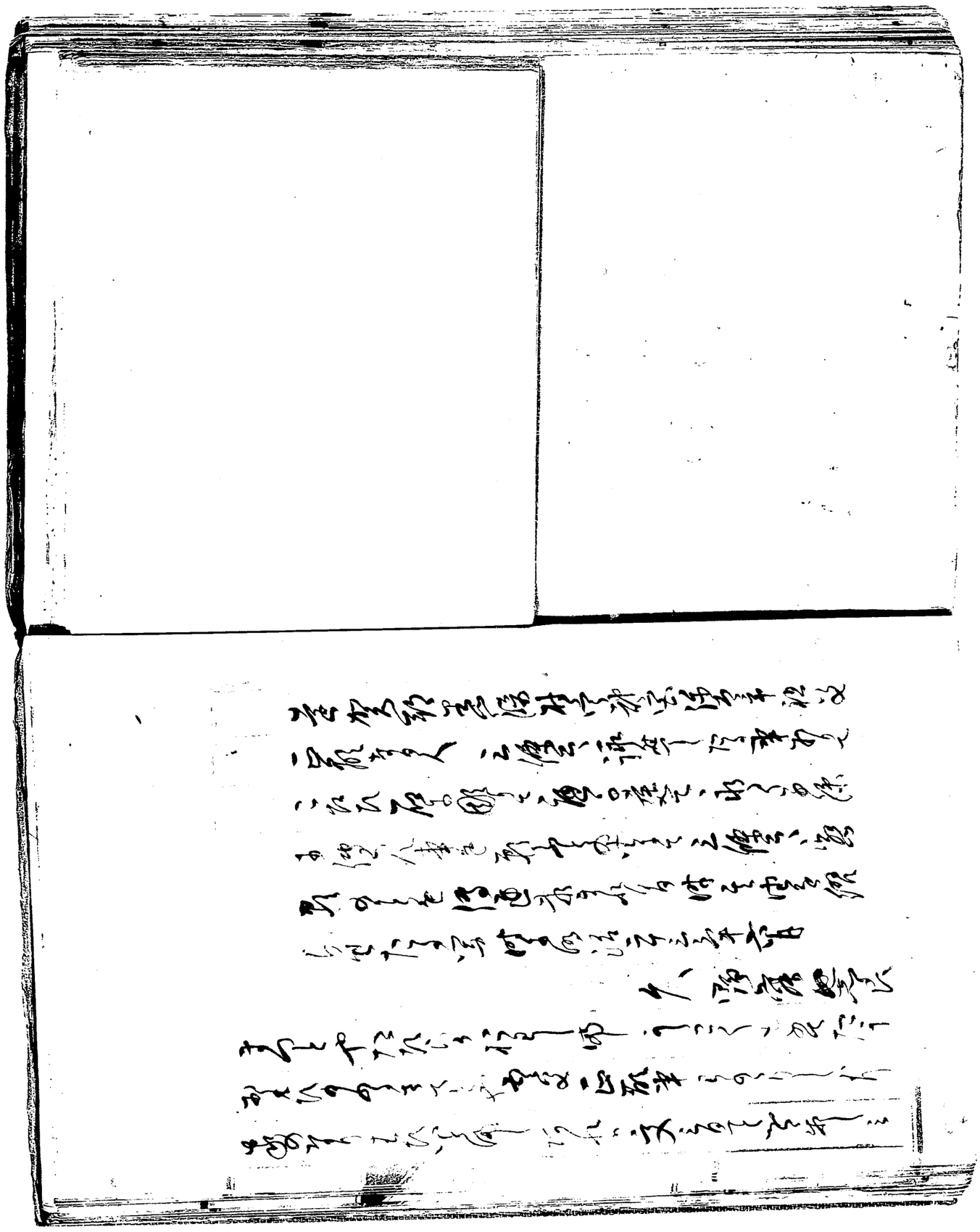
松間月

[illegible]

[illegible]

[illegible]





[illegible]

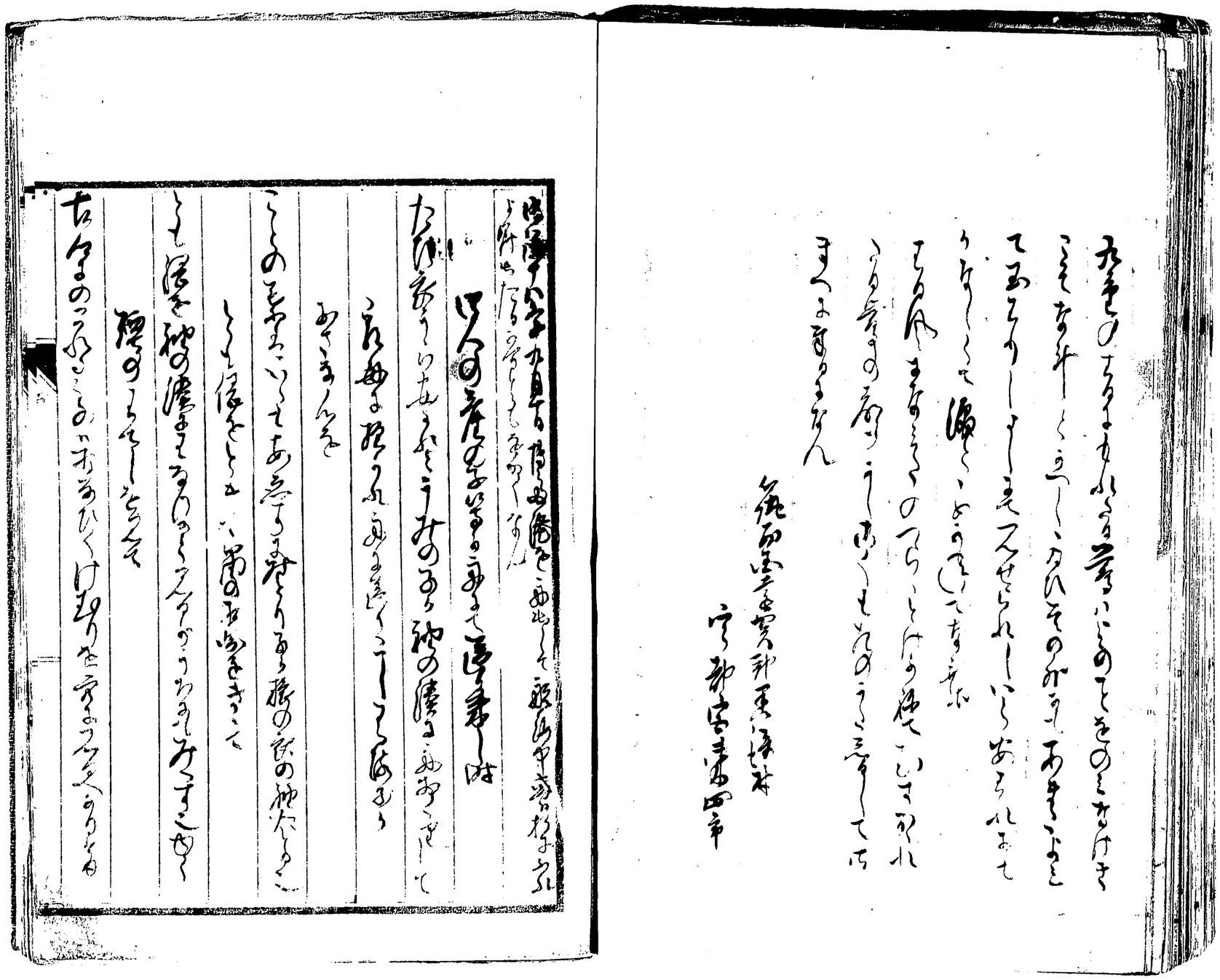
[illegible]

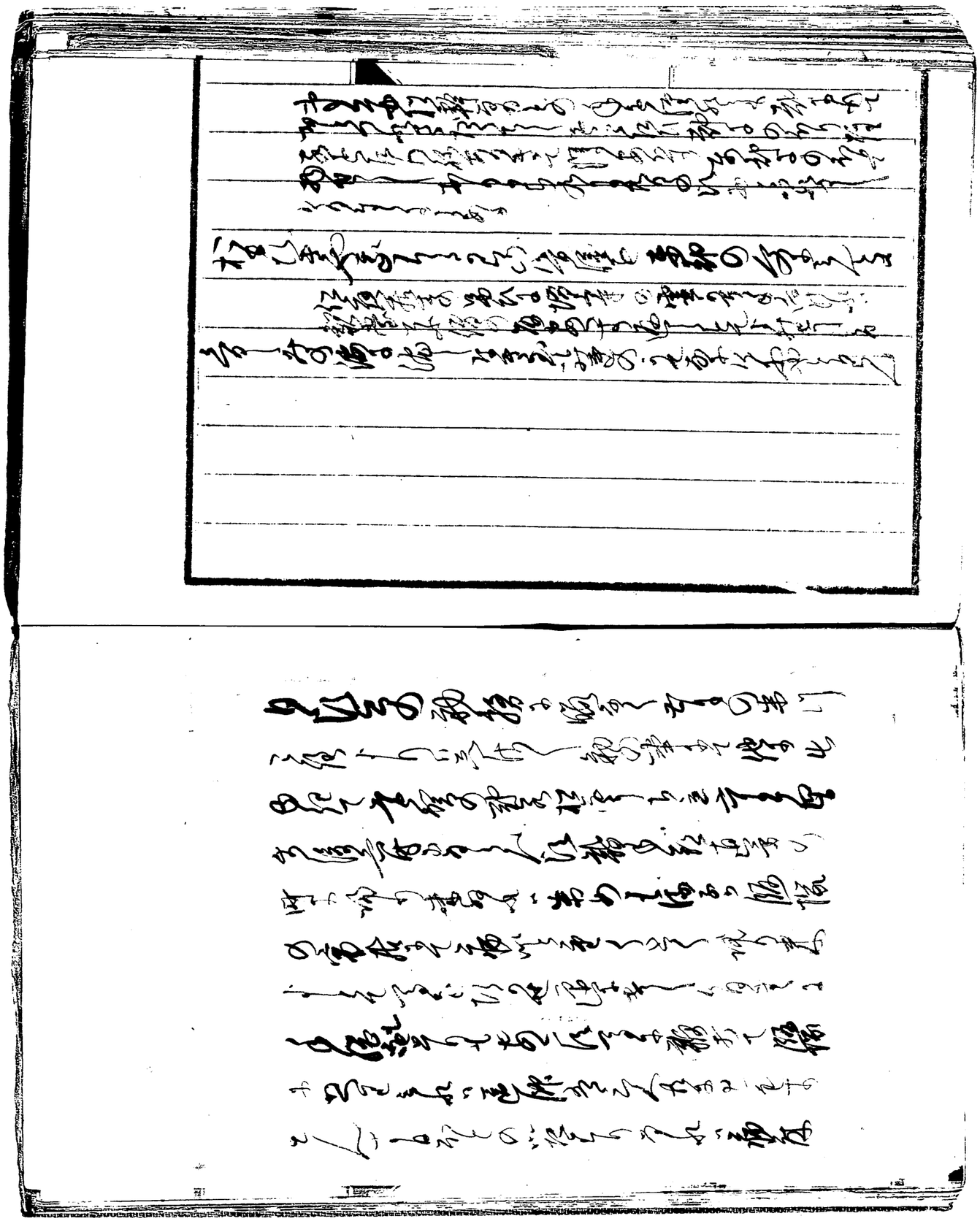
[illegible]

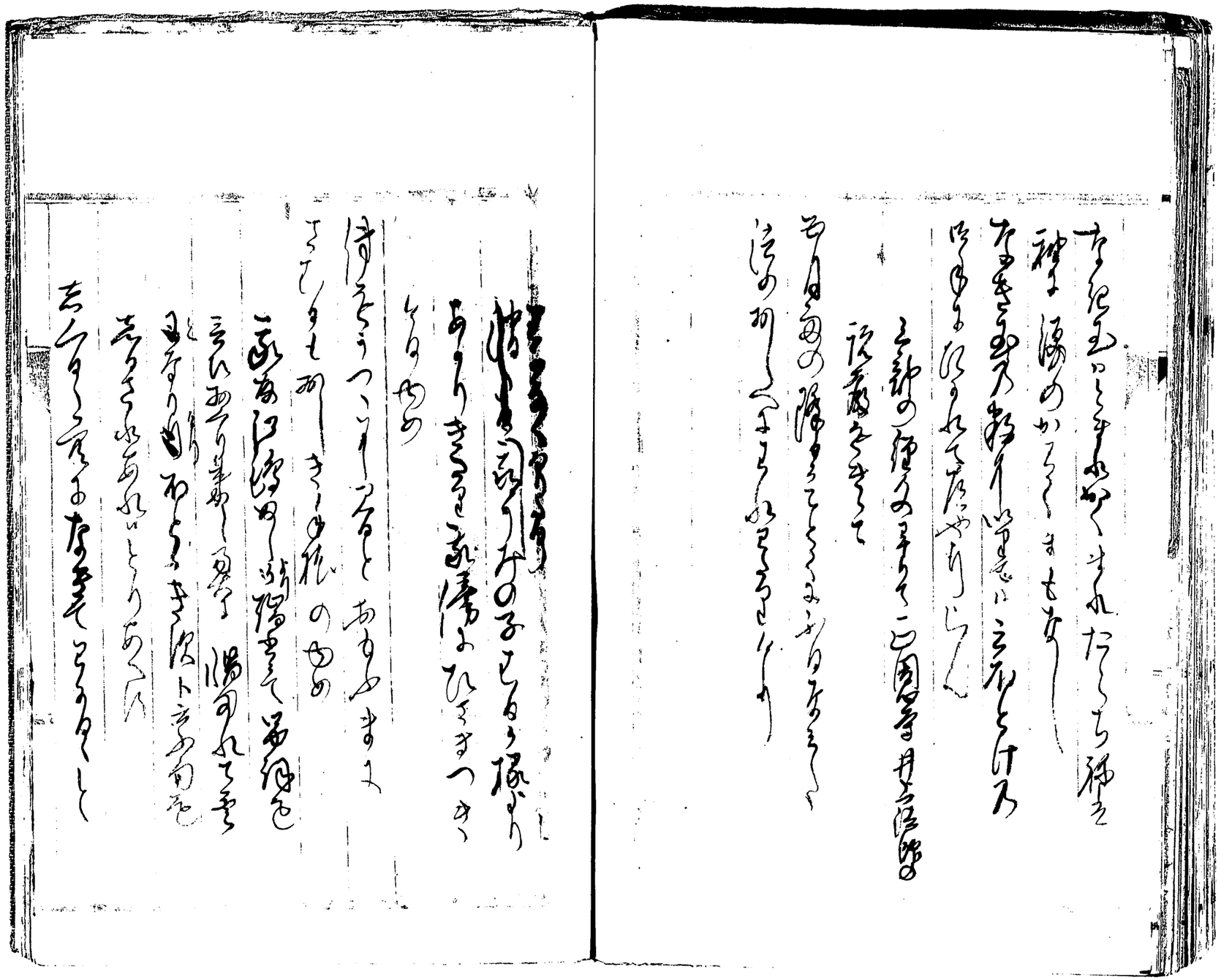
[illegible]

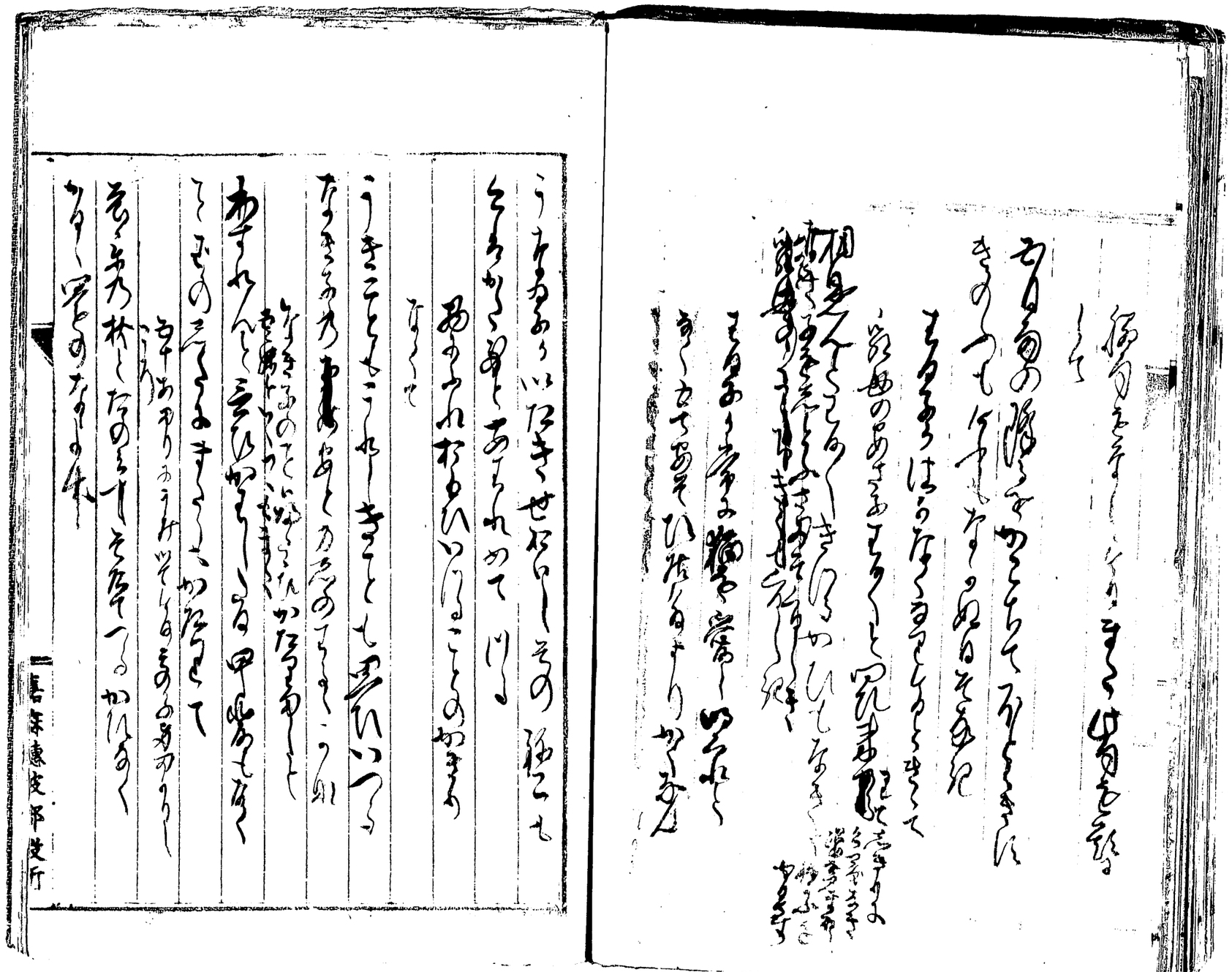
[illegible]

[illegible]









先哲者亡四り知了如而知了如而忠
者い卯大事也若非言也今之野
長官宮主所保之歌八頗也如待全安
若少之輿雄之人亡此心而可事
世業甚多怪感欲鄭仁弘而
之云

[illegible]

[illegible]わたされて

神やとぶらん

長月二十五日

三満寺にて

源寛

二

[illegible]

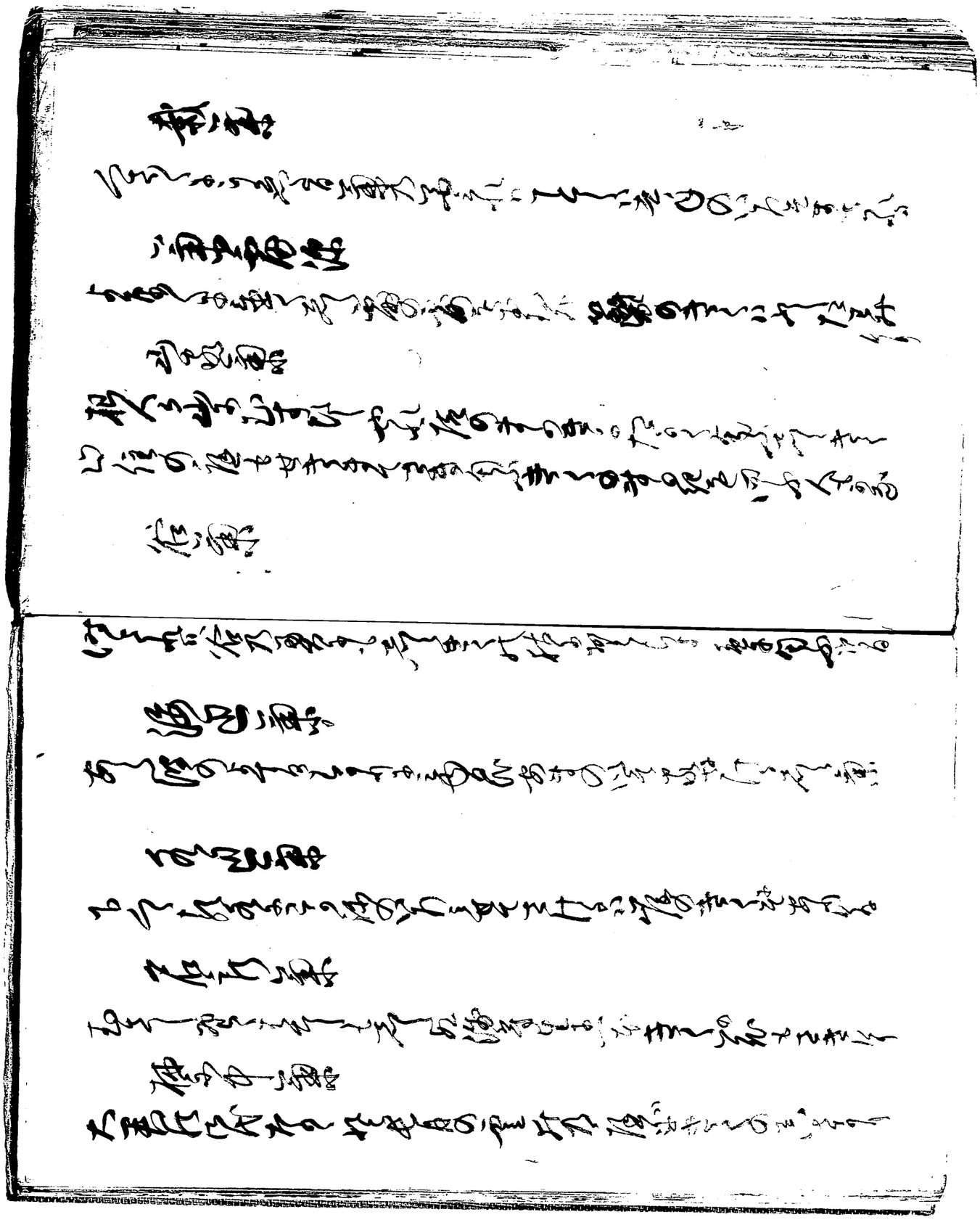
[illegible]

曉庭東

[illegible]

月白東

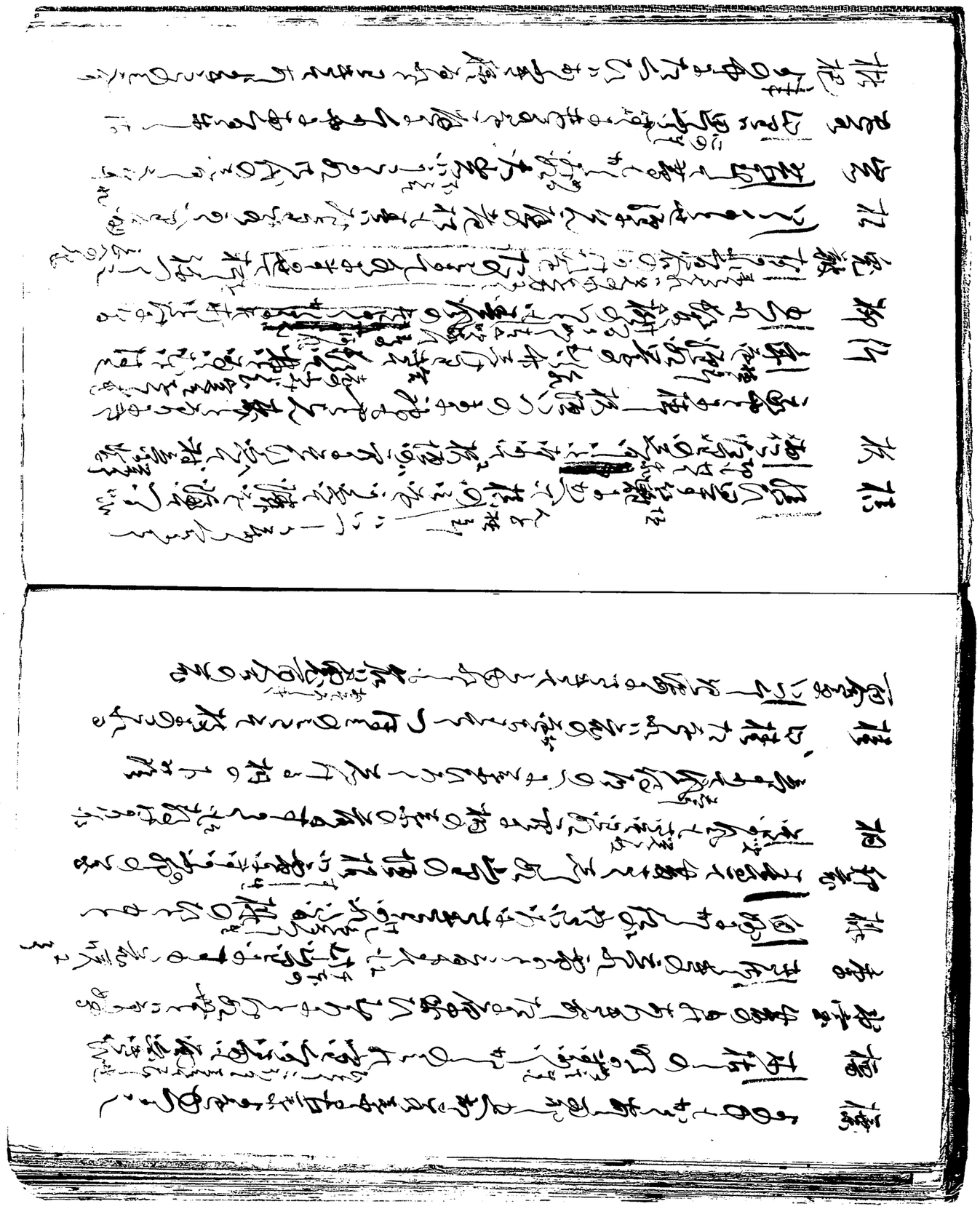
[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]



梅

櫻

柳

梨子

椎

杜若

牡丹

躑躅

谷川のたゝれ流れて

清流のひゝ

山の

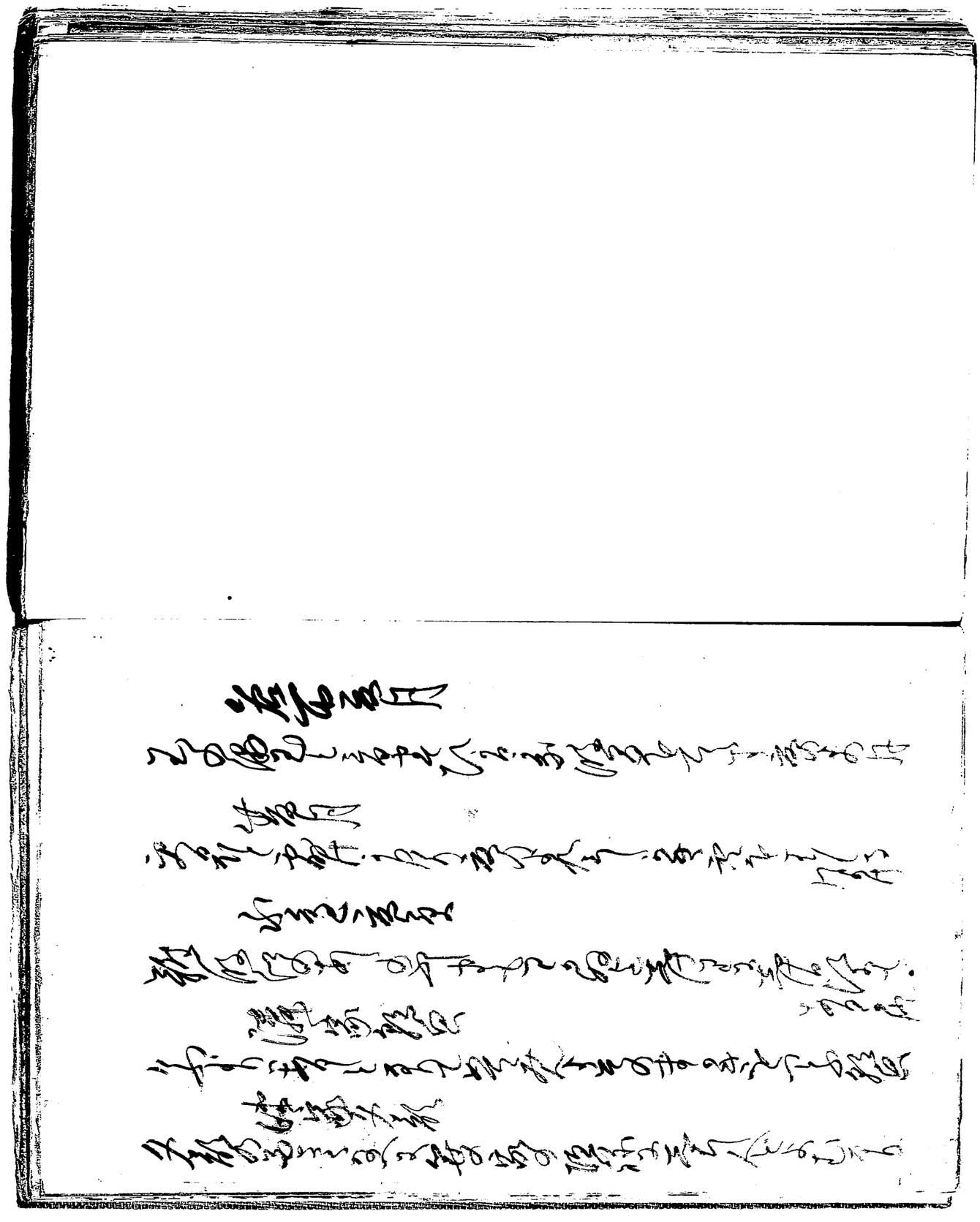
苗

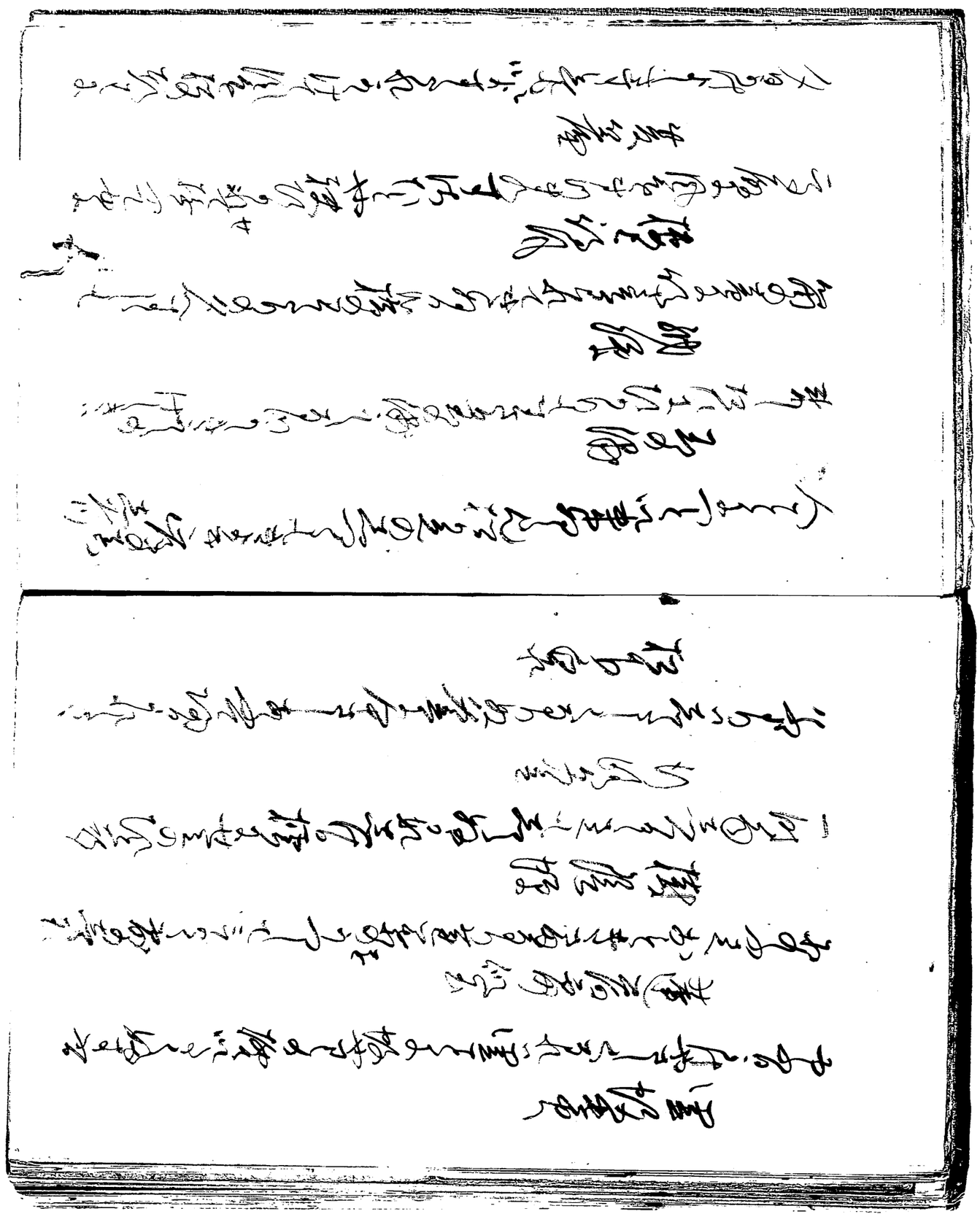
再重

柳

杜若

牡丹





貧家説

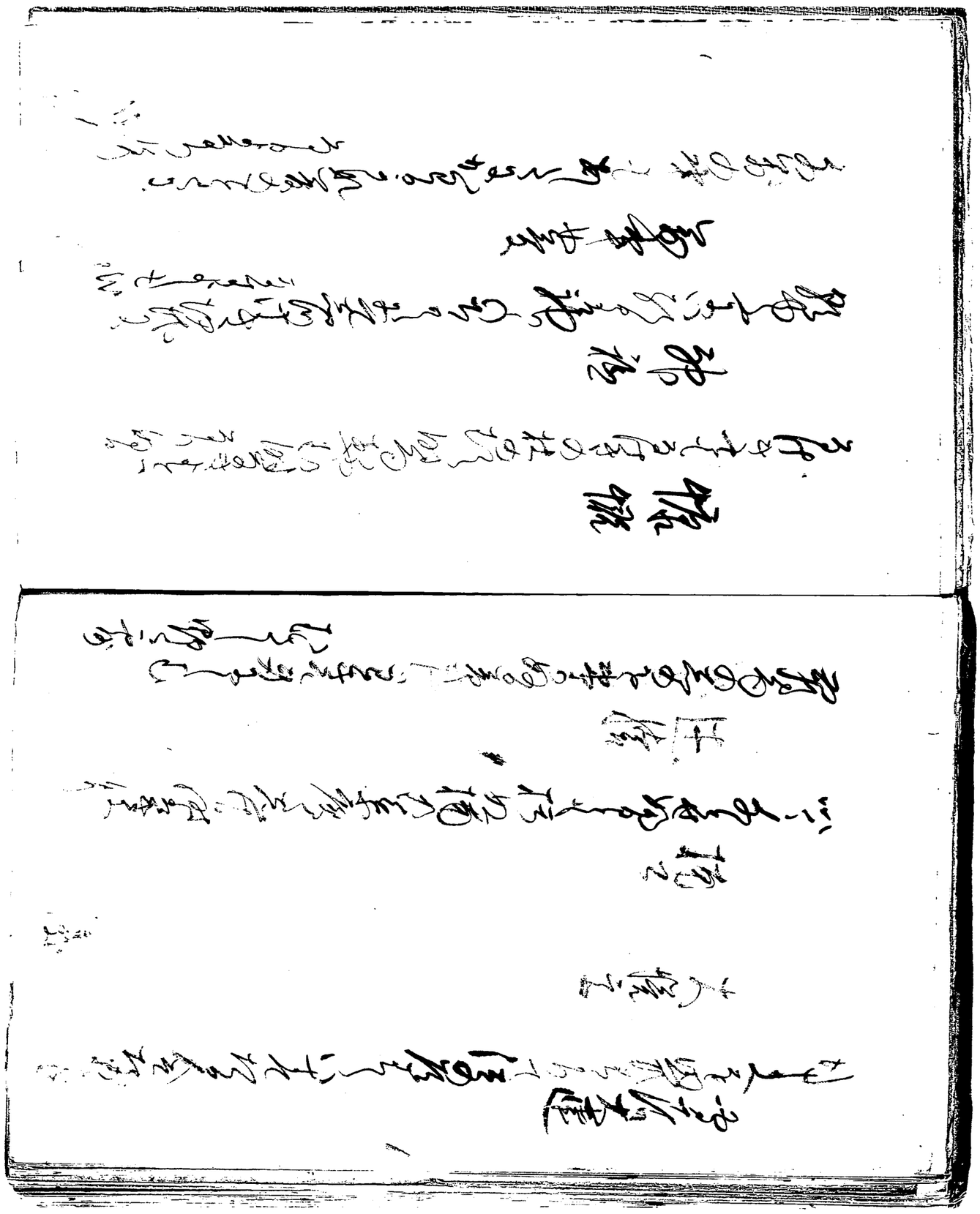
[illegible]

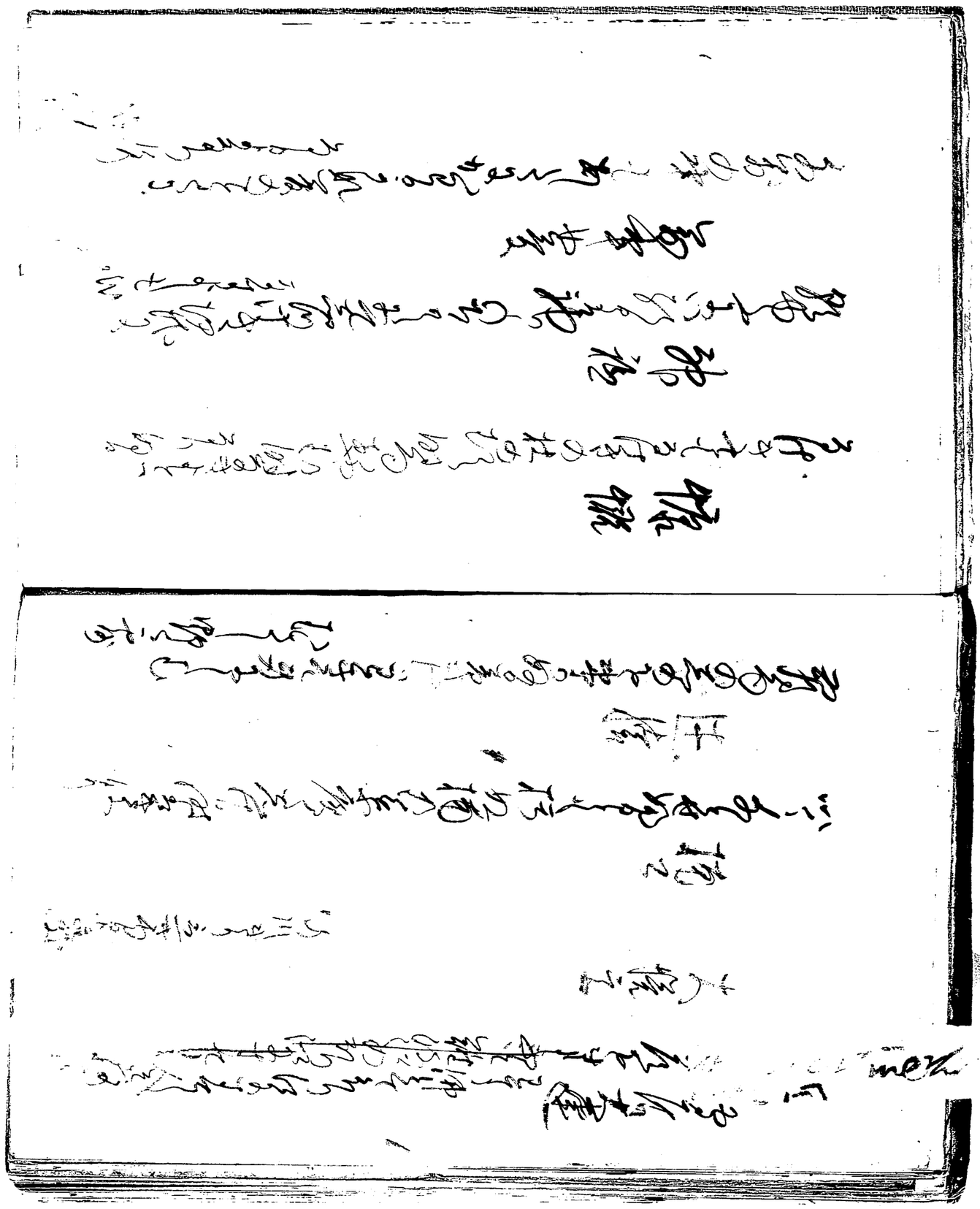
右義信

[illegible]

[illegible]

[illegible]





中の門なる法師の口歌を

ひきてすりやうやうみしれ

ものとでしかをあるを

月はたゞ人を問けり

ものゝうらもあるかな

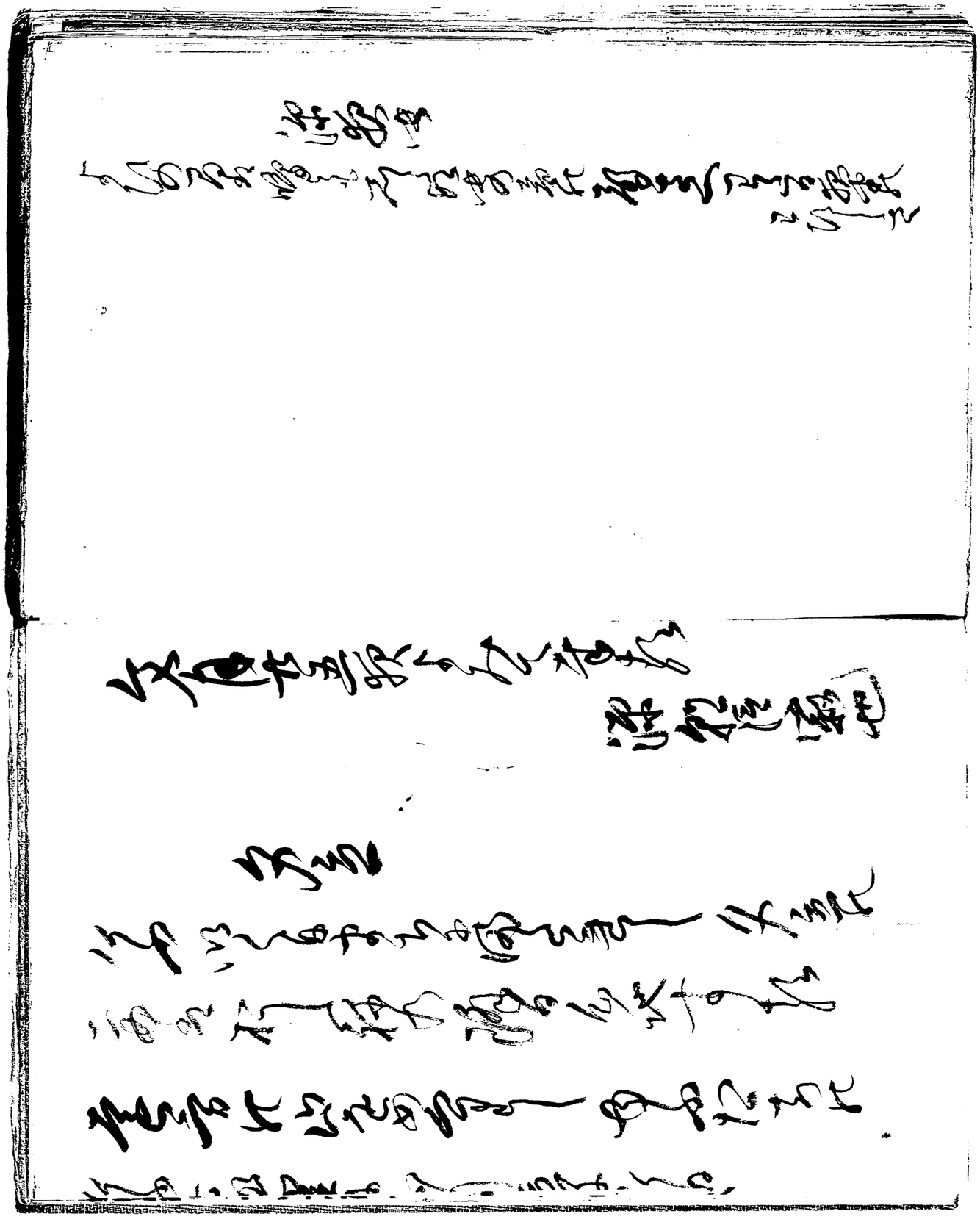
法師　[illegible]

春天満神社歌　源和臣家

秋夕月

野分

[illegible]



祈願

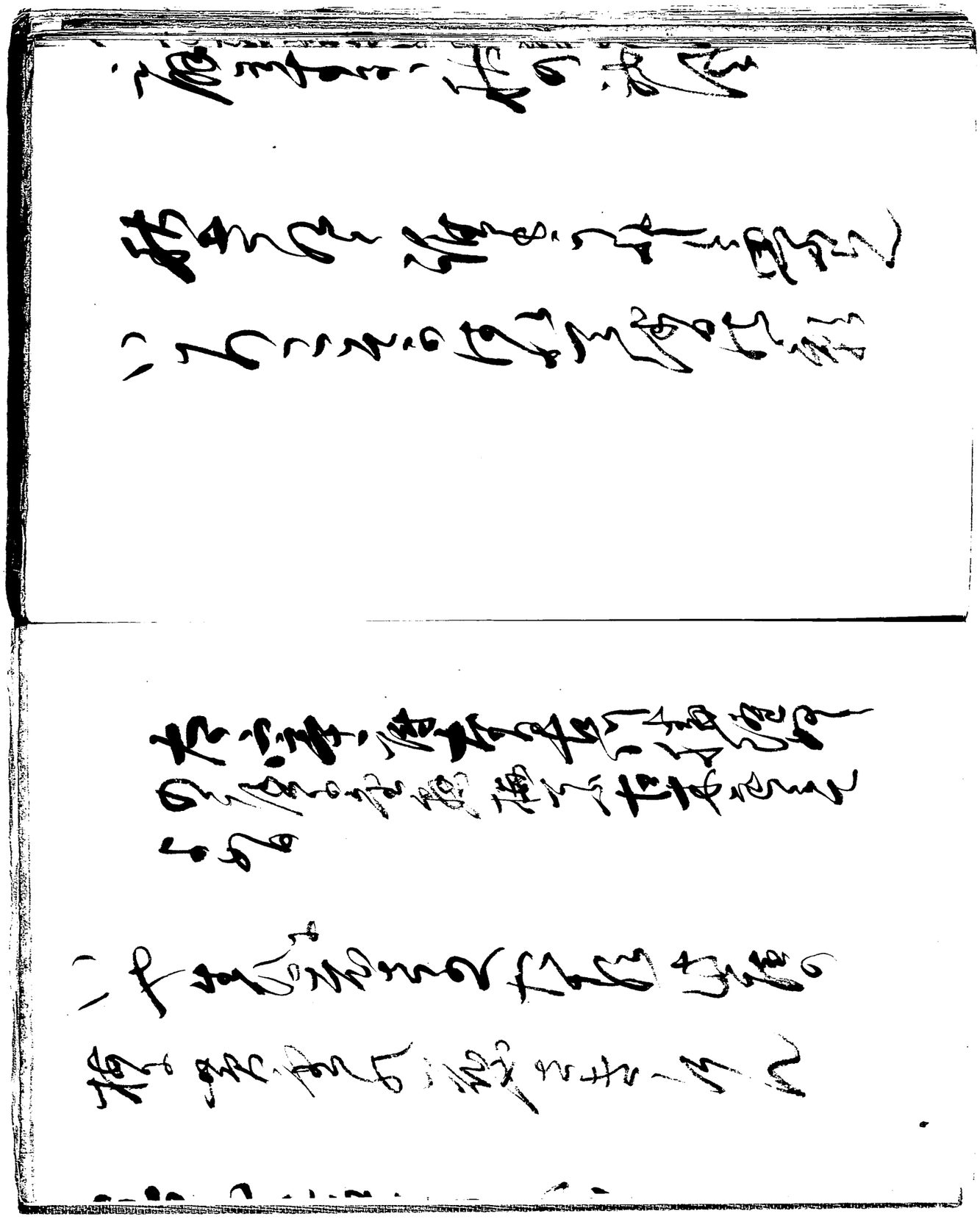
おもふ事あるのあけぬれば
かゝることもあらじと祈きゝ
[illegible]をかけまくも
[illegible]

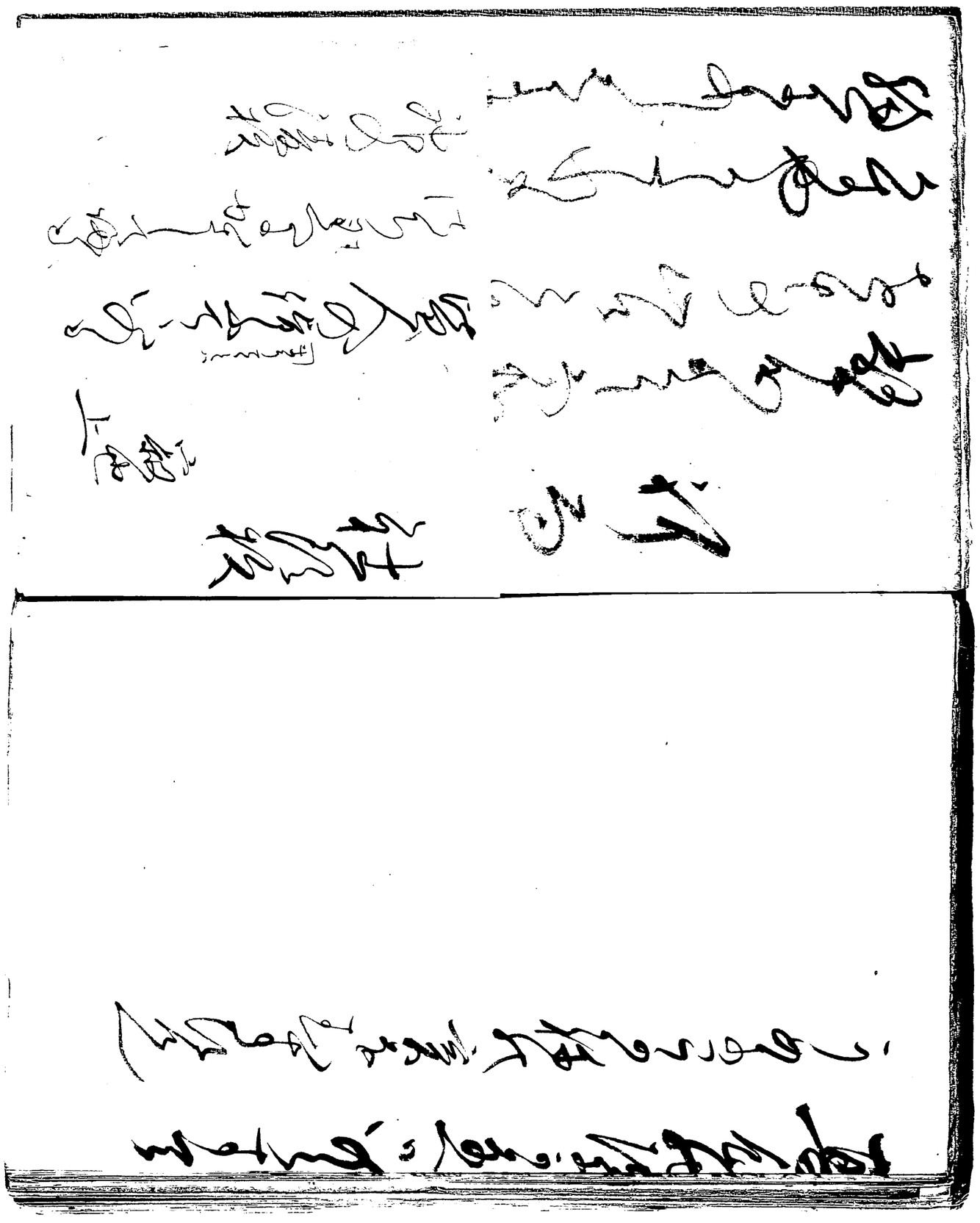
寿永二年五月歌

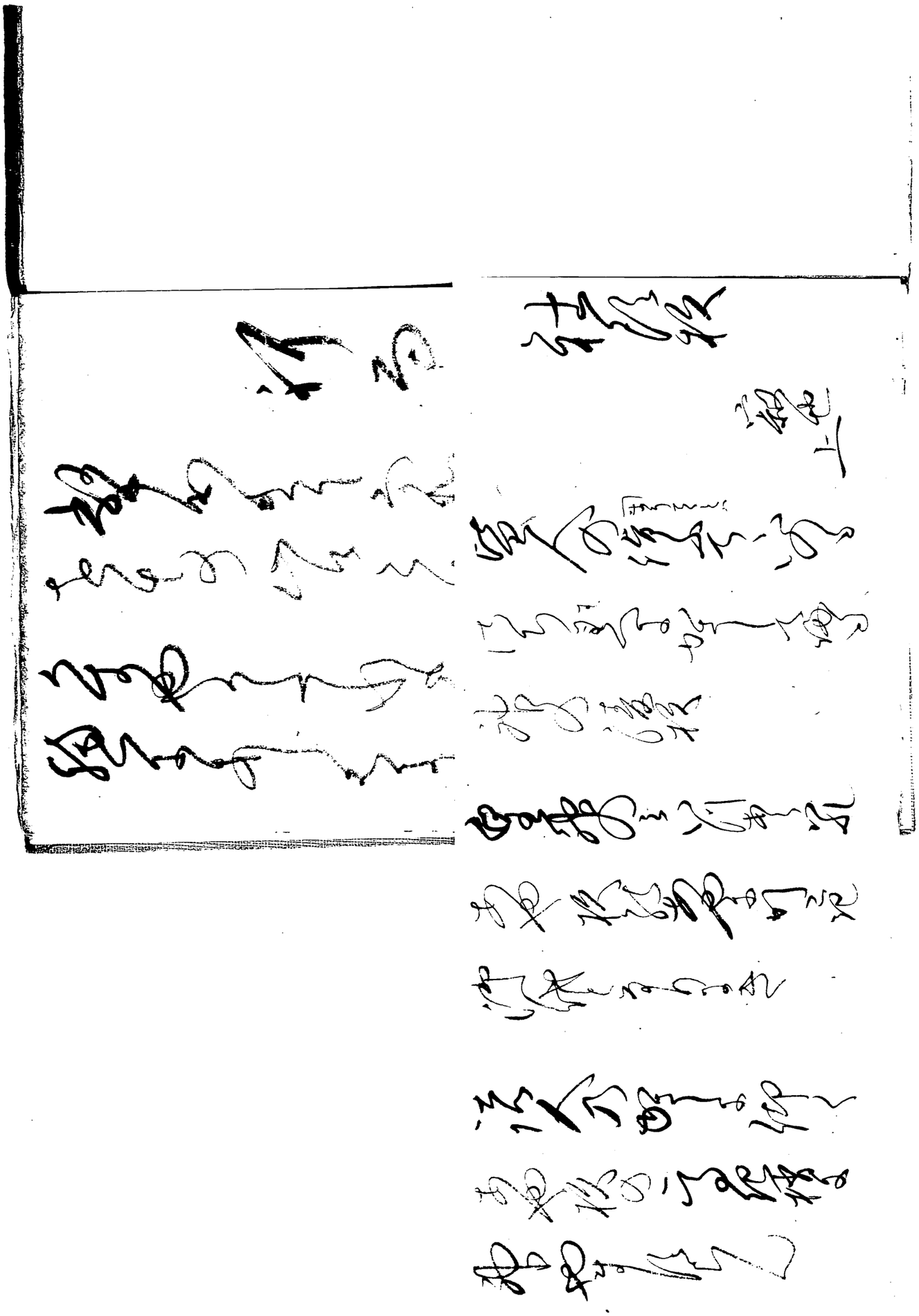
源寂西

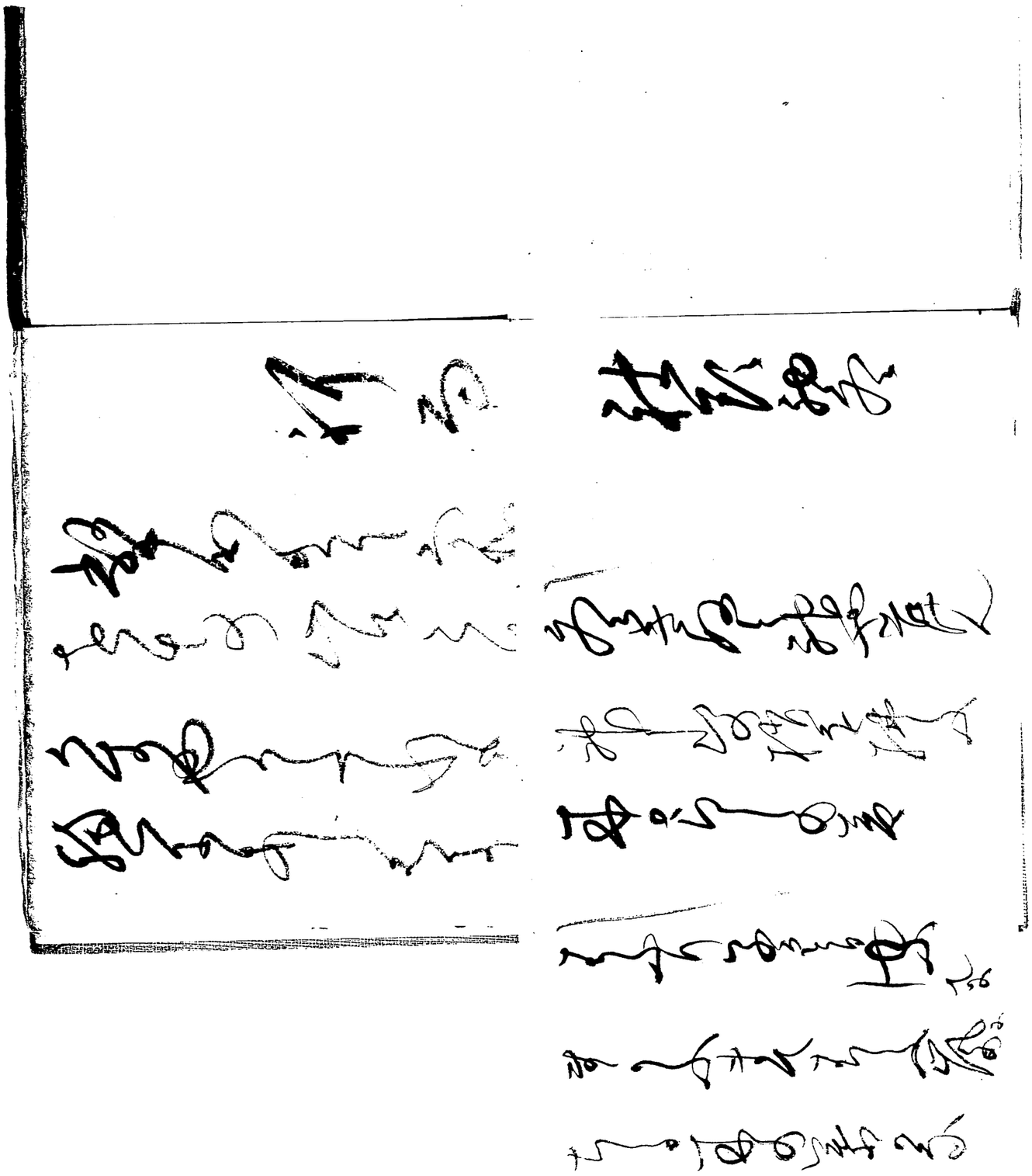
立秋

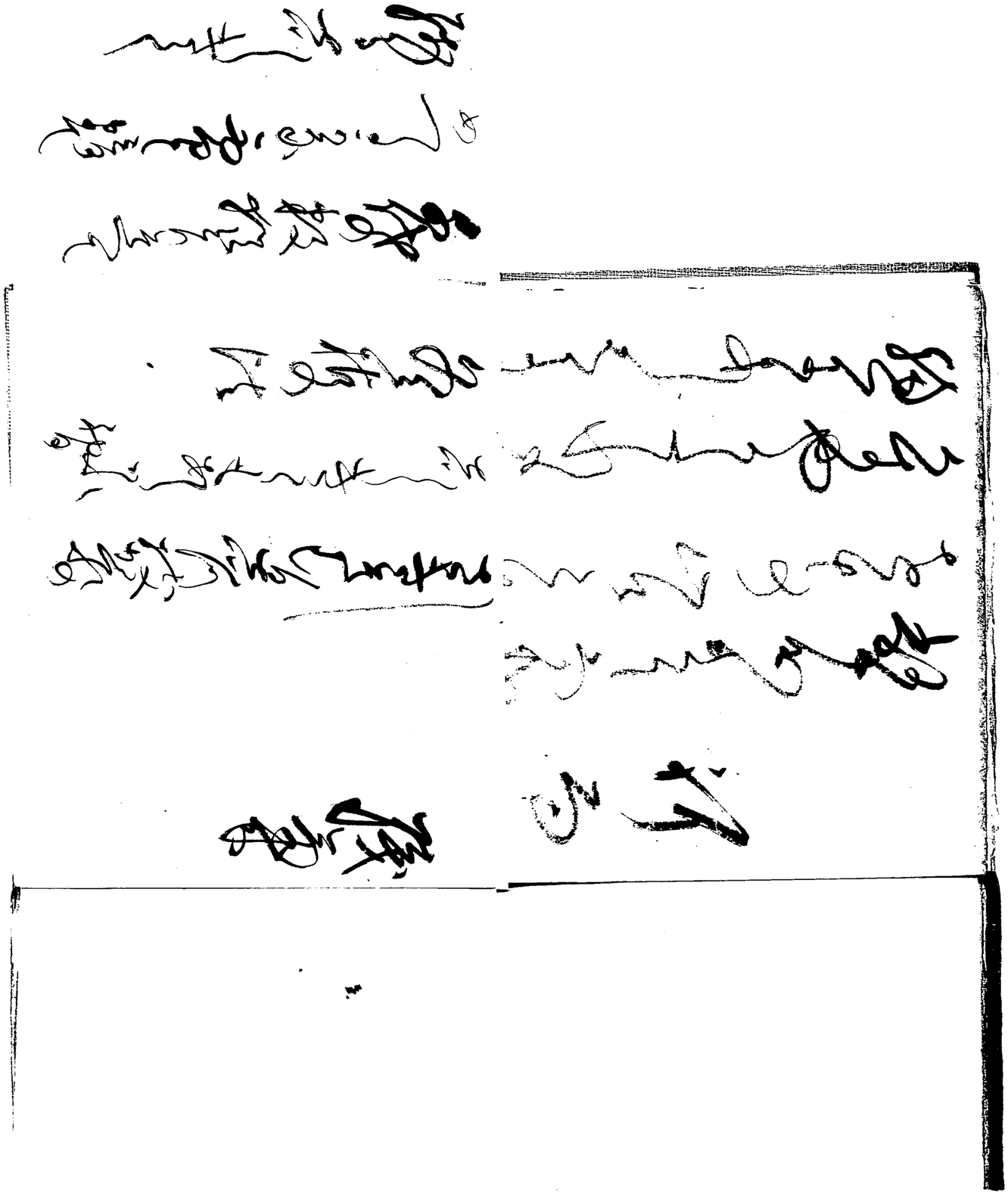
[illegible]

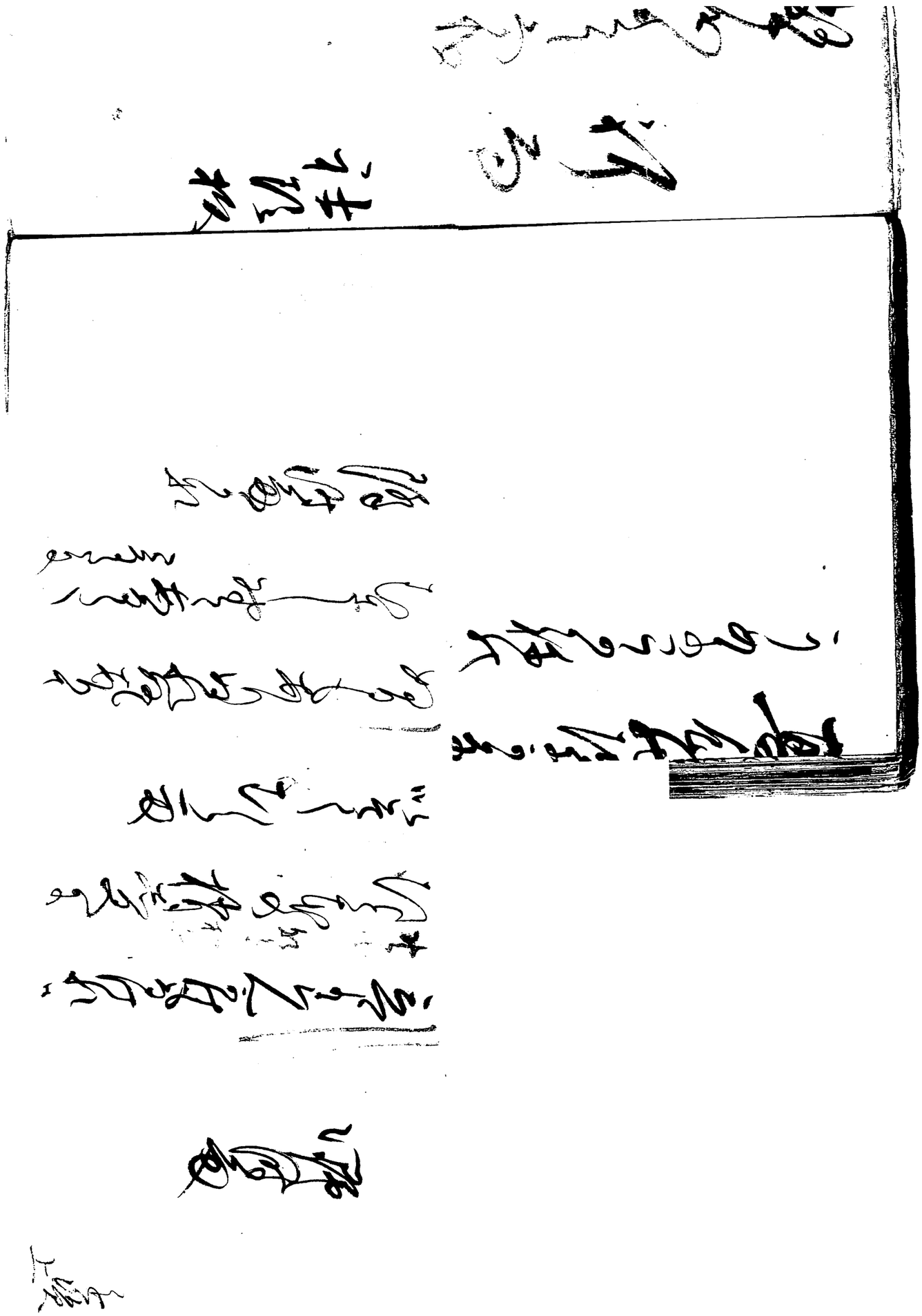


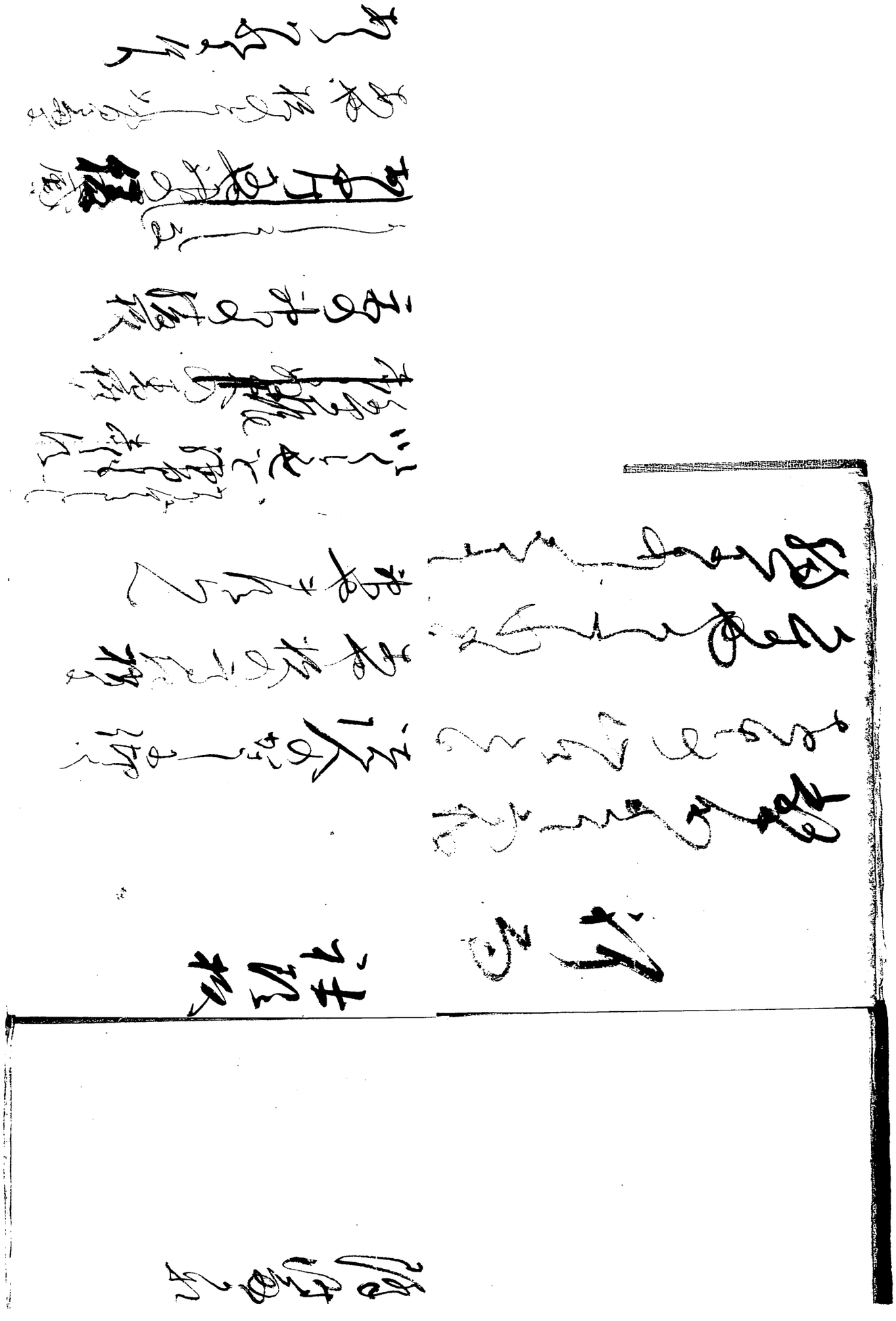


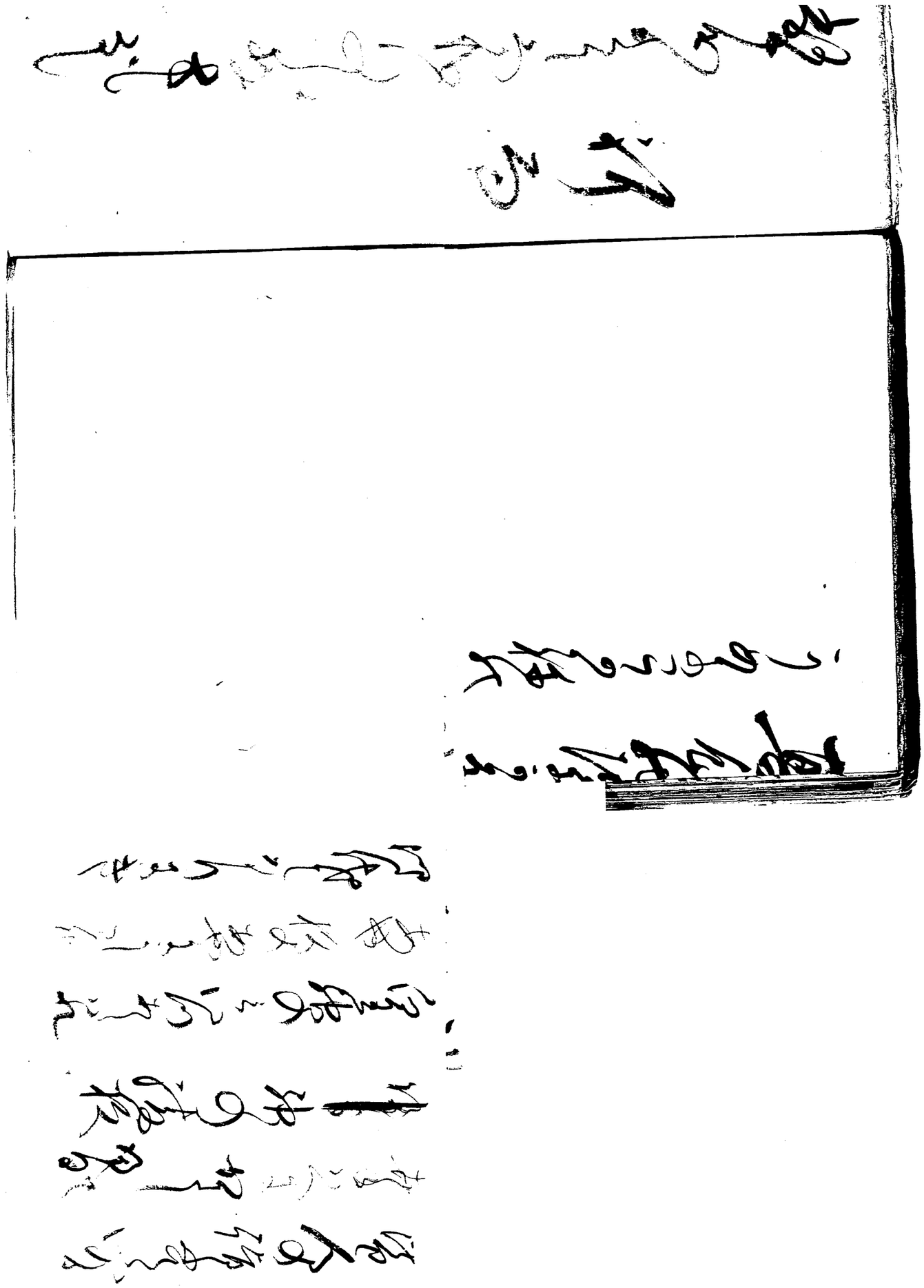


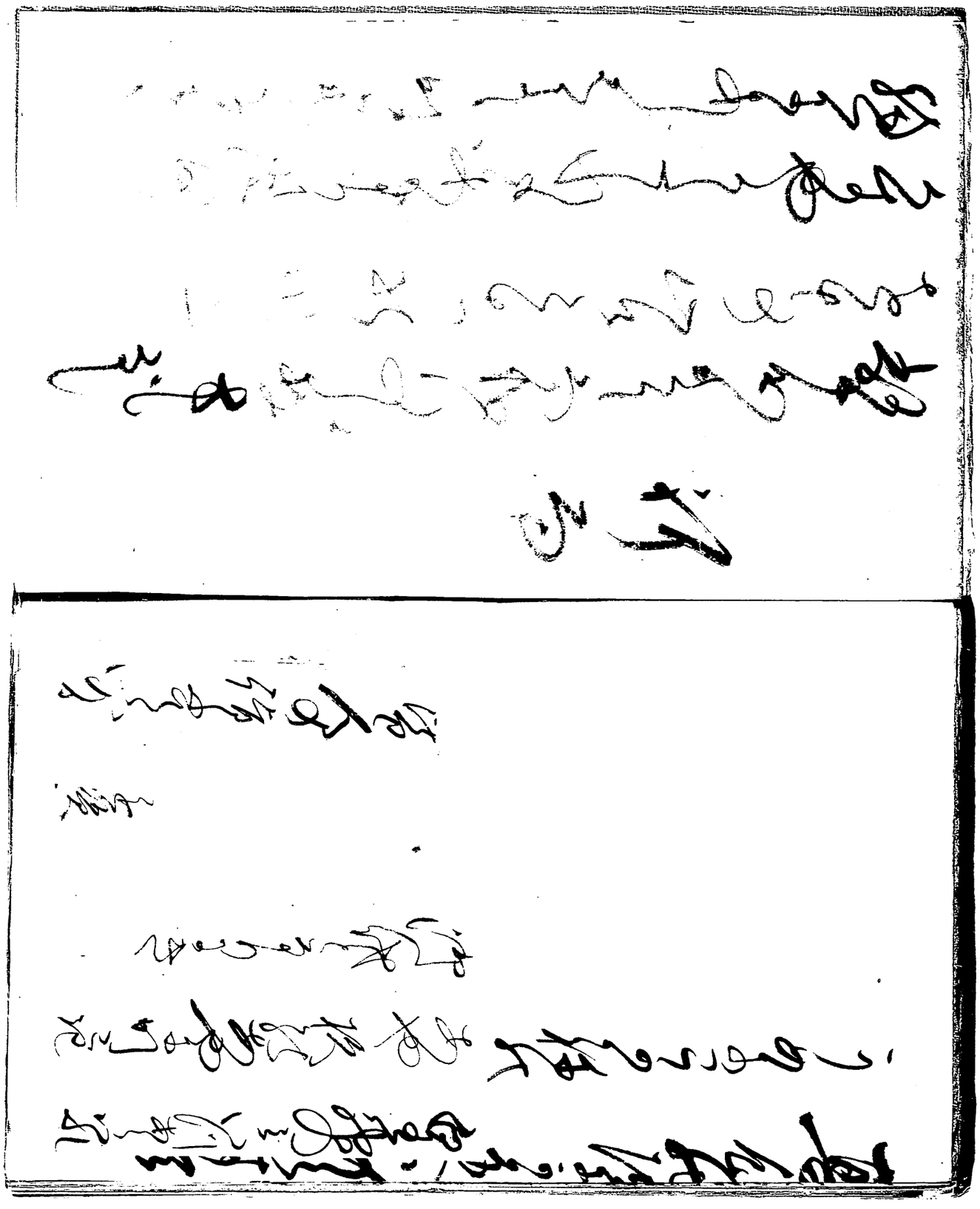


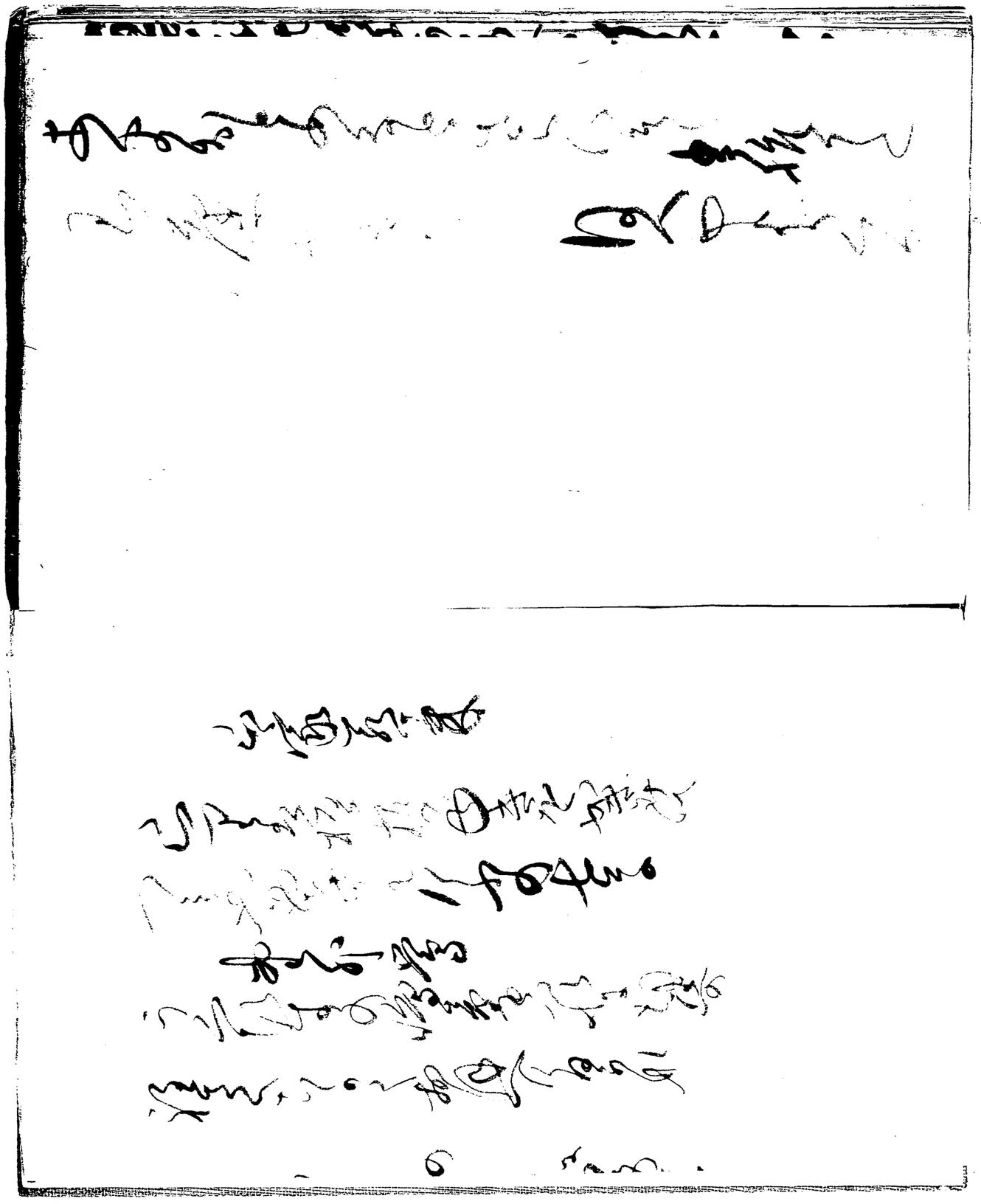






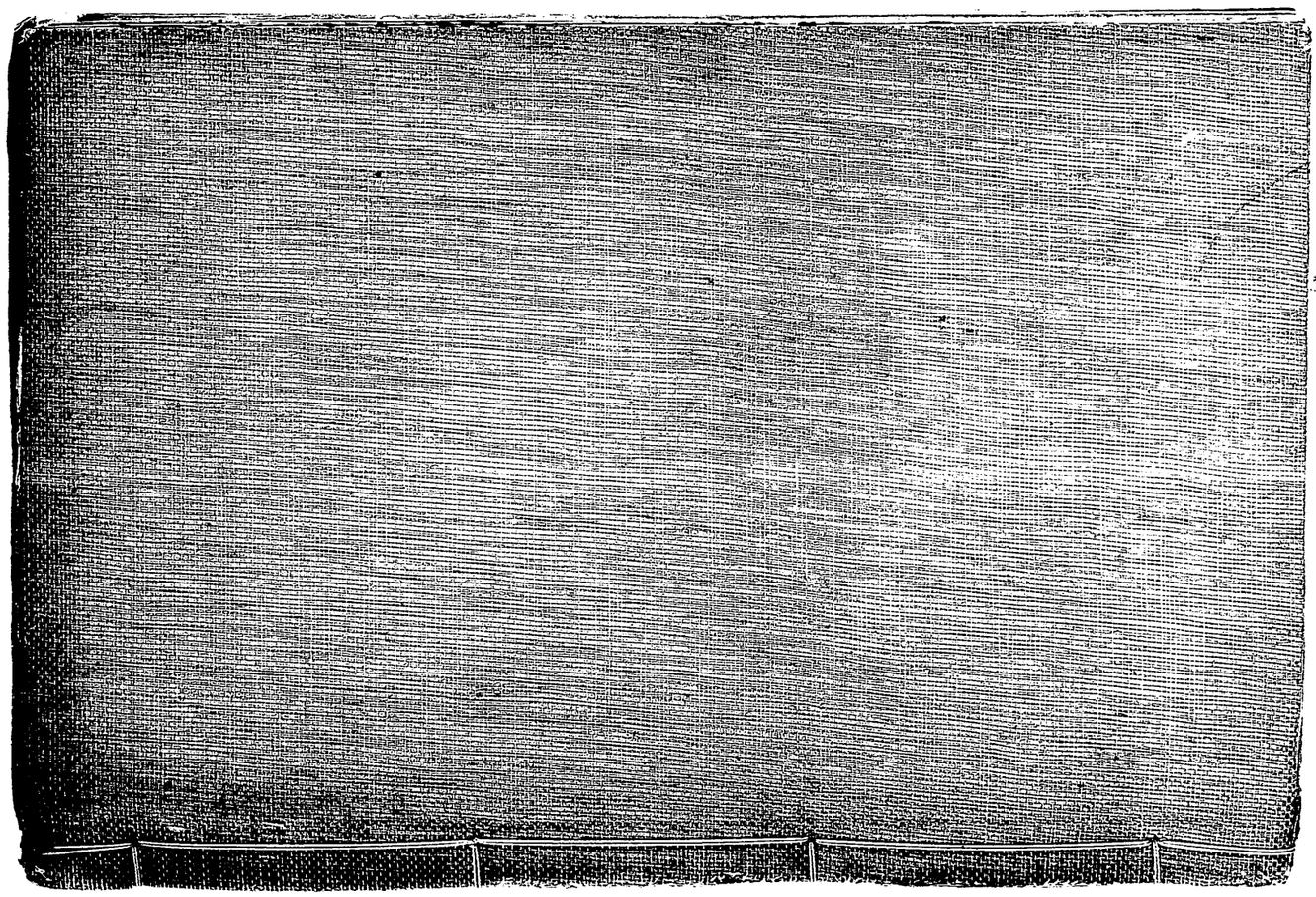






江島茂史,
江島茂史社長
第一,上

6(2)
工

42.11.13

九州大学附属図書館
下記日附または以前に此の本をご返し下さい
42.11.13